

特別史跡

# 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅴ

第29次 77・78次調査

1995

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅴ 正 誤 表

ページ	行	誤	正
23ページ	本文2行目	破片総数は23,012点	破片総数は22,804点
PL. 18	キャプション	土師土器160・163・171	土師質土器皿160・163
	キャプション		区画2の後に <u>土師質土器皿171・175・181</u> を挿入
	キャプション	灰釉皿	灰釉皿
第29図	図の番号	597・598・599	98・599・600
	キャプション	石製品硯597	石製品硯598
60ページ	小見出し	第78次調査遺物	第77次調査遺物

口絵 1 第29次調査



第29次調査 区画6 越前焼大甕設置の家



第29次調査 SE1036 出土の一輪挿

口絵 2 第77・78次調査



第77次調査 倉と石積施設



第78次調査 全景（北から）

## 序

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査事業の報告書も5冊目になります。今回の対象地は現在町屋の立体復原が出来ているところとそれに隣接した西側です。

町屋地区は、土塁による広い区画割りではなく、狭い敷地一杯に建てられた屋敷が、幹線道路に面して続いていました。西側地区は間口30mを基準とする武家屋敷が並んでいたところで、春日神社所蔵の古絵図では「朝倉角三吾跡」と書かれているあたりです。またその南側部分も発掘しました。

町屋地区では建物は全般に小規模ですが、各戸とも井戸をもち独立したもので「洛中洛外図」の共有井戸との相違が見られます。ただ居住者を決定づけるものではなく、生産に携わる人々、あるいは武家屋敷の下級被官なども考えられます。遺物は陶磁器では、日常雑器の越前焼、輸入品の青磁、染付のほか瀬戸、美濃などが出ています。

西側の武家屋敷地区では後世の削平が著しい中で、土塁、井戸、礎石建物などのほか南西の調査地域からは、倉庫と考えられる石敷建物が確認されました。遺物は1区画あたりの数量としては少ないようで、内容は一乗谷における一般的な出土傾向を示しています。これまでの発掘調査と合わせて、一乗谷の町並み構成、生活の実態が少しずつ判明してくれば幸いです。

最後に、事業の実施にあたり、懇切なるご指導とご高配をいただきました文化庁をはじめ関係各位の皆様、ならびに終始暖かいご支援をいただきました城戸ノ内をはじめとする地元の皆様に対し、心から感謝申しあげます。

平成7年3月

# 目 次

口絵	3
序	7
目次	9
図版目次	10
I 調査概要	
1. 調査目的	3
2. 調査の経過	3
3. 調査の方法と調査組織	5
4. 経費	7
5. 報告書について	7
II 第29次調査	
1. 調査の経過と概要	11
2. 遺構	14
3. 遺物	23
4. 小結	40
III 第77・78次調査	
1. 調査の経過と概要	51
2. 第77次調査遺構	55
3. 第77次調査遺物	60
4. 第77次調査小結	64
5. 第78次調査遺構	66
6. 第78次調査遺物	71
7. 第78次調査小結	80

# 図 版 目 次

## 口 絵 (カラー)

1. 第29次調査
2. 第77・78次調査

## 図 面

### 第29次調査

- |       |                |       |                          |
|-------|----------------|-------|--------------------------|
| 第 1 図 | 第29次調査土層図      | 第 2 図 | 第29次調査遺構詳細図(1)           |
| 第 3 図 | 第29次調査遺構詳細図(2) | 第 4 図 | 第29次調査遺構詳細図(3)           |
| 第 5 図 | 第29次調査遺構詳細図(4) | 第 6 図 | 第29次調査遺構詳細図(5)           |
| 第 7 図 | 第29次遺構詳細図調査(6) | 第 8 図 | 第29次調査道路側溝SD985・986側壁立面図 |
| 第 9 図 | 第29次調査遺物(1)    | 第10図  | 第29次調査遺物(2)              |
| 第11図  | 第29次調査遺物(3)    | 第12図  | 第29次調査遺物(4)              |
| 第13図  | 第29次調査遺物(5)    | 第14図  | 第29次調査遺物(6)              |
| 第15図  | 第29次調査遺物(7)    | 第16図  | 第29次調査遺物(8)              |
| 第17図  | 第29次調査遺物(9)    | 第18図  | 第29次調査遺物(10)             |
| 第19図  | 第29次調査遺物(11)   | 第20図  | 第29次調査遺物(12)             |
| 第21図  | 第29次調査遺物(13)   | 第22図  | 第29次調査遺物(14)             |
| 第23図  | 第29次調査遺物(15)   | 第24図  | 第29次調査遺物(16)             |
| 第25図  | 第29次調査遺物(17)   | 第26図  | 第29次調査遺物(18)             |
| 第27図  | 第29次調査遺物(19)   | 第28図  | 第29次調査遺物(20)             |
| 第29図  | 第29次調査遺物(21)   |       |                          |

### 第77・78次調査

- |      |                          |      |                           |
|------|--------------------------|------|---------------------------|
| 第30図 | 第77次調査遺構詳細図(1)           | 第31図 | 第77次調査遺構詳細図(2)            |
| 第32図 | 第77次調査遺構詳細図(3)           | 第33図 | 第77次調査遺構詳細図(4)            |
| 第34図 | 第77次調査遺構詳細図(5)           | 第35図 | 第77次調査遺構詳細図(6)            |
| 第36図 | 第77次調査土壘SA979・980東面石垣立面図 | 第37図 | 第77次調査遺物(1)               |
| 第38図 | 第77次調査遺物(2)              | 第39図 | 第77次調査遺物(3)               |
| 第40図 | 第77次調査遺物(4)              | 第41図 | 第77次調査遺物(5)               |
| 第42図 | 第77次調査遺物(6)              | 第43図 | 第77次調査遺物(7)               |
| 第44図 | 第78次調査遺構詳細図(1)           | 第45図 | 第78次調査遺構詳細図(2)            |
| 第46図 | 第78次調査遺構詳細図(3)           | 第47図 | 第78次調査遺構詳細図(4)            |
| 第48図 | 第78次調査遺構詳細図(5)           | 第49図 | 第78次調査土壘SA980・981東面石垣石立面図 |
| 第50図 | 第78次調査遺物(1)              | 第51図 | 第78次調査遺物(2)               |

第52図 第78次調査遺物(3)  
第54図 第78次調査遺物(5)  
第56図 第78次調査遺物(7)

第53図 第78次調査遺物(4)  
第55図 第78次調査遺物(6)  
第57図 第78次調査遺物(8)

## 写真図版

### 第29次調査

PL. 1 第29次調査・全景	PL. 2 第29次調査・中景及道路SS976
PL. 3 第29次調査・主要遺構(SS977, SD993他)	PL. 4 第29次調査・東西方向道路SS975に面する建物群
PL. 5 第29次調査・北部中規模屋敷	PL. 6 第29次調査・南北方向道路SS976に面する小規模区画(1)
PL. 7 第29次調査・南北方向道路SS976に面する小規模区画(2)	PL. 8 第29次調査・南半東部遺構群(SB1027・SB1024他)
PL. 9 第29次調査・井戸(SE1033他)	PL. 10 第29次調査・石積施設(1)
PL. 11 第29次調査・石積施設(2)	PL. 12 SS975出土遺物(1)
PL. 13 SS975出土遺物(2)	PL. 14 SS976出土遺物
PL. 15 SD985出土遺物	PL. 16 SD985・986出土遺物
PL. 17 SD986出土遺物	PL. 18 区画1・2出土遺物
PL. 19 区画3・4出土遺物	PL. 20 区画4出土遺物
PL. 21 区画5-1出土遺物(1)	PL. 22 区画5-1出土遺物(2)
PL. 23 区画5-2出土遺物(1)	PL. 24 区画5-2出土遺物(2)
PL. 25 区画6出土遺物(1)	PL. 26 区画6出土遺物(2)
PL. 27 区画7・8出土遺物	PL. 28 区画9出土遺物
PL. 29 区画10・11出土遺物(1)	PL. 30 区画11出土遺物(2)
PL. 31 区画11出土遺物(1)	PL. 32 表土出土遺物

### 第77・78次調査

PL. 33 第77次調査・全景	PL. 34 第77次調査・中景(1)
PL. 35 第77次調査・中景(2)	PL. 36 第77次調査・中景(3)
PL. 37 第77次調査・土塁等(SA980 3310 4127他)	PL. 38 第77次調査・土塁SA979 980および門SI1083
PL. 39 第77次調査・各種遺構(建物SB4129 SX4144他)	PL. 40 第77次調査・井戸及石積施設(SE4130 SF3328他)
PL. 41 遺構面出土遺物(1)	PL. 42 遺構面出土遺物(2)
PL. 43 遺構面出土遺物(3)	PL. 44 遺構面出土遺物(4)
PL. 45 遺構面出土遺物(5)	PL. 46 遺構面出土遺物(6)
PL. 47 遺構面出土遺物(7)	PL. 48 第78次調査・全景
PL. 49 第78次調査・中景	PL. 50 第78次調査・土塁SA4127他
PL. 51 第78次調査・溝SD4201 4202 4203	PL. 52 第78次調査・土塁SA4127 門SI1084等
PL. 53 第78次調査・建物SB4207等	PL. 54 第78次調査・各種遺構(SE4211 SV4217他)
PL. 55 表土層後期遺構確認面出土遺物(1)	PL. 56 後期遺構確認面出土遺物(2)
PL. 57 後期遺構確認面出土遺物(3)	

- PL. 58 後期遺構確認面(3)・焼土層・SD4200・SD4202・SD420出土遺物  
 PL. 59 SE4211出土遺物  
 PL. 60 SF4213・ピット・SX4235東・SX4235西出土遺物  
 PL. 61 前期整地層出土遺物(1)  
 PL. 62 前期整地層出土遺物(2)

## 挿 図

### 第29次調査

- |                             |                                     |
|-----------------------------|-------------------------------------|
| 挿図1. 第29次調査地区周辺地形図 (1/2000) | 挿図2. 第29次調査グリッド設定図                  |
| 挿図3. 道路SS975断割り状況           | 挿図4. 建物SB1022平面詳細図 (1/50)           |
| 挿図5. 石積施設SF1063・1064立面図     | 挿図6. 第29次調査区画模式図                    |
| 挿図7. SS975出土の銅銭 (一部)        | 挿図8. 区画11出土の硯                       |
| 挿図9. 越前焼甕片出土分布図             | 挿図10. 越前焼壺片出土分布図                    |
| 挿図11. 越前焼鉢片出土分布図            | 挿図12. 土師質皿片出土分布図                    |
| 挿図13. 天目茶碗片出土分布図            | 挿図14. 灰釉碗・皿片出土分布図                   |
| 挿図15. 青磁碗片出土分布図             | 挿図16. 青磁皿片出土分布図                     |
| 挿図17. 白磁皿片出土分布図             | 挿図18. 染付碗片出土分布図                     |
| 挿図19. 染付皿片出土分布図             | 挿図20. 第77・78次調査区周辺地形図 (1/2000)      |
| 挿図21. 第77・78次調査区グリッド設定図     | 挿図22. 第77次調査地区東西方向土層模式図             |
| 挿図23. 第78次調査地区Uライン土層模式図     | 挿図24. 門SI1084・門建物SB4206平面詳細図 (1/50) |
| 挿図25. 溝SD4201 (北から)         | 挿図26. 暗渠SZ1091 (東から)                |
| 挿図27. 暗渠SZ1091詳細図 (1/50)    | 挿図28. 井戸SE4211                      |
| 挿図29. 越前焼大甕設置遺構SX4235       |                                     |

## 表

### 第29次調査

- |                         |                   |
|-------------------------|-------------------|
| 表1. 石積施設一覧表             | 表2. 第29次調査出土遺物一覧  |
| 表3. SS975・第29次調査出土銅銭一覧表 | 表4. 第77次調査出土遺物一覧表 |
| 表5. 第78次調査出土遺物一覧表       |                   |

## 付 図

- |                   |                |
|-------------------|----------------|
| 付図1. 一乗谷朝倉氏遺跡地形図  | 付図2. 第29次調査全測図 |
| 付図3. 第77・78次調査全測図 |                |

# I 事業概要

# I 事業概要

## 1. 調査目的

一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名朝倉氏の城下町として広く知られている。一乗谷には朝倉館を中心に山城、上下の城戸、家臣団の武家屋敷や、寺院・町屋群などが、極めて良好に残っている。この良好に遺存する遺跡を国民共有の文化遺産として保護するため、昭和46年、278haという広大な地域を特別史跡に指定し、その中心部にあたる平地部の24haが公有地化された。

遺跡保護の目的は、遺跡に手を加えず保存するだけにとどまらず、遺跡を調査しその成果を広く公表して、人々の歴史認識に資することも非常に大切なことと考える。こうした認識に立って一乗谷朝倉氏遺跡を「遺跡をして自ら語らせる」ことを目的とした「史跡公園」化をめざす計画をスタートさせた。この事業は昭和47年3月に策定された「朝倉氏史跡公園基本構想」と、それに基づいて立案された「一乗谷朝倉氏遺跡整備基本計画」に基づき、遺跡を究明する発掘調査とその成果を公表する環境整備が両輪となって進められている。

## 2. 調査の経過

一乗谷が朝倉氏の居城跡であることは古くから良く知られており、近世の地誌にもその記述がみられる。昭和5年7月には朝倉館と湯殿跡・諏訪館跡・南陽寺跡の3庭園1.4haが国の史跡と名勝に、西山光照寺跡が史跡に指定され、その保護が計られることとなった。戦後、管理団体である足羽町は朝倉館唐門の修理（昭和38年）、英林塚の覆屋建設（昭和40年）の事業を実施すると共に、昭和42年には史跡の保存と活用を計るために朝倉氏遺跡整備事業委員会を設け、環境整備事業3カ年計画を立案して、まず湯殿跡・諏訪館跡・南陽寺跡の3庭園の整備を実施した。その間、昭和42年12月には山城跡・上下の城戸跡が史跡に追加指定され、面積は6.8haとなった。翌43年には、朝倉館の発掘調査が実施された。その結果極めて良好に遺構が残っていることが判明、遺跡の重要性が改めて確認された。

一方、昭和44年には一乗谷地区の農業構造改善事業が始まり、上城戸以南から工事が着手された。その結果、多量の遺物や遺構が露呈し、遺跡は破壊の危機の直面した。ことの重大性に気づいた文化財関係者は、この事業の中止を求め地元ならびに関係機関と協議した結果、城戸の内と山城を含む周囲の山林の278haを国の特別史跡に格上げ指定し、城戸ノ内の住宅地を除く農地の大半を一括全面買収して遺跡を保護することとなった。以前から公有地化された分も合わせて公有地面積は約25haとなった。

広大な遺跡であることから足羽町が実施してきた発掘調査と環境整備を福井県が分担し、福井市（足羽町は昭和46年福井市に合併され、福井市が管理団体となった）はその保護と管理を分担して共同で保存と活用を計ることとなった。そこで県はこの事業の実施機関として教育庁に「朝倉氏遺跡調査研究所」を設置、先の計画に基づき、「朝倉氏遺跡研究協議会」指導のもとに事業を進めることとなった。

これまでに実施した事業は次の通りである。

- 第1次5カ年計画（S42年～46年 発掘調査面積 6,780㎡）
  - 内容 当初は足羽町が3カ年計画として開始したが、特別史跡に昇格指定されたことにともない、4,5カ年次から福井県が引継実施した。南陽寺跡庭園、湯殿跡庭園、諏訪館跡庭園、朝倉館の発掘調査とその環境整備を主な内容とする。一乗谷の1/1,000の基本図も作成した。
- 第2次5カ年計画（S47年～51年 発掘調査面積 18,989㎡）
  - 内容 朝倉館とその濠のほか武家屋敷、寺院、町屋跡など性格の異なる屋敷跡の発掘調査を通じて一乗谷の概要をつかむことに主眼をおいた。環境整備はその地区の平面復元を行った。
    - 「一乗谷石造遺物調査報告書Ⅰ」（S49年）
    - 「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘整備事業10周年記念展」（於岡島美術記念館 S51年10月）
- 第3次5カ年計画（S52年～56年 発掘調査面積 29,310㎡）
  - 内容 第2次5カ年計画で明かとなった平井地区の武家屋敷群や道路、赤淵・奥間野地区の町屋群や寺院群を広く面的に調査し、一乗谷の都市計画を解明することに主眼を於いた。環境整備はその面的な整備を行った。
    - また、S56年には懸案となっていた出土遺物の展示等を目的とする朝倉氏遺跡資料館が開館した。
    - 「環境整備事業報告書Ⅰ」を刊行（S52年）
    - 資料館展示図録「一乗谷」を刊行（S56年）
- 第4次5カ年計画（S57年～61年 発掘調査面積 16,513㎡）
  - 内容 赤淵・奥間地区の調査を面的に拡大して中小の武家屋敷や多数の町屋群を発掘して戦国城下町の基本的な性格をつかむこと目的とした。これらの地区を面的に平面復元するとともに、平井地区の武家屋敷を立体復元整備した。
    - 「県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書」を刊行（S58年）
    - 「朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅰ」を刊行（S59年）
    - 開館5周年記念特別展「一乗谷と中世都市 まちなみとくらしの復原」開催（S61年8月）
    - 同図録「一乗谷と中世都市」を刊行
    - 同シンポジウム「一乗谷と中世都市 都市の構造と生活の復原」開催（S61年8月）
- 第5次5カ年計画（S62年～H3年 発掘調査面積 21,553㎡）
  - 内容 上下の城戸など谷内の要所の調査と庭園跡の再調査を行う。また、平井地区の町並み立体復原事業に先だって未調査の山裾側の武家屋敷群を調査する。これらの調査を通して史跡公園としての整備を充実させる。
    - 「朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅱ」を刊行（S63年）
    - 「朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅲ」を刊行（H2年）
    - 「朝倉氏遺跡環境整備事業報告Ⅱ」を刊行（H3年）
    - 第1回企画展「朝倉文化と茶の湯」開催（S62年8月）
    - 第2回企画展「石の鬼——一乗谷の笏谷石」開催（S63年8月）同図録刊行
    - 第3回企画展「一乗谷のくらしと木」開催（H元年8月）同図録刊行
    - 第4回企画展「一乗谷と越前焼」開催（H2年8月）同図録刊行
    - 開館10周年記念特別展「朝倉の遺宝」開催（H3年8月）同図録刊行

○第6次5カ年計画（H4年～H8年 発掘調査面積 12,800㎡）

内容 西山光照寺や御所・安養寺跡など城戸の外、馬出しなどの山裾部の調査を行い、城戸の外を含めた一乗谷全体の理解を目的とする。

「朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅳ」を刊行（H5年）

「朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅴ」を刊行（H6年）

第5回企画展「戦国大名朝倉氏の誕生」開催（H4年8月）同図録刊行

第6回企画展「一乗谷と職人」開催（H5年8月）同図録刊行

第7回企画展「海を越えて来たやきもの」（H6年8月）同図録刊行

### 3. 調査の方法と調査組織

調査は、国の補助事業として福井県が直接実施している。その実施機関として、福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所（昭和47年4月1日～昭和56年8月19日）とこれを改組した福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が設置され、発掘調査および環境整備を行っている。また、その指導のため朝倉氏遺跡調査研究協議会が設置されている。

本報告書に関係する年度の組織を以下に記す。

○昭和53年（第29次調査）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

委員	青園謙三郎	（福井テレビ 社長）
〃	石田 昇	（城戸ノ内町 町内会長）
〃	大久保道舟	（県文化財専門委員会 委員長）
〃	黒板 昌夫	（国土館大学 教授）
〃	田治 六郎	（大坂公園協会 理事長）
〃	戸塚 文子	（作 家）
〃	松下 圭一	（法政大学 教授）
〃	水上 勉	（作 家）
専門委員	伊藤 滋	（東京大学 助教授）
〃	岸谷 孝一	（東京大学 教授）
〃	木原 啓吉	（朝日新聞 編集委員）
〃	近藤 公夫	（奈良女子大学 教授）
〃	重松 明久	（福井大学 教授）
〃	田畑 貞寿	（千葉大学 助教授）
〃	坪井 清足	（奈良国立文化財研究所 所長）

朝倉氏遺跡調査研究所

所 長	藤原 武二	（造園）
	水藤 真	（文献）
	水野 和雄	（考古）
	小野 正敏	（考古）

岩田 隆 (考古)  
 吉岡 泰英 (建築)  
 南 洋一郎 (考古)  
 事務補助員 吉越 強

○平成4年度(第77・78次調査)

朝倉氏遺跡調査研究協議会

会 長 青園謙三郎 (福井テレビ 会長) 平成5年3月2日逝去  
 副 会 長 近藤 公夫 (神戸芸術工科大学 教授)  
 石井 進 (国立歴史民俗博物館 教授)  
 木原啓吉 (千葉大学 教授)  
 小林健太郎 (滋賀大学 教授)  
 田畑 貞寿 (千葉大学 教授)  
 玉置 伸悟 (福井大学 教授)  
 坪井 清足 (大阪文化財センター理事長)  
 平井 聖 (昭和女子大学 教授)  
 松浦 義則 (福井大学 教授)  
 石田 昇 (朝倉氏遺跡保存協会会長)  
 岸田 清 (城戸ノ内自治会長)

一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館 長 藤原 武二 (造園)  
 次 長 大塚セツ子 (事務)  
 主任文化財調査員 水野 和雄 (考古)  
 " 岩田 隆 (考古)  
 " 吉岡 泰英 (建築)  
 主 査 南 洋一郎 (考古)  
 " 佐藤 圭 (文献)  
 " 月輪 泰 (考古)  
 嘱 託 舟澤 茂樹 (学芸)  
 高野 正春 (事務)

○平成6年度(本報告作成年度)

朝倉氏遺跡調査研究協議会

会 長 近藤 公夫 (神戸芸術工科大学 教授)  
 副 会 長 平井 聖 (昭和女子大学 教授)  
 委 員 河原 純之 (奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター長)  
 木原 啓吉 (千葉大学 教授)  
 小林健太郎 (滋賀大学 教授)  
 田畑 貞寿 (千葉大学 教授)  
 玉置 伸悟 (福井大学 教授)  
 坪井 清足 (大阪文化財センター 理事長)  
 松浦 義則 (福井大学 教授)

吉田 伸之 (東京大学 教授)  
石田 昇 (朝倉氏遺跡保存協会 会長)  
奥田 道雄 (城戸の内自治会長)

一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館 長 貴志 真人  
次 長 大塚セツ子 (事務)  
主任文化調査員 岩田 隆 (考古)  
" 吉岡 泰英 (建築)  
主 査 佐藤 圭 (文献)  
" 赤沢 徳明 (考古)  
" 水村 伸行 (考古)  
嘱 託 舟澤 茂樹 (学芸)  
" 高野 正春 (事務)

また、発掘調査・遺物整理は多くの作業員の協力により進めることができた。以下にその名を記す。

(発掘作業) 伊与道太、加藤義雄、木村正志、斎藤喜代松、島 計作、岸上 勉、谷口惣次郎、  
谷口仁作、土田徳栄、西川末松、西田 忠、林 滋、平井茂左衛門、平鍋与津治、  
神岡遊蔵、福岡義信、藤田武志、藤田 忠、細田弥三郎、山口 堅、山根木茂麿、  
吉川 斉、吉川宗男、石田カズゐ、石田艶枝、石田はまを、石田ミヨ子、今吉ハギ、  
伊与フジ子、上坂和子、梅田みさを、奥田恵美子、奥田末子、奥田まつえ、奥田ユリ、  
岸田あや子、小林澄子、小林末子、小林ヒサヲ、田中和子、田中トシヲ、戸田起世子、  
福岡敏子、三崎チエ子、山口さだを、山下すみ子、山下喜美子、吉川サダ子  
(遺物整理) 朝倉八重子、上田優子、梅田由里、上都由利子、川中三恵子、佐飛康子、高木愛子、  
辻岡幸子、長谷川佐弥子、平井悦子、藤田恵美子、安田春代

## 4. 経 費

本報告書に関係する発掘調査経費および印刷製本費は以下の通りである。

○昭和53年度 (第29次調査)

発掘調査経費 20,000千円 {発掘調査面積4,500㎡ 内第29次調査 2,400㎡}

○平成4年度 (第77・78次調査)

発掘調査経費 33,000千円 {発掘調査面積2,600㎡}

○平成6年度 (報告書作成年度)

印刷製本費 2,000千円

## 5. 本報告書について

内 容 本報告書は、国庫補助事業として福井県が昭和53年度および平成4年度に実施した第29次調査、

第77・78次調査の報告である。各年度ごとに概要を報告しているが、内容については本報告書が優先する。また、第29次調査地区については、遺構にまとまりのあるSS977以北の町屋群に限った。

本書の構成は3章からなり、Iは全体の調査概要、IIは第29次調査、IIIは第77次調査、第78次調査について記す。

**執筆** 本報告書は、各調査次の諸記録を元に、館長貴志真人の指導の元に以下の分担により執筆し、編集は岩田隆があたった。

I 岩田隆、II-1 吉岡泰英、II-2 岩田、II-3 吉岡・岩田、III-1 吉岡、III-2 吉岡、III-3 赤沢徳明、III-4 吉岡・赤沢、III-5 吉岡、III-6 水村伸行、III-7 吉岡

**図面** 遺構平面図はアジア航測（株）に委託し、航空写真測量により作成したものである。遺物実測図については、担当者とともに遺物整理作業員もこれを助けた。また、挿図として使用した地形図は、昭和44年に足羽町がパシフィック航業（株）に委託して作成した基本図（1/1000）およびその集成図である。

**その他** 本報告書の遺構図に用いた座標は「第IV系」である。

また、遺構番号の頭に付した記号は以下の分類による。

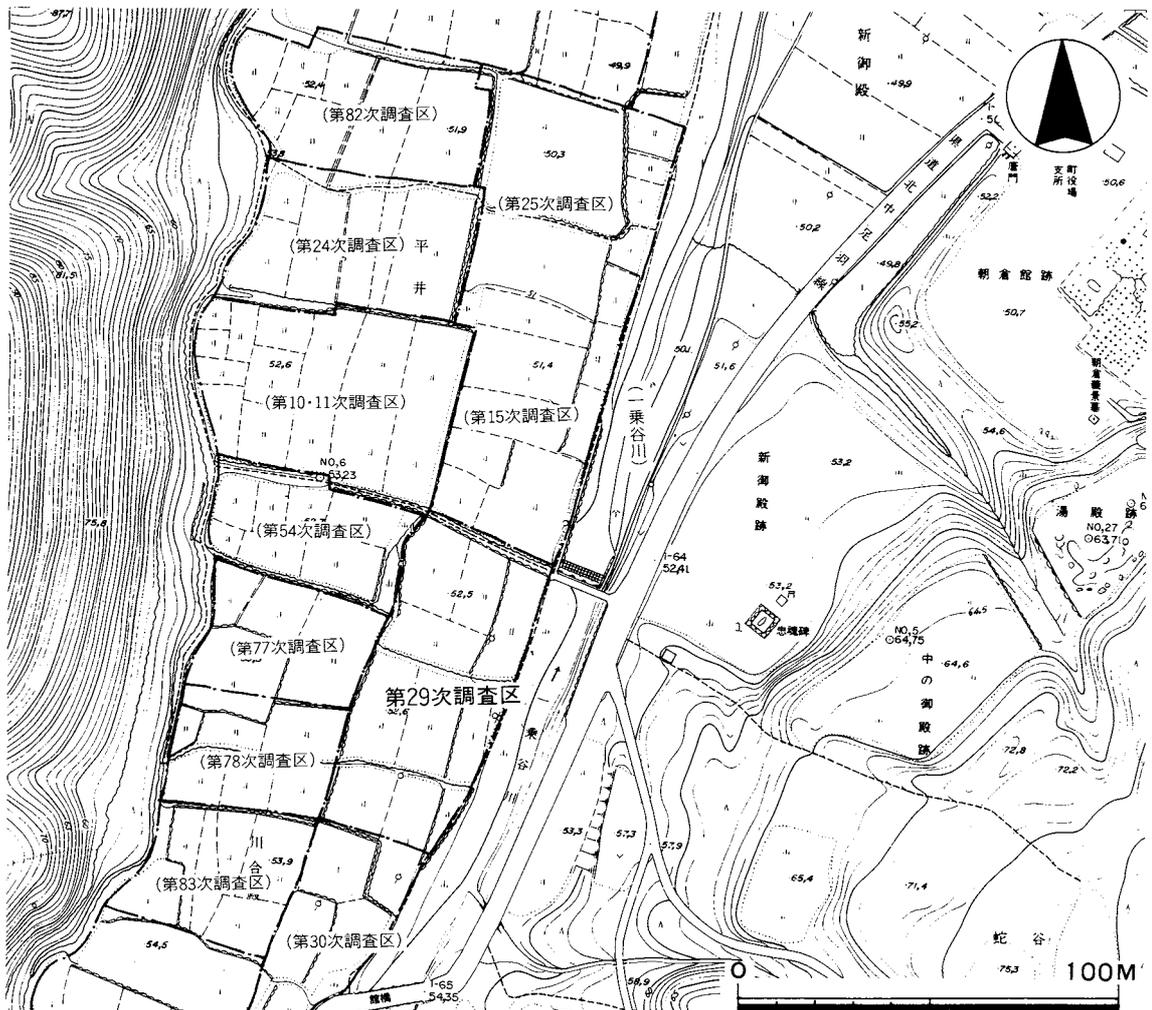
SA：土塁・堀・柵、SB：建物、SD溝、SE：井戸、SF：石積施設、SG：庭園、SI：門、SK：土壙、SS：道路・通路、SV：石垣、SZ：暗渠、SX：その他

## II 第 29 次 調 査

## II 第29次調査

### 1. 調査の経過と概要

本調査の対象とした地区は、都市「一乗谷」の中心となる上・下の城戸に区画された「城戸ノ内」の中程やや南寄にあって、朝倉氏五代当主義景が居住したことが判明している朝倉館（『報告書Ⅰ』）とは一乗谷川を隔てて、その西岸南100mに位置している。この付近一帯の水田畦畔等からは比較的整然とした大きな区画が連続することが読み取られ、また、江戸時代後期にその伝承に基づいて描かれたものではあるが「一乗谷古絵図」にも「斎藤兵部大輔」・「新馬場」・「平井」・「鰐淵将監」・「河合安芸守」等の有力家臣名を含む名称が記されていることなどから、重臣団屋敷地区の可能性が想定され、注目されていた。こうしたこの地区の様子を遺構から解明するため、まずその中央にあって最も大きな区画となっている古絵図の「新馬場」に比定される所に昭和48・49年度、第10・11次調査（『報告書Ⅱ』）3,665㎡が実施され、その結果、予想された通り、南北方向の幅約4.5mの道路と、これに面する周囲に土塁を廻らす大規模な屋敷が存在することが確かめられた。引き続き、その東に第15次調査（昭和50年度、



挿図1 第29次調査区周辺地形図 (1/2000)

『報告書IV』)、これらの北に第24・25次調査(昭和52年度、『報告書IV』)の調査区が設定された。こうした面的な調査区の拡大により、その計画的な町造りの様子が明らかになってきた。また、従来、集落内を通過していた県道に代わって、この一乗谷川の西岸に沿って県道を移動させる計画が進行しており、その事前調査も必要とされていた。そこで、これまでの第10・11・15・24・25次調査に引き続いて、その南の、従来の県道が川を渡り西岸を走る所までの間、約120mに、川沿の区画の解明と道路建設の事前調査を兼ねることを目的として、計画されたのが、第29・30次調査である。

第29次調査区は、福井市城戸ノ内町字川合殿及び平井地係、一乗谷川の西岸に沿うもので、検出されている南北方向の道路と水田の区画から、東西約36m、南北約84m、画積約2,950㎡の規模を持って、設定した。調査は、昭和53年5月11日に開始し、同年8月23日に遺構検出作業をほぼ終え、隣接する第30次調査に移り、その終了を待って、同年10月5日に二つの調査区を併せて、ヘリコプターによる航空写真測量を実施し、また、10月20日に遺構写真撮影を行い、現場作業を終了した。

調査地周辺の地形をみてみると、南から北へ向かって流れる一乗谷川は、東へ寄っており、この西岸は山と川の間は80m程であり、面積300㎡前後の水田が広がっている。また、西の山から流れ出る小さな沢がみられ小規模な扇状地形がみられるとともに、対岸の東には、城山から流れ出る蛇谷川が一乗谷川に注ぎ込んでおり、小規模ではあるが発達した扇状地形がみられる。海拔高は53~54mであり、各水田間は畦や石垣で仕切られており、その高低差は0.1~0.5mであり、全体としては、南西から北東へ傾斜している。調査区内は、10区画の水田に分かれており、これらは大きく30m前後で南北に3分され、さらに川から約10m離れて南北にはしる石垣で、川沿いの水田とその西の水田に東西に二分されるが、その高低差は0.1~0.3mであって、比較的少ない。

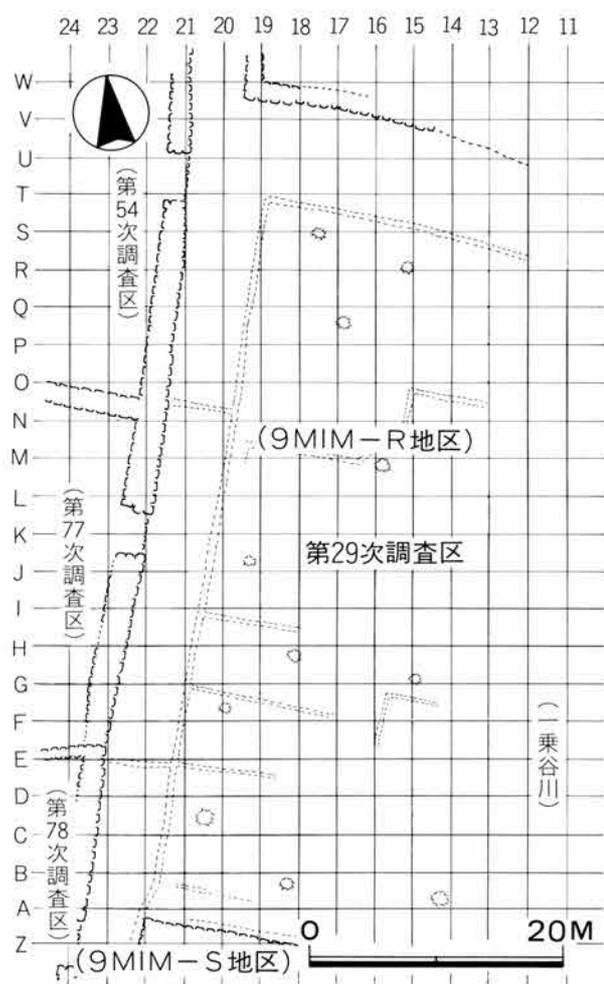
調査は、北から順に水田耕作土を除去し、明らかにこの水田畦畔として後世に造られた石垣を撤去した。耕作土を0.1~0.2m除去すると、礎石等一部の遺構がみられ、また、遺物も出土した。調査グリットは、これまでの調査に際し設定したものを踏襲した。まず、これまでの調査により検出されている南北方向の道路と併せてその西の石垣の検出を実施した。次いで、南から順次遺構検出に取りかかった。この調査における成果は、川沿に一部氾濫による削平がみられるものの、全体に遺構の残存状況が良いこと、また、この一乗谷の調査では初めて、道路に沿って溝で区画された小規模な屋敷が並んで存在している例が検出されたこと、南北方向の道路が行き止まりとなるとともに調査区の北端で東西方向の道路が検出されたことなど、多く、城下町一乗谷における町造りの計画の解明作業は大きく進展したといえよう。

なお、本調査区内に含まれ、上段として調査した、東西方向の道路SS977から南の区画は、第30次調査区と一体として考えたほうが理解しやすいと思われるので、今回の報告からは切り離すこととし、ここでは取り扱っていない。また、南北方向道路に面する西の屋敷の門、石垣等についても、同様に、より関係が深い、それぞれの屋敷の報告(第77・78次調査)で取り扱うこととした。

## 第29次 調査日誌抄

(1978年5月11日～10月5日)

- 5.11 調査開始。ベルコン等器材搬入。
- 12 除草。
- 15 水田石垣除去及び表土除去を始める。
- 16 銅銭42枚出土。
- 18 銅銭多量(220枚)出土。
- 23 耕作土直下から礎石が一部出現し始める。
- 24 道路 S S 976土塁 S A 979・980の検出作業開始。
- 29 研修生、八戸市(工藤竹久)、浪岡町(工藤清泰) 2名受入れ。
- 31 グリッド設定、地区杭打。本格的な遺構検出作業に着手。
6. 1 下段の耕作土除去終了、中段に移る。
- 2 溝 S D 985～989検出。
- 6 中段の耕作土除去終了、上段に移る。
- 8 井戸 S E 1047ほか検出。
- 12 中段と上段の境で道路 S S 977検出。
- 13 道路 S S 976を塞ぐ土塁 S A 983等検出。本日で、上段の遺構検出作業を終了し、中段に移る。
- 14 溝 S D 999, 建物 S B 1027, 井戸 S E 1040～1043, 石積施設 S F 1064～1067等検出。
- 15 極めて残存状況の良い建物 S B 1022, 溝 S D 997・998等検出、これらから、道路に沿って櫛状に区画が並ぶことが判明する。
- 15 花押墨書挿鉢(RH17)出土。
- 16 中段の遺構検出作業を終了し、下段に移る。
- 18 溝 S D 994, 井戸 S E 1035・1036等検出。
- 24 溝 S D 985と、その北に存在する東へ延びる道路 S S 975を検出し、ここで道路はT字路となることを確認。
- 30 道路 S S 975の北境界となる土塁 S A 978の南面石列を検出、北については後世の削平により不明。
7. 3 門 S I 1082を検出。
- 5 第1回の遺構検出作業を終了、下層遺構の確認等の作業を始める。
- 6 井戸 S E 1036を完掘、一輪挿、傘のロクロ等出土。
- 11 井戸 S E 1047を完掘、錠前、鉄釘一括(未使用110本を含む約300本)等多数の遺物出土。
- 13 門 S I 1083を検出。井戸 S E 1041を完掘、傘のロクロを含む多数の遺物が出土。
- 17 門 S I 1084を検出。
8. 1 井戸 S E 1044を完掘、壺、水滴の完形品等出土。
- 4 建物 S B 1022内で大甕埋設遺構検出。
- 9 立面図等作成のため遣り方を設定。
- 23 第29次調査の遺構検出作業を終了。引き続き、南に隣接する第30次調査を開始する。
- :
- :
- 10.5 第29・30次調査区を併せてヘリコプターによる航空測量を実施。
- 20 第29・30次調査区を併せて写真撮影を実施、現場作業終了。



挿図2 グリッド設定図

## 2. 遺 構 (第1図～第8図, PL. 1～PL. 11)

ここで取り扱うのは、前述したようにこの調査区内、約60mの間隔を持って検出された東西方向の2本の道路とこれと繋がる南北方向道路で区画された範囲である。調査区の東、一乗谷川寄りには、この川の氾濫による削平を受け、その後に水田化されているようで、整地土に遺物を含むものの遺構は見られないが、他の地域については良好に遺構が残されている。検出した主な遺構は、これら町割の基本となる道路3や土塁及び石垣8のほか、柵(塀)3、溝15、井戸12、石積施設28、建物16等である。これらは基本的に2～3時期に区分できるようであり、ここではこれを下層から順にI期、II期、III期とする。III期は、この一乗谷の町が朝倉氏と共に滅亡する天正元年(1573)に存在した最終時の遺構である。I期は、一乗谷の町割りの開始された最初の時期の遺構であり、II期、についても基本的には計画的な町割にのりものであるが明確な時期は判明していない。なお、基本的には、諸状況から一乗谷の町割りの開始は15世紀末から16世紀初頭と推定している。これらの遺構の間のレベル差は少なく、かつ、上層となるIII期の遺構がほぼ全面にわたって検出され、十分な下層の調査を実施出来ておらず、加えて、屋敷毎に整地が異なり、またこれらを分断する石垣、溝等の遺構が存在するたために全体を通した検討が困難であった。そのため、各遺構相互の関係については明確でない点も残されている。

なお、ここでは、まず、町割の基本となる道路や土塁等を、次いで、この中を各屋敷に細分する石垣、溝等を、そして最後に各屋敷毎に建物や井戸等を説明する。また、ここで用いる方位は、谷の入り口を北、奥を南としているが、正確には南北方向の道路の東辺ラインと第VI系方位との間ではN17°Eのずれがある。また、遺構平面図等に記した数値は、第VI系座標系に基づく位置を示している。

**S S 975** 調査区北端で検出された東西方向の道路。I～III期を通じて存続する町割の骨格となる遺構の一つである。この道路の北辺となるのは土塁S A 978であって、これを境にして北の屋敷と間には約1mの高低差を持っており、川下となる北に位置する屋敷が低い。南辺となるのは石組の側溝S D 985である。道路幅は、西の南北方向道路S S 976との接点付近で内法を計ると、7.6m(25尺)である。東の川寄りには一部削平を受けているが、若干狭くなるようである。検出長は20m程であって、勾配はほとんどみられない。断ち割り調査の結果、礫層の上に0.1m程度の間隔で5回の良く叩き締められた砂利敷整地層がみられた。なお、最終整地層(上から第2面)上には焼土・炭層が存在している。



挿図3 道路S S 975路面断割り状況

**S S 976** 調査区西端で検出された南北方向の道路。I～III期を通じて存続する町割の骨格となる遺構。以前の調査で検出されている北の南北方向の道路 S S 260と連続する。西辺となるのは山裾に広がる大規模な屋敷群の土塁石垣であり、ここには門が開かれている。東辺となるのは側溝 S D 986である。側溝はほぼまっすぐであるが、西の土塁石垣は東西方向道路 S S 975との接点から少し南の屋敷境で5°ほど折れ曲がっている。また、65mほど南にこれを閉塞する土塁 S A 983が存在し行き止まりとなる。なお、この少し手前に幅約3mの東西方向道路 S S 977が取り付いている。この2条の東西方向道路の間隔は、約60m (200尺)である。幅は、東西方向道路 S S 975との接点で6m (20尺)、折れ曲がり以南は5.1m (17尺)、東西方向道路 S S 977以南は4.5m (15尺)である。南端と北端の高低差は0.6mで、この間は60mほどであるので、勾配は1%となる。断ち割り調査では、良く叩き締められた砂利敷面が4面確認されているが、この間は約0.2mであって、少ない。特に上から第2面と第3面は近接している。(第1図, P L. 2)

**S S 977** 調査区南半で検出された東西方向の道路。I～III期を通じて存続する。前述した南北方向の道路 S S 976から東へ延びる。幅は3m (10尺)。南辺となるのは、高さ約0.3mの石垣 S V 1088とこの裾の溝 S D 993である。北辺となるのは、基本的には、断片的に検出されている溝 S D 1004と考えられる。検出長は約24mである。砂利敷面は2面確認されている。そのレベル差は、約0.1mである。中程でこの道路を斜めに横断する溝 S D 1007が検出されている。勾配は約2%と、ゆるやかではあるが、川側である東に向かって傾斜している。中ほどに道路を斜めに横断する石組溝 S D 1007が存在するが、側石は検出された道路面に比べ少し低く、谷内の他の類似例から見て、この溝は暗渠となっていた可能性が高いものと考えられる。(P L. 3)

**S A 982** 南北方向の小土塁。後述するように、道路側溝の側石が他の場所と異なり、大きく、その根入れもやや深く、そして1石である。加えて、断片的ではあるが、この溝側石と平行して、約0.9m内側にも石列が存在する。こうしたことから、屋敷を区画する塀の基礎部(小土塁)と推定した。幅0.9m、長さ約17m。(第8図)

**S D 985・986** 道路 S S 975・976に沿う石組の側溝。I～III期を通じて存続する。南北方向の道路 S S 976の東にあって、周囲の屋敷からの排水を集め、南から北へ向かって流れるのが S D 986。長さは、約67m。南端は暗渠 S Z 1093となって屋敷境の塀を潜り、さらに南の屋敷からの排水を集める。東西方向の道路 S S 975の南にあって、S D 986を受け、西から東へ流れるのが S D 985。東端は後世の攪乱を受けており、川との取り付け等は不明。検出長は、約21m。石は長径0.3～0.4m、短径0.2～0.3m、厚み0.2～0.3m程度の大きさの自然石を主として用いている。内法幅は、0.3～0.4m。深さは、S D 986の南端部では0.2m (1石)、S D 985の東端部では0.6m (3石)である。この側石の積み方を見ると天場のそろった所がかなり見受けられたり、下部の石を欠く所が見られる。道路の改変に従って、石が積み上げられたり、積み直したりしたことが知られる。また、道路側の側石は全体的に均質であるのに対し、屋敷側の側石の大きさや積み方には、変化があって、これが、屋敷を区切る溝等と対応していることが指摘できる。このことから、こうした道路側溝の石積みは、少なくとも各屋敷側については、屋敷毎に施工したものと考えられよう。こうした変化の見られる石積みではあるが、基本的に径0.3m内外の石を用いて、2～3段の石積みとしている中であって、S D 986のほぼ中央から約17mの間の屋敷側の石の配列は、これとは大きく異なり、主として径0.6m程で扁平な面を持つ大きな石、1段で構成している。これは、際立っており、注目すべきである。(第8図, P L. 3)

**S D 987・988** 南北方向の道路 S S 976を横断し、西の大規模な屋敷からの排水を道路側溝 S D 986に流す東西方向の石組溝。I 期の溝が S D 988、これを II・III 期に 0.2m 積上げし、東端を 0.2m 南にずらして作り直した溝が S D 987。径 0.3m 内外の比較的扁平な自然石を用い、内法幅は 0.25～0.3m、深さ 0.2m であって、石は積み上げない。改変後の溝 S D 987が、当初の溝 S D 988に比べ、少し狭い。西の屋敷の塀は、暗渠 S Z 1089で潜る。なお、この南 2.4m に存在する暗渠 S Z 1090からの排水も石垣裾の溝を介して受けている。(P L . 3)

**S D 989** S D 987・988同様、南北方向の道路 S S 976を横断し、西の大規模な屋敷からの排水を道路側溝 S D 986に流す東西方向の石組溝。I～III 期を通じて存続する。この溝と北の S D 987・988との間隔は 58.5m である。径 0.3m 内外の比較的扁平な自然石を 1 石並べ、内法幅は 0.3m、深さ 0.15m と少し浅い。西の屋敷の塀石垣は、暗渠 S Z 1091で潜る。

**S D 993** この地区を大きく区画する石垣 S V 1088の裾に存在し、東西方向の道路 S S 977の南側溝を兼ねる石組溝。不明な点もあるが、I～III 期を通じて存続するものと思われる。東端は、後世の攪乱を受けている。検出長約 20m。径 0.2m 程度と全体的に少し小振りの自然石を 1 石並べる。内法幅 0.2m 弱、深さは 0.15m 程。また、西端は、浅くなり、明確な側石は見られず、自然に消滅したことも考えられる。

**S D 1004** 東西方向の道路 S S 977と北の小規模屋敷の境となる石組溝。検出レベルから見て、II・III 期の遺構と考えられるが、後世の削平で一部が残されているのみで、詳細については明らかでない。残存部では、内法幅 0.15m、深さ 0.1～0.15m である。この延長線上に見られる断片的な石列 S X 1141は、この溝の名残の可能性が高い。

**S X 1176** 調査区の中程に存在する東西方向の石列。基本的には III 期の遺構であるが、II 期から存在した可能性も考えられる。検出長は 5.4m、径 0.3～0.4m の比較的扁平な石を 1 石並べている。遺構のレベルは、この石列を境にして、南北が 0.2m 程異なり、上流側である南が高い。また、ちょうどこの位置が後世の水田の畦畔となり、段差が生じており、東半部は、削平を受けている。この石列によって二つの東西方向の溝 S D 995・1004の間約 55.6m が正確に二分される。こうした点から、この遺構は、この地区を大きく区画する重要な意味を持つものと考えられる。

**S D 994** 調査区北半部にあつて、矩折れを持って西から東へ流れる石組溝。レベルから考えると III 期の遺構と見られるが、II 期にも存在した可能性も考えられる。まず、小土塁 S A 982に沿って南から北に向かう。この部分は若干不明な点もあるが、内法幅は 0.2m、深さ 0.1m 程と推定される。素掘りの可能性も考えられる。そして、東に折れ、約 9m 伸び、井戸 S E 1036の北を巻くように東北に約 3.5m 進み、北に折れ、約 5m 進んだ後、再び東に折れて川に向かって約 5.4m 進む。この先は、後世の削平を受けている。径 0.3m 程度の上面の平な石、1 石を並べ、内法幅 0.2m、深さ 0.1～0.15m である。高低差は全体で約 0.1m 程であつて、ゆるやかである。(P L . 5)

**S D 997** 調査区中程で検出された屋敷境となる東西方向の石組溝。基本的には III 期の遺構であるが、II 期から存在していた可能性もある。東から西の道路側溝 S D 986に注ぐ。径 0.3m 前後の上面の平な石を 1 石を並べて側石とするもので、長さ約 7.5m、内法幅 0.25m、深さ 0.15～0.2m である。勾配は 1% 程。主屋の奥行きに相当する部分のみで、屋敷の裏境までは延びていない。

**S D 998** 調査区中程やや南寄りで検出された屋敷境となる東西方向の石組溝。基本的には III 期の遺構であるが、II 期から存在していた可能性もある。西の道路側溝 S D 986に注ぐ。S D 997との間隔は 6m。径 0.3m 程の石を 1 石を並べ、長さ約 11.9m、内法幅 0.15m、深さ 0.1～0.15m である。高低差はほとんど

どみられない。屋敷の奥行き一杯に延び、東端で0.8m南に折れて延びる。

**S D 999** 調査区やや南寄りで見出された屋敷境となる東西方向の石組溝。東から西へ流れ、道路側溝 S D 986に注ぐ。この溝との関係から見ると、II・III期の遺構と考えられる。S D 998との間隔は5.9m。径0.3m前後の石、1石を並べ、長さ約12m、内法幅0.18m、深さ0.15m程度である。高低差はほとんど見られない。屋敷の奥行き一杯に延びている。ただし、屋敷奥寄り3m程は南側の側石を欠き、この部分については、当初より溝ではなかった可能性も考えられる。

**S D 1000** 調査区南寄りで見出された屋敷境となる東西方向の石組溝。東から西の道路側溝 S D 986に注ぐと考えられるが、高低差は見られない。検出された面も周辺の遺構に比べ少し低いようであり、また、後述するようにこの溝を分断して井戸が設けられていることから、II期の遺構と考えられる。S D 999との間隔は3.6m。径0.2~0.3mの石を1石並べ、長さ約7.7m、内法幅0.15~0.2m、深さ0.1~0.15m程度である。屋敷の裏境までは延びていない。なお後に、中程西寄りに造られた井戸 S E 1041により分断されている。また、東端に北の溝 S D 999との間を結ぶ暗渠 S Z 1094が取り付いている。

**S D 995** 調査区やや北寄り中程で見出されたII期と考えられる南北方向の長さ3.5mの溝状遺構。上幅0.3m、下幅0.2m、深さ0.1mの規模を持ち、基本的に側石は見られず、素掘りと考えられる。

**S D 996** 調査区やや北寄り中程で見出された南北方向の石組溝。基本的にはIII期の遺構と考えられる。側石の多くを欠くが、長さ約2m、内法幅0.15m、深さ0.1m程である。南端は溝 S D 994と繋がる。

**S D 1001** 調査区中程南寄りで検出された鍵型に曲がる石組溝。III期の遺構である。径0.2~0.3mの石、1石を並べる。内法幅0.25m、深さ0.2m程度である。石積施設 S F 1064から北へ約4.1m延び、ここで直角に折れ東へ約4m進み、削平により消滅している。南北部は水平に近いが、東西部は2%程度の勾配を持って東の川側に流れる。

**S D 1002** 調査区南端近く東寄りで検出された南北方向の石組溝。削平を受けており、断片的に残るのみで、詳細は明らかでないが、III期の遺構と思われる。検出長1.5m程、内法幅は0.15m程度と考えられる。

**S D 1003** 調査区南端近くで見出された南北方向の石組溝。側石の多くを欠き、詳細については不明だが、III期の遺構と考えられる。内法幅0.2m弱、深さ0.15m程度と見られる。

**S D 1009** 調査区北端近くで見出された南北方向の石組溝。断片的に残されていたため詳細については明確でないが、III期の遺構と考えられる。検出長約2m、内法幅0.2m弱、深さ0.1m程度と見られる。両脇に建物礎石が見られることから、敷地境にあって、敷地の奥である南から道路側溝 S D 985へ排水する溝と考えられる。

**S D 1010** 調査区北東端で見出された後世の遺構と考えられる南北方向の石組溝。一乗谷川の氾濫により遺構が失われた所に位置し、他の遺構とレベルもことなり、0.7m低い。近世の水田に伴うものと考えられる。検出長約14m、内法幅0.4m、深さ0.2m程である。

**S X 1132・1134・1137** 調査区の南半中央で見出された南北方向の石列。基本的にはIII期の遺構と考えられる。東西方向の溝 S D 997・998・999等で区画される屋敷の奥、東端に位置し、ほぼ方向は一致するが、少しずつずれが見られる。S D 997と S D 998の間に位置するのが S X 1132。基準となる南北方向道路 S S 976とは平行せず、約5度北で西へ振っている。長さ約6.5m、径0.2m程度の石を並べる。残りはよい。S D 998と S D 999の間に位置するのが S X 1134。石の多くを欠くが、方向は S X 1132とほぼ一致し、東へ0.2mずれているようである。長さは5.5m程と見られる。S D 999の南に位置するのが S

X1134. 石の多くを欠き、詳細については明らかでない。方位は、基準となる南北方向道路 S S 976 に対し、約 3 度北で西へ振る。二つの石が並列する所が見られる。

**S B 1012** 東西方向道路 S S 975 に面する屋敷にあって、東端で検出された、礎石を用いた建物。III 期の遺構と考えられるが、残存状況はあまり良いといえず、また、東方が後世の削平を受けているため不明な点が多い。検出した礎石では、東西、南北とも約 4 m であるが、東西方向については、水田化後に設けられた溝状遺構 S X 1114 の東にも礎石と考えられる石が存在することから、これを越えて東へ延びていた可能性も考えられる。道路側溝と建物前面礎石列は少し振れており、溝側石との間隔は、検出礎石東端で 0.5 m、西端で 0.8 m 程である。礎石配置にバラツキがあって、基準となる寸法は明確でない。

**S B 1013** 東西方向道路 S S 975 に面する屋敷にあって、中程東寄りで検出された礎石を用いた建物。III 期の遺構。S B 1012 の西に位置する。東西 3.6 m、南北 4.5 m 程の規模と考えられるが、残存する礎石もまばらで、はっきりしない点もある。特に、西南部には、突出部があった可能性がかんがえられる。前面の溝側石に接して礎石が存在する。また、この建物内に井戸 S E 1033 が検出されている。(P L . 4)

**S B 1014・1015** 東西方向道路 S S 975 に面する屋敷にあって、中程西寄りで検出された礎石を用いた建物。S B 1013 の西に位置する。断片的ではあるが、隣接し、レベル差 0.1~0.2 m の上下二つの礎石群が検出されており、上層すなわち III 期の建物が S B 1014、下層すなわち II 期の建物が S B 1015。明確でない点もあるが、東西 3.8 m、南北 5.6 m の規模と考えられる。一乗谷において多く見られる 1 間 6.2 尺 (1.88 m) に近い間隔で礎石は配置されているように見受けられる。この建物内に笏谷石製の炉の一部が、据え付けられた時のままとと思われる状態で出土している。(P L . 4)

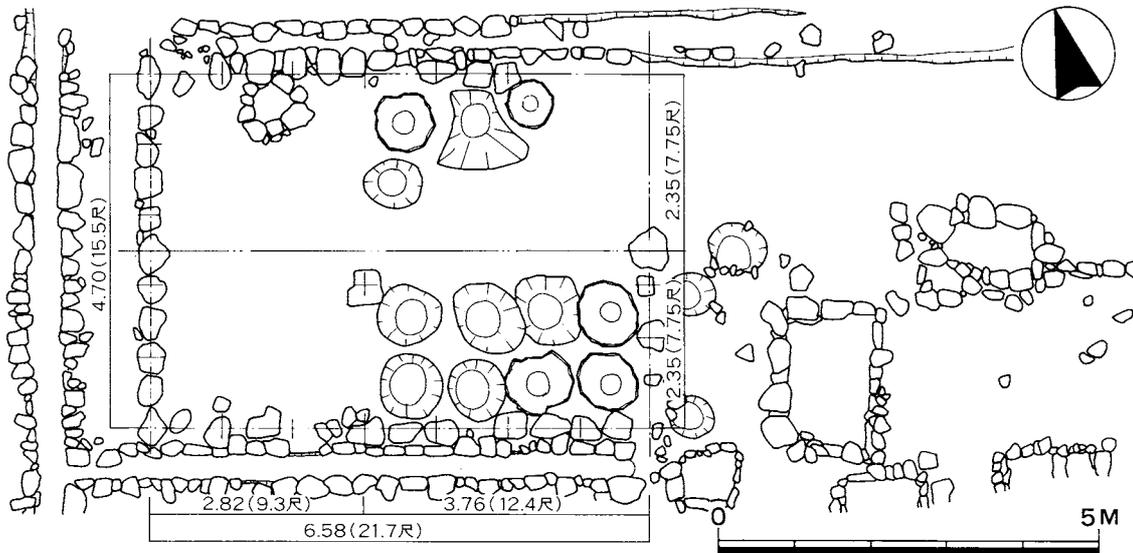
**S B 1016** 東西方向道路 S S 975 と南北方向道路 S S 976 に面する礎石を用いた建物。III 期の遺構。溝 S D 985 の側石の天場に規則的に少し大きく扁平な石が見られ、これが前面の礎石列と考えられる。東西 5.6 m、南北 5.6 m の規模と考えられる。礎石配置から、基準柱間寸法は、約 6.2 尺 (1.88 m) と判断される。また、この建物を東西に二分するように礎石列が見られ、この東半、中央寄りに、溝 S D 985 に 1 m × 0.6 m 程の大きく扁平な自然石を架け渡しており、ここが、出入口と考えられる。加えて、この出入口の東南脇に井戸 S E 1034 が検出されている。これらのことから、この東半部は、土間と考えられる。(P L . 4)

**S B 1017** 調査区北半西寄りで検出された礎石を用いた建物。III 期の遺構と考えられるが、II 期の可能性も残る。礎石が断片的に残るのみで詳細は明らかでないが、東西 3.7 m、南北 7 m 程の規模と考えられる。なお、北に少し突出部があった可能性も高い。所々、6.2 尺 (1.88 m) に近い寸法が見られる。

**S B 1018** 調査区北半西寄りで検出された礎石を用いた建物。III 期の遺構と考えられる。東西約 3.8 m、南北約 11 m の規模と考えられるが、中央の約 3.8 m を除外して南北二つの別の建物と考えることもできる。この建物の西北隅に礎石の集まり S X 1126 が存在し、西面北半と北面に沿って溝 S D 994 が廻る。基準柱間寸法は、約 6.3 尺 (1.9 m) と思われ、少し大きい。(P L . 5)

**S B 1019** 調査区北半中央で検出された礎石を用いた建物。III 期の遺構と考えられる。東西約 3.8 m、南北約 3.8 m (東半は 4.1 m) の規模を持つ。基準柱間寸法は、S B 1018 同様、約 6.3 尺 (1.9 m) と思われる。(P L . 5)

**S B 1020** 調査区北半中央で検出された礎石を用いた建物。III 期の遺構と考えられる。東西約 2.1 m、南北約 1.9 m の規模と考えられるが、東に約 1.9 m 延びていたことも考えられる。



挿図4 建物SB1022平面詳細図(1/50)

**SB1021** 調査区北半中央で検出された礎石を用いた建物。III期の遺構と考えられる。東西約3.6m、南北約6.5mの規模と考えられる。基準柱間寸法は6.2尺(1.88m)と見られる。建物内北端中程に水甕と考えられる越前焼大甕が据え付けられている。(PL.5)

**SB1022** 石列SX1176と溝SD997により区画された間口6mの屋敷で検出された礎石を用いた建物。III期の遺構と考えられる。東西約6.6m、南北約4.7mの規模を持つ。径0.4m程の比較的しっかりした扁平な石を連続して置かれているようにも見えるが、礎石は、基準柱間寸法となる1間を6.2尺(1.88m)として、半間間隔に配置したと判断される。建物は正面となる道路側溝から、約1.2m後退している。東西の端の柱筋では、建物の南北間2.5間をちょうど二分する位置に礎石が配置されており、これは建物の棟木を支え柱を受けるためと見るべきで、建物は、東西すなわち道路に対して、妻を見せる構造と考えられる。礎石は、周囲が基本で、建物内には前面より1.5間、南面より1間の位置に1個置くのみである。そして、この礎石の奥に越前焼大甕を8個規則正しく据え付けた遺構SX1098があり、北面に沿っても同様の越前焼大甕と中甕を4個据え付けた遺構SX1097が存在している。また、前寄りに井戸SE1037も存在している。(PL.6, 挿図4)

**SB1023** 溝SD997とSD998により区画された間口6mの屋敷で検出された掘立柱と考えられる建物。しかし、柱穴と考えているピットから柱根は検出されておらず、また、深さは、0.1~0.4mとばらつきもあって、これが礎石の抜取り跡となる可能性や、2種の建物跡が混在していることも考えられる。基本的にはIII期の遺構と考えられるが、周囲の溝側石に比べ、検出面は、0.1m程低いこともあり、II期の可能性も残る。東西約6.5m、南北約4.2m程の規模と見られるが、不明な点も多い。前述の規模とすれば、井戸SD1038は建物内となるが、この西側に、南北の石列の断片があり、ここが、建物の東面となる可能性もある。とすれば、建物外となる。なお、石積施設SF1072は、建物の整地土で完全に覆われており、先行する遺構である。(PL.6・7)

**SB1024** 調査区中程東寄りで検出された礎石を用いた建物。III期の遺構と考えられる。径0.4m前後の比較的大きな礎石列が残るが、断片的で、建物の規模、向き等は不明である。1間を6.2尺(1.88m)として、1間、半間に近い寸法が見られる。(PL.8)

**SB1025** 溝SD998とSD999により区画された間口6mの屋敷で検出された礎石を用いた建物。ピッ

トと礎石が混在するが、ピットは礎石の抜取り跡と考えられる。Ⅲ期の遺構と考えられる。断片的に礎石等が残るのみであって、建物の規模、向き等、詳細は、不明である。井戸S E1040はこの建物内と考えてよい。また、正面の溝S D986脇に径1 m近い大きな石が据えられている。入り口と関係するのではなかろうか。(P L. 7)

**S B1026** 溝S D1000とS D1004により区画された屋敷で検出された礎石を用いた建物。礎石の抜取り跡と考えられるピットと礎石が混在する。Ⅲ期の遺構と考えられる。建物の規模等は明確でないが、東西は6 m前後、南北は3.6 mもしくは、井戸S E1041を取り込んでいたとすれば、6.5 m程度となろう。1間を6.2尺(1.88 m)として、1間、半間に近い寸法が見られる。(P L. 7)

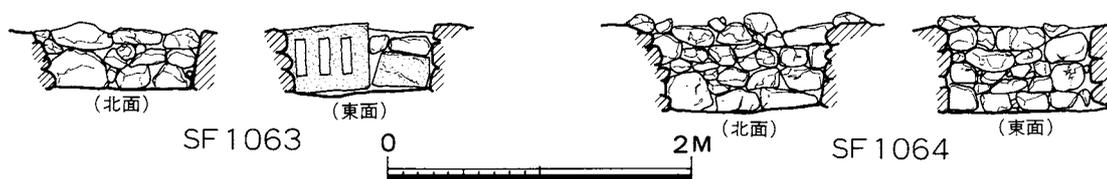
**S B1027** 調査区南半東寄りで検出された建物。Ⅲ期の遺構と考えられる。径0.3~0.6 mの石を鍵型に連続して並べる。土台構造の建物と推定される。西、南の2面が残るのみで、規模等は明確でない。

**S E1033~1044** 石積の井戸。一部掘り下げを実施しているが、これらから知られることは、水位は高く、天場石から1~1.5 m下が水面となり、深さは、2.5~3 mと比較的浅い。S E1033は、調査区北の東西方向道路に面する屋敷の建物S B1013内で検出された。天場石の一部も残り、内径0.6 m弱とやや小振りである。大きな石が投げ込まれており、掘り下げはしていない。S E1034は、東西方向道路に面する屋敷の建物S B1016内で検出されたもので、天場石もほぼ残り、内径は0.6 mである。S E1035・1036は、調査区北半中程で検出されたもので、天場石も比較的よく残り、共に内径0.7 m強で、建物外に位置する。S E1037は、南北方向道路に面する屋敷の建物S B1022内北端で検出されたもの。天場石もよく残り、内径0.5 m程で小振りである。S E1038は、南北方向道路に面する屋敷のやや奥寄りで検出されたもので、内径0.6 m程である。S E1039は、調査区中程東寄りで検出されたもので、内径0.6 m、天場石を欠く。S E1040は、南北方向道路に面する屋敷の建物S B1025内北端で検出されたもので、天場石の一部が残り、内径0.5 m程で小振りである。S E1041は、調査区南半西寄りで検出されたもので、溝S D1000を分断して造られており、内径も0.9~1.1 mと大きなもので、天場石もほぼ残る。S E1042は、調査区南半中程の石積施設S F1074の下層で検出されたもので、内径0.6 m程(P L. 11 参照)。S E1043は、調査区南端中程で検出されたもので、内径0.6 m程であって、周囲に礎石が見られる。S E1044は、調査区南西隅近くで検出されたもので、削平により天場を欠くが、内径は1 m程と大きい。時期について見てみると、明確に下層であることが確認できるS E1039・1042は、IないしII期、そして、これ以外のS E1033・1034・1035・1036・1037・1038・1040・1041・1043は、基本的にⅢ期の遺構である。なおS E1044は、上部を欠くので明確ではないが、Ⅲ期の遺構の可能性が高いと思われる。(P L. 9)

**S F1049~1076** 方形に石を積む遺構で、便所として使用されていたものが多いことが知られている。規模等は表1(次頁)の通りである。これをみてみると、一辺0.6~1.2 m程度、深さ0.6 m程度、石を3~4段積むものが一般的である。最大は、S F1060(1.8 m×0.9 m)もしくはS F1068(1.1 m×1.6 m)である。最も深いものは、S F1071・1072の約0.9 mである。S F1051・1052・1053・1054・1056の5基は、東西に一直線状に並ぶ。北の道路側溝S D985からは、南壁まで7~8 mである。北のS X1119とした石積も同種の遺構であった可能性も残る。この5基と平行して北約1.5 mに位置するのがS F1049・1050である。S F1057・1058は、溝S D986に接し、土塁S A982の北端に位置する。S F1055・1059は、それぞれ単独で存在している。調査区南半の屋敷の裏境界と考えられる遺構S X1032・1034・1037を挟んで平行するように存在しているのがS F1061・1062・1063・1064・1065・1066・

表1 石積施設一覧表

遺構番号	形状(m)			備考(段数等)	遺構番号	形状(m)			備考(段数等)
	東西	南北	深さ			東西	南北	深さ	
SF1049	0.80	0.80	0.70	2~3段積	SF1063	0.90	0.90	0.50	2~3段積 笏谷石使用
SF1050	1.10	0.80	0.65	4段積	SF1064	1.10	1.10	0.50	5段積 溝S D1001接続
SF1051	1.20	1.20	0.60	4段積	SF1065	1.20	0.80	0.70	4~5段積
SF1052	1.30	0.80	0.50	3段積	SF1066	1.00	1.00	0.50	3段積
SF1053	0.80	0.60	0.60	2~3段積	SF1067	1.10	0.90	0.45	3段積
SF1054	0.80	0.80	0.50	5段積	SF1068	1.10	1.60	0.60	2~3段積
SF1055	0.80	0.60	0.40	2~3段積	SF1069	1.00	1.00	0.55	3~4段積
SF1056	0.90	0.80	0.85	5段積	SF1070	1.00	1.10	0.60	3段積
SF1057	0.70	0.70	0.65	4~5段積	SF1071	0.60	0.60	0.90	3~4段積
SF1058	1.20	0.90	0.70	6~7段積 規模拡大可能性有	SF1072	0.60	0.60	0.90	9~10段積
SF1059	1.00	0.90	0.45	2~3段積	SF1073	0.70	0.90	0.75	3~4段積
SF1060	1.80	0.90	0.55	3段積	SF1074	0.90	0.60	0.45	3~4段積
SF1061	1.20	0.60	0.75	4段積	SF1075	0.80	0.60	0.45	4~5段積 下層に井戸SE1042有
SF1062	1.20	0.80	0.70	6~7段積 底に石有	SF1076	0.80	0.70	0.40	3段積



挿図5 石積施設S F1063・1064立面図(1/50)

1067・1068・1069・1070・1073・1074である。S F1063の東面には、たて0.6m、よこ0.45m、厚み0.15mでスリット状の穴を持つ笏谷石が使用されている。これが特殊な意味を持つのか、それとも単なる転用なのかは不明である。そして、S F1060・1071・1072・1075・1076は、これらと少し離れて存在する。なお、S F1072は、建物S B1023の整地土で覆われており、明確に下層の遺構であることが判明する。他のものは基本的にはⅢ期の遺構と考えられるが、天場石の多くを欠くものもあり、若干不明な点も残る。(P L.10・11)

**S K1085・1086** 素掘りの穴。調査区北半やや東寄りの建物S B1018、井戸S D1036の近くで検出されたのがS K1085。上端長径1.7m×短径1.0m、下端長径1.0m×短径0.6m、深さは浅く0.1mである。調査区南半やや東寄りの溝S D1001脇で検出されたのがS K1086。上端径0.9m、下端径0.6mのほぼ円形で、深さは0.4mである。

**S X1096** 建物S B1021内に存在する越前焼の大甕1個を据えた遺構。底部が残る。水甕と考えられる。

**S X1097** 建物S B1022内に存在する越前焼の甕4個を据えた遺構。東西に3個、この西端の南に1個が配置されている。約0.6m埋められており、埋め土に焼土を用いている。底部は東西列の西と東のみ残り、東が中甕、西は大甕。(P L.6, 挿図4)

**S X1098** 建物S B1022内に存在する越前焼の大甕を東西に4個、南北2列、計8個、規則正しく据えた遺構。建物内は焼土で埋められており、S X1097同様、周囲は焼土で、約0.6m埋められている。底部は東南の3個が残る。(P L.6, 挿図4)

**S X 1114・S V 1087** 調査区北半東寄りで検出された南北方向の溝状遺構とその東側の石垣。S X 1114は、検出長33m程、上幅0.7m、下幅0.4m、深さ0.2～0.4mの溝状遺構。S V 1087は、このS X 1114の中程北寄りに見られる石垣。共に、後世の水田化に伴う遺構と考えられる。

**S X 1115～1118** いずれも、調査区北半東寄りに位置する礫石の若干の集りが見られるもので、性格等は不明な遺構。

**S X 1120・1121** それぞれ建物S B 1013・1014に伴うと考えられるが、性格等詳細は不明。S X 1021は、半分を欠くが、0.6m角の大きさの笏谷石製の炉に伴う。

**S X 1122～1124** 調査区北寄りで検出された石の集まり。性格等は不明。

**S X 1125・1127** 建物S B 1017・1021に伴う南北の石の集まり。建物の軒の内側を固める遺構の一部と考えられる。

**S X 1126** 建物S B 1018の西北隅部に見られる礫石群。土間を固めたものではなかろうか。

**S X 1128～1130** 調査区中程東寄りで検出された石の集まり。性格等は不明。

**S X 1131** 調査区中程で検出された径 0.8m程の円形に石を並べ、少し積み上げた深さ 0.6mのピット。性格は不明。

**S X 1135・1136** 南北方向の道路S S 976に面し、2条の東西溝S D 998・999により、区画された屋敷内で検出された石列。S X 1135は、径0.3m程の石を東に面を持って並べたもので、検出長約2m。何かの境界となる遺構と考えられる。S X 1136は、S X 1135の西約1.5mに位置する南北の石の集まり。性格は不明。

**S X 1138～1142・1174** 南北方向の道路S S 976に面し、東西溝S D 999・1000及び東西道路S S 977により、区画された屋敷内で検出された遺構。S X 1138は、溝S D 1000の延長線上に存在する東西の石列。S X 1139は、南北の石の集まり。暗渠S Z 1094と約1.8m東に離れて平行する。S X 1140は、井戸S E 1043の東に位置する溝の北端と考えられる遺構。S X 1141は、溝S D 1004の延長線上に存在する石列で、この溝の一部の可能性が考えられる。S X 1142は、建物S B 1026の中で検出された石の集まり。S X 1174は、ほぼ東西に並んで点在する石とピット。建物の一部の可能性が考えられる。

**S X 1143** 調査区南半東寄りの鍵型の溝S D 1001で囲まれた所で検出された石を東西0.8m、南北0.6mに敷並べる遺構。内が1段低い。炉の可能性が考えられる。

**S X 1144** 建物S B 1027の一部と考えられる東西の石の集まり。

**S X 1145・1146・1168** 調査区東南部で検出された遺構。S X 1145・1146は、石が集まるが、性格等ははっきりしない。S X 1168は、やや振れているが東西1.0m、南北1.5mの土坑。深さは0.25m。

**S X 1170** 調査区中程、建物S B 1022の東で検出されたピット。3個あって、いずれも径0.6m、深さ0.3m程。

### 3. 遺物 (第9～29図, P L. 12～32)

今回取り扱うのは遺構の報告に従って、第29次調査で出土した遺物のうち道路S S 975、S S 976、S S 977に囲まれた区域から出土した遺物群である。その総破片数は23,012点あって、1㎡あたりの出土点数は20.03点となる。一乗谷では1㎡あたりの出土点数は8～36点とかなりバラツキがあるが、20.03点/㎡はやや多い部類にはいる。この地区は、遺構のところでも述べたように当初は2区画の武家屋敷であったが、ある時期に町屋群に改変されたところである。整理の方法としては、道路面とそれに伴う溝、さらに挿図6のように町屋の区画単位にわけて扱った。また、井戸や石積施設などから出土して、一括遺物として扱えるものについてはその遺構ごとにまとめた。ただ、今回は上層の遺構の状態が良かったので、下層をほとんど調査していない。したがって、下層出土の遺物も少なくまとまりにかけるので割愛した。また、井戸や石積施設からの出土遺物についても、まとまりのあるものに限った。

遺物の分類については、これまでの報告書を踏襲した。すなわち越前焼大甕・播鉢は「県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書」、土師質皿は「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書I」、染付は「15.16世紀の染付碗・皿の分類とその年代」(貿易陶磁研究No.2)による。その他の遺物についても、はっきりとした分類基準をまとめてはいないが、これまで使用してきた分類および名称による。

器種				器種				器種						
器種		破片数	%	器種		破片数	%	器種		破片数	%			
日本製陶磁器	越前	甕	4,239	29.6	須恵器	3	1.5	金属	銅錢	740	4.0			
		信楽鉢	1,300		信楽	1			鉄	111				
		播鉢	184		備前	14			銅	13				
		桶	1,012		国産	4			鍵	1				
		皿	13		国産陶器合計	20,082			把手	2				
		その他	2						分銅	1				
	小計	6,767			鉄鍋	3								
	土師質	皿	12,481	55.2	中国製陶磁器	青磁	碗		177	石製品		筒物	1	0.35
		土釜	54				皿		79			砥石	8	
		鈴壺	39				香炉		20			盤	1	
		香炉	2				その他	42	鉢		1			
		耳皿	1				小計	26	その他		3			
		灯芯	2				青磁	344	小計		911			
	その他	9	碗	1	碗	67								
	小計	12,591	小計	1	碗	8								
	瀬戸・美濃	鉄釉	碗	196	中国製陶磁器	白磁	碗	4	木製品	碗	2	0.1		
			皿	12			皿	619		かさ	2			
			壺	51			坏	35		蓋	1			
			茶入	16			その他	6		箸	12			
		水注	1	小計			664	容器		4				
その他		26	染付	678			曲物	1						
小計		302	碗	160		炭	1							
灰釉		碗	53	1.3		皿	503	その他	1	0.02				
		皿	299			鉢	2	小計	24					
		壺	6			坏	7	骨	1					
	鉢	8	壺		2	壁土	4							
	香炉	12	その他		4	小計	5							
	坏	1	赤絵		1	合計	1,020							
水滴	1	小計	1	朝鮮製	7	0.06								
その他	9	碗	4	0.06	碗		4	0.02						
小計	389	粉青沙器	3		0.06		小計		5					
瓦質	香炉	3	0.06				小計		14	0.06	合計	1,020		
	火鉢	1					輸入陶磁器合計		1,702		7.5	4.5		
	鉢	7					陶磁器合計		21,784				95.5	
	その他	7				合計	22,804		100					
小計	11	0.05		総合計		22,804								

表2. 第29次遺物一覧表

## SS975出土遺物 (第9図, PL. 12)

この道路は幅8mの東西方向の道路で、道路全体に焼土が覆っていた。この焼土から多数の遺物が出土した。

**越前焼** 大甕は破片が多く、III群bからIV群a(1)、IV群c(3)まで認められる。破片数としてはIV群cが多い。(4・5)は口縁部断面が逆三角で頸部をもたず、全体にずんぐりした甕である。2点ともよく焼き締まっている。

壺も多く(6～8)はいわゆるお歯黒壺である。ほとんどが高さ15cmまでにおさまる小型の壺である。(8)のように縦の耳がつくものもある。口縁部はたいてい鳶口になっている。(9・10)は高さ20cm前後の小型の壺で、肩が張らず、口縁直下に沈線が入ることによってできる口頸部の膨らみが特徴である。(11)は高さ33.5cmの四耳壺で、この種の壺は越前焼きの中では器壁が薄い傾向がある。

播鉢も多数出土しているが、(13・14)のようにIV群が多い。(13)は底部にも播目があり、播目の部分に扇状の装飾をもつ。

(15)は、薬研の回転する部分で、よく使用されてかなり摩滅している。なお、一乗谷では、これまで出土した薬研は越前焼ばかりで、鉄製のものはない。

(16)は口縁部が直径16cmと大きく、肩の最大径で25cmを測る。胎土が白く、焼き上がりも明るい色をしている。一般の越前焼とはかなり異なり信楽焼の可能性が高い。

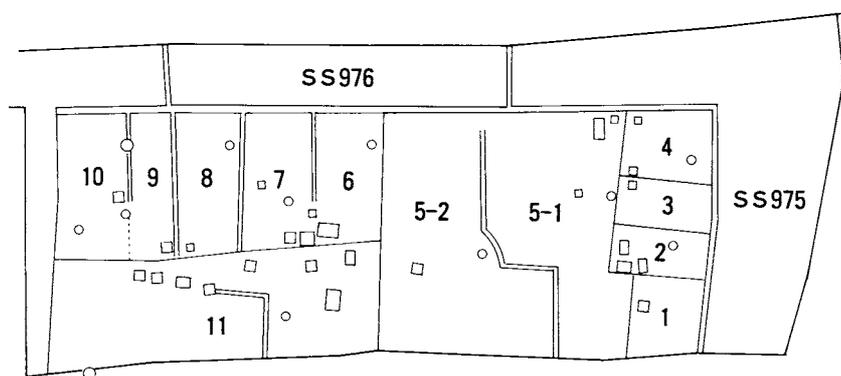
**土師質** 土師質皿は大量に出土しているが、小さい破片が多い。(17)はやや上げ底状になっていて直角に立ち上がる。蓋の可能性はある。

**瀬戸・美濃焼** 天目茶碗、灰釉の碗・皿が出土した。天目茶碗は(18・19)のように全体に直線的で、口縁部の下が直立する新しいタイプのもが多い。(20)は口縁の直径が8.5cm、高さが6cm前後と小型の天目茶碗である。小型の天目茶碗は量的には少ないが、必ずみられる。(21)は直径12cm高さ9.8cm程で、口縁部がやや開く筒状の花生と推定される。全体にシブ鉄が施されその上から灰釉が散らすように掛けられている。

灰釉碗では、口縁部にくびれのある天目茶碗型(22)で腰部は露胎になっている。(23)は端反の灰釉皿で、見込みにはカタバミの印花があり、(24)は小型の端反皿で同じく見込みに葉の印花がある。

**備前焼** (25)は小型の

徳利型の一輪挿の底部であろう。細かく黒みを帯びた粘質感のある胎土で、堅く焼き締まっている。内部には轆轤の痕が残り、底部は回転糸切りの痕が残る。(26)も備前の徳利で、底径が10cmあって



挿図6 第29次調査区画模式図

徳利としては、かなりの大型品である。細かく赤茶色を呈し粘質感のある胎土で、良く焼き締まっている。なお、これらは後の作見窯の製品に似ている。

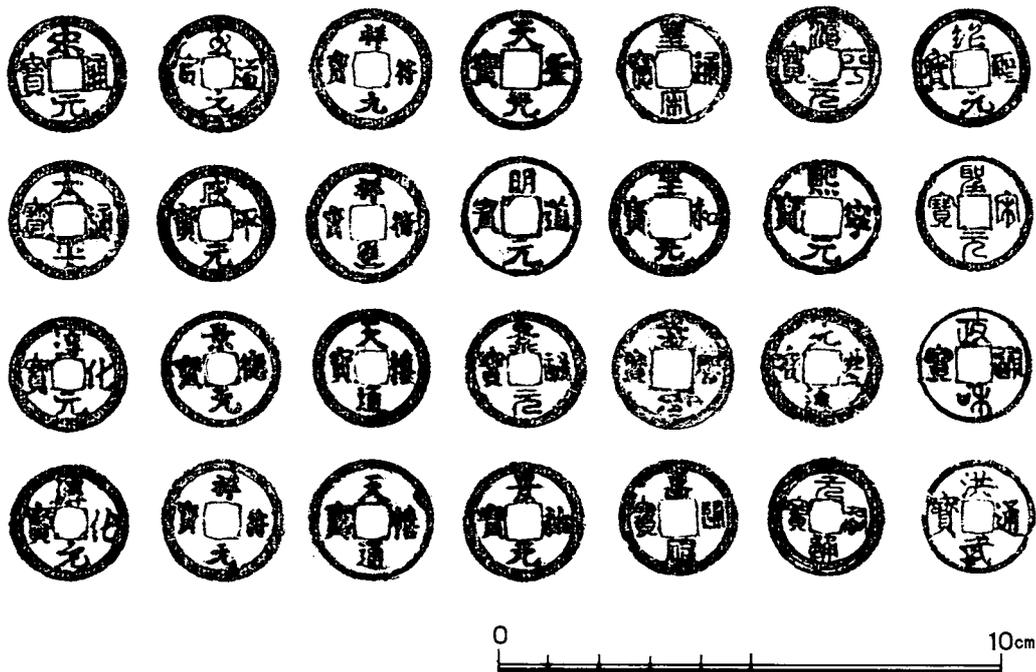
**中国製陶磁器** 青磁では碗や皿に混じって、鉢や盤など大型の製品が多い。(27)は外面には蓮弁文が、内面には劃花文が施されている。高台裏の一部を除いて全面に施釉されている。

白磁は、口縁部が外反する皿が大半を占める。(29)は外面が蓮弁文状になっているが、それが内側までおよんでいない。見込みには劃花文がある。胎土は細かいが、十分磁器化していない。乳白色の釉がかかり、細かい貫入が全面にはしる。高台畳付きの部分の釉が削り取られている。(30)は硬質の碗であるが、白磁の碗類は少ない。(31・33)は普通にみられる端反の白磁皿である。(32)は、器形は(31)とほとんど同じであるが、半透明の白磁釉がかかっている。

染付碗は見込みが蓮子型のC群(38)が多く見られたが、口縁部が外反するB群も小片ではあるが出土している。(35)は外面に鳥のような文様が描かれており、(36)は外面が唐草文、内面は四方禪と羯磨文の組み合わせである。(37)は見込みの大きいD群であるが、高台がしっかりしているところから古手に属すると思われる。(40・41)はE群に属する碗である。皿では口縁部が外反し、外面の文様が唐草文のB<sub>1</sub>群(42・43)が最も多い。(44)は高台を有し口縁部が内湾するE群の皿で、外面は蔓草文、見込みには人物文、内面に竹と松が描かれている。この皿の文様は呉須の発色が鮮やかで明るい。(45)は大型の鉢であろう。(46)は碁笥底の小杯で口縁部は刻みがあり、見込みにのみ草花文が描かれる。

**朝鮮製陶磁器** (47)は見込みは小さく、いわゆる「ととや」である。外面には轆轤成形の筋が残り、茶色がかった暗い灰色をしている。

**金属製品** (48)は銅製で輪が2つ連なる。鎧の紐を通す金具と思われる。(49)は煽り止めと対になる金具である。道路上の焼土および砂利面から521枚の銅銭が出土した。銅銭はいくつかの塊とバラ銭とかなる。このことから差し銭の状態焼土といっしょに整地されたことがわかる。銅銭の内訳は表(3)のとおりで、北宋銭がほとんどである。この傾向は一乗谷出土の銅銭の傾向と一致する。



挿図7 S S 975出土の銅銭(一部)

銭貨名	初鑄造年	王朝	SS975	29次全体	銭貨名	初鑄造年	王朝	SS975	29次全体	銭貨名	初鑄造年	王朝	SS975	29次全体
五銖	BC 188	前漢			元豐通寶	1078	"	41	56	咸淳元寶	1265	"		
貨泉	14	新唐			元祐通寶	1086	"	23	32	至大通寶	1301	元		
開元通寶	621	唐	1	13	紹聖元寶	1094	"	11	15	至正通寶	1341	"		
乾元重寶	758	"			元符通寶	1098	"		1	天定通寶	1360	"		
乾德元寶	919	前蜀			聖宋元寶	1101	"	14	25	大中通寶	1361	明		
漢通元寶	949	後漢			大觀通寶	1107	"		2	洪武通寶	1368	"	1	18
周通元寶	955	後周			政和通寶	1111	"	19	21	永樂通寶	1411	"		5
唐國通寶	958	南唐			宣和通寶	1119	"		3	宣德通寶	1433	"		
宋通元寶	968	北宋	7	7	建炎通寶	1127	南宋			弘治通寶	1488	"		
太平通寶	976	"	6	8	紹興元寶	1131	"			嘉靖通寶	1527	"		
淳化元寶	991	"	8	13	紹興通寶	1131	"			萬曆通寶	1574	"		
至道元寶	995	"	20	24	正隆元寶	1157	金			小			515	709
咸平元寶	998	"	20	24	天盛元寶	1158	西夏			天福鎮寶	980	安南		
景德元寶	1004	"	35	38	大定通寶	1161	南宋			大治通寶	1283	"		
祥符元寶	1008	"	44	54	乾道元寶	1165	"			紹豐元寶	1341	"		
祥符通寶	1008	"	13	22	淳熙元寶	1174	"			順天元寶	1428	"		
天禧通寶	1017	"	41	50	紹熙元寶	1190	"			紹平通寶	1434	"		
天聖元寶	1023	"	63	72	慶元通寶	1195	"			大和通寶	1443	"		
明道元寶	1032	"	6	6	嘉泰通寶	1201	"			延寧通寶	1453	"		
景祐元寶	1034	"	22	24	開禧通寶	1205	"			天興通寶	1459	"		1
皇宋通寶	1039	"	49	63	嘉定通寶	1208	"			光順通寶	1470	"		
至和通寶	1054	"	6	9	大宋元寶	1225	"			洪德通寶	1470	"		
至和通寶	1054	"		1	紹定通寶	1228	"			洪順通寶	1509	"		
嘉祐元寶	1056	"	3	6	端平元寶	1234	"			玄聰尊寶		"		
嘉祐通寶	1056	"	5	7	嘉熙通寶	1237	"			朝鮮通寶	1423	李		1
治平通寶	1064	"	6	10	淳祐元寶	1241	"			大世通寶	1454	琉球		
治平通寶	1064	"			皇宋元寶	1253	"			世高通寶	1461	"		
咸雍通寶	1065	遼			開慶通寶	1259	"			和同開珍	708	天武		
熙寧元寶	1068	北宋	51	79	景定元寶	1260	"		1	不			6	29
										明				
										合			521	740

表3. S S 975. 第29次調査出土銅銭一覧表

**S S 976出土遺物 (第11図, P L. 14)**

幅5～6mの南北方向の砂利敷道路である。遺物の出土は比較的少ない。

**越前焼** 越前焼甕は、II群からIV群まで見られたが、II群III群は少なくIV群がほとんどである。(50)は、II群であるが、口縁帯が退化して内面の段が失われつつある。(51・52)は口縁部が肥厚し始めたIV群aである。(53)は口縁部が最も厚くなったIVc群である。壺は各種出土しているが、体部や底部が多く図示しなかった。播鉢もIII群からあるがやはりIV群が多い。(54)は口径が20cm程の小型の播鉢で、口縁部が水平にカットされたタイプである。

土師質土器(55)は、D<sub>2</sub>類の皿であるが、見込み中央が穿孔されている。胎土は細かく全体に白っぽい。(56)は、口径が10cmの土師質羽釜で、罌を貼付けている。小型であるが底部外面にわずかに煤が付着しており、何等かを煮炊きしたことはまちがいない。

**瀬戸・美濃焼** 天目茶碗(57)も比較的少なく10点ほどしかない。(59)は徳利型の壺の底部で、外面は露胎となっている。釉は茶色い。(60)は鉄釉の水滴で、円く肩の張った体部に面取りのある注ぎ口が付く。底部外面は露胎で回転糸切りのあとがある。

灰釉では端反の皿(61)が多い。(63)は、灰釉の水鳥型の水滴で底部を欠く。口嘴の部分が注ぎ口で、尻尾の所に水をいれるための穴がある。全体にリアルに作られており、鴛鳥と思われる。一乗谷でも中国製の水鳥型の水滴が出土しているが、それにくらべるとひとまわり小さい。(62)は竹節を型どった灰釉の香炉で、釉は薄く底部と内面の底付近が露胎となっている。

**中国製陶磁器** (64)は外面に退化した線刻の蓮弁文がめぐる青磁碗で、釉は透明がかった緑青である。(65)も青磁碗で見込みに印花文があり、内側も蓮弁状になっている。(66)は外面に浮牡丹の文様の皿である。(67)は見込みに印花文のある鉢で内側には縦方向の刻みがめぐる。(69)は白磁の端反皿である。(70)は口縁部が外反する染付の杯で、外面には草花文が描かれ、見込みには太古石が描かれる。見込みの文様については、染付碗E群のなかの人物文の周囲に描かれる雲のような文様と共通する。

**石製品** (71)は砂岩系の石で作られた茶臼の下臼で受け皿が造り付けになっている。主溝は8分割で副溝は15本である。摺り面は平で、普通の臼のように膨らみはない。

**S D 985出土遺物** (第12図, P L. 15)

道路 S S 975の側溝で、溝の中にも S S 975を覆っていた焼土が入っており、S S 975出土の遺物と接合したものも多い。

**越前焼** 甕は200点ほど出土しているが、体部や底部が多く口縁部は以外と少ない。(72)はIV群cで口縁部が大きく肥厚している。(73)は、口頸部がやや外反し口縁直下と体部との境に凹線が入る壺である。胎土は細かく、表面は灰色を呈し堅く焼き締まっている。肩にEと十字のヘラ記号があり、高さは26.5cmを測る。(74)は直径22cm、高さ7.8cm程の播鉢である。やや焼き締めがあまり下から1/3は播目が摩滅してなくなっている。口縁下の沈線がなく、播目は口縁端部まで施されている。(76)は、火桶の下半分である。堅く焼き締まっており、外面は赤茶色を呈している。

**土師質土器** (76)は耳皿で、いちどやや楕円の皿を作ってから口縁部の両側を押して成形している。おそらく、なんらかの儀式の際の箸置として使われたものであろう。

**瀬戸・美濃製品** 鉄釉ではやはり、天目茶碗が最も多い。(77)は全体に丸みがあって口縁部は軽く外反し、高台脇の削りも小さい。大窯の製品としては2期に属する。釉はやや薄く腰から高台部はシブ鉄が施されている。(78)は全体に直線的で、口縁部下が直立する。大窯のII b期の製品であろう。高台は丸く抉る竹の節状高台である。(79)は直径6.5cm、高さ2.7cm程の浅い小杯で、内面と外側の1/3に鉄釉が施され、腰から底部はシブ鉄が塗られている。(80)は口頸部が小さく立ち上がり、肩の張った小壺で、外側の底部以外は鉄釉が施されている。(81)も同じく鉄釉小壺で、こちらの方が肩がなだらかである。(82)は直径が3cmほどの小壺の蓋で、上面は鉄釉がかかっているが、下面は露胎である。轆轤轆きで長く延びた底には回転糸切りの痕が付く。茶入れの蓋だろうか。

灰釉は端反の皿(83)が最も多い。体部を轆轤成形し裏返して腰部を削りだした後、高台部を貼り付けたものである。全面に灰釉が施され、高台裏には重ね焼きのための輪トチン痕が残る。釉で見えにくくなっているが(84・85)にも菊の印花がある。口径は11.5cmあり、このサイズのものが多い。(86)は内側に丸ノミによる刻みがめぐる。おそらく口縁部は内湾する。見込みに菊花文の印花が押されている。これらの印花は菊であるが、それぞれ異なっている。

**中国製陶磁器** 青磁では碗では、線刻の蓮弁文を持つものが最も多いが、(89)のように無文のものもある。見込みには喜寿の印が押されている。全面に施釉され、高台裏だけ輪状に釉が拭き取られている。(88)は、高さが4.5cmの浅い平碗で、口縁部の外側に山形の線刻が連なる。高台も薄く釉色は白っぽい青で、つくり・釉色とも他の青磁碗とはかなり異なり、いわゆる龍泉窯系とは産地が違っているのであろう。皿では刻みのある(90)や稜花皿(91)がある。(92)は直径22.5cm程の青磁盤で、内側に3本単位の篋による蓮弁状の削りが施されている。釉は緑青で全面に施釉した後、高台裏だけが輪状に拭き取られている。(93)も青磁盤で唐草文が刻まれている。(94)は竹の節型の香炉で、文様のあるしっかりした脚が3箇所につく。

白磁は外反しない碗(95)が1点出土しているが、端反の皿が最も多い。(99)はその中で最も小さいサイズの皿で直径が9.4cmを測る。(96・97)は内湾する皿で、表面は灰色を呈する。胎土自体が灰色で、釉も透明ではなくやや濁っている。また、全体に細かい貫入が走る。出土例は一乗谷でも多くない。(101)は輪花皿、(100)は高台部から大きく外反する皿である。

染付では碗と皿合わせて90点近く出土している。(102)は口縁部が外反する碗で、(103)はC群の碗である。(106)はE群の碗で口縁部外面に四方禰の変化した文様がめぐり、見込みには人物文が描かれる。高台は薄く畳付けの部分の釉が削り取られている。(104・105)は口縁部に回線がめぐるだけのE群碗である。皿では端反で、外面が唐草文、見込みは羯磨文が合わさったB1群(107・108)が最も多い。(110)は、内湾するE群で見込みが太古石に人物文、内面に竹と梅、外面は蔓草文が描かれている。呉須の発色が良く、B1群とは異なって明るく澄んだ色をしている。碁笥底のC群の皿(109)もある。

**金属製品** (113)は銅製の環付き金具で、立方体の所で環を留めている。(112)は三巴文が2つ並んだ金具で、いずれも鎧の飾り金具であろう。

**石製品** 小型の硯が2点出土している。2点とも海の部分を欠く。(115)は幅が3cmしかなく、厚さも0.6cmと最も小さい。(114)も幅は4cmであるが、陸の部分が墨をすったため窪んでいる。

#### S D 986 出土遺物 (第13・14図, P L. 16・17)

南北道路SS976の側溝から出土した遺物群である。

**越前焼** 大甕はIV群がほとんどである。(116)は口縁部の幅から見てIVb群、(117)は口縁部が最も厚くなるIVc群に属する。これらは凹の「本」と格子の組合わさった押印が肩にめぐる。

播鉢はIII群からV群までであるが、IV群が最も多い。(119)は口縁部が丸く、口縁端部から少しさがった位置に沈線がめぐるIII群aである。すり目は、この沈線の位置で止まる。III群aの出土は、一乗谷全体の中でもあまり多くなく、出土地点にバラツキがある。越前焼の中では播鉢の個体数が最も多く、その性質状他の甕や壺と比較して耐用年数が短い。こうしたことからIII群aは、一乗谷の町割りが建設される頃までに生産されたと考えられる。(120)は口縁部下の沈線がなくなり、すり目が口縁端部までつけられるV群である。V群は一乗谷では各調査地に1・2点しか出土しないところから、一乗谷が滅びる1573年の直前に生産され始めたと考えられる。

**瀬戸・美濃製品** ここでも、天目茶碗が20点出土している。(121・122)は、体部が直線的で大窯II b期に属する。高台部はいわゆる竹の節高台で、口縁部から薄茶色の釉が筋状に流れている。(124)はやや小型で口径の割に高さが低い。器形は直線的で口縁下が直立する。(125)は数少ない鉄釉の皿で、高台がない碁笥底と外反する口縁部をもつ。見込みにトチン痕が付いている。(126)は、肩のなだらかな小壺で、低く小さい口頸部がつく。器壁は薄い。(127)は底部が回転糸切りになった徳利である。腰から下が露胎になっている。

灰釉碗は、スタンプによる蓮弁文の碗(128)と無文碗(129)がある。(130)は緑釉の小皿である。

**土師質土器** 土鈴(131~135)が、数個体出土した。土玉をいれた球を作り、紐で吊るす部分をひねりだす。さらに球の一部を切りとって鈴にする。これらの土鈴は溝からまとまって出土することが多い。(135)は土師質の小壺である。

**瓦質土器** (137)は筒状の香炉で、3箇所脚が付く。胎土は粗く、焼成不良なのか表面は荒れている。体部中央に「S」字状のスタンプがめぐる。この他に風炉の破片(136)も見られる。

**中国製陶磁器** 青磁は退化した線刻の蓮弁文の碗が多いが、(138)は口縁下に1本の回線がめぐるだけである。底部が厚く、高台裏は輪状に釉が拭き取られている。(142)は見込みに印花文のある青磁碗で、高台部が薄く、釉も厚くて青く発色している。(139)も無文の青磁碗であるが、直径が14cmと他の青磁碗より一回り大きく、体部中央に2条の沈線がめぐる。

(143)は白磁杯で、器壁は薄く、体部はわずかに外反気味に立ち上がる。見込みには、重ね焼きのため

ドーナツ状に釉を拭き取っている。

染付碗は、C群が多い。(146)は外面の主文様が唐草文がすっかり退化したもので、見込みも同じ文様である。(145)もC群の碗で、外面は唐草文、見込みは草花文である。(144)は同じくC群の碗で腰部に蕉葉文がめぐる。(146)のタイプは外面と見込みの文様の組み合わせがこの1種類だけであるが、(144)のタイプは、外面の腰の部分に退化した蓮弁文が加わったり、見込みが瑞果文のこともある。皿ではやはり唐草文と見込みに羯磨文のB<sub>1</sub>群(147・148)が多い。

**陶製円盤** (149・150)は越前焼の破片を円盤としたもので、(140)は青磁の碗を円盤に加工したものである。見込みに印花文がある。一乗谷では、越前焼の甕・播鉢を円盤に加工したものが最も多い。青磁碗の底などを利用したものもあるが、その場合青磁碗の底は厚くて丈夫なので、自然と円盤状になったものもある。現在のところ出土状態に特徴もなく、用途は不明である。

**金属製品** (151)は太刀の足金物で銅製である。

#### S S 997出土 (第14図)

**瀬戸・美濃製品** (152)は鉄釉の小杯で、内面と外面上半分に鉄釉がかかる。他は露体である。

**中国製陶磁器** (153)は青磁碗の底部で、わずかに線刻の蓮弁文が見える。底部は厚く、高台裏は兜巾状に削り残しがある。(154)は青磁鉢で、釉が厚く見込みには双花文が押し印されている。

白磁は端反の皿が多いが、(155)は直径が18cmもあり、この種の皿では大きい部類に属する。

なお、(157・158)は越前焼播鉢を加工した土製円盤である。

#### 区画1 出土遺物 (第15図, P L. 18)

**土師質土器** これらはS F 1049から出土したもので、C類だけを図示した。C類の中でもサイズから形態からいくつかに分けられる。まずサイズでは6～7cmもの(159～163)と9cm前後のもの(164～167)がある。形態からは、(160・163)は底部が丸く、口端部の折り返しも小さい。これに対して(165～167)は器壁が薄く底部が平である。(164)は成形時にねじったような痕がある。

**中国製陶磁器** 青磁、白磁、染付が出土しているが、小片が多い。(169・170)は線刻の蓮弁文をもつ青磁碗で、見込みに線刻の花文がある。2点ともよく似たサイズで直径は13.2cmある。

#### 区画2 出土遺物 (第15図, P L. 18)

**土師質土器** これらはS F 1050から出土したもので、C類とD類でほとんどを占め、わずかにB類がある。ここでもサイズや形態から各類の中でも細分できる。特に(177～180)は図上ではやや異なっているが、直径が6cmと非常によくまとまっており、作りも同じでおそらく同じ工人の手によるものと推定される。(181・183・184)は直径が9cm程で底部が丸い。(185～193)はD類である。全体に器壁が薄く底部が平か上げ底状になっている。口縁端部は軽いナデによる折り返しがある。胎土は細かく、丁寧に作られている。表面は白くて焼成時の黒斑がある。これらには灯心油痕がない場合が多い。特に直径が14cmを越すD<sub>2</sub>類は、灯心油痕がない。

**瀬戸・美濃製品** 鉄釉では天目茶碗(194)の他に小壺(195)、花瓶(196・197)がある。花瓶は体部と高台のある底部が出土している。灰釉では端反皿(199)が多く、(198)は他の灰釉皿の一部が融着しており、こうしたいわば不良品が製品として流通しているところに灰釉皿の価値が現れている。

**中国製陶磁器** 青磁碗では無文(200)、雷文(201)、幅広の蓮弁文(202)がある。無文の碗はつくりが悪く、高台裏の削り痕が荒く残る。雷文の碗や幅広の蓮弁文は一乗谷では出土例が少ない。

(203)はC群の染付碗で、唐草文が退化して蔓の部分なくなり、葉も変化して「あひる」のような文様が散らばっている。

### 区画3 出土遺物 (第16図, P L. 19)

**土師質土器** (204)は底部の丸いC類の皿で口縁部が大きく広がっている。(205)は器壁が厚いD類の皿で、口縁部下のナデの痕が強い。胎土がやや粗く、表面は赤っぽい色を呈する。

**瀬戸・美濃製品** 灰釉皿が数点まとまって出土した。(206・207)は口縁端部が軽く外反する端反の皿で断面が三角形の付け高台が付き、高台裏には輪トチンの痕がある。(208)は口縁端部がほとんど外反しなくなったが、内湾する丸皿とは言い切れない中間の形態をしている。これらには見込みに印花が見られるのが普通で(207)にはカタバミ、(209)には菊の印花がある。(210)は碁笥底の灰釉皿で、上半分を欠いているが内湾するのが一般的である。見込みにはカタバミの印花がある。

**中国製陶磁器** 青磁碗、白磁皿が多い。(214)は端反の白磁皿であるが、器壁が厚く口縁部が軽く稜を持って外反するなど、一般的な白磁皿とは異なる形態をしている。また、釉も乳白色で胎土も赤味がある。(215)は白磁杯で器壁は極めて薄く、口縁部が菊花状になっている。高台はしっかりしており、畳付け部分の釉を削り取っている。

染付は、碗と皿の出土破片数の比があまり変わらない。(216)はC群の碗で外面には「三丸」文、見込みは「三丸」と渦巻が組合わさった文様が描かれている。高台は厚めで低い。高台裏はほとんど釉が掛けられていなくて柿色に鉄分が発色している。

**朝鮮製陶磁器** (218)は大きく開く碗で、内面には刷毛目が施されている。篋削りの痕が残る外面はいわゆる蕎麦茶碗のように灰色の地に小さく黒い粒点が見られる。(219)は後に「ひろととや」と呼ばれるようになった茶碗の底部である。

### 区画4 出土遺物 (第16・17図, P L. 19・20)

**越前焼** 大甕は多数出土したが、時期のわかる口縁部の破片は少ない。(220)は一乗谷では口縁部が最も肥厚したタイプで、IV群cに相当する。(222)は、口縁部を欠いているが越前焼の徳利である。撫肩から底部に向かってすぼまり、細い頸部が付く。播鉢はIII群(223~226)からIV群(227~229)までみられる。図示した資料はIII群でも口縁下の沈線が上がってきており、口縁断面の形態も四角く成っているところからIII群cに属する。

**土師質土器** 土師質皿は多数出土したが、小片が多い。(230)はC類の皿で口縁部の返りがはっきりしている。(231)は箸置きで、(232)は直径が3cm程の土鈴で、上に紐を通して吊るすための穴がある。この場合はなくなっているが、中に土の小玉入っていて、ふるとコロコロと鳴る。(233)は円盤状の土製品で、土師質皿を生産していたと推定される第18次調査ではこうした土製品が数点発掘されているが、その他の所ではほとんど見かけない。

**瀬戸・美濃製品** 鉄釉では天目茶碗が多い。(237・238)は高台脇から直線的に開き口縁した垂直に立ち上がる。器形全体が直線的で大窯II b期の製品であろう。(236)はこれに対して高台脇から丸みをもって立ち上がり、口縁下の屈曲もゆったりとして丸い。釉がやや薄い。大窯I期の製品であろう。(236)は両者の中間的な形態をしている。これら天目茶碗にはいずれも腰部以下にシブ鉄が塗られている。

**中国製陶磁器** 青磁ではやはり碗が多く、中でも線刻の蓮弁文が多くみられる。(244)は蓮弁文の退化が進んで上の山形の刻みさえ下の線刻とまったく合わなくなっている。釉色もやや青白い。(243)も線刻蓮弁文碗であるが、まだ線刻が深く、退化しながらも蓮弁が独立している。(245・246)は無文の青磁碗で、いずれも口縁部下に沈線がめぐる。(247)も無文の碗で、見込みに印花がある。青磁碗は口径が14cm近くあるのが普通であるが、(246)は口径が10.7cmと小型である。(248)は蓮弁文の青磁皿で、口縁部がおおきく外反する。体部の蓮弁文はまだわずかに立体感がある。一乗谷では、少ないタイプの青磁

皿である。

白磁では皿がほとんどである。(250)は桜高台の白磁皿で、軟質のタイプである。見込みには重ね焼きのため釉が取れたところが4ヶ所ある。(249)は一乗谷では最も多い端反の白磁皿である。口縁部内側に釉が少し垂れている。高台畳付きには、釉着を防ぐための砂が付着してる。

染付では皿が多い。(252)は口縁の下に回線が一筋回るだけで文様から言えばE群であるが、形態的には浅い形をしており、これまでの分類に属さない。(253)は外面が唐草文、見込みが玉取獅子文のB<sub>1</sub>群の端反皿である。(254)も見込みが草花文であることからB<sub>1</sub>群の端反皿であろう。

**瓦質土器** 瓦質の風炉(256)が出土している。底部が平で短い円筒形の脚が3本付く。表面は非常に丁寧に磨かれている。

**金属製品** (257)は笠と鋏が組合わさった小型の饅頭金具で、笠の直径が3cm、長さが4cmある。

**石製品** (258)は砥石で、一乗谷の浄教寺の山で産するいわゆる「浄慶寺」砥石である。

(259)は笏谷石のバンドコの蓋である。D型で直線部分が20cm足らずの小形のバンドコである。

#### 区画5-1出土遺物(第18・19図, P L. 21・22)

**越前焼** ここでも破片数としては大甕(260)が最も多い。(263)はいわゆるお歯黒壺で、肩は下がるが大きく張り出す。底部を欠いているが、高さはあまりなくずんぐりした器形である。体部の器壁の厚さの割に口縁部の器壁が薄い。破片のため図化していないが、鳶口になっていたと思われる。(262)は撫肩で底部の大きいずんぐりした高さ16cm程の小型の壺である。軽く開く口頸部には小さく鳶口が付く。釉はすっかりかせている。(264)は口頸部が軽く外反する中型の壺で、口頸部の特徴は、口縁端部が外に延び、そのすぐ下に沈線がめぐって体部と接するところが締まる。

播鉢はIV群が多い。(265・266)は口縁部が水平なIV群の播鉢で、口縁下の沈線が口縁直下であり、卸目がここまで施されている。(265)には片口が付く。(267)は高さ3.5cm、直径23.2cm程の越前焼卸皿である。卸目は播鉢と同じで口縁端部まで施されている。(268)は浅くて内碗する鉢で、直径13.5cm、高さ6.2cmある。(269)は、口縁部内側に蓋受けが付いているところから、水指と推定される。直径は19.5cmで、体部が丸く膨らむ太鼓胴の様な形をしている。作りは丁寧である。越前焼の茶道具はあまり多くないが、これまでに葉茶壺・茶入れ・建水・水指などが確認されている。

**土師質土器** 土師質皿は、C群・D群が多い。(270~274)は、C群でナデ痕が良く残っているものを図示した。手づくねでナデを成形を行わないB群の皿でも、割合形が丸く成形されているもの(277)と、そうでないもの(276)がある。

**瀬戸・美濃製品** (278)は天目茶碗で、(279)は鉄釉の徳利と考えられ、内部と外側上部に鉄釉を施し、腰部から下はシブ鉄が塗られている。底には回転糸切りの痕が残り、内面には轆轤成形の痕が残る。(280)は鉄釉の仏花瓶の頸部で退化した耳が付く。(281)は青磁碗を模した灰釉碗であるが、無文である。付け高台で高台裏には輪トチンの痕が残る。全面に施釉されている。(282・283)は端反の皿で、(284・285)は腰部から下が露胎の端反皿である。高台は削りだし高台で、形態的に青磁稜花皿を模したものと思われる。大窯以前のものである。

**国産陶器** 一輪挿が出土しており(286~288)は胎土も細かく堅く焼き締まっているが、(288)は胎土も粗くボソボソしている。(287)は口縁部に文様があり胎土から備前焼で後の作見窯に似ている。

**中国製陶磁器** 青磁では碗が多い。(289)は見込みに大きい印花のある碗で、外面は無文である。釉が薄く磁胎が透けて見え、高台裏は露胎である。(291・292)は端反の白磁皿で、直径12cmとサイズ的にも

最も多いタイプである。(293)は白磁の菊皿で胎土は細かく純白である。染付碗は外面に唐草文がめぐるC群(295・296)のほかE群(297)も出土している。(299～301)は碁笥底の染付皿で(300)は口縁部外面波頭文が退化した列点文がめぐり、見込みには捻花文が描かれる。(299)は腰部に芭蕉文が退化した鋸歯文がめぐり、見込みには草花文が描かれる。(301)はサイズがやや大きく、体部にアラベスク文があり、見込みは寿文である。染付の杯(302)も見られる

**朝鮮製陶磁器** (303)は後の「ととや」と推定される碗で、見込みの重ね焼きのための目痕は砂目である。

#### S F 1058 出土遺物 (第19図, P L. 22)

**土師質土器** S F 1058からは土師質皿がまとまって出土した。(305)は直径が15.6cmあって、D<sub>2</sub>類の皿である。直径の大きいD<sub>2</sub>類は灯明皿としては使用しないのが普通であるが、この皿には灯心タール痕がある。(306・307)は腰部の押さえが強く底部が碁笥底状に持ち上がり、口縁部のナデもしっかりしている。(309)は底部から全体が丸いタイプのC類である。(313～315)底部が小さく口縁部の撫でが強いタイプ、(310・311)が底部がやや広いタイプで、(314)は器壁が厚い。(317・318)は手づくねだけでナデを行わないB類である。(317)は口縁部に布目が残る。

**石製品** (319)は笏谷石製の行火＝「バンドコ」で、平面形は「D」型である。正面には細い窓が6本開いている。「バンドコ」は「D」型と「O」型があるが、「D」型が圧倒的に多い。

#### 区画5-2 出土遺物 (第20図, P L. 23)

**越前焼** 越前焼は、隣の区画6から移動してきたためか大甕が多い。事実、区画6に埋設されていた甕群と接合したものも多い。大甕のほとんどはIVa群(320～322)からIVc群(323・324)である。(320)は甕群の中で底部が元位置保っていた(377)の口縁部である。(325・326)は口縁部が逆三角形でずんぐりとした甕の口縁部である。

(328・329)は、IV群に属する播鉢で、播目が密に入り口縁部直下まで施されている。(327)には外面に篋記号がついている。播鉢に篋記号は少ない。

**瀬戸・美濃製品** 鉄釉では天目茶碗が多く、ほかの器種は少ない。(330)は一乗谷では最も多い直線的な形態の天目茶碗である。(331)は鉄釉の小杯で、内側と外面の中程まで施釉されている。灰釉では端反の皿(333～337)が多く、これらはいずれも全面に施釉され、付け高台で見込みにかたちは異なるが菊の印花を持つ。

**中国製陶磁器** ここでも青磁碗と白磁皿が多い。普通の青磁碗が直径と体部の高さの比が2:1であるのに対して、(239)はそれが3:1と平たい。しかし、高台が高いのが特徴である。透明がかった青磁釉が薄く掛けられ、高台部はまんだらで露体の部分がある。外面の線刻の蓮弁文は口縁端部からやや下がった位置にある。

白磁の端反皿(241)は直径が16.5cmあり、一般的な白磁皿より一回り大きい。(344)はさらに大きく、直径18cmになるだろう。(345)は腰部が丸く口縁は軽く外反する白磁皿で、釉は灰色がかり、表面に細かい貫入がはしる。(348)は8面の小杯で口縁部が稜花状になっている。釉は乳白色で全体に軟質である。(346)は端反の小杯で、腰部が丸くほぼ垂直に立ち上がる。(347)は同じく小杯で高台裏に呉須で「宣徳年製」と書かれている。

(349)はE群の染付碗で、高台部を欠いていて文様がなく口縁部に回線がめぐらただけである。

**朝鮮製陶磁器** (350)は小さい高台からほぼ直線的に開く「蕎麦茶碗」で、口縁部がわずかに外反する。見込みには数カ所の砂目の目跡がある。

#### S E 1036 出土遺物 (第21図, P L. 24)

この井戸からは大量の遺物が出土したが、ここではやや特殊な遺物を載せた。

**国産陶器** (351・352)は筒状の掛け花生で、円筒を作って底を塞いだものと思われる。表面には篋削りの跡があるが、これは一種の装飾であろう。口縁部近くには柱などに掛けるための穴が開いている。焼成前に開けたものである。大きさはいずれも直径が5.5cm程で(351)は高さが13.5cm、(352)が14.7cmある。胎土は砂粒が多く見られ粗い。越前焼の胎土とは異なり、産地不明である。(350)は、砲弾型で平面が楕円形の掛け花生である。手づくねで表面全体に指の跡を残している。口縁部には波型の装飾がめぐる。胎土がやや粗く赤茶色である。これも産地が不明である。(355)は、越前焼の茶入れの底と考えられる。胎土はやや細かく赤味を帯びる。

**中国製陶磁器** (360)は白磁皿で、直径が11cmとごく普通のサイズの端反皿である。高台の畳付部分だけ釉が削り取られている。

**朝鮮製陶磁器** (363)は粉青沙器の壺の底部である。内面には轆轤成形の跡が残り、外面には縦方向の篋削りの跡がある。釉は灰色で底以外の全面にかかる。

**石製品** (364)は兎のレリーフをもつ硯と思われる。薄茶色の石で裏面には丸いえぐりがある。中国製品であろう。

**木製品** (365)は傘上の轆轤で、40本の骨とじめるための刻みがある。直径は7.6cm、高さは2.5cmある。中央には竹の柄が焼け残っており、竹串で2方向から固定されている。

そのほか、骨製の双六の駒石(366)が出土している。

#### S D 944 出土遺物 (第21図, P L. 24)

区画5-1と区画5-2を分ける石組溝から出土した遺物群である。

**越前焼** (367)はわずかに外に開く筒状の容器で、直径8.5cm、高さ5.7cmと小型である。用途は不明。また、胎土は越前焼としては細かく粘りのある土が使われている。

**瀬戸・美濃焼** (369)は、外側に鉄釉が施され内面は露体となっている。狛犬か猿の腰の一部と思われる。

**中国製陶磁器** (369)は青磁鉢で、直径が32cm程ある。折れ口縁状で、内面は浅い菊花のようになっている。高台も軽い刻みが回る。全面施釉で高台裏だけ輪状に釉が拭き取られている。白磁ではやはり端反の皿が多く出土しており、サイズのにも12cm(370)~14cm(371)のものが多い。染付は碁笥底のC群皿が多くみられた。(374・375)はいずれも腰部に波濤文がめぐり見込みには草花文が描かれている。

#### 区画6 出土遺物 (第22・23図, P L. 25・26)

**越前焼** この区画は越前焼の甕12個体を2ヶ所に分けて8個体と4個体埋設してあった。(376~378)はS X 1098側に、(382・383)はS X 1097側に底部が原位置を保っていた甕である。大甕はいずれもIV群cに属するが、(376)だけはIV群aになる。この時期の大甕は肩部に凹の「本」と格子の組合わさった押印がめぐるが、(376)以外あまりはっきりしない。特に(378)は押印がなかったようである。(378)は直径は90cmと他の大甕と変わらないが、高さが1mとやや高い。(378)は焼成時にゆがんだので口径が大きく凶化されている。(379)は口縁部が立ちあるタイプで口径50cm、高さ65cmある。(380・381)も同じく甕を埋設してあった土壌から出土したものであるが、原位置は保ていなかった。いずれも口縁の形態は異なるが、IV群cの口縁を持つ。

播鉢は甕に比べると少ない。(384)はIV群の播鉢で片口を持つ。片口は3本の指で口縁部を摘んで軽

く押し広げたものである。外面には花押状の墨書がある。(385)もIV群の播鉢で、よく使用されたとみえて底部近くの播目はすっかり摩滅している。一般に播鉢は焼きが甘く柔らかいものが多い。

**土師質土器** 土師質は皿がほとんどである。(386)は、手づくねによるB類であるが、丁寧に作られていて、形がよく整っている。(387)は、土師質の土鍋である。一乗谷では煮沸具としては鉄鍋がもっぱらで、小型の羽釜以外の煮沸具が、確認されたのは始めてである。直径は16.3cmと高さ4.5cm(推定)と浅くてあまり大きくはない。内湾する口縁部に浅い沈線がめぐる。胎土は雲母を多く含んで粗く、赤茶色を呈する。底部は火を受けて脆くなっている。(388)は土師質の円盤状土製品で、直径は1.2cmと越前焼のそれに比べて小形である。また、一乗谷では出土点数も少なく、これまでに数点にとどまる。

**瀬戸・美濃製品** 鉄釉では、天目茶碗が6点出土している。(389・390)は全体が直線的な大窯II b期の製品と考える。(389)がより直線的である点から後出であろうか。(391・392)は直径6.5cm前後の小杯である。(394)は底部を欠くが、やや中央が膨らんだ筒状の器体に、外に開くような口縁部を持つ。直径は13cm程である。釉は外面は腰部まで、内面は口縁部近くのみ施され、他は露体となっている。水指であろう。胎土はやや薄い灰色を呈する。(393)は同様の容器であるが、一回り大きく内側も底部まで釉が施されている。(395)は鉄釉四耳壺の肩の部分である。

灰釉では皿が7点出土しており端反の皿が多いが、(397)は内碗する丸皿に近い。(396)は灰釉碗もしくは鉢の底部で削りだし高台で露胎である。(399)は直径4cmの小さい碁笥底の杯である。

**中国製陶磁器** 青磁は碗・皿合わせて4点と意外に少ない。(401)は直径が11.7cm程とやや小型の青磁碗で、線刻の蓮弁文が施される。蓮弁文は山形と縦線とで構成されている最も退化したものである。(402)は幅の広い蓮弁文の青磁皿で、内側にも篋による花卉状の刻みがある。釉はやや厚く、全面施釉後高台裏のみ輪状に拭き取られている。

白磁は皿がほとんどで13点出土している。(403)は高台から直接大きく外反して開くタイプの白磁皿で、胎土や釉色は白く、一般の端反皿と共通している。高台畳付には釉着を防ぐための砂が付着している。(404)は端反の皿で、灰色の小さい点が多数あり、全体に白磁釉が汚れている。

染付では碗・皿合わせて18点出土しているが、小片が多かった。(405)はC群の碗、(406)はE群の碗である。(407・408)は染付小杯で、腰部が膨らみ口縁部が外反する。文様は外面に草花文が描かれ、見込みは太古石の文様であろうか。(408)の見込みの文様の描き方は、染付碗E群、染付皿B<sub>2</sub>群と共通するものがある。

**朝鮮製陶磁器** (409)は、形は「蕎麦茶碗」と同じであるが、内面に刷毛目を施している。(410)は、「ととや」の高台部である。見込みには砂の目跡がある。(411)は刷毛目の皿もしくは杯で、外側の刷毛目が薄い。

**円盤状土製品** (412~414)は、越前焼きの甕もしくは播鉢の破片を打ち欠いて円盤状にしたもので、(415)は青磁碗の高台部を円盤状にしたものである。

**石製品** (416)は浄教寺砥石で、目が細かく仕上げ砥石に近い。表面には筋状の傷が多数見える。

#### 区画7 出土遺物 (第24図, P L. 27)

**越前焼** 越前焼きは意外と甕が少ない。(417)はIII群aの播鉢で口縁部が端部が丸く、内側の口縁したの沈線がない。播目の間隔が粗く、口縁のかなり下までしか施されていない。(418)は、IV群の播鉢で焼きが甘く、7条の播目をかなり密に施しているが、口縁部のやや下がった位置でとまる。

**土師質土器** 土師質皿はD類とC類が大半を占める。(419)はC類であるが、口縁部の撫で調整が不十分

なため口縁の高さが不揃いである。(420)は口径が6 cm前後のタイプ、(421)は口径9 cm前後で底部が小さく丸みあるタイプ、(422)は底部が平らなタイプである。

**瀬戸・美濃製品** 天目茶碗が8点、灰釉皿が9点と瀬戸美濃製品は少ない。(425)は端反の皿で高台もしっかりしており、口縁部の端反も大きい。(426)は内面に篋による刻みのある皿で、このタイプの口縁部は内碗する。一乗谷では灰釉皿は端反がほとんどで、内碗する皿は少ない。

**瓦質土器** 一乗谷では瓦質土器は、風炉や香炉が多く火鉢は少ない傾向にある。(427)は頸部が立ち上がるタイプの風炉で、頸部に印花がめぐる。

**中国製陶磁器** この区画からは、意外と出土例が少なかった。(428)は白磁菊皿の底部で、高台裏には大明(年造)の文字がある。(430)は染付のB<sub>1</sub>群の端反皿で、外面に唐草文、見込みは羯磨文が描かれるタイプである。(429)はD類の碗で見込みは羯磨文であろう。

#### 区画8 出土遺物 (第24図, P L. 27)

**越前焼** 破片としては大甕が20点ほど出土しているが、良好な口縁部は少ない。壺は40点ほど出土しており、(431)は口縁部が逆三角で体部中央に突帯がめぐる壺である。(432)はお歯黒壺の口縁部で、器壁が厚い体部に薄い口縁部が付く。(433)は小形の壺で、炭化した内容物が付着している。内容物そのものは不明。

播鉢は25点ほど出土しているが、ほとんどがIV群である。(434)は、口縁部の沈線はしっかりしているが、播目はほとんど全面に施され、沈線を越えている。(435)もIV群で口縁部が斜めにカットされる。

**土師質土器** ここでもC類とD類がほとんどである。(436)はD類の皿で底部が持ち上がる。(437~441)はC類の皿で、(437・438)は口径9 cm前後、(439・440)は口径6 cm前後で器壁が薄くて丸いタイプ、(441)は口縁部のナデによる返りが無い。

**瀬戸・美濃製品** (442)は小型の天目茶碗で直径が9 cm、推定の高さが4.5cm程である。小型化しているだけで、つくりや釉などは普通の天目茶碗と全く同じである。(443)は灰釉皿の底部で、見込みは無文である。

**中国製陶磁器** 青磁碗が10点出土しているが、皿は1点しかない。(445)は線刻の蓮弁文青磁碗である。花卉の先端と縦の刻みを別々に刻んでいるが、まだそれらが一致している。見込みには波型の刻みがある。(446)は青磁稜花皿の底部で高台部は露胎である。

白磁は23点あり、端反の皿(447)がほとんどである。高台に抉りのある皿(448)も出土している。(449)は腰部が張って直線的に開く小杯である。

染付では碗・皿が合わせて20点ある。(451)は外面が梅と月の文様の碗である。器形はC類に属するが、この文様の碗は大きく開く。

**金属製品** (453)は銅製の輪で用途は不明。(452)は銅製の紅皿である。体部は菊花状に作り、見込みも別に菊花状に作って、抉りのある高台とを鉾で留めてある。

#### 区画9 出土遺物 (第25図, P L. 28)

**越前焼** 大甕ではIV群が主体を占め、とくに口縁部が最も肥厚するIV群c(454)が多い。しかし、同時に大甕ではないが、口縁部の退化した緒がなくなったIII群の甕(455)やさらに古く口縁部がのこるII群の甕(456)が出土した。この甕は高さ45cm程の小型の甕で、肩が張っており胴部と腰部の境も大きく屈曲する。この甕のは口縁部の形態から14世紀中葉の所産と考えられる。一乗谷では個体数は少ないがII群の甕が出土する。(457)は頸部のない甕で、肩に篋記号がある。(458)は小さく直立する頸部がつく壺で

ある。

播鉢はIV群が多く、口縁の形態が水平で少し外に延びるタイプ(459)と斜めに切られるタイプ(460)がある。いずれも播目が口縁直下の沈線を越えて口縁端部まで延びて来ている。(461)は、沈線の位置が低いIII群aの口縁部で、端部は丸くおさまられている。

**瀬戸・美濃製品** 天目茶碗は9点出土している。(462)は口縁部下の屈曲が弱く全体に丸みのある所から大窯初期の製品と考える。

灰釉は20点程出土しているが、半数は碗であった。(463・464)は灰釉碗で直径が15.5cmと大振りであり、これまでこうした大振りの灰釉碗には幅の広い蓮弁文がめぐることが多かったが、これは無文である。高台裏には輪トチンが一部付着したままである。(467)は一般的なサイズの灰釉碗である。(468)は高台がしっかりしており、端反の強い灰釉皿である。見込みには印花がみられる。(469)は口縁部にのみ灰釉が施された卸皿である。外面には轆轤轆きの跡がよく残る。

**中国製陶磁器** 青磁は9点出土しており、(470)は線刻の蓮弁文碗、(472)は無文の青磁碗で口縁下に沈線が1筋入る。見込みが厚く饅頭心状になっている。(471)は青磁碗の高台部で見込みに「福」のスタンプが押されている。白磁は30点、40点程あるが、小片が多い。(473)は外面に唐草文、見込みは羯磨文のB<sub>i</sub>群の皿である。(474)は、「交址」と呼ばれてきた小皿で、体部は蓮弁状になっている。釉はかせているが金属色に光る赤だったと推定される。

#### 区画10出土遺物 (第26図, P L. 29)

区画10は、全体に出土遺物が少ないが、井戸S E 1041からは、越前焼を始めとして青磁香炉や硯・砥石などのほか傘のロクロなどが出土している。

**越前焼** (478)は壺の口縁でよく張った肩部に軽く外反する短い口縁部が付く。大型のお歯黒壺であろうか。

**土師質土器** 図はS F 1076出土の土師質皿である。C類では(483)が直径が6.5cmの皿で底が丸く口縁部のナデによる返りがほとんど見られない。(484・485)は低部が平で口縁部にナデによる返りがはっきりしている。(479～482)はD類の皿でいずれも薄く丁寧に作られており、低部が平もしくは上げ底状になっている。このタイプは胎土も細かく堅く焼き締まっているものが多い。

**瀬戸・美濃製品** 天目茶碗は4点出土しているが、いずれも井戸S E 1041からの出土である。(486)は、その内の1点で、直径が8.5cmの小型の天目茶碗である。全体に丸く口縁下の屈曲部も緩い。(487)は同じく小形の天目茶碗の底部である。(488)は灰釉碗の底部で高台裏には輪トチンが付着したままになっている。そのほか灰釉は、皿を中心に12点出土しているが小片であった。

**中国製陶磁器** 青磁は、碗の他皿・香炉が出土している。(491)は青磁稜花皿で、器壁は厚く腰から大きく外反する。口縁部は篋で稜花状に刻みをいれ、さらに波状に線刻している。全面に施釉されているが、高台裏は重ね焼きの際の輪トチンが付着している。(492)は、筒状の香炉で、口縁の内側に返りが付いている。釉色が一般の青磁香炉とは異なり黄緑がかった褐色で、落ちついた色合いをしている。

白磁は21点出土しているが端反の皿がほとんどで、他に菊皿(494)、小杯(495)などがある。

染付は小片が多く碁笥底のC群の皿(496)などがある。

**石製品** 砥石が2点出土している。(499)は薄く表面に多数の傷がある。(500)とも浄教寺砥石である。(498)は硯の海の部分で色は黒い。

## 区画11出土遺物（第26～28図，P L. 29～31）

区画を広く設定したので、全体に出土遺物の点数が多くまた種類も多い。

**越前焼** 甕は全体から出土しているが、溝S D 1061以北からの出土が多い。大甕はIV群が多く、(501・502)は、口縁部が極端に厚くなる以前のIV群bで、(503)は口縁部が肥厚したIV群Cである。(504)は高さ48cm、口径25cmの甕で、井戸S E 1044から出土した。割れていたが接合すると完形となった。卵型の体部に少し外反する口頸部が付く。中甕と称してきたタイプの小型版である。使用しているときに割れて、漆で接合した跡がある。

播鉢もS D 1061より北に多く分布する。IV群が多く(506)は直径が30cmを越えており最も大きいタイプである。口縁部が斜めに切られる。播目は上半分で少し間隔が開くがかなり密で口縁端部まで引かれ、見込みにも播目がある。(505)は沈線が口縁直下にあって、播目が口縁端部まで延びていることからIV群と見られる。(507・508)はIV群の中でも新しいタイプであろう。(509)は底部からほぼ直線的に開いて口縁が直立する鉢である。全体に厚ぼったい。(510)は直径が12.3cm、高さが8.8cm程のわずかに開く筒状の容器で、表面は赤褐色を呈する。おそらく水指であろう。

**土師質土器** S F 1060(511・513・520・523・524)とS X 1145(512・514～524)付近からまとまって出土している。(511～513)は手づくねでナデを施さないB類である。おなじB類でも(512)は厚くて全体に不正形であるが、(513)はナデこそ施されていないが、厚さも均一で平面形も円に近い。(514～518)は見込みのほぼ中心から口縁部までを一気にナデ抜くC類で(516)までは口径が6～7cmを中心とする小型のもの(521)までが口径9cmを中心とするものである。(522～524)までは見込みに横方向にナデを施した後、立ち上がり部から口縁までにナデを施すD類である。なおナデの最後は逆方向に返すようにナデ抜く。(522)を除いてこれらのD類は底部が丸い。(526)は土師質の羽釜で直径10cm、高さ8cm程である。平らな底部からやや開く筒状の容器を作り羽を張り付けている。胎土は細かく水簸した土を用いているかのようである。

**瀬戸・美濃製品** 天目茶碗は18点ほど出土している。(527)は全体に直線的なタイプであるが、口縁端部が古い形態をしている。高台は丸く抉ったいわゆる内返りである。(528)はやや丸いが口縁端部が大きく外反している。(530)は直径が普通サイズの天目茶碗の2/3程の小天目である。全体に丸く輪高台である。(531)は内面と外面の口縁部に鉄釉が施された小杯で、輪高台を持つ。(532)碁筭底タイプの小杯である。こちらは高台付近の釉は薄い全面に施釉されている。(533)は鉄釉茶入の下半分で底部は碁筭底状に挟りがある。

灰釉は碗の底部が1点(534)出土している以外、皿がほとんどで、S X 1145付近から集中して出土している。(536)は高台からほぼ直線的に広がって口縁部が軽く外反する。内側に櫛描の波状文がある。端反の皿には見込みにカタバミ(535)や菊(538)の印花がある。(539)は青磁を写した香炉で、竹の節を模しており小さい足が3足貼り付けられている。釉は外側と内面の中程まで掛けられ、見込みと底部が露胎となっている。灰釉の香炉のほとんどがこのタイプである。

**中国製陶磁器** 青磁は碗が23点出土しているが、やはり線刻蓮弁文が最も多い。(540)は内湾して深く山形の刻みと縦の線が組合わさって蓮弁を表している碗である。(541)は大きく開く器形に連続した山形の刻みと縦の線が組合わさったものである。(542・543)は直径が11cm前後と普通の青磁碗より小型である。(544)は無文の碗の高台部で見込みに「積」の字のスタンプがある。(546)は高台部が露体となった青磁碗で、釉は青白色を呈する。皿は11点出土しており、5弁の輪花皿(549)が目につく。碁筭底で

内碗するやや大振りな皿である。(548)は直径9.8cmとやや小型の腰に稜のある端反皿で、口縁部に刻みをいれて輪花状にしている。(547)は稜花皿で口縁部に線刻の波状文がある。体部内側にも文様が刻まれている。

白磁は70点程出土しているがその大半は皿で、中でも端反皿が主体を占める。端反の皿もいくつかサイズがあるが、直径12cm(551)から14cm(552)の皿が多い。(550)は小さい高台から腰部の稜を経て大きく外反する皿である。釉は青味が強く青磁ともみえる。(554)は碁笥底を思わせるような小さい高台を有する端反の皿で、釉はやや乳白色を呈する。

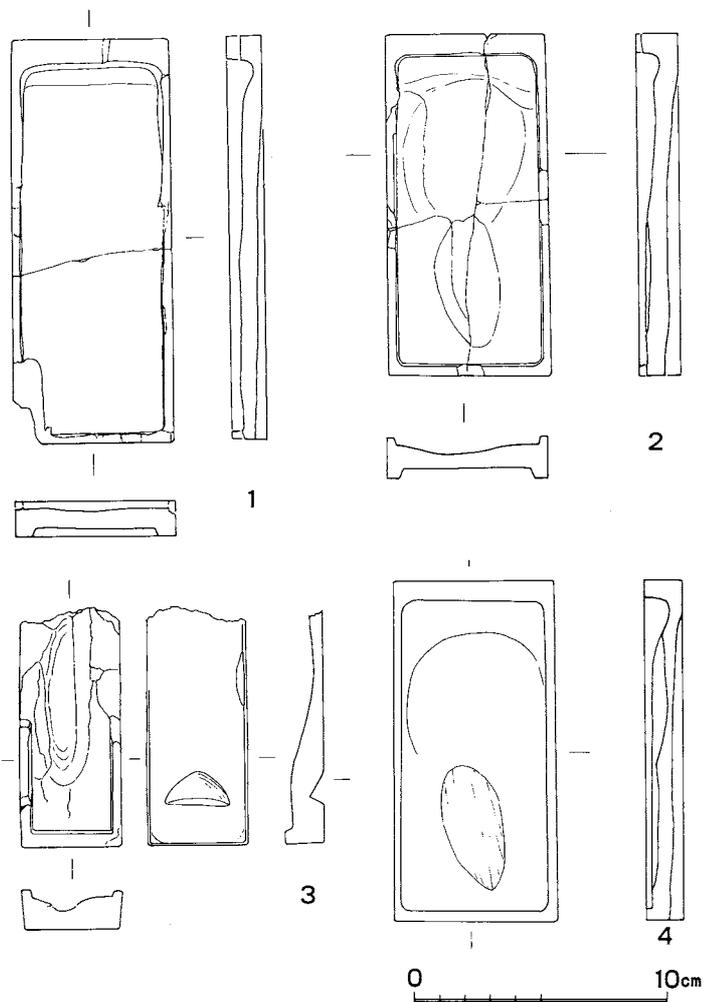
染付は碗・皿合わせて47点出土している。(559)は口縁部が波濤文、腰部に唐草文がめぐるD群の碗である。皿ではB1群(560)やC群(562)が多い。(563)は、赤絵の皿で口縁部に赤い波濤文、外面には緑と赤の草花文の様な文様が見える。

**朝鮮製陶磁器** (566)は「蕎麦茶碗」で、内外面に黄褐色の斑点が散らばる。

(565)は水滴で、産地は不明。図では左の欠けた部分が取手で中央の小さい穴から水を注ぐ。この部分も欠けており、下は削られている。

**金属製品** (566)は銅製で、竿秤の分銅である。一乗谷ではこれまでに8点出土しているが、この橢形のものがほとんどである。

**石製品** 硯が4点出土している。(567・挿図7-1・2)は長方形で足が付く硯で、挿図7-3は、底が平らげ脚の付かないタイプであるが、底部より上が広がる逆台形の形をしている。挿図7-2と4はサイズがほとんど同じで、長さ13.5cm、幅6.4cmを測る。(567)は先の2例とほぼ同じ幅であるが、長さが16cmと2.5cmほど長い。いずれの硯もよく使い込まれ、他に砥石も出土している。



挿図8 区画11出土の硯

**表土出土遺物** (第29図, P L. 32)

表土からは多数の遺物が出土している。

**越前焼** (569)は越前焼の水指であろう。直径25.5cm、高さ21.2cmで口縁部が矢筈口状になっている。外側は赤茶色を呈し、内側は「H」筧記号があり、白く自然釉がかかっている。(568)はV群に含まれる播鉢である。(578)は焼締め陶器で胎土は赤く備前焼で後の作見窯の製品に似ている。口縁部に刻みがある。

**瀬戸・美濃製品** 天目茶碗(572・573)が最も多い。(575・576)は青磁を写した灰釉碗であるが、(576)は灰釉の碗で器形は天目茶碗と同じである。(574)は灰釉壺の底部である。(577)は銅緑釉の皿である。

**中国製陶磁器** 青磁、白磁、染付がほとんどである。(579)は青磁碗の高台部で高台裏は露胎である。(580)は青磁の稜花皿で見込みにも吉祥字のスタンプがある。そのほか青磁鉢(582・583)も出土している。

白磁は皿が多く、(584)はやや薄く釉色は灰色で細かい貫入が入る。(585)は乳白色の白磁鉢で、(29)と同一固体であろう。

染付はC群碗やB<sub>i</sub>群が多い。(588)は唐草文が崩れた文様、(589)は腰部に芭蕉文、見込みには巻貝の文様がある。いずれもC群の碗である。(589)は、端反の碗で亀甲文が描かれるB群の碗である。見込みに鳥の文様を描いたE群の碗の高台部(592)もみられる。(593)は唐草文がめぐるB群1の端反皿で、直径は8.5cmと小さいがしっかりした高台が付く。(595)は碁笥底で見込みにねじり花文のC群の皿である。(596)は内湾するE群の皿で、第29次調査以外ではあまりみない。(597)は大型の壺の蓋である。

**石製品** (599・600)は砥石で、いずれも「浄教寺砥石」である。(598)は硯で、底部に足を持たず平で、底部から直角に立ち上がっている。この形式は一乗谷では最も新しい形式である。

## 4. 小 結

### 遺 構

#### 地区の全体計画

この地区の骨格となるのは3条の道路SS975・976・977であって、まず、東西方向の道路2条SS975・977を見てみよう。この間隔は先に約60mであるとした。正確には、幅7.6m(25尺)の東西方向の道路SS975の南側溝から幅3m(10尺)の東西方向の道路SS977の南の石垣SV1088までは59m、この石垣と1.2m離れて平行する石列(この間1.2m、4尺が、土塁の可能性が考えられる)までが60mとなる。なお、これまでの調査により、周辺の屋敷の間口等から、この数値の半分、30m(100尺)が基本単位として存在すると推定されており、これと矛盾しない。この調査区の北の、東西方向の道路SS944とSS975の関係も同様で、SS944の南側溝とSS975南側溝の間が91m(300尺)となっている。ただ注意すべきことは、道路SS977の南の屋敷の土塁部も内に含まれていることである。この道路SS977は、幅3m(10尺)と狭く、他の道路では3～5面の整地面が認められているのに比べ、道路面が2面と少なく、そのレベル差も0.1mであること等、相違点も認められる。地区の基本計画には含まれていなかった可能性も想定でき、あるいは、二次的改変により、設けられた可能性もあろう。その場合は、I期には存在せず、後述するように、この地区の屋敷構成が変化したII期以降の遺構となることも考えられる。この2条の東西方向の道路により区画された地区は、0.2mの段差を持つ南北の石列SX1176により、南の東西方向道路SS977を除いて、正確に南北に二分されている。次に南北方向の道路SS976を考えてみる。この道路は南で行き止まりになっている点が大きな特徴である。加えて、西を限る土塁石垣の方位は少し折線になり、これを修正するように、その幅が変化する。この道路の北に続く道路SS260が直線で幅4.5m(15尺)と一定となっているのに比べてかなり異なる。また、道路の整地面の数や積上げも少ない。こうした点から、この道路も、前述した東西方向道路SS977同様、二次的改変の可能性も残されている。だが、この点を解明する大きな手がかりとなる、これまでの周辺の調査によって東の一乗谷川の西岸に沿って存在したと考えられているもう1条の南北方向の道路は、今回の調査では、一乗谷川の氾濫と考えられる削平のため、確認することはできなかった。そのため、この2条の南北方向道路詳細を比較検討したり、その間隔等から、計画のあり方を明確にすることは、不可能であった。

#### 区画構成

次に、これらの道路で区画された地区の内部について見てみよう。南北55.6m、東西は不明であるが、周辺の調査から30m(100尺)程度と推定されるこの地区は、大きく南北に二分されることはすでに述べた。まず、北半部を見ると、北の東西方向道路SS975に面して2～3間(1間=6.2尺、1.88mとして)の建物が接するように連続しており、加えて7～8m南に石積施設群SF1049～1056が存在する。この石積施設群を境にして状況が大きくことなる。すなわち、北の東西方向道路SS975に面しては小規模な建物が連続し、石積施設は各建物にそれぞれ対応し、基本的には便所と考えられる。ただ、後に述べる南半の小規模屋敷等で見られるように溝で明確に仕切ることなく、また、井戸を欠くものもあって、比較的独立性は低いことが知られる。南は、これを分割するような遺構は見られない。基本的に

は東に存在したと考えられる道路まで一つの屋敷と考えると良いものと思われる。そして、西に土堀の基礎部と考えられる遺構S A982が存在すること等から、本来は、東西道路S S975に面する区画と一体であって、これを後に分割した可能性が高いのではなかろうか。南半部は、石列S X1132・1134・1137や石積施設群S F1061～1074の配置から、東西に分割され、さらに、西の南北方向道路S S976に面しては、東西方向の溝S D997～1000により、間口6m(20尺)を主とする屋敷に細分される。この細分された屋敷の奥行き(東西)は12m(40尺)前後である。この各小屋敷には建物、井戸、便所と推定される石積施設が備わり、独立性が高い。加えて、ここには、越前焼大甕を規則的に据え付けた遺構S X1097・1098から推定されるように、紺屋のような職人の住居が存在することも注目できる。東については、明確な区分はみられないが、石積施設の配置等から若干の区分があったものと思われる。また、南北道路S S976に面する小屋敷を区切る東西の溝は、I期には存在していないと考えられることや、北半部の状況をあわせ考えると、この南半部も、北半部同様本来一つであったものを、後に分割した可能性が高いと考える。なお、仮に、小屋敷の奥行き12m(40尺)を単純に2倍すると80尺となり、これに西の南北方向道路S S976の幅約6m(20尺)を加えれば100尺となることも指摘しておきたい。

#### 区画と建物

次に、道路に面して検出された建物についてみてみると、基本的に二つのことが指摘出来る。第1は、北の東西方向道路に面する建物群についてである。これらが溝等で明確には分割されていないことはすでに述べた。加えて、これらは、隣の建物と柱を接するように隣接する。その間隔は0.3m弱であり、屋根構造を考えると、基本的には軒先を正面の道路側に見せる「平入り」以外には、不可能と考えられる。第2は、南の南北方向道路に面する建物群の中のS B1022についてである。この建物の側柱筋は、敷地境の溝の中心から0.3m程度の間を持って存在し、従って、隣の建物とは、少なくともこの倍以上の間隔となり、先に見た東西方向の道路に面する建物群の例に比べれば隣棟間隔は大きい。そして、正面2.5間、奥行き3.5間の規模であるが、正背面に、これを二分する位置に若干大きな礎石があって、ここに立つ柱が棟を支えると推定でき、「妻入り」となることである。他の屋敷では、明確でないものの、同様の構造を推定することも出来る。このように、建物の構造にも違いが見られる点を指摘しておきたい。

#### まとめ

最後に、以上の諸点をふまえ、判明したことをまとめると次のようになろう。

この地区は、周辺を含め、計画的に割付けされており、基本となる単位は30m(100尺)の可能性が高く、南北二つの区画に大きく区分される。また、南北二つの区画は、さらに細分化され、北の区画は、東西方向道路S S975に面して、間口2～3間程度の小規模な建物が柱を接して連続するが、その境界は必ずしも明確でない部分と、その南の建物等が点在する部分に分かれる。南の区画は、南北方向道路S S976に面して、溝で明確に区分された敷地間口6m(20尺)、奥行き12m(40尺)程度的小屋敷が連続し、この中には紺屋といった職人の住居と推定されるものも存在する。しかし、そこに存在したと推定される川沿いの南北方向の道路に面していたと考えられる東半分については、こうした明確な分割は認められない。なお、当初は、基本的にそれぞれ一つの大きな区画であって、このように細分化されるのは、後のことと考えられる。また、建物の構造についても違いがあって、独立性が低い東西方向道路に面しては、平入り構造の建物が柱を接するように連続し、独立性の高い南北方向道路に面する屋敷では、妻入りの建物が存在する傾向が認められる。

## 遺物

第29次調査の内今回の報告対象としたSS997以北の出土遺物の総破片数は（明らかに近世の製品を除く）、22,804点で、その器種別破片数は表(2)のとうりである。やはり土師質皿が最も多く、12,481点あって全体の54.2%を占める。次に越前焼の甕が多く4,239点で18.4%を占める。越前焼大甕が12個体も埋設されていた割には甕の破片数が少ない。これは大甕が細かく割れずに残っていたことによると考えられる。越前焼壺が1,300点と播鉢が1,012点とほぼ同数で5%前後あり、越前焼全体では29.6%ある。土師質皿は55.2%あって越前焼と合わせると84.3%になりほぼ大半を占める。瀬戸美濃焼は鉄釉の天目茶碗が196点、灰釉の皿が299点と瀬戸美濃焼の2/3以上を占めるが、全体では3%程しかない。中国から輸入された陶磁器はそれぞれ青磁1.5%・白磁2.9%・染付2.9%ある。それぞれに多い機種があり、青磁は碗、白磁は皿、染付も皿が多いが碗も比較的多い。中国製陶磁器と瀬戸美濃製品は飲食器として互いに競合・補完の完形にあるが、中国製陶磁器の方が瀬戸美濃製品より多くて約2.5倍ある。

この地区は、南半と北半で性格が異なるのは、遺構のところで指摘した通りであるが、SS975以西の大規模な武家屋敷とは異なり、間口6m、奥行き12mほどの小規模な屋敷で区画6のように越前焼大甕が12個体も設置されていて、身分的には様々な想定がなされているが、職人の住居と考えられる側面が強い。こうしたこの地区の性格から組成比をみってみると、49次・50次調査の中級武家屋敷や36次調査地区の町屋出土の組成比と共通する点が見られる。すなわち、土師質皿が54%台低いのは町屋地区とほぼ似ており、瀬戸美濃製品が3%と低いのは中級武家屋敷のそれと似ている。もちろん同じ町屋や武家屋敷でもそれぞれバラツキがあって、全体的傾向が似ている程度である。

ところで、天目茶碗はもともと喫茶用の茶碗であり、青磁碗も文献や絵画資料から喫茶用として使用されたことは確実である。青磁碗を写した灰釉碗も喫茶に使用したと考えて良いだろう。ところが染付碗は積極的に喫茶用とする資料がない。食事の際の碗を染付碗だけとすると碗が160点、皿が1,008点でその比率が約1:6となって圧倒的に皿が多くなる。「おあむ物語」に見られるような当時の食事情から考えればもっと碗の比率が高いはずで、青磁の碗や灰釉碗が食事にも用いられたか、腐ってなくなる漆器の碗が多く使用されたか。いずれかというよりおそらく両方であろう。

### 出土遺物の分布について

多量の遺物が出土しているが、どんな遺物がどの辺りからどのくらい出土したのかを知るために分布図を作成した(挿図9~19)。分布図は、グリッドごとの出土点数を階層的に示しており、溝や溜枘、井戸など遺構ごとの出土点数ではない。しかし、一般的にはグリッド内にそうした遺構がある場合には、そこから出土していることが多い。全体としては、発掘区全体から比較的均等に出土しているといえるが、SS976とSS975の北半分からはあまり遺物が出土していない。区画5の中央部と区画10も比較的少ない傾向がある。また、器種別にいくつか特徴のある分布を示す。

越前焼甕は、区画6に越前焼き大甕が据えられていたこともあってこの付近に多く分布するのは当然であるが、SS975とその側溝SD985からの出土も多い。これはこの付近は厚さ約10cmの焼土層で覆われており、この焼土層から出土したものである。また、井戸からも多く出土している。しかし、井戸の場合はすべての井戸を底まで発掘したのではなく、(SE1033、SE1037、SE1042、SE1043は直径が小さかったり、中の石積が崩れそうで危険だったりで底まで発掘していない)限られた井戸

から一乗谷滅亡後に田畑にするとき後から捨てられたような状態で出土するのが特徴である。同じ越前焼でも壺は少し違った出土状態を示す。S S 975とその側溝S D 985付近から多く出土するのは同じであるが、井戸S E 1038やS E 1041からは多く出土しているが、そのほかの井戸からはあまり多くない。播鉢の場合は、壺よりも全体に分散しており、井戸に集中することもほとんどない。

土師質皿の場合は、出土点数が多いので全体から出土しているが、溝からの出土が多いのが特徴である。屋敷と屋敷の境界の溝は雨垂れの溝でもあるので浅くあまり多く出土していないが、道路の側溝からは多い。溝に捨てた土師質皿が道路側溝に溜まったようである。また、すべての溜枘ではないが、多数の土師質皿が出土している溜枘もある。これも、出土状況から一乗谷が滅ぶ前にすでに捨てられていたと考えられ、滅亡後、田畑にする過程で溝や溜枘に溜まったのではないと考えられる。

天目茶碗の場合は、点数は少ないが傾向としては、越前焼壺や播鉢に似る。すなわちS S 975の焼土層と区画5のS D 985内、区画5-2と区画6の境付近の焼土層からの出土が比較的多い。灰釉も天目茶碗とほぼ同じであるが、区画5のS S 985付近や区画10などに空白部がある。ただ区画11の南部に集中して出土しているところがあり、この点は土師質皿の出土状況と共通している。また、5点以上出土しているグリッドには井戸や溜枘・溝などの遺構があり、こうした遺構からの出土は天目茶碗より多い。

青磁もほぼは瀬戸美濃製品と同じ傾向を示す。ただ、点数が少ないだけ区画5と区画10の空白部が目立つ。白磁・染付もほぼ同じであるが、点数が多い分空白部が目立たないだけである。

道路S S 975の北半と道路S S 985、区画5と区画10からの出土遺物が少ないことは遺物の種類に関わらず共通している。逆に遺物の出土が多いところは区画9から区画11の北半にかけてと区画4から道路S S 975にかけてである。後者は焼土層が堆積していたところであるが、前者についてはそうしたはっきりした土層は見られなかった。しかし、南西から北東方向に遺物出土量が多い点は共通しており、滅亡後の整地の際この方向に土の移動があったことを示しているといえよう。

このことは、遺物の出土状況が廃棄時の様子を反映していないことであり、例えば、区画2から出土したからといって、その遺物が使用時もしくは廃棄時に区画2にあった遺物とはいえないこととなる。この点に付いては遺物の接合状況からも確認されている。

そのほか第29次調査の特徴としては、産地不明の壁掛け用の一輪挿が区画5の井戸S E 1036から完形で3点、傘のロクロ、うさぎのレリーフのある硯が出土していることがあげられる。これらの遺物は、他の地区ではほとんど見ないし、出土してもたいてい小さい破片であることが多い。これらの遺物から、29次調査で見つかった小区画の屋敷の性格に付いて、「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡X」では商工業者の家ではなく、馬廻り衆の様な人々の屋敷の可能性も推定したのである。しかし、この点に付いては、一乗谷滅亡20年後には水田となっており、その際山側の大規模武家屋敷が削られて一段低い川側に盛られた可能性があって、その時遺物もいっしょに移動したと推定される。であるから特別な遺物が多いのではないだろうか。

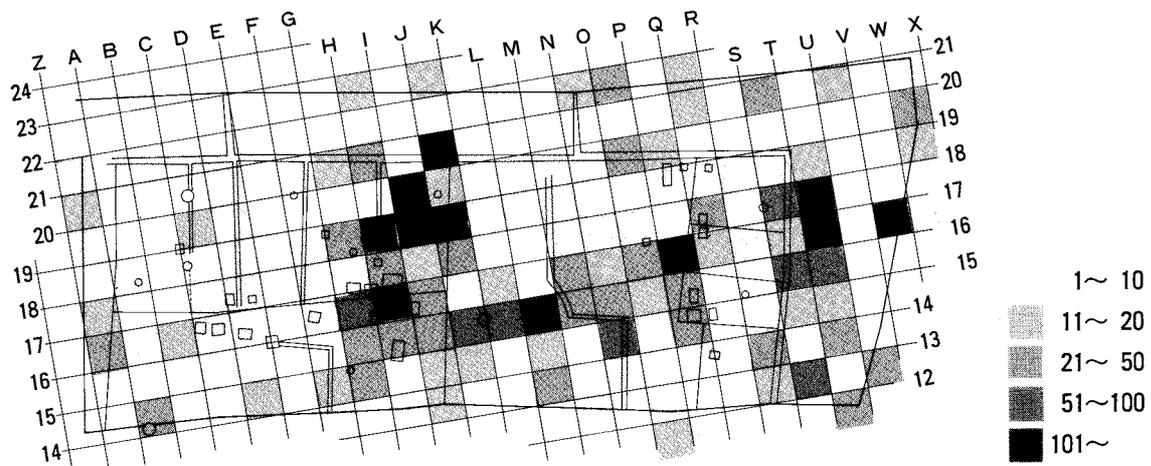


插图9 越前烧甕片出土分布图

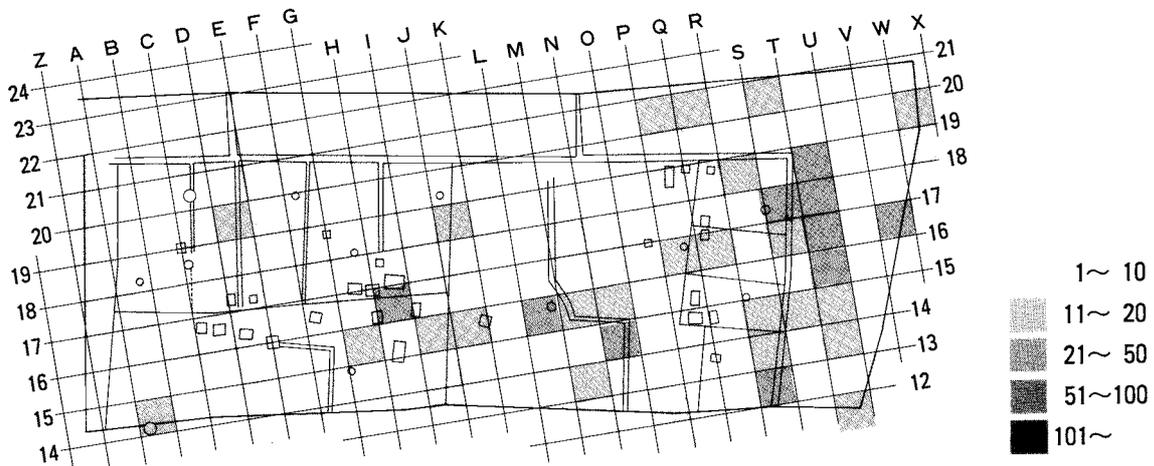


插图10 越前烧壺片出土分布图

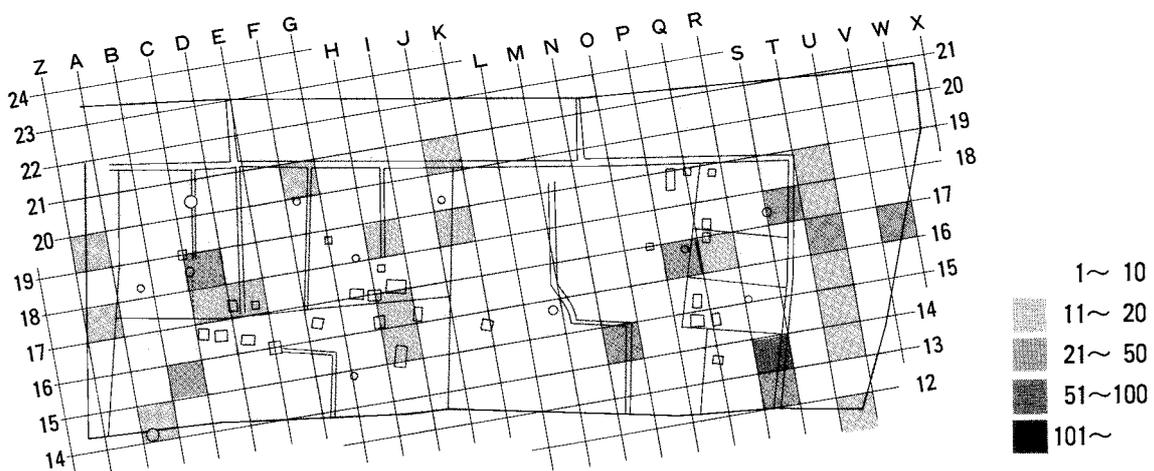
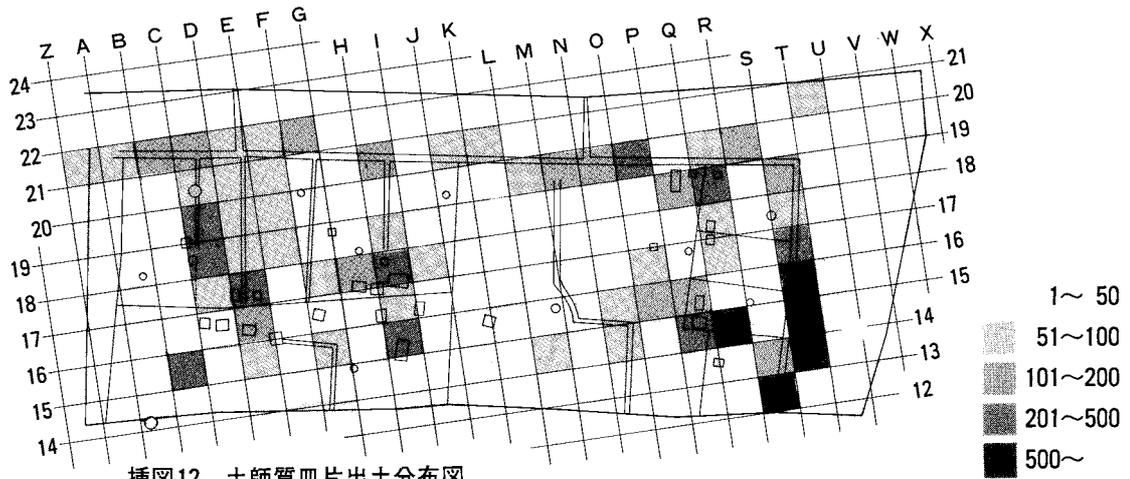
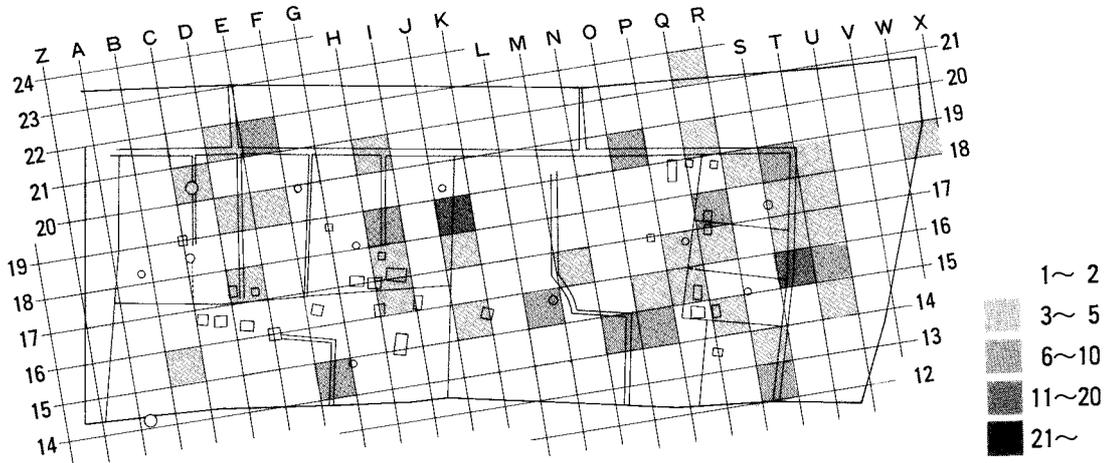


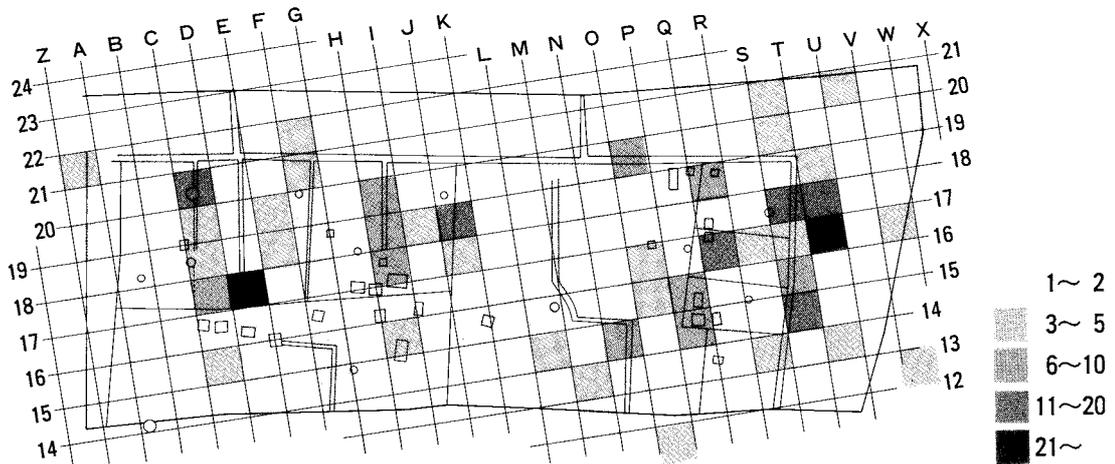
插图11 越前烧鉢片出土分布图



挿図12 土師質皿片出土分布図



挿図13 天目茶碗片出土分布図



挿図14 灰釉碗・皿出土分布図

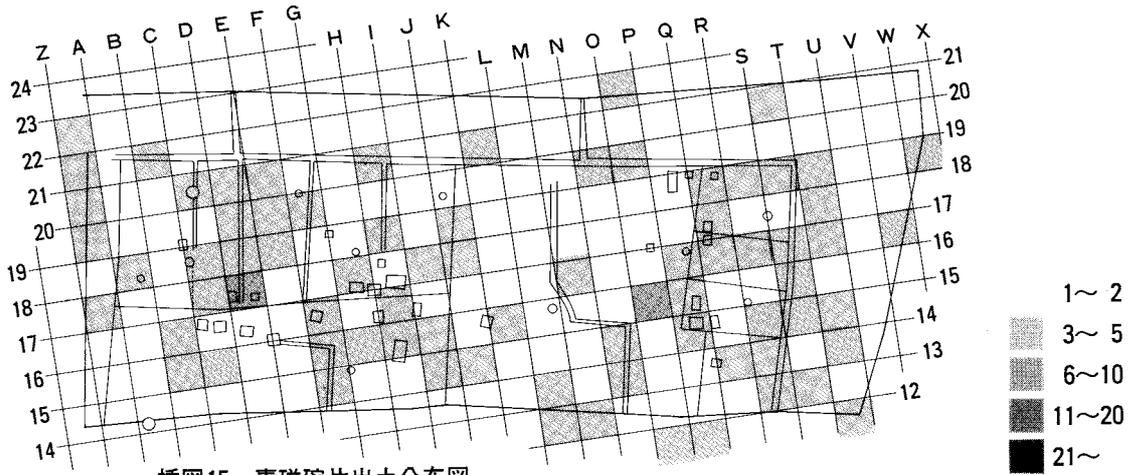


插图15 青磁碗片出土分布图

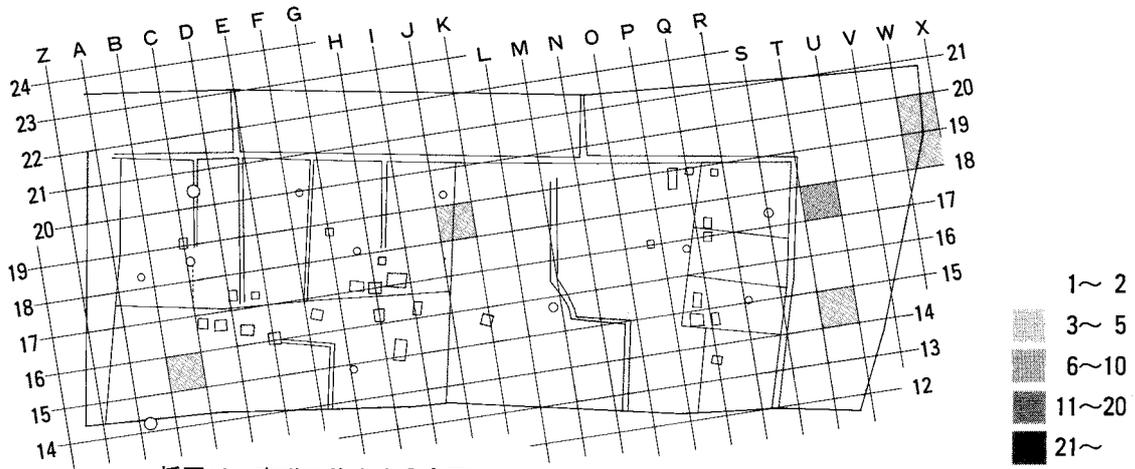


插图16 青磁皿片出土分布图

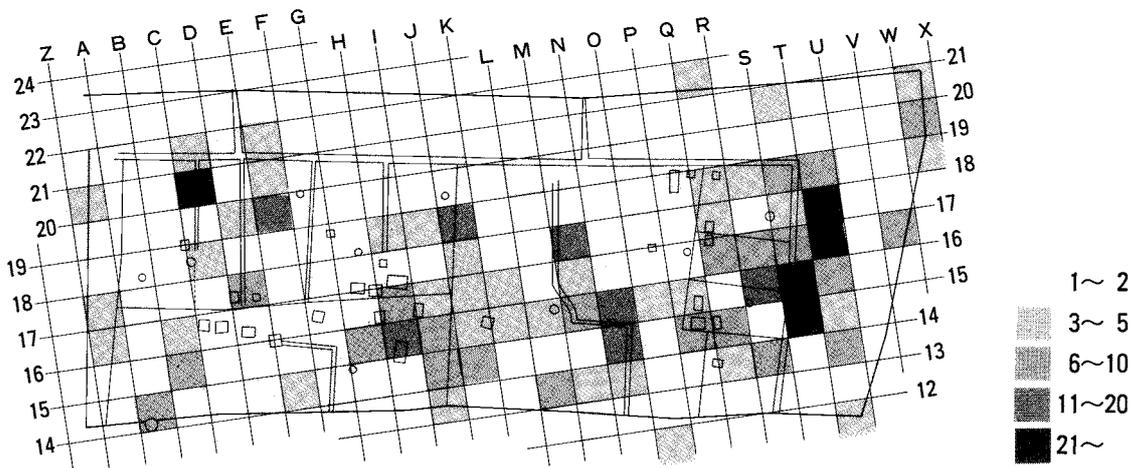


插图17 白磁皿片出土分布图

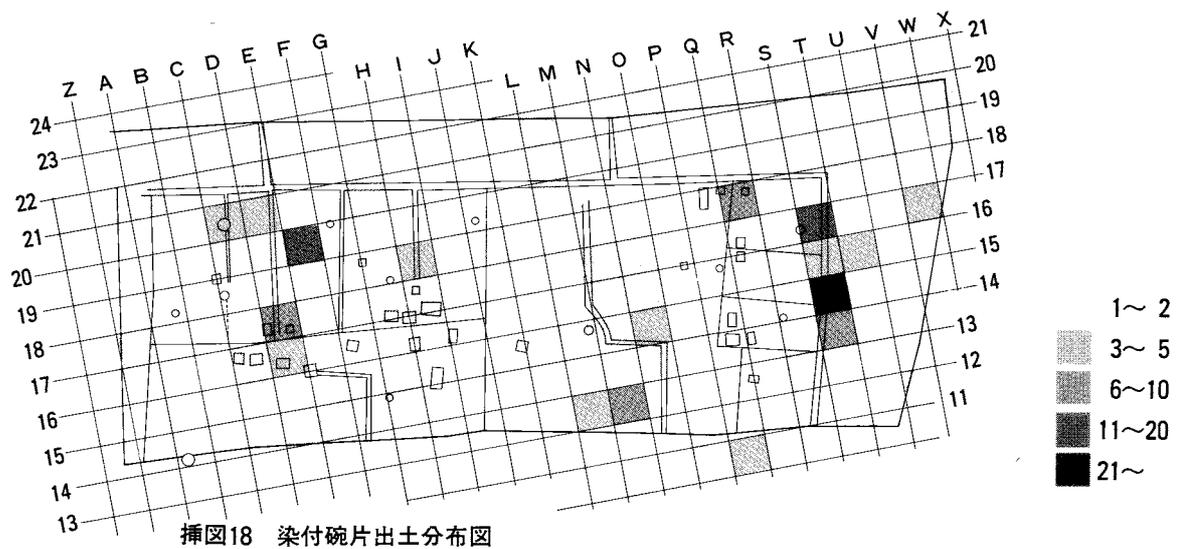


插图18 染付碗片出土分布图

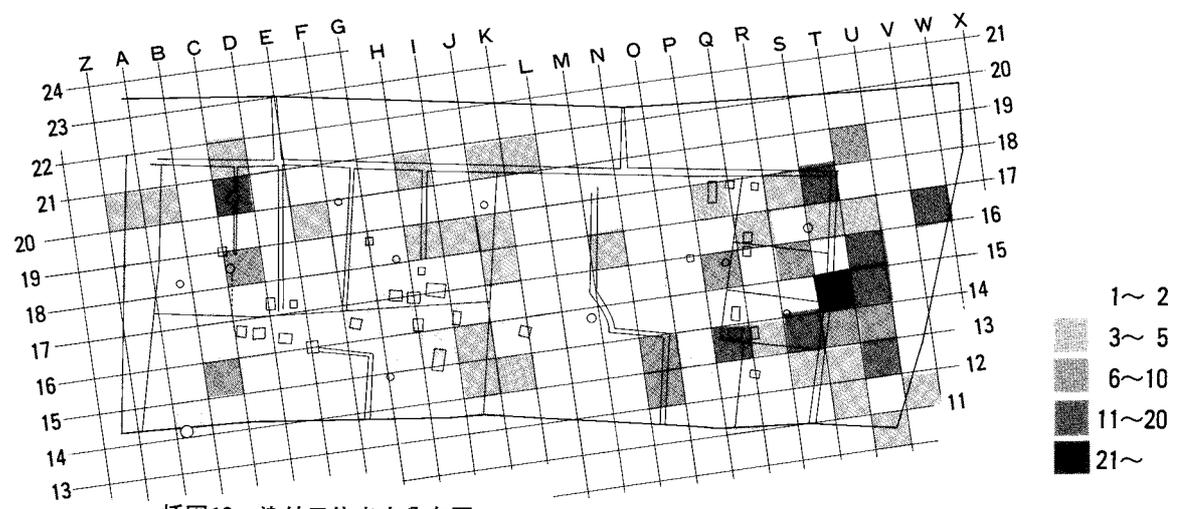
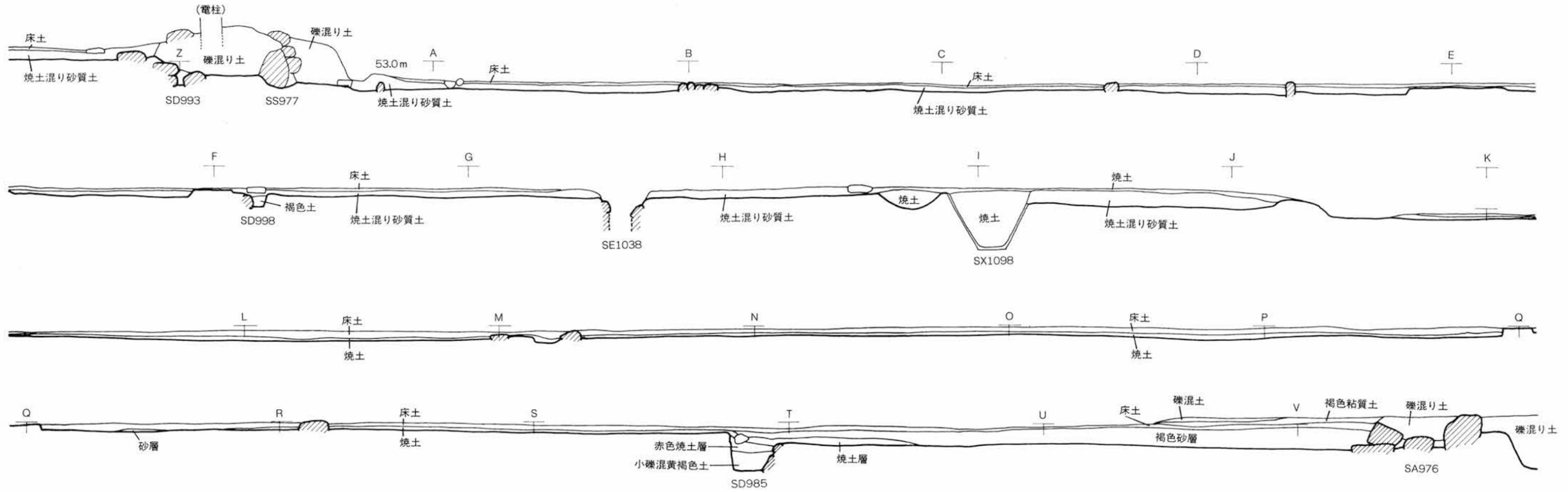
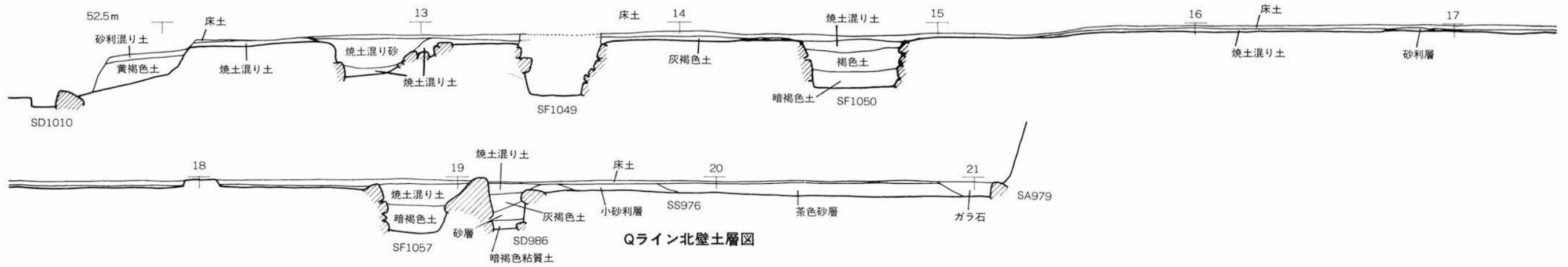


插图19 染付皿片出土分布图

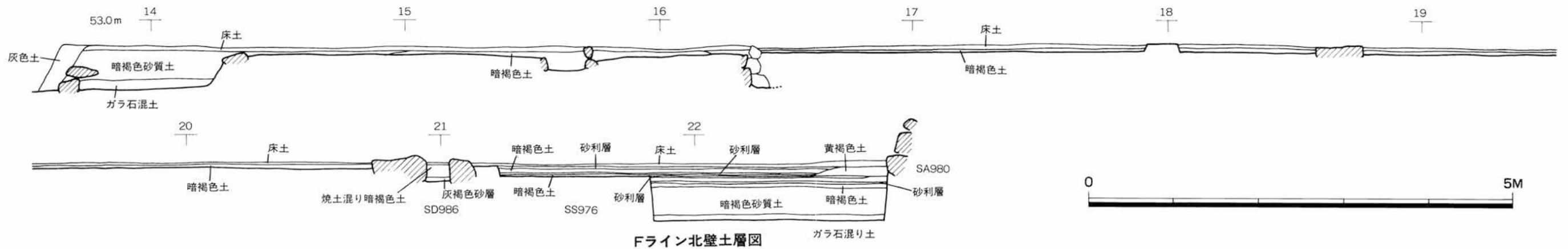
第1図 第29次調査土層図



18ライン東壁土層図

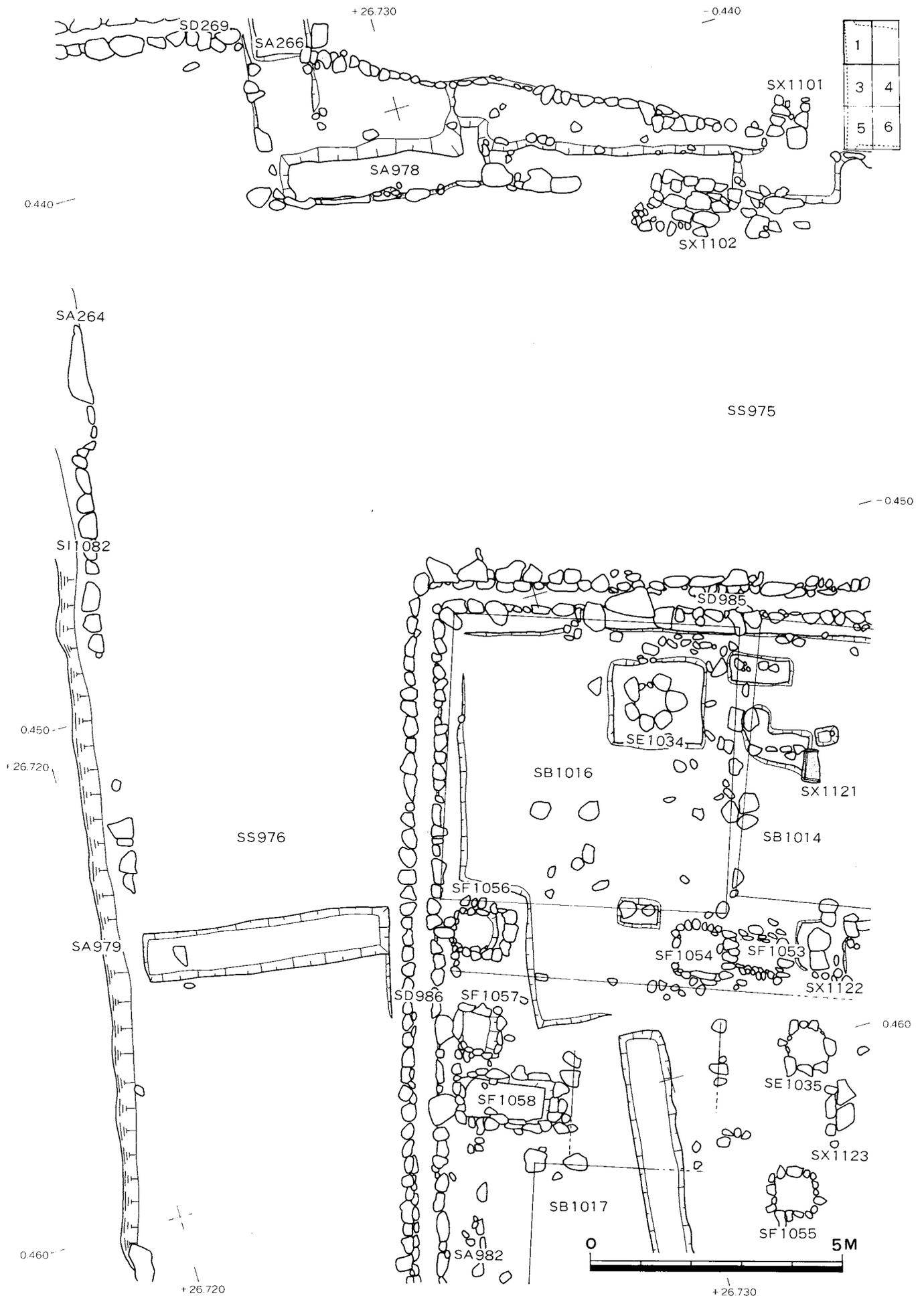


Qライン北壁土層図

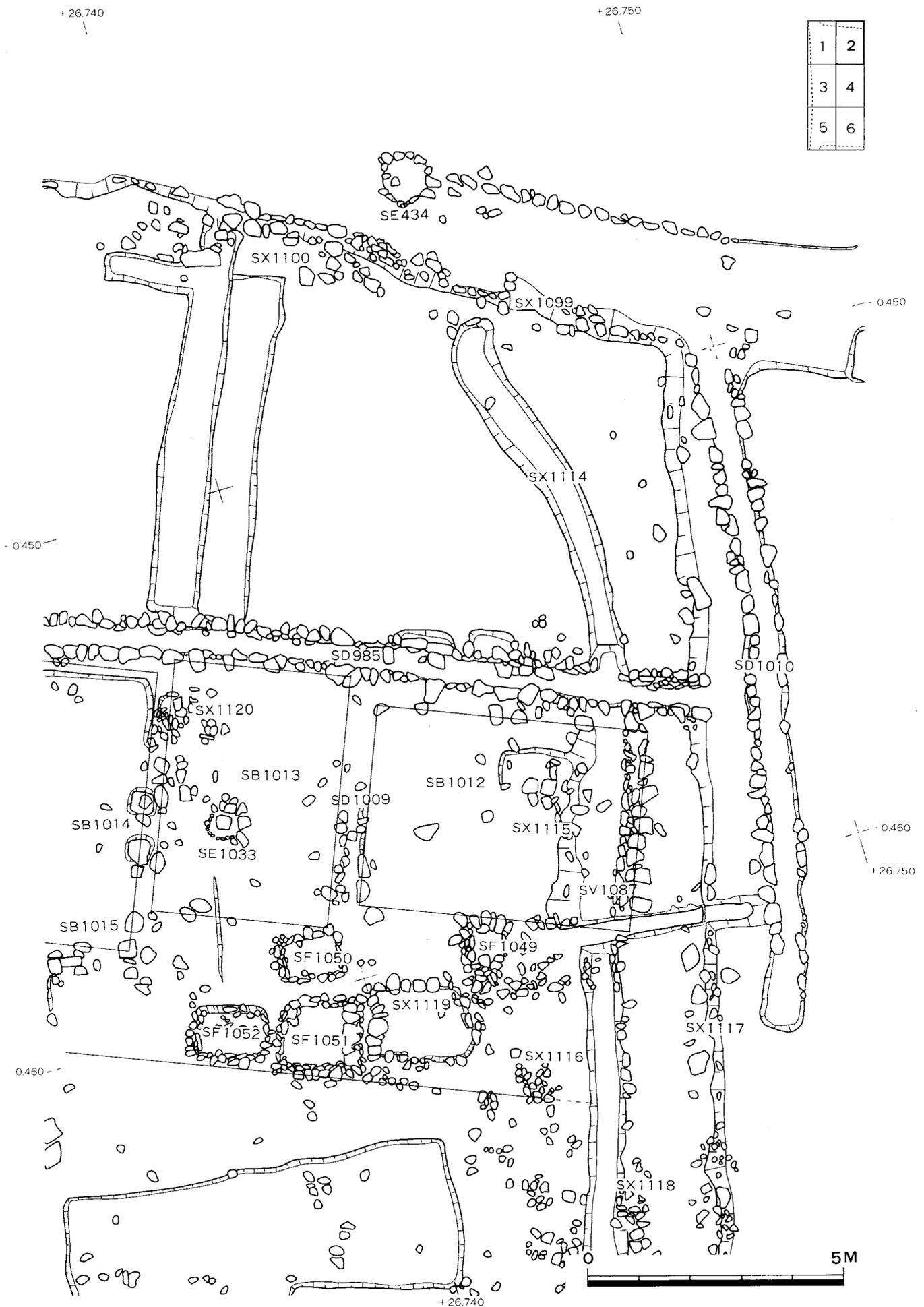


Fライン北壁土層図

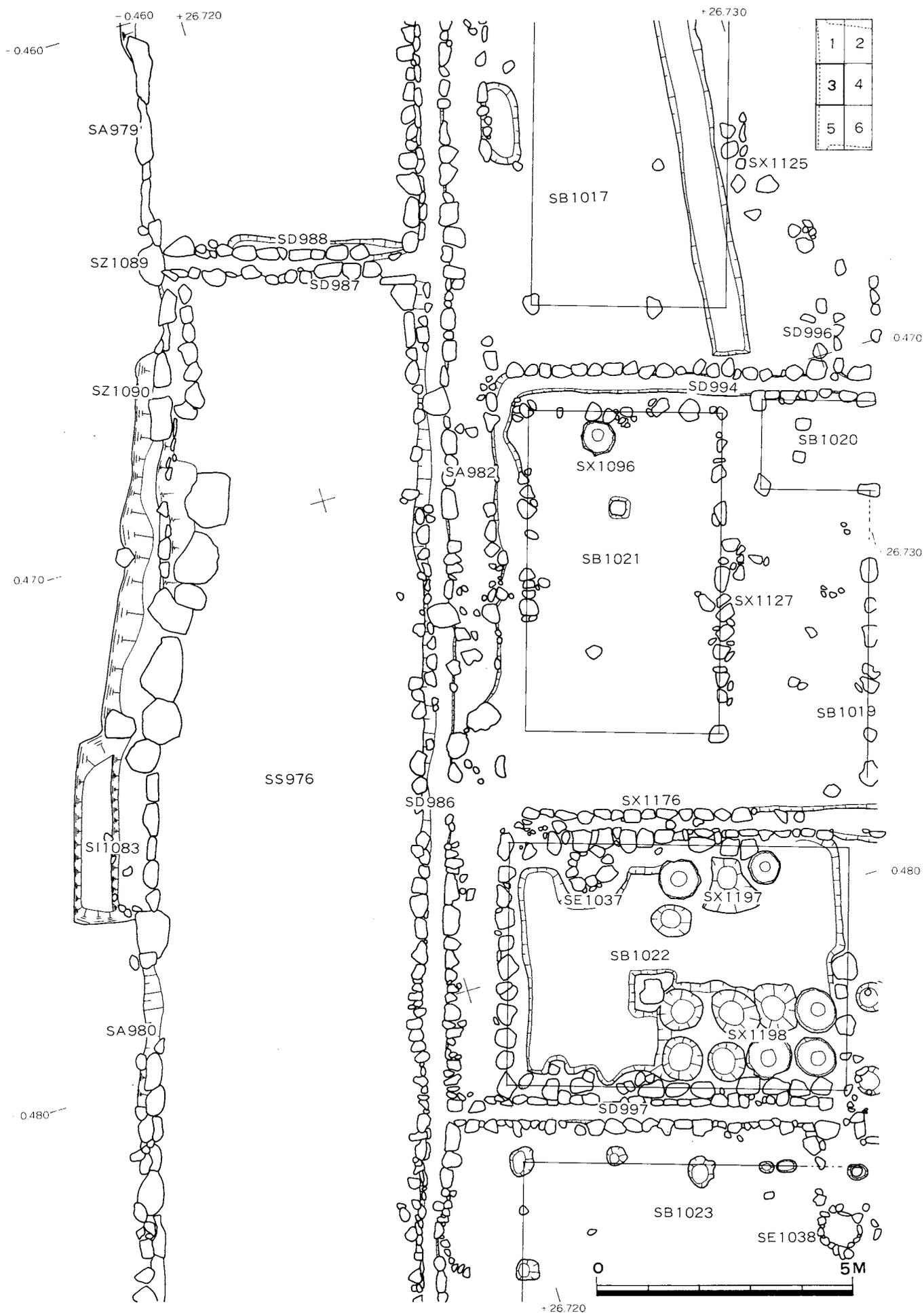
第2図 第29次調査遺構詳細図(1)



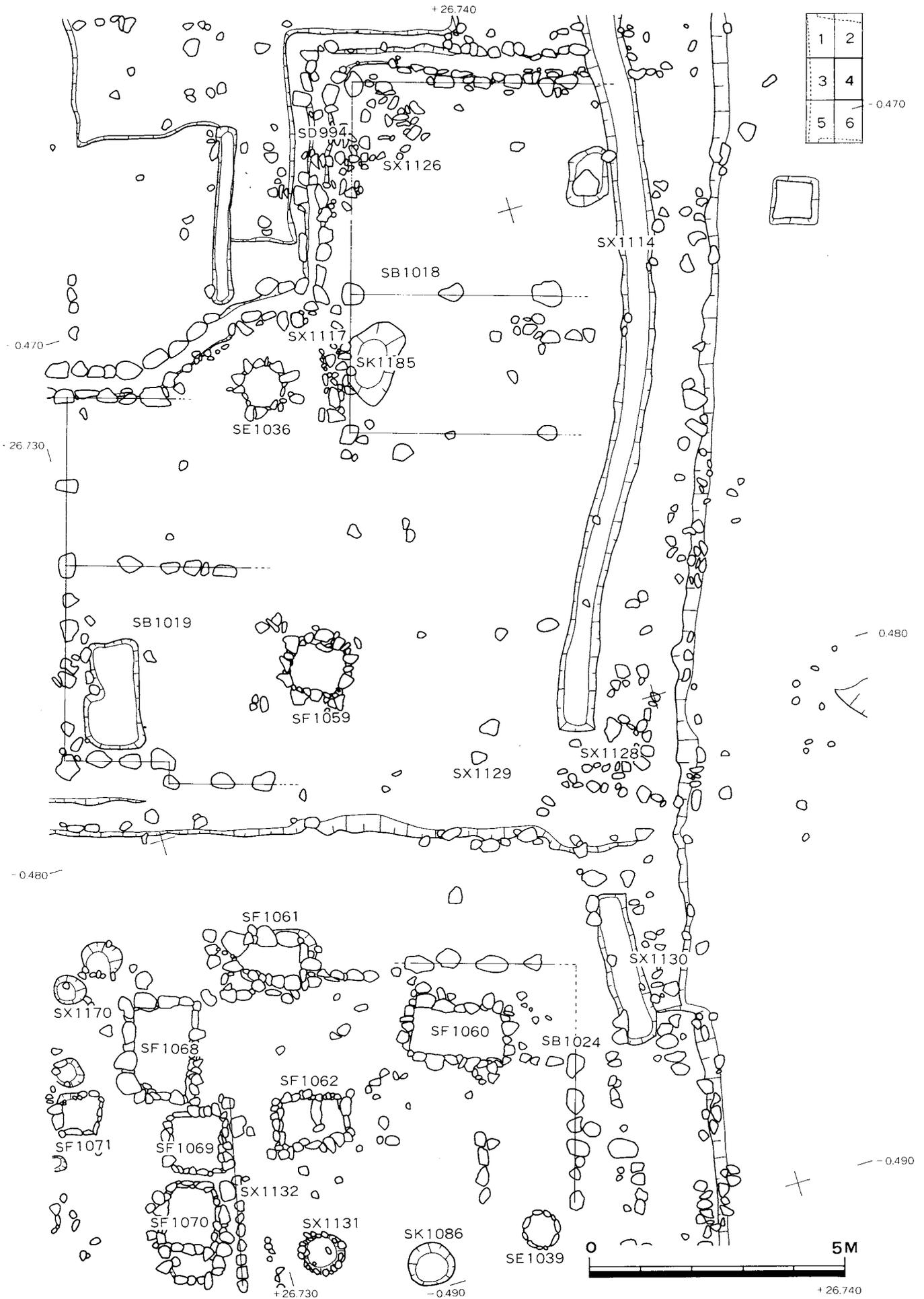
第3図 第29次調査遺構詳細図(2)



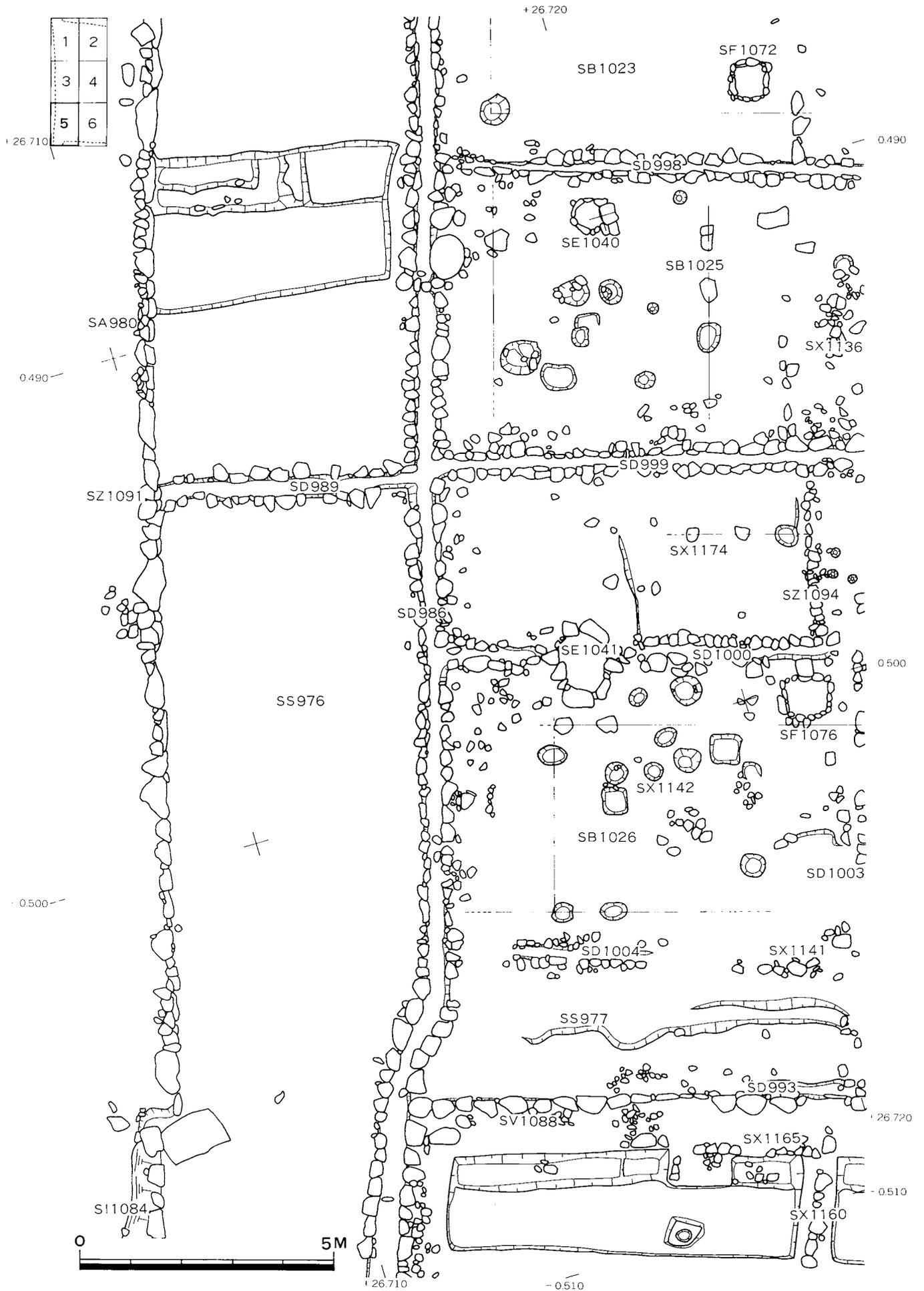
第4図 第29次調査遺構詳細図(3)



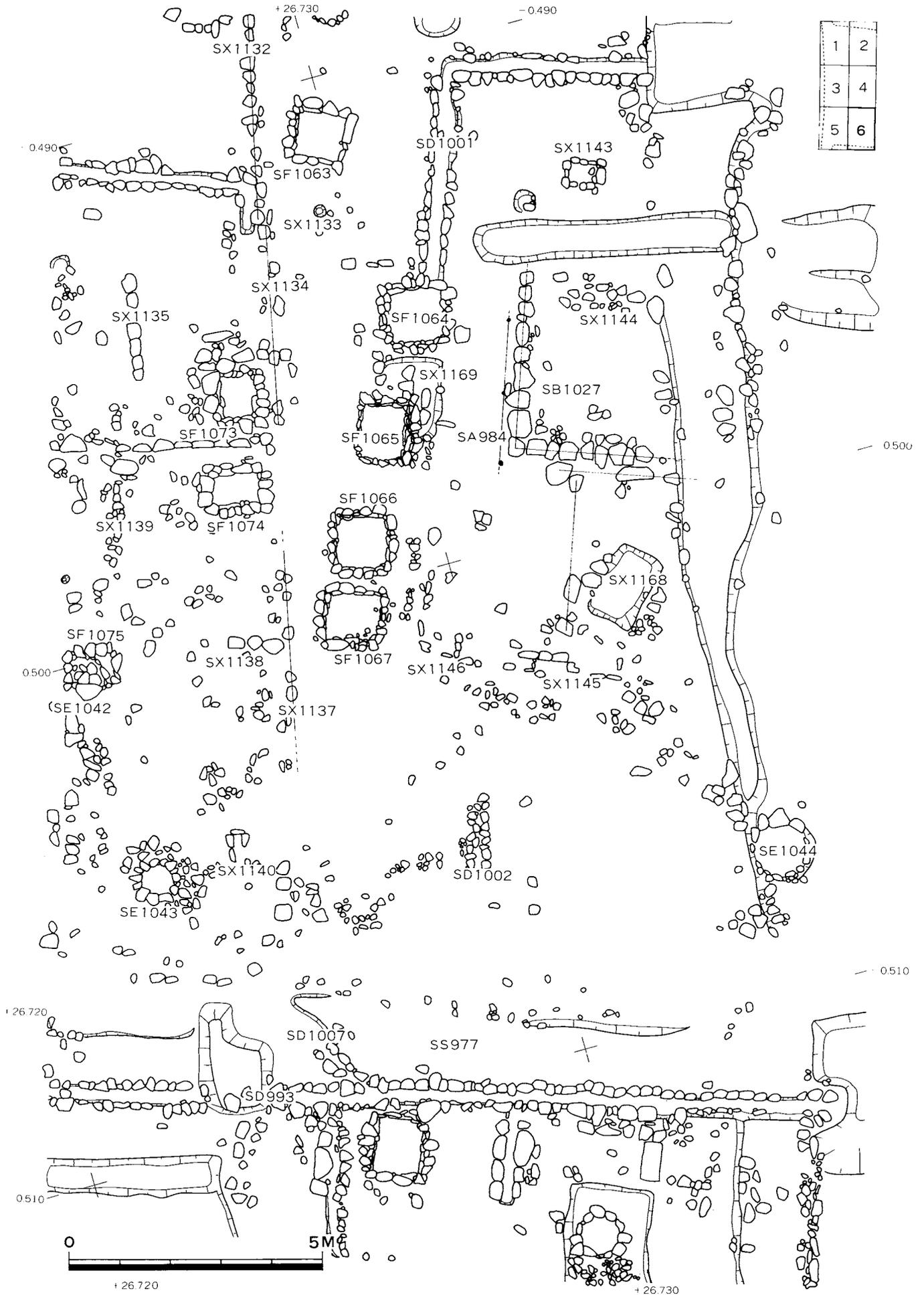
第5図 第29次調査遺構詳細図(4)



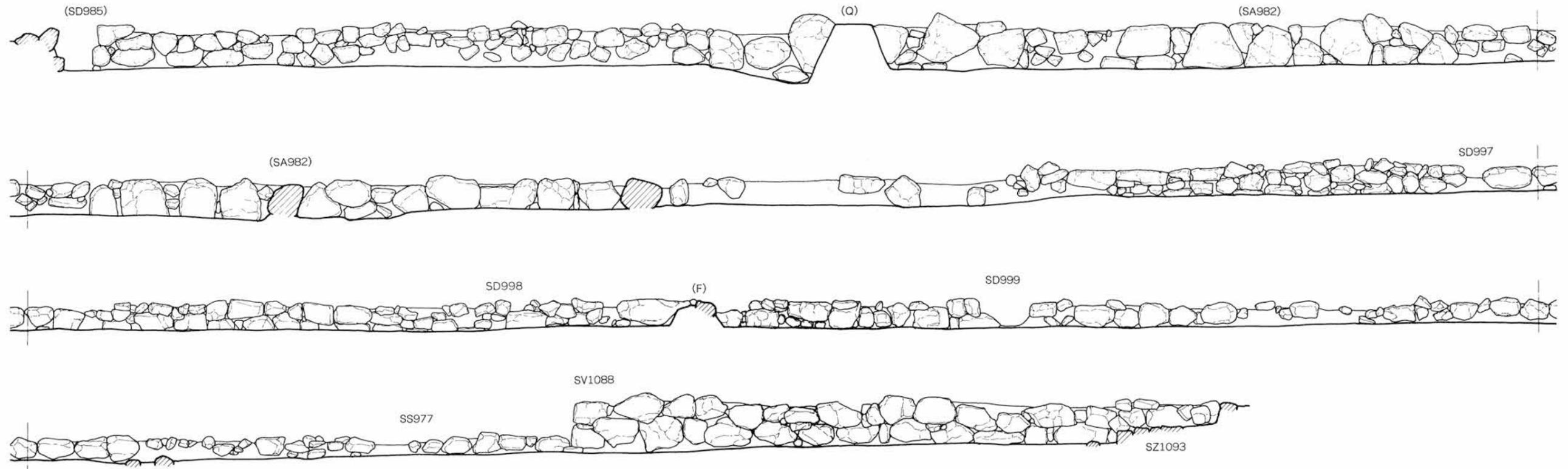
第6図 第29次調査遺構詳細図(5)



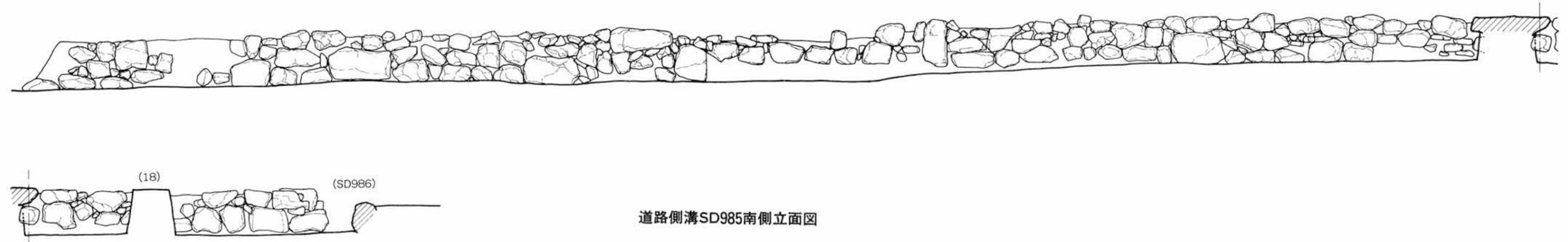
第7図 第29次調査遺構詳細図(6)



第8図 第29次調査道路側溝SD985・986 側壁立面図



道路側溝SD986東側立面図



道路側溝SD985南側立面図



道路側溝SD986西側立面図(SD987・988付近)



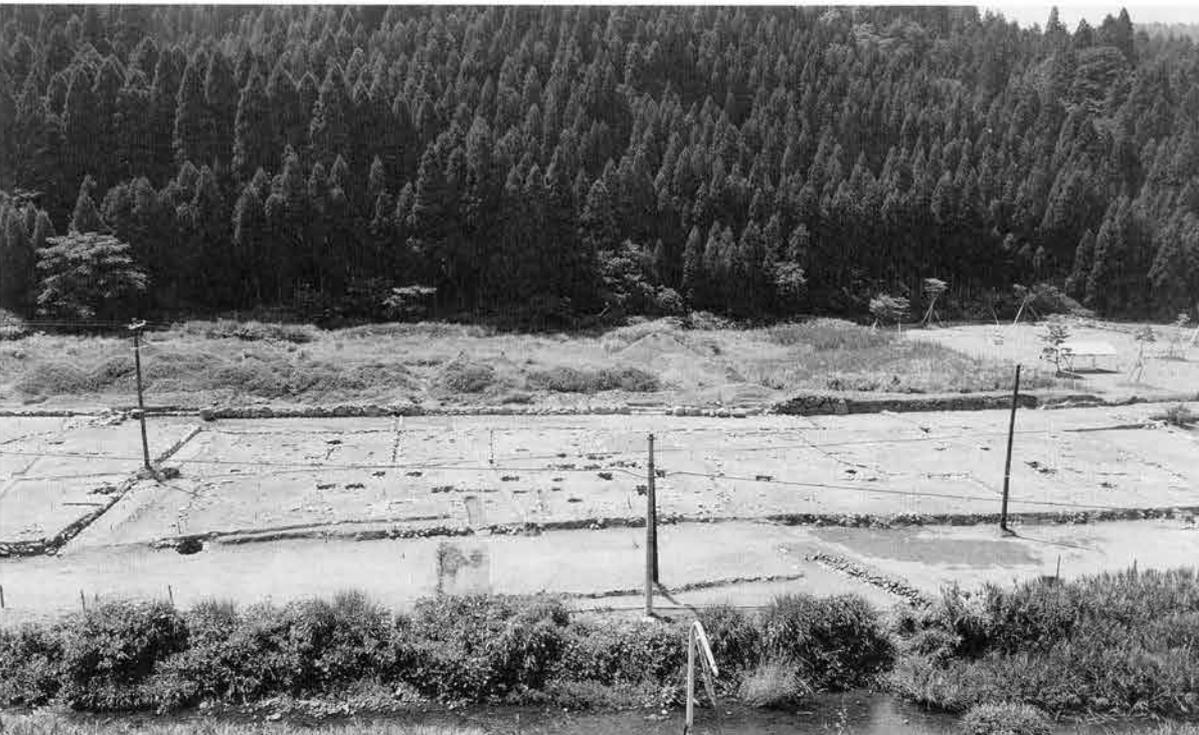
第29次調査・  
調査区全景



(北から)



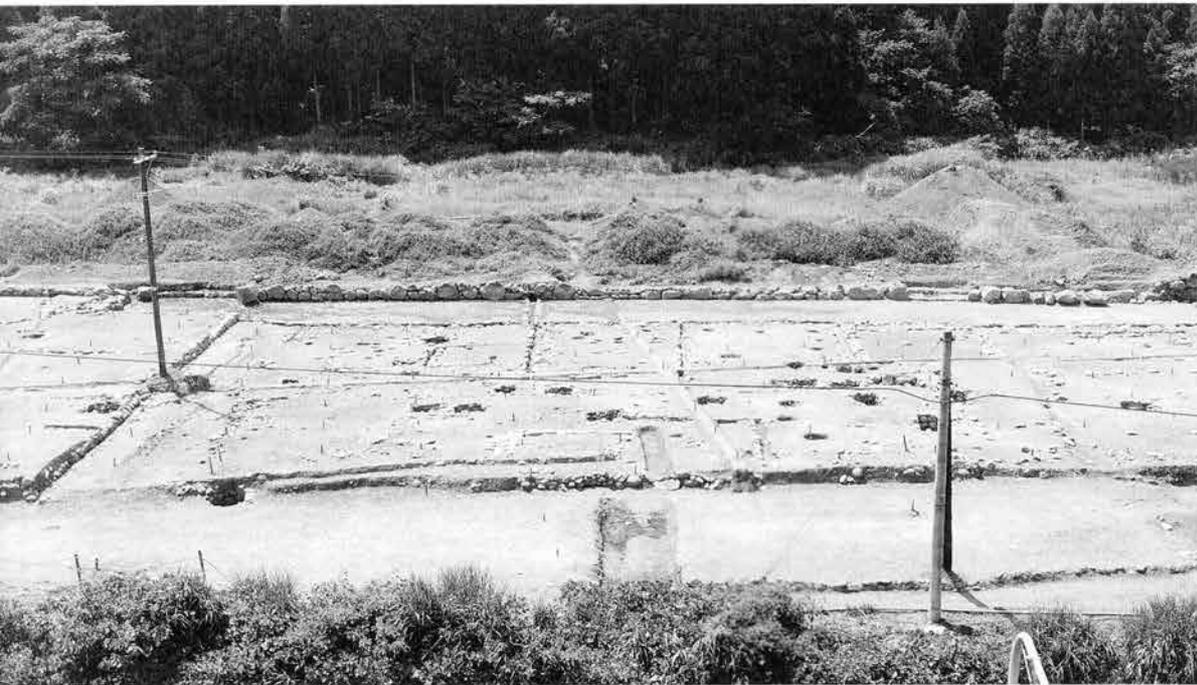
(南から)



(東から)



調査区北半  
(東から)



調査区南半  
(東から)



道路SS976  
◀ (北から)  
▶ (南から)

第29次調査・  
主要遺構



道路SS977  
及び溝SD993  
(東から)



溝SD987・988  
(東から)



道路側溝SD986  
(南から)

第29次調査・  
東西方向道路  
SS975に面する  
建物群



(西から)



(東から)



(北から)

第29次調査・  
北半部中規模  
屋敷



北半  
(西から)



南半  
(西から)



溝SD994と  
井戸SE 1036  
(東から)



第29次調査・  
南北方向道路  
SS976に面する  
小規模区画 (1)

SB 1022  
(西から)



同上  
(北から)



SB 1023  
(西から)

第29次調査・  
南北方向道路  
SS976に面する  
小規模区画 (2)

SB1023  
SB1025  
(西から)



SB1025  
(西から)



SB1026  
(西から)





第29次調査・  
南半東部遺構群

SB 1027等  
(東から)



SD 1001・  
SB 1024等  
(東から)



屋敷境界石積施設群  
SF 1070他  
(南から)

第29次調査・  
井戸

◀ SE 1033  
▶ SE 1034



◀ SE 1035  
▶ SE 1038



◀ SE 1040  
▶ SE 1041



◀ SE 1043  
▶ SE 1044





第29次調査・  
石積施設 (1)

◀ SF 1050  
▶ SF 1051



◀ SF 1052  
▶ SF 1055



◀ SF 1056  
▶ SF 1057



◀ SF 1058  
▶ SF 1059



◀ SF 1060  
▶ SF 1061

第29次調査・  
石積施設 (2)

◀ SF 1062  
▶ SF 1063



◀ SF 1064  
▶ SF 1068



◀ SF 1069  
▶ SF 1071



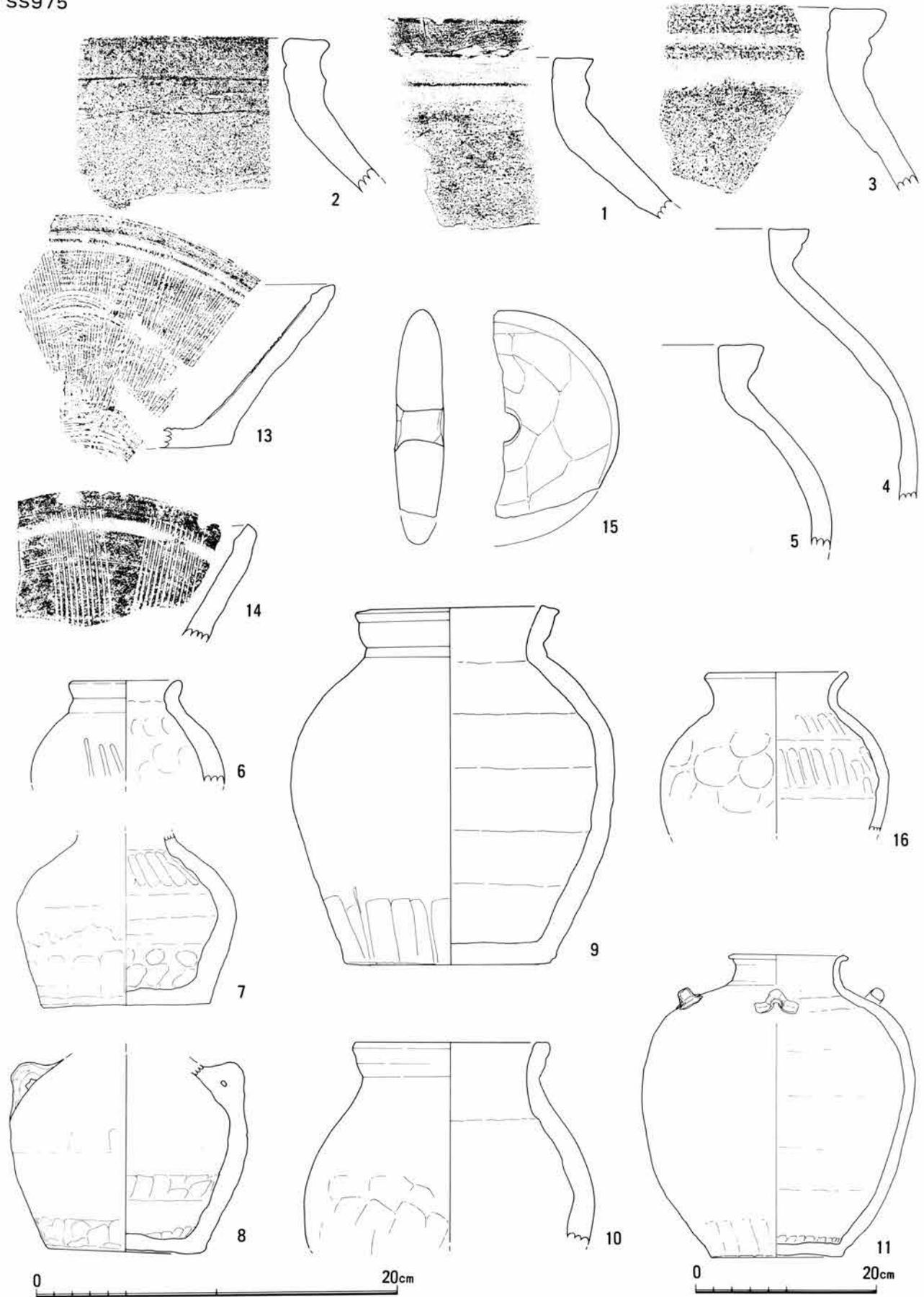
◀ SF 1072  
▶ SF 1073



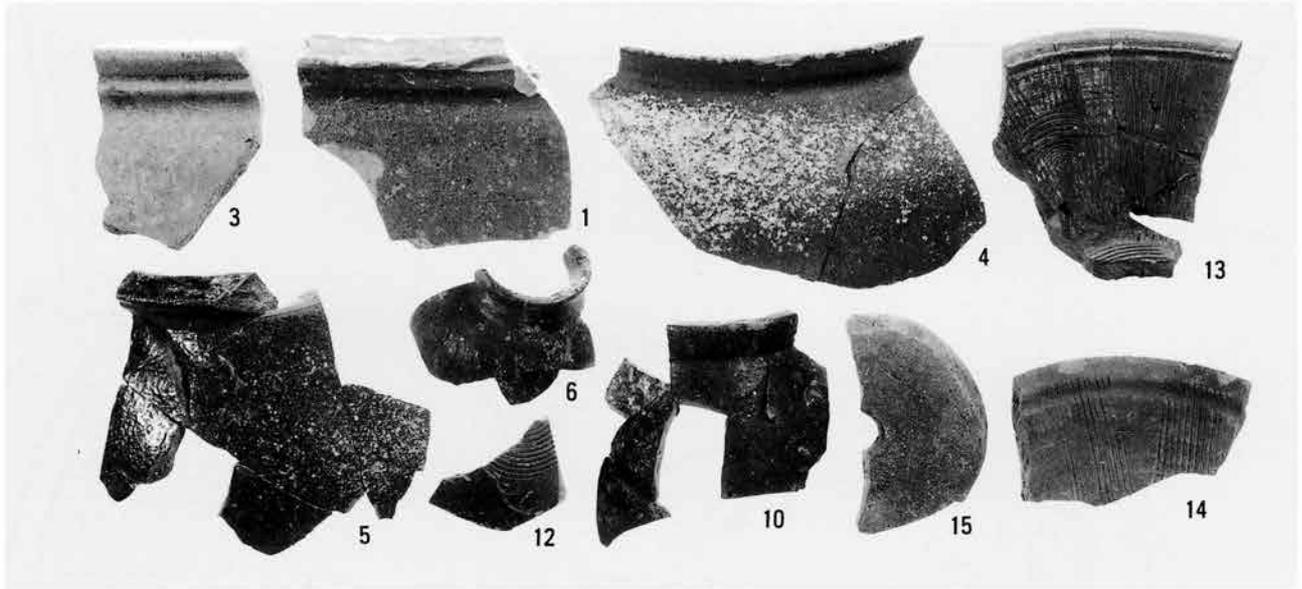
◀ SF 1074  
▶ SF 1075  
(SE 1042)



第9図 第29次調査遺物(1)  
SS975

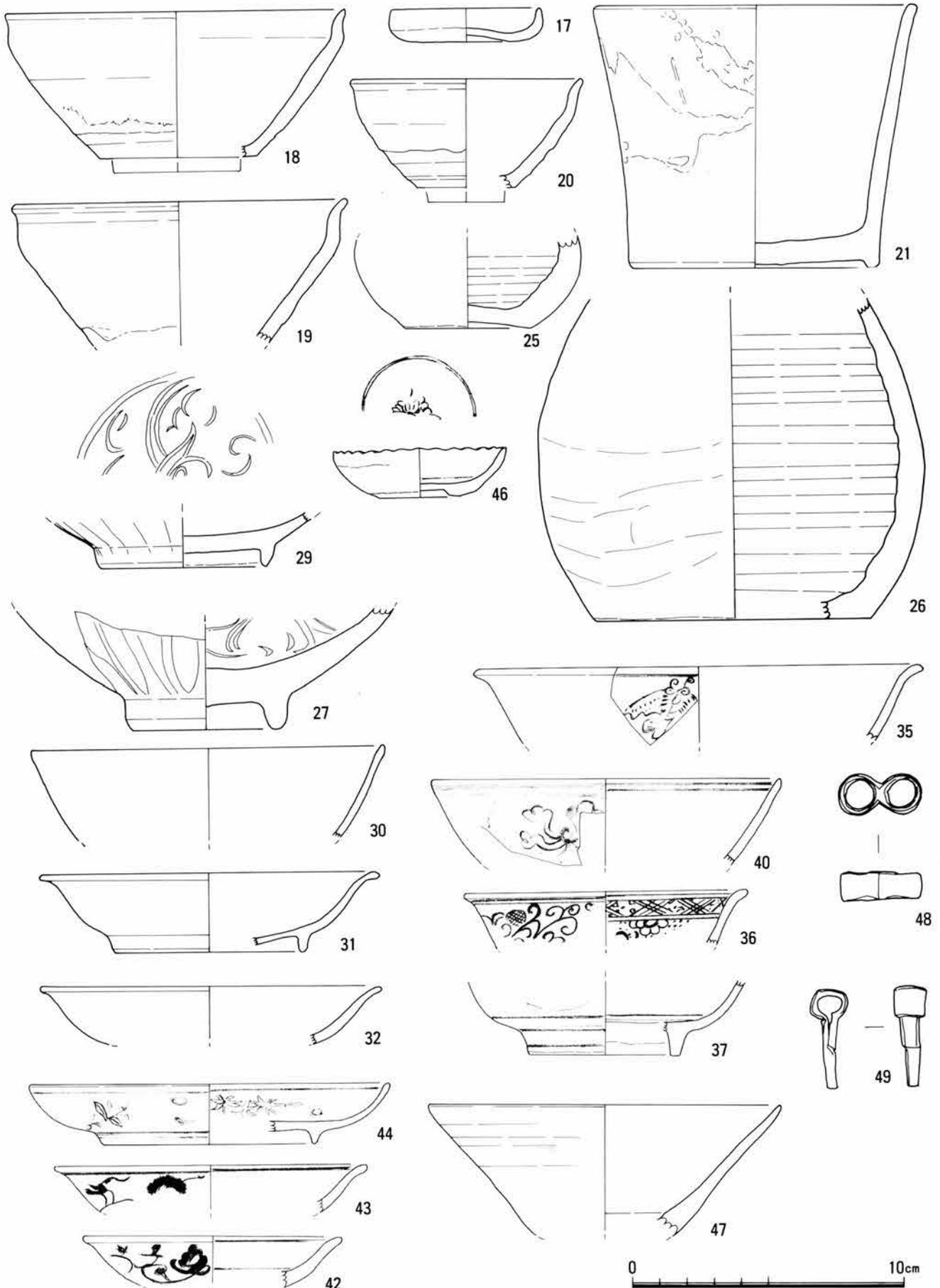


越前焼甕 1～5 壺 6～11 播鉢 13・14 菜研 15 信楽焼壺 16

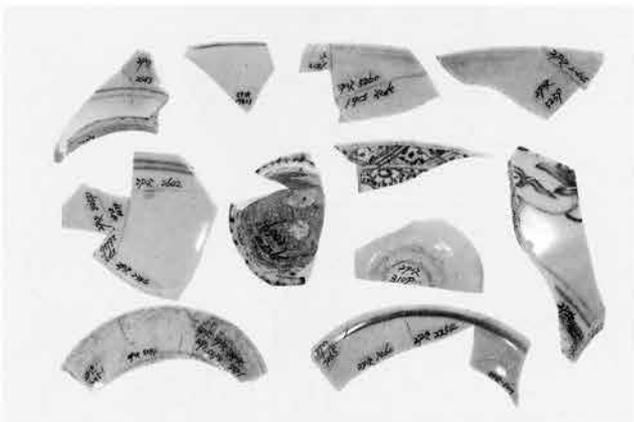
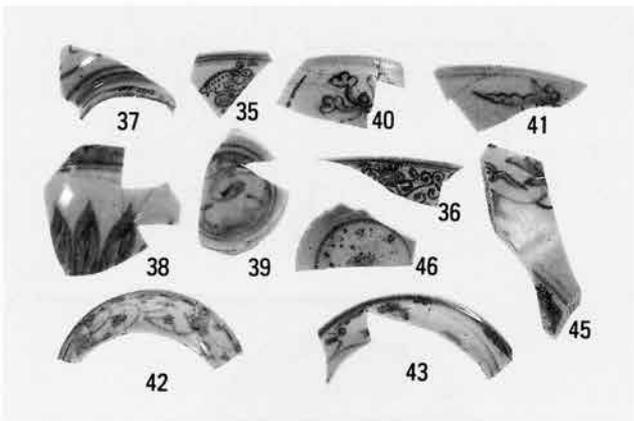
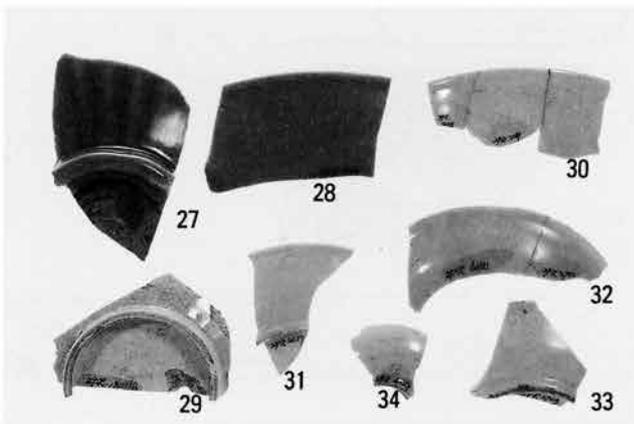
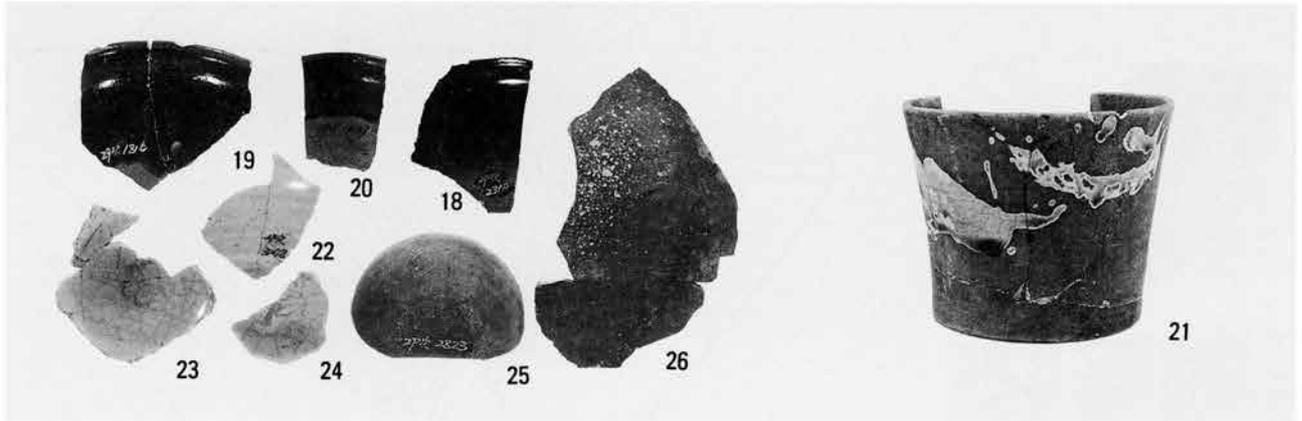


SS975 越前焼甕1・3・4・5 壺6・8~11 搦鉢13・14 薬研15 信楽焼壺16

第10図 第29次調査遺物(2)

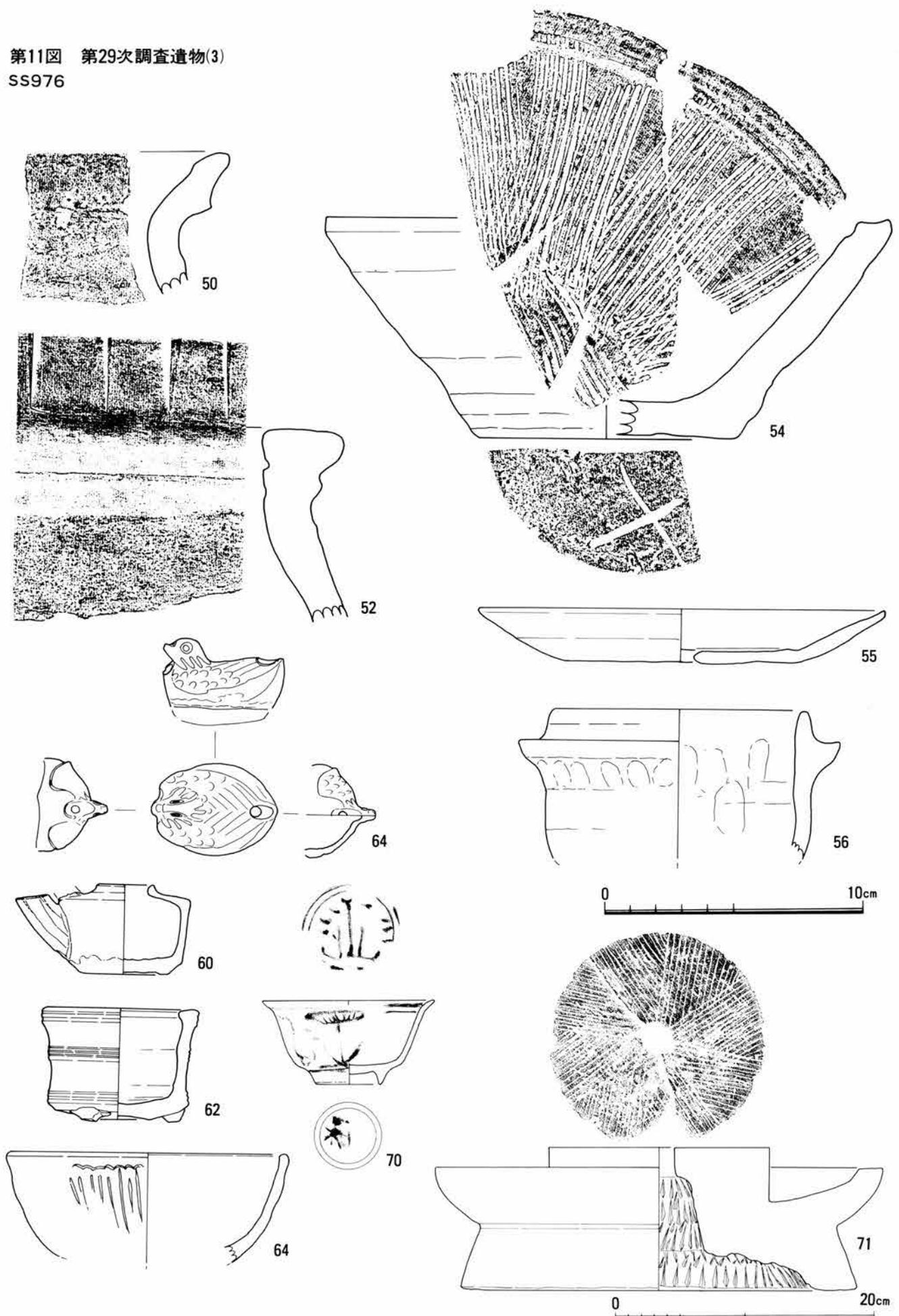


土師質皿18 瀬戸・美濃焼天目茶碗19~21 鉄釉筒物22 備前焼瓶26・27 青磁鉢28 白磁鉢30 碗31 皿32・33  
 染付碗36~38・41 皿43~45 朝鮮製陶磁器碗48 金属製品輪49 扇止50

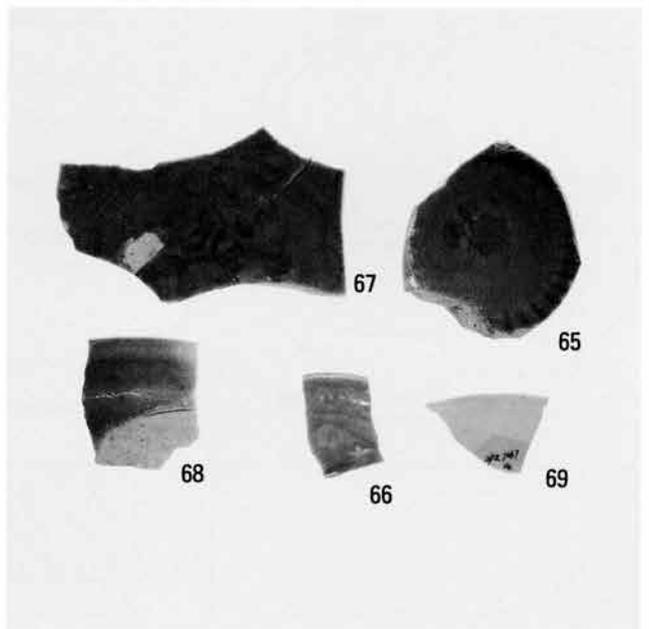
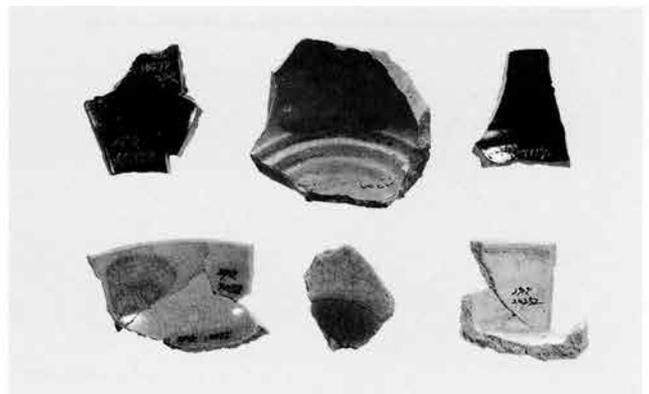
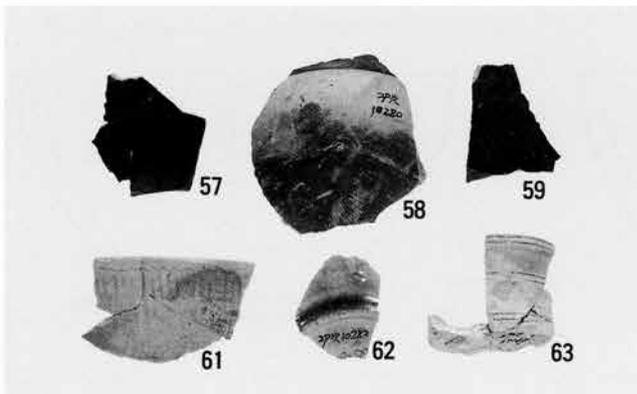
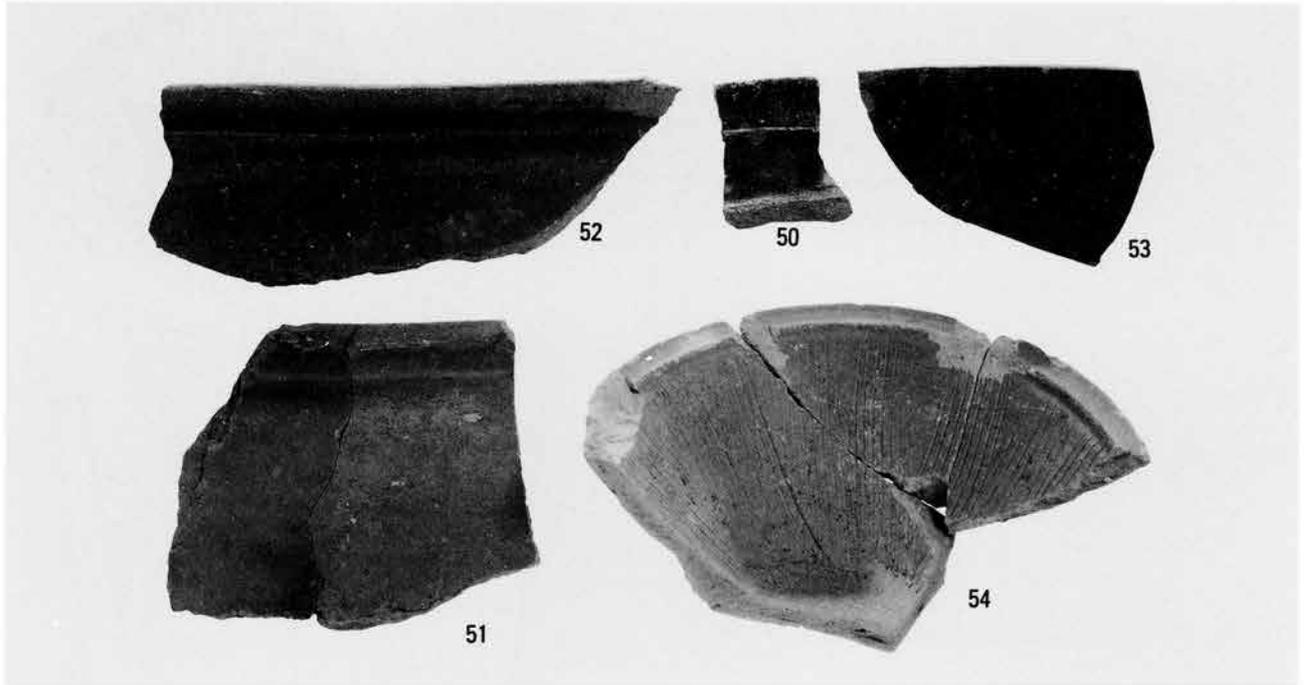


SS975 瀬戸・美濃焼天目茶碗18~20 鉄釉筒物21 灰釉碗22 皿23・24 備前焼花瓶25・26 白磁鉢29 碗30 皿31~33 杯34 染付碗35~41 皿42~44 鉢45 朝鮮製陶磁器47

第11図 第29次調査遺物(3)  
SS976



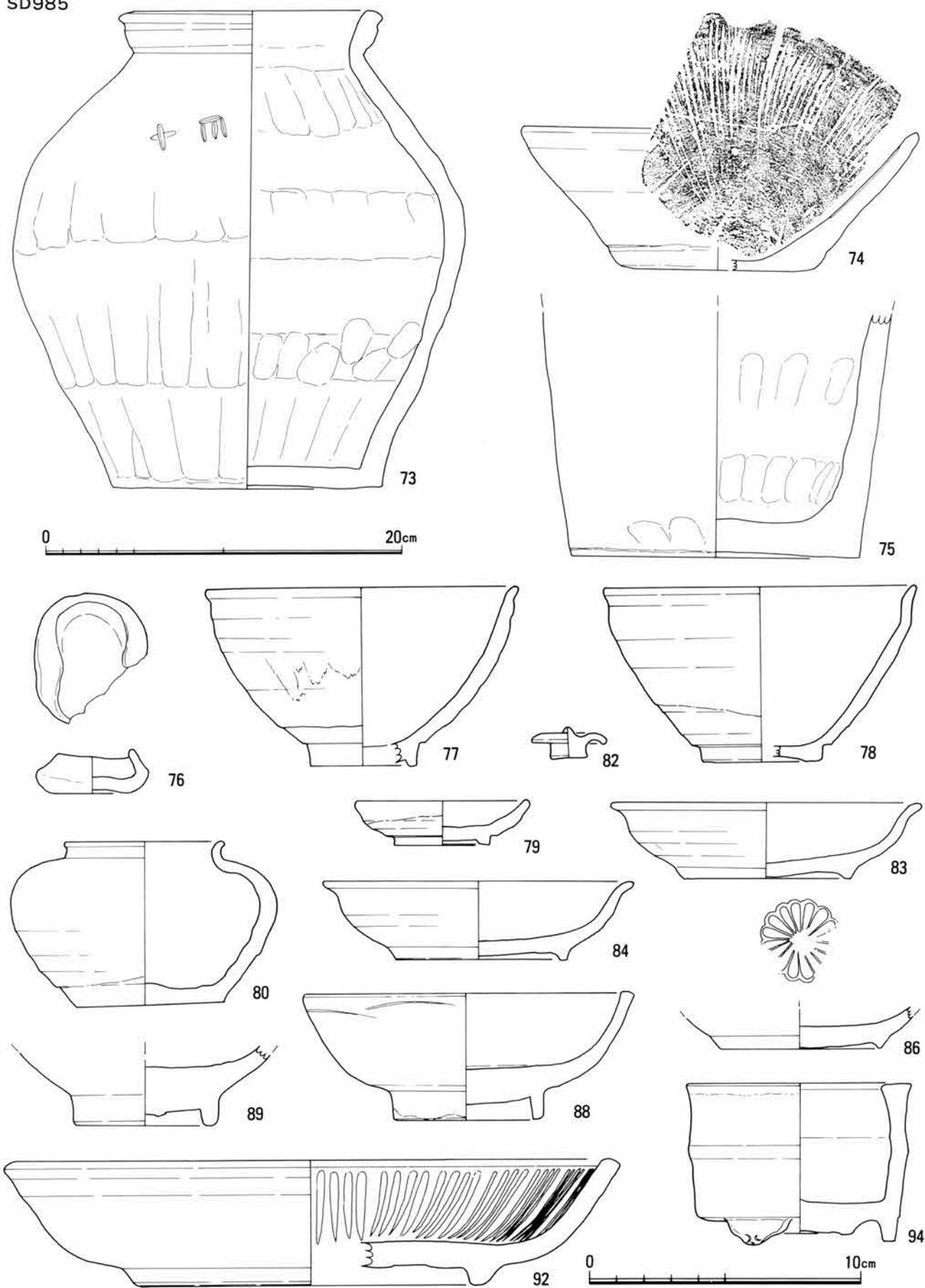
越前焼甕51・54 播鉢55 土師質皿56 羽釜57 鉄釉水滴60 灰釉香炉63 水滴64 青磁碗65 染付坏71 石製品茶臼67



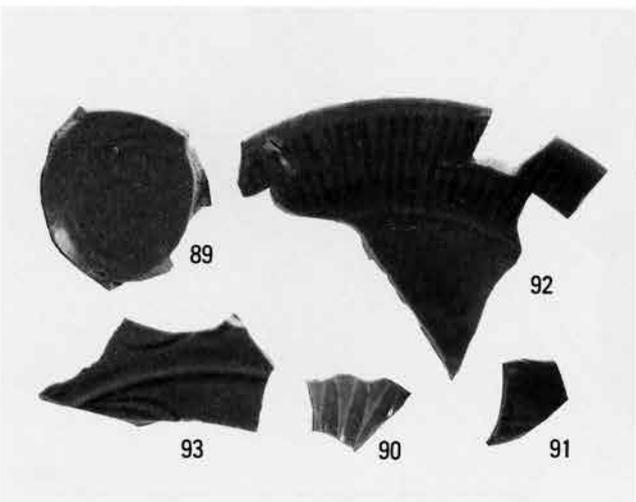
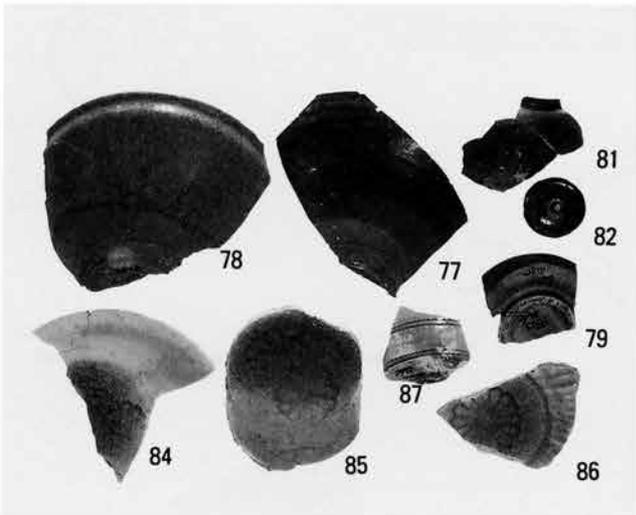
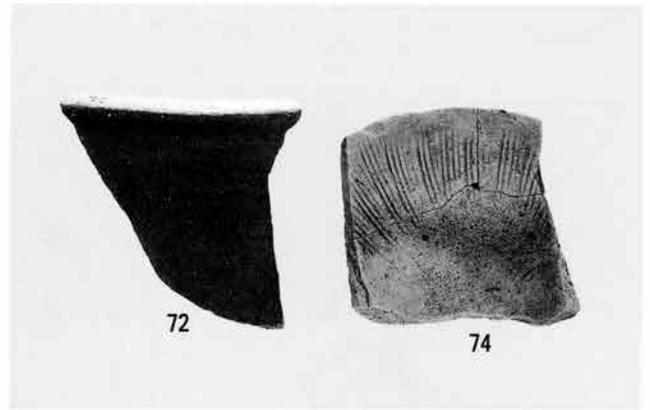
SS976 越前焼甕50~53 播鉢54 鉄釉壺57~59 灰釉皿61 香炉62 水滴63 青磁碗64・65 皿66 鉢67・68 染付杯70

第12図 第29次調査遺物(4)

SD985

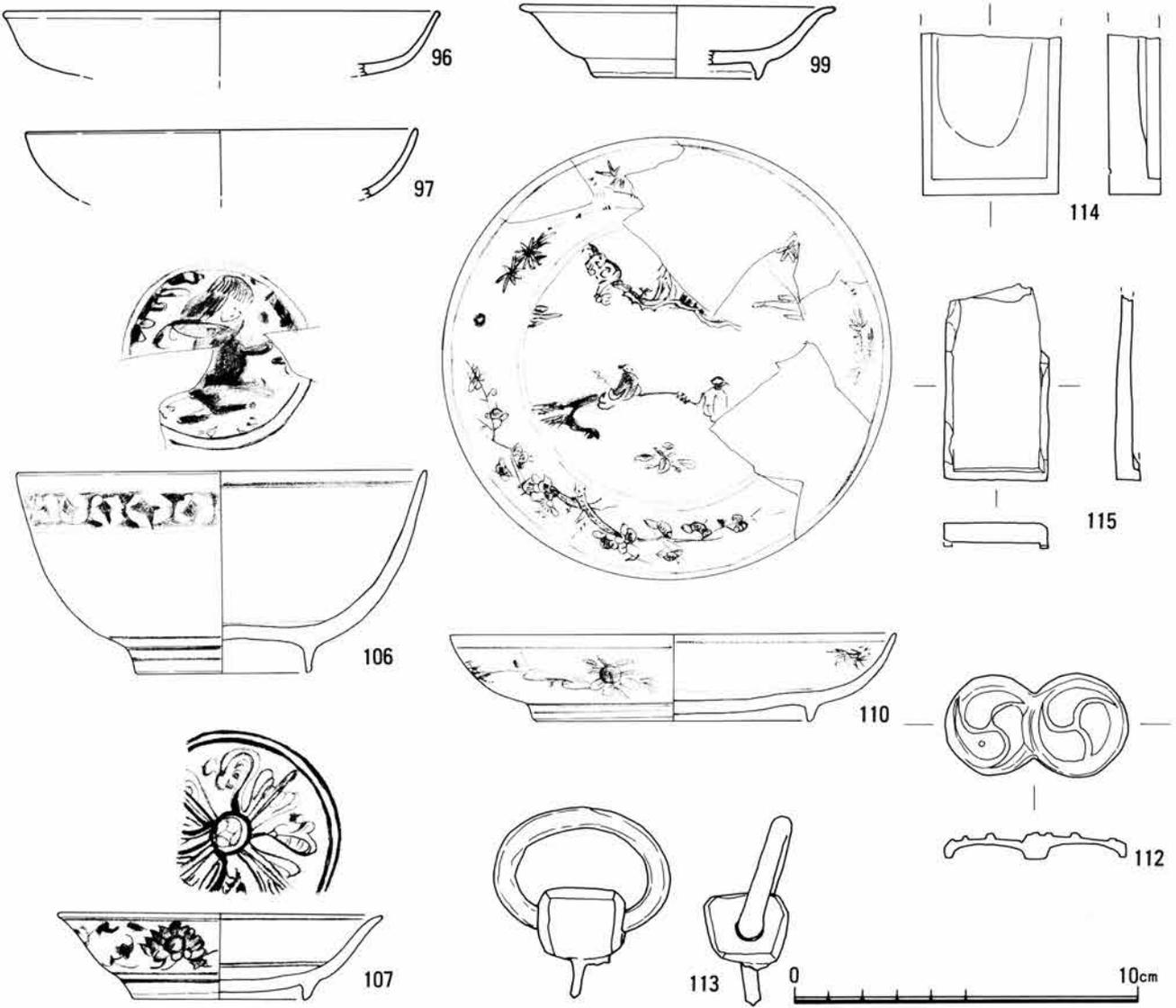


越前焼壺74 播鉢75 火桶76 土師質耳皿77 鉄釉天目茶碗78・79 小杯81 茶入80 蓋83 灰釉皿83~86 青磁碗88・89 盤92 香炉94

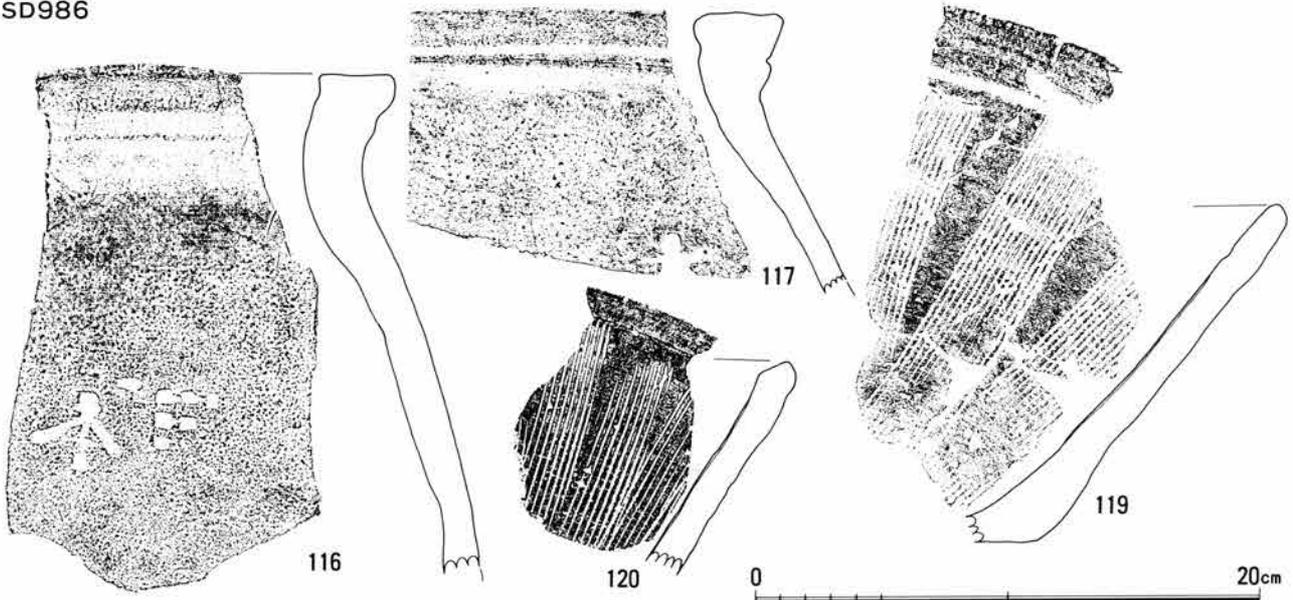


SS976 越前焼 甕72 壺73 播鉢74 鉄釉天目茶碗77・78 小杯79 茶入80・81 蓋82 灰釉皿84~86 香炉87  
 青磁碗88・89 皿90・91 盤92・93 香炉94

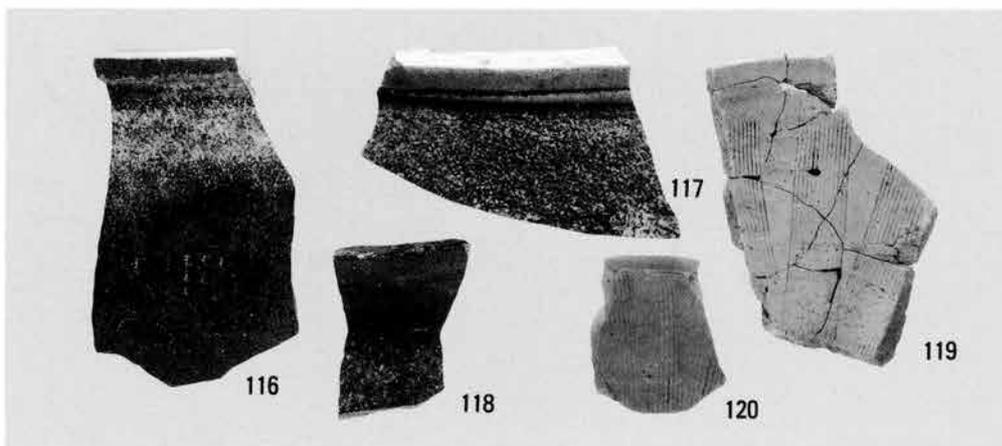
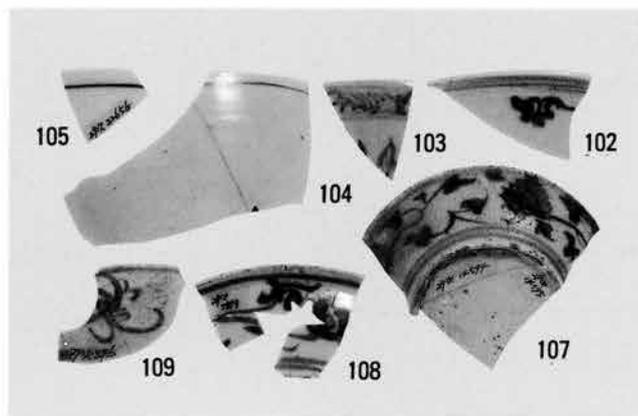
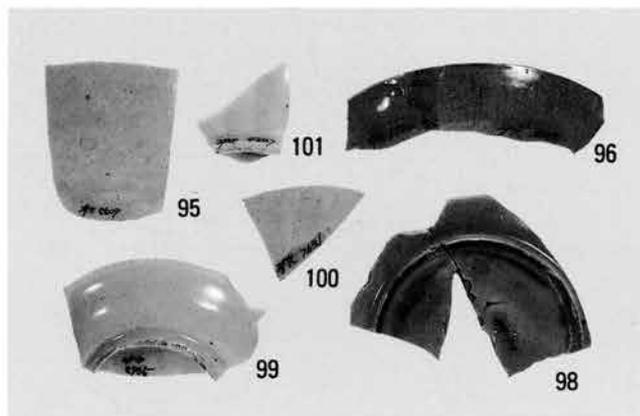
第13図 第29次調査遺物(5)



SD986

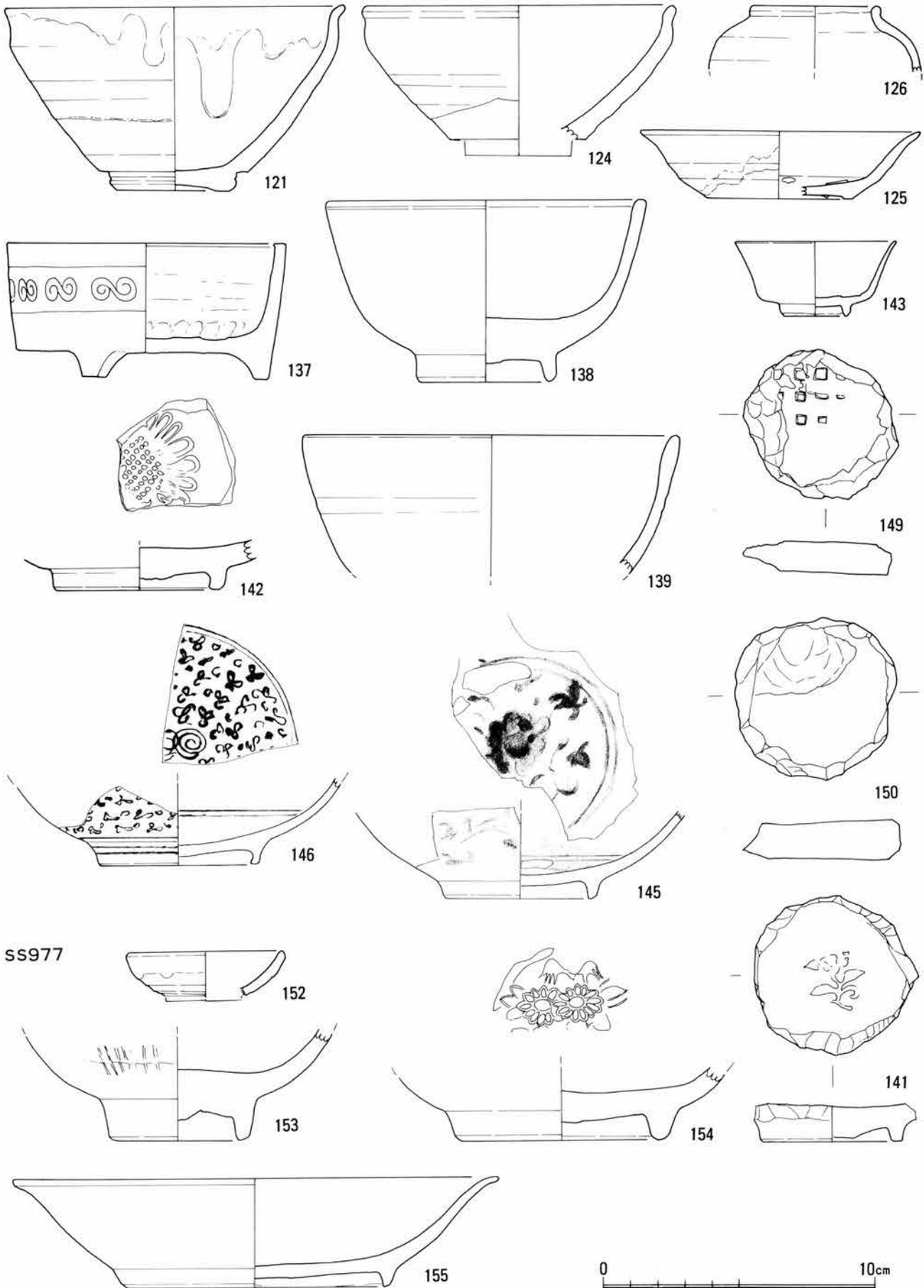


白磁皿97~99 染付碗107 皿108・111 金属製品飾金具112 環付金具113 石製品硯114・115 越前焼斐116・117 播鉢119・120

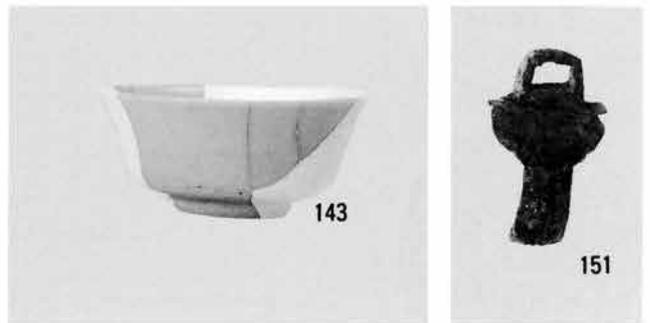
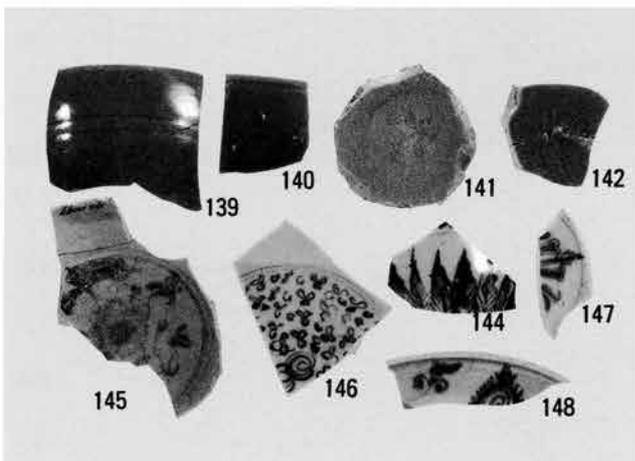
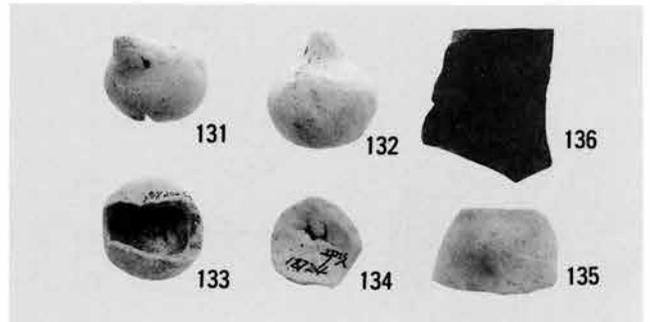
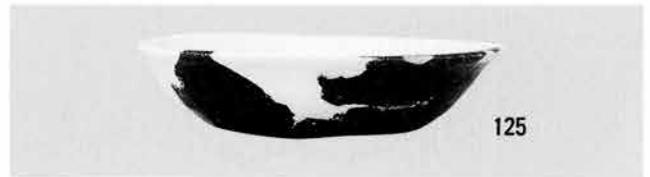
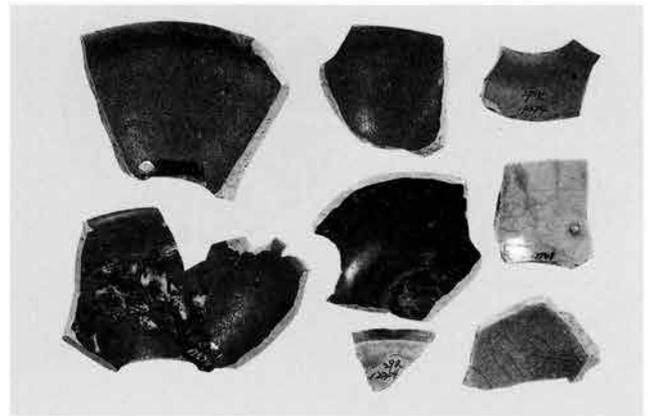
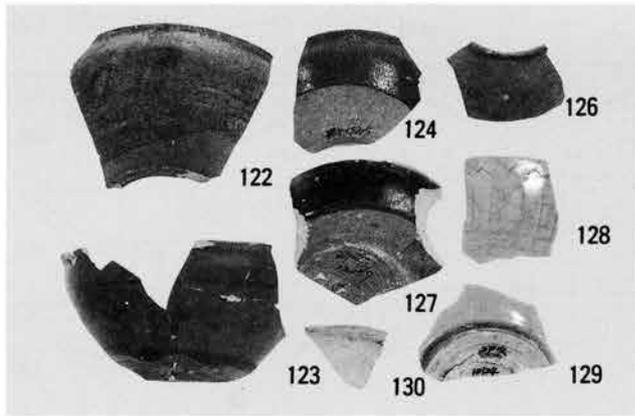


SD985 白磁碗95 皿96・98~101 染付碗102~105 皿107~110 SD986 越前焼甕116~118 播鉢119・120

第14図 第29次調査遺物(6)



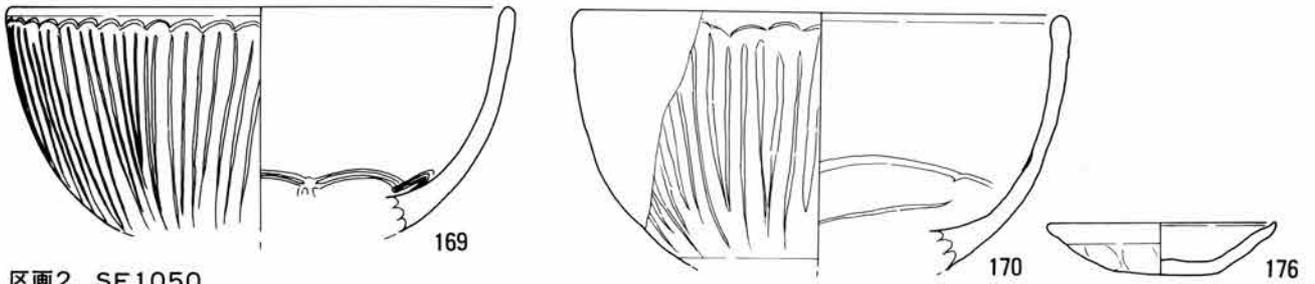
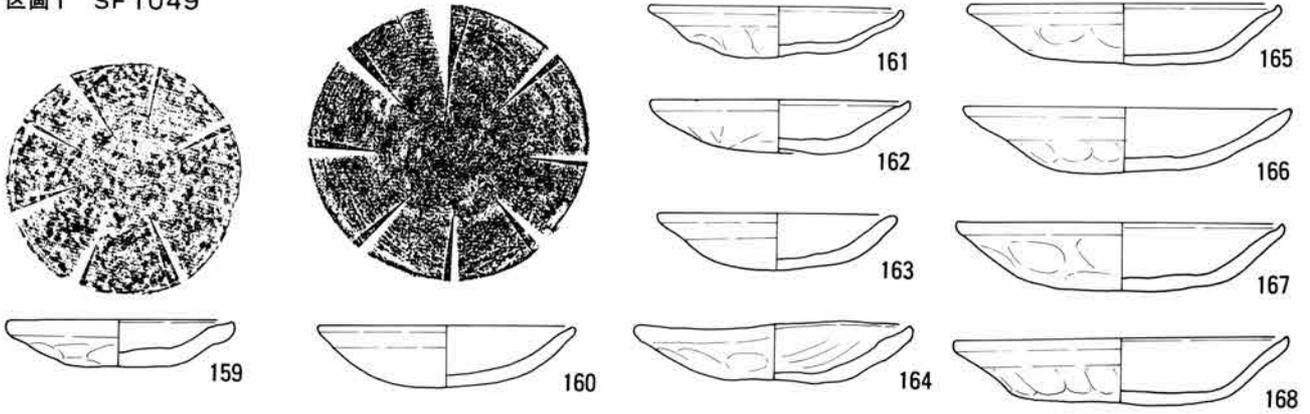
鉄釉天目茶碗121・124 皿125 茶入126 瓦質土器香炉137 青磁碗138・139・142 白磁杯143 染付碗145・146  
土製円板149・150 鉄釉小杯152 青磁碗153 鉢154 白磁皿155



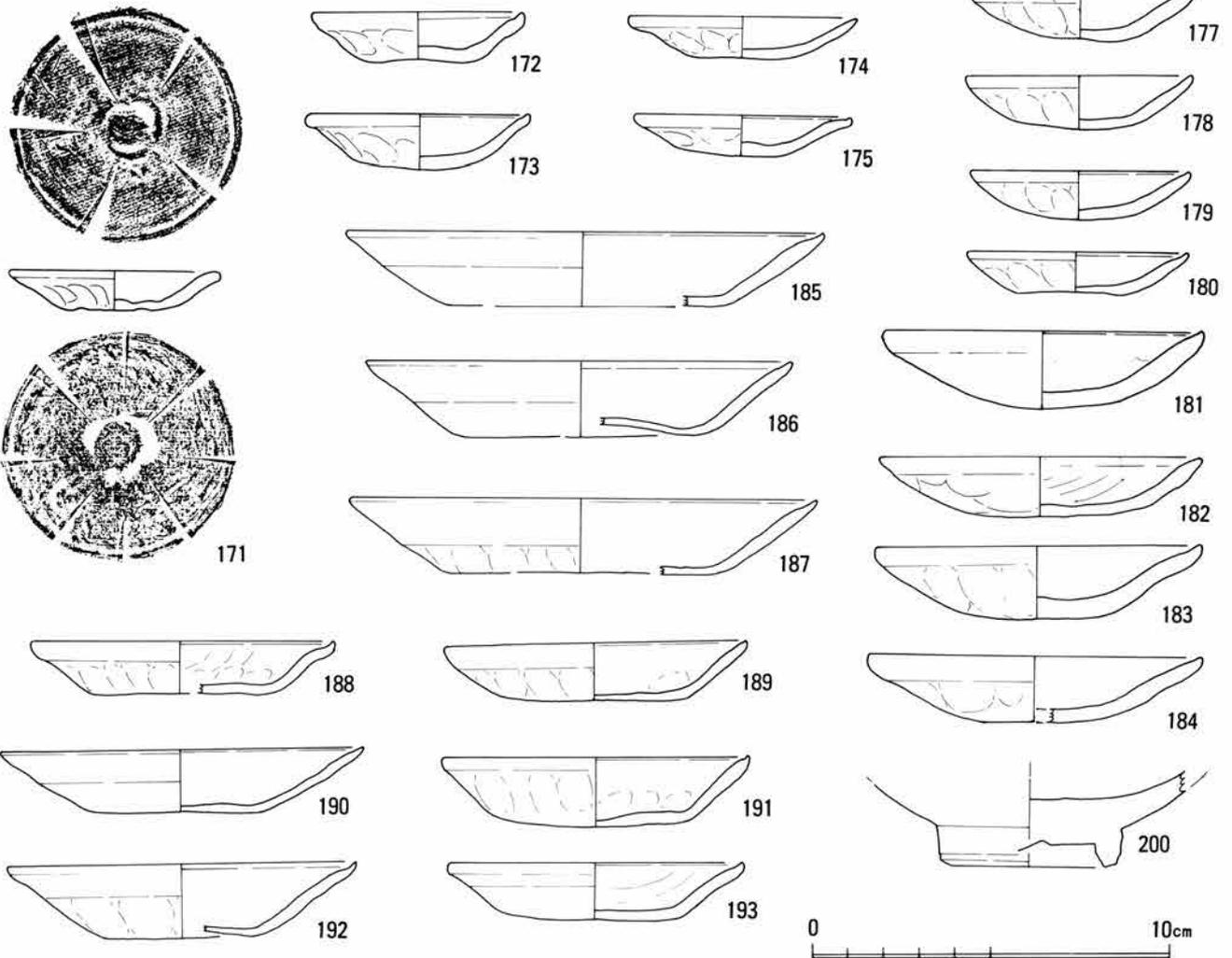
SD986 鉄釉天目茶碗122~124 皿125 茶入126 德利127 灰釉碗128・129 緑釉皿130 土師質土器土鈴131~134  
 円板135 瓦質土器香炉136・137 青磁碗138~140 白磁杯143 染付碗144・145 皿147・148 金属製品 刀装具151

第15図 第29次調査遺物(7)

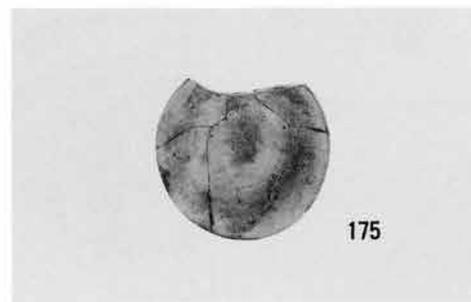
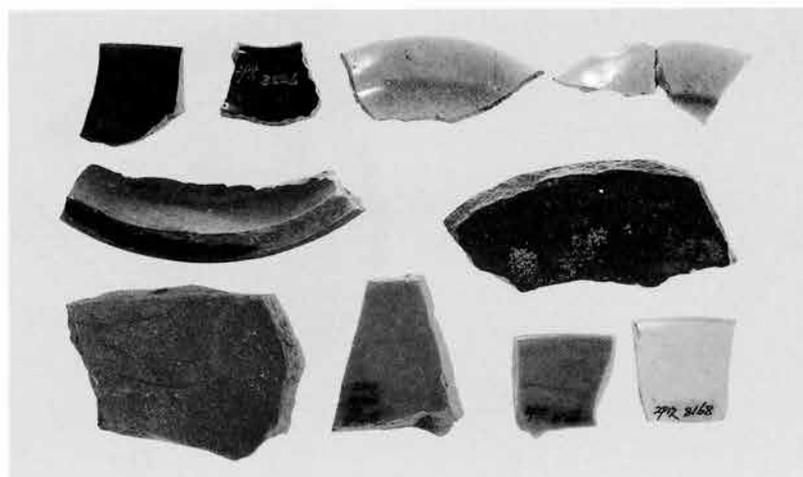
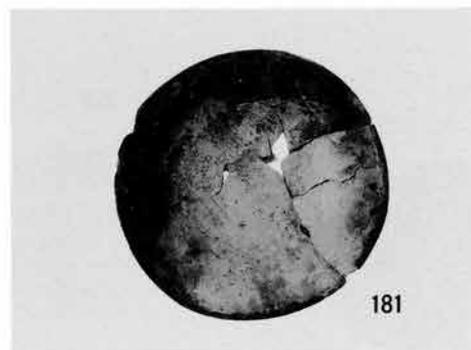
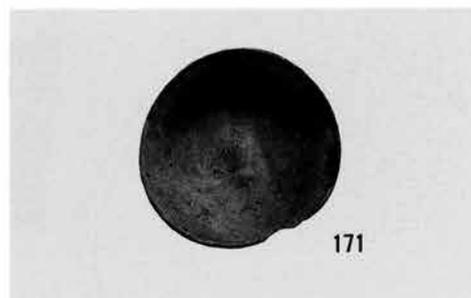
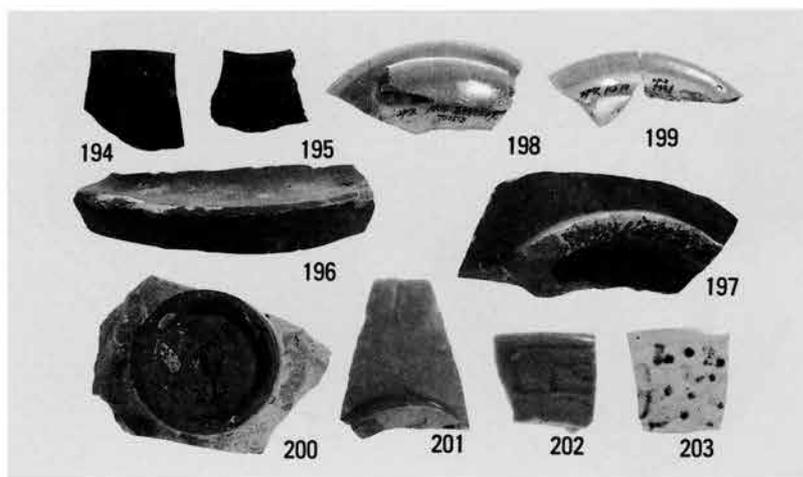
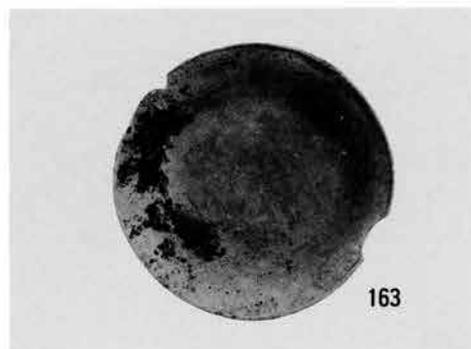
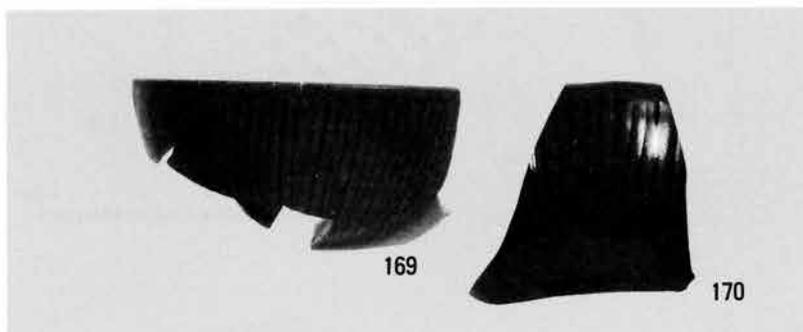
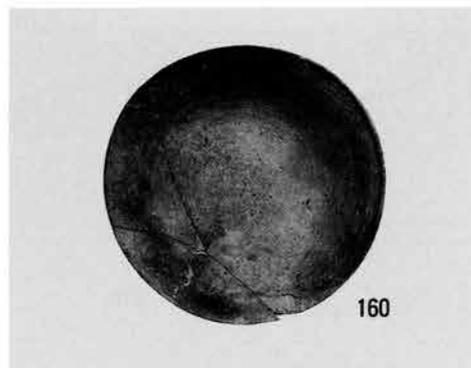
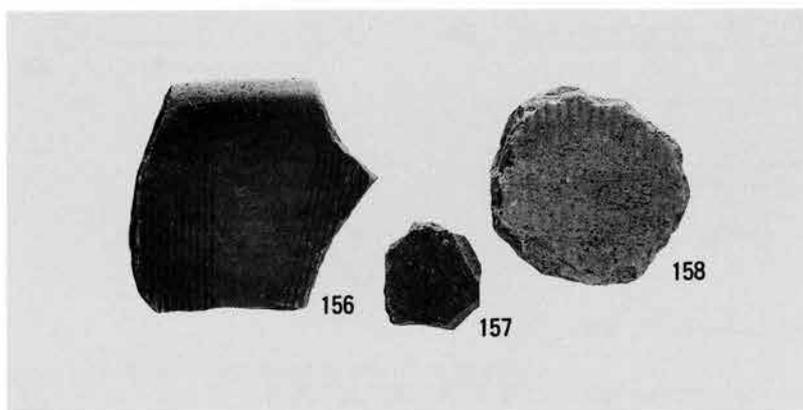
区画1 SF1049



区画2 SF1050



土師質土器Ⅲ159~168 青磁碗169・170 土師質土器171~193 青磁碗200

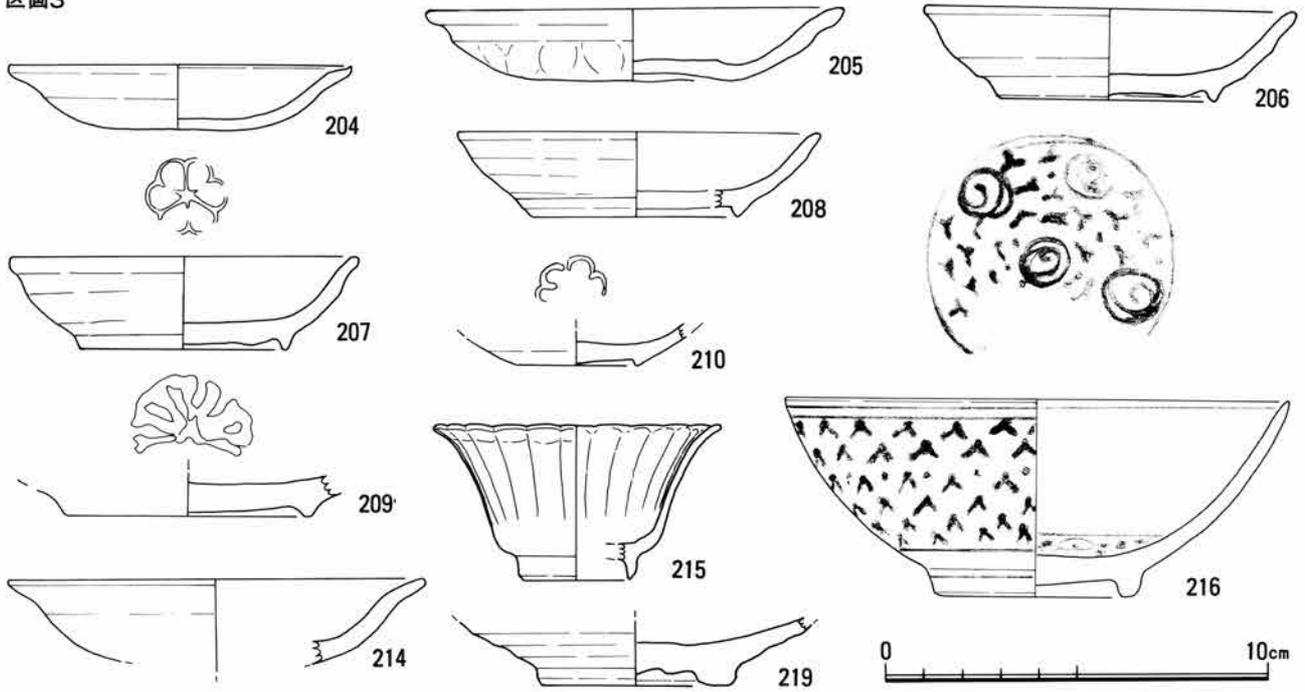


区画1 越前焼播鉢156 土製円盤157・158 土師土器160・163・171 青磁碗169・170

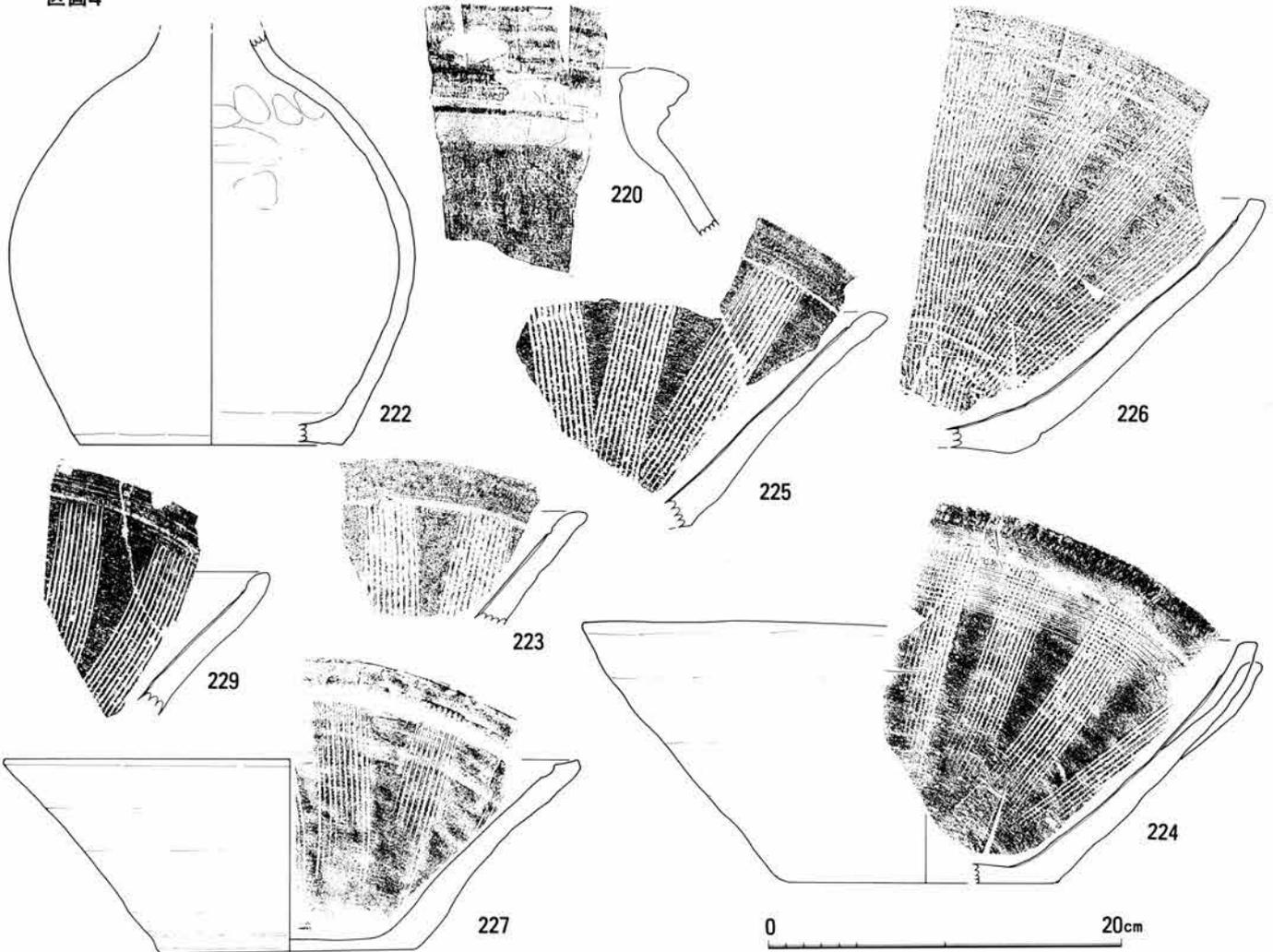
区画2 鉄釉天目茶碗194 茶入195 仏花瓶196・197 灰釉皿198・199 青磁碗200・201・202 染付碗203

第16図 第29次調査遺物(8)

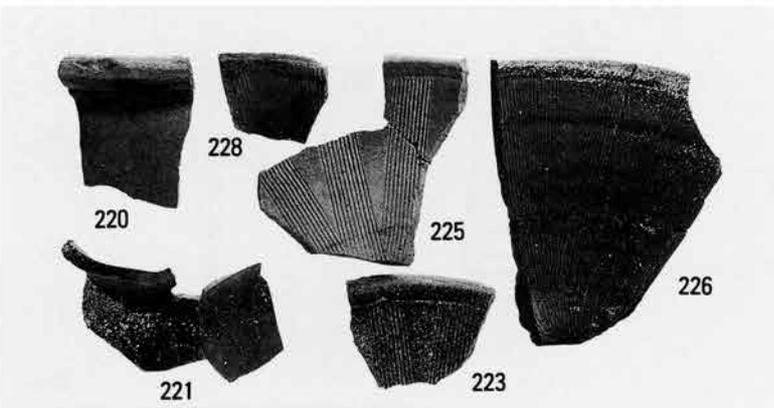
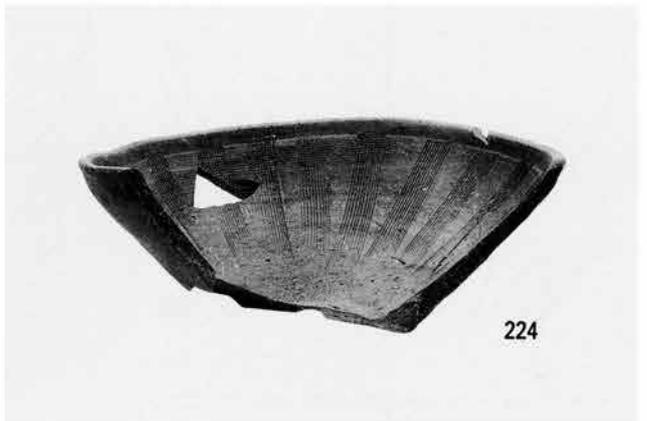
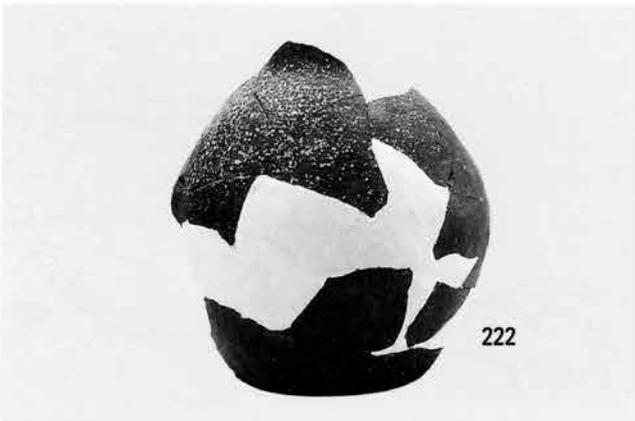
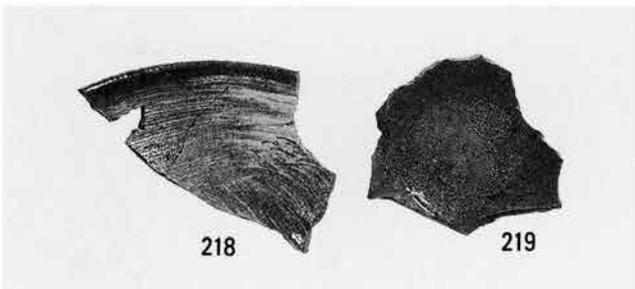
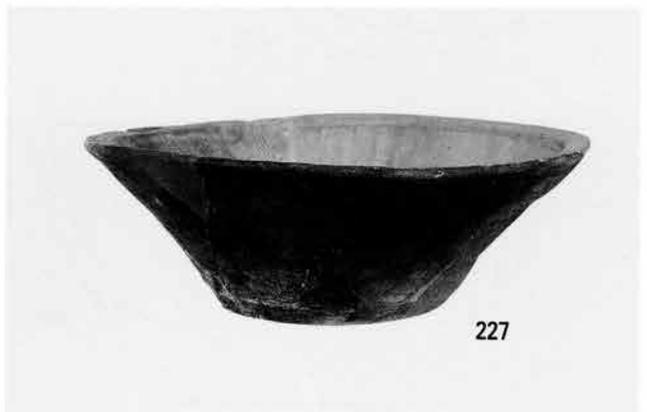
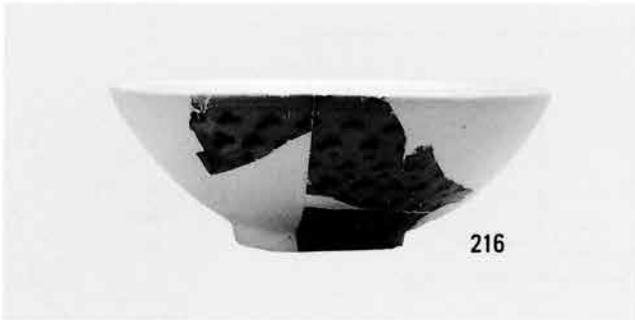
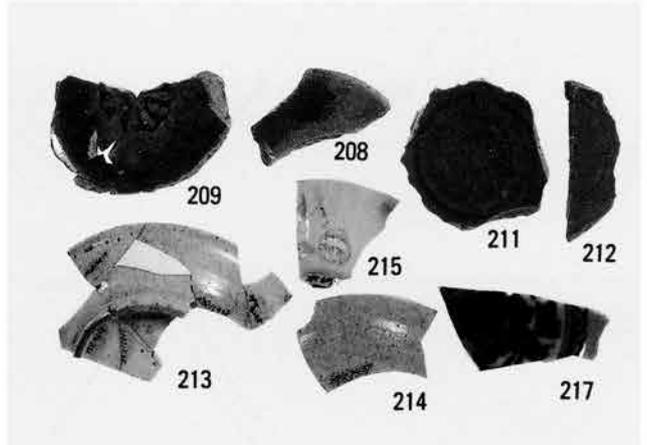
区画3



区画4

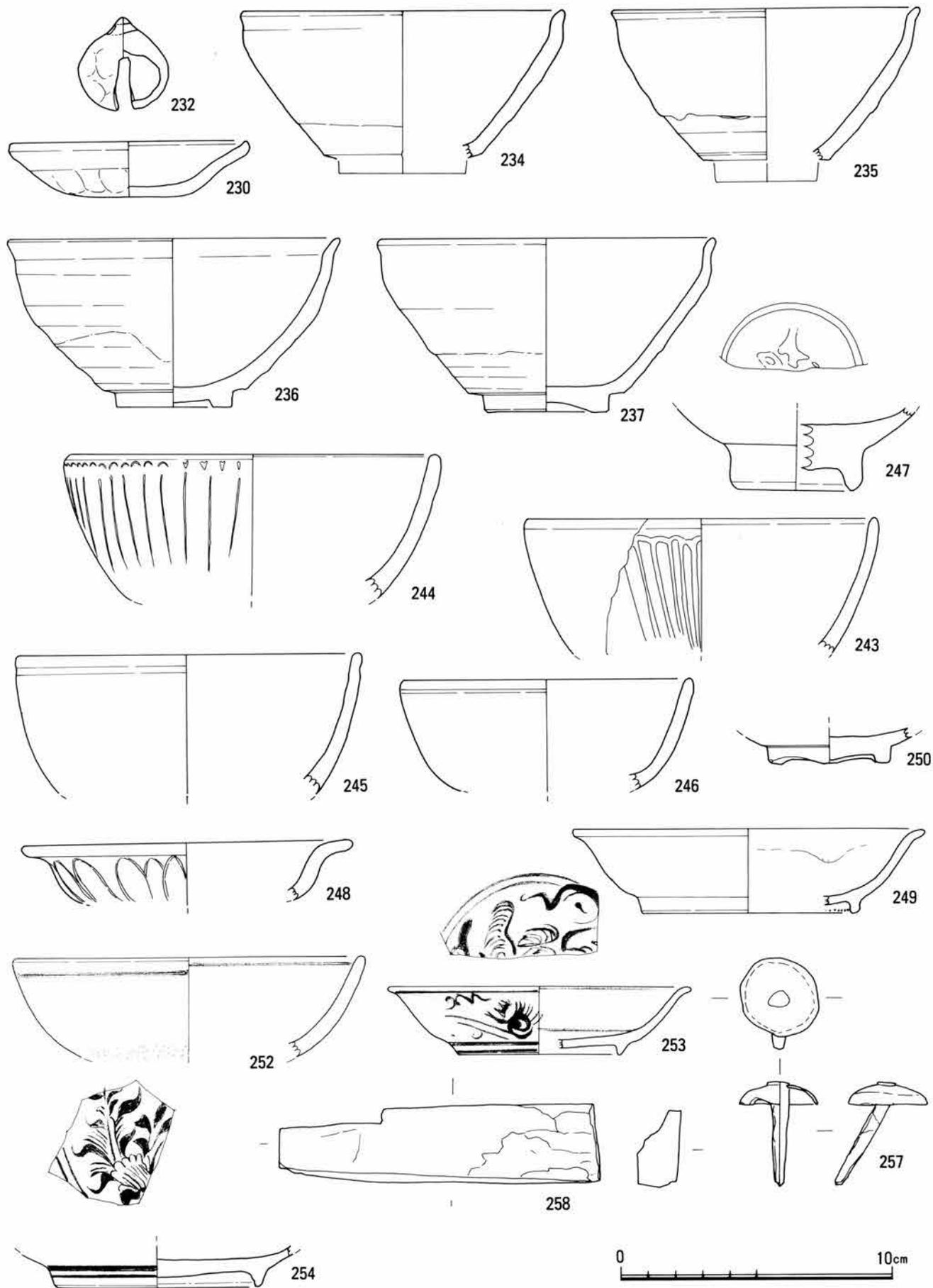


土師質土器皿204・205 瀬戸・美濃焼灰釉皿206～210 白磁皿214 杯215 染付碗216 朝鮮製陶磁器219 越前焼甕220 壺222  
 搦鉢223～227・229

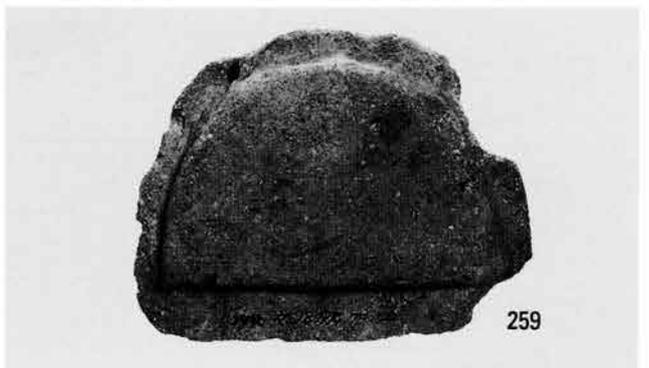
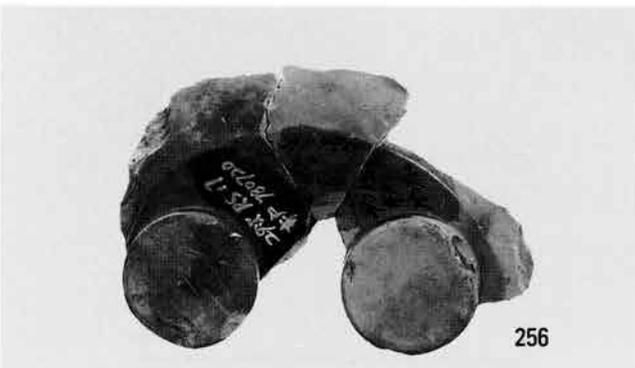
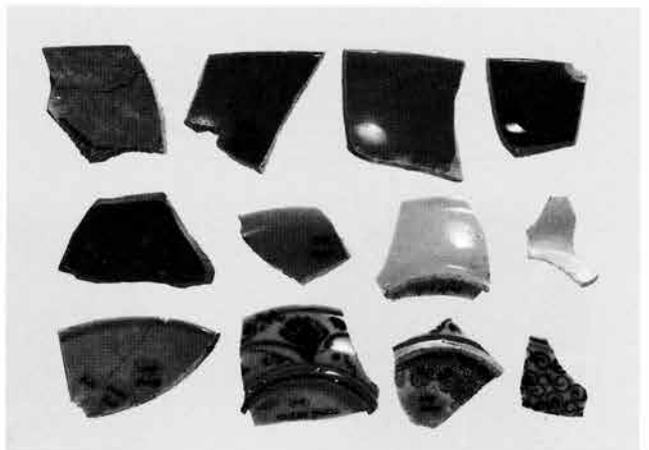
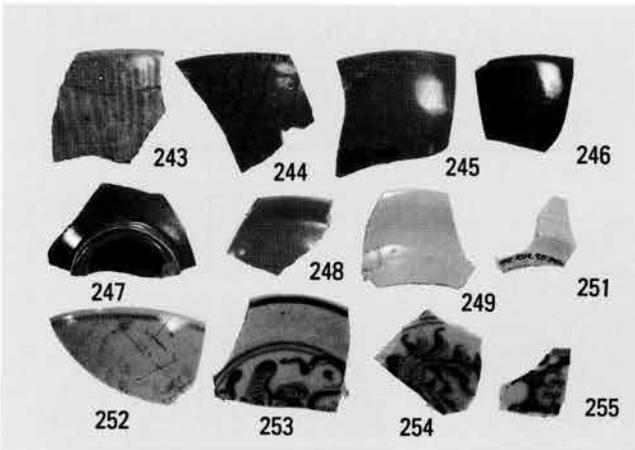
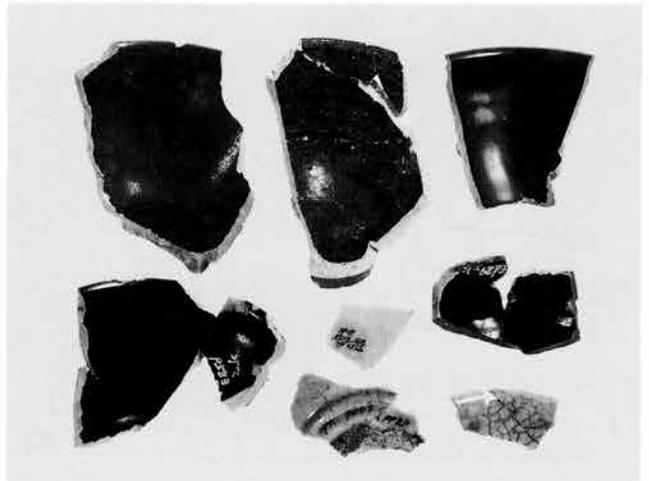
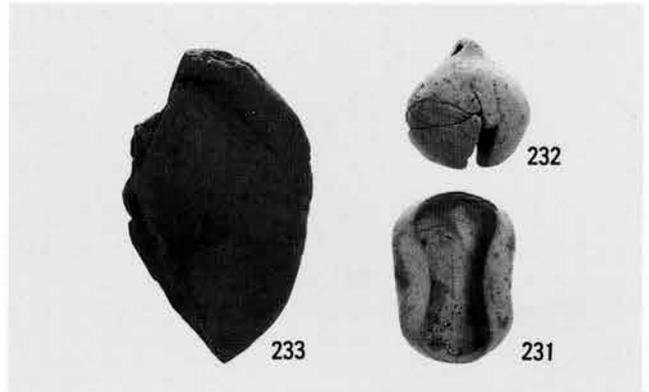


区画3 灰积皿207~209 青磁211・212 白磁皿213・214 杯215 染付碗216 皿217 朝鮮製陶磁器碗218・219  
 区画4 越前甕220 壺221 德利222 播223~228

第17図 第29次調査遺物(9)



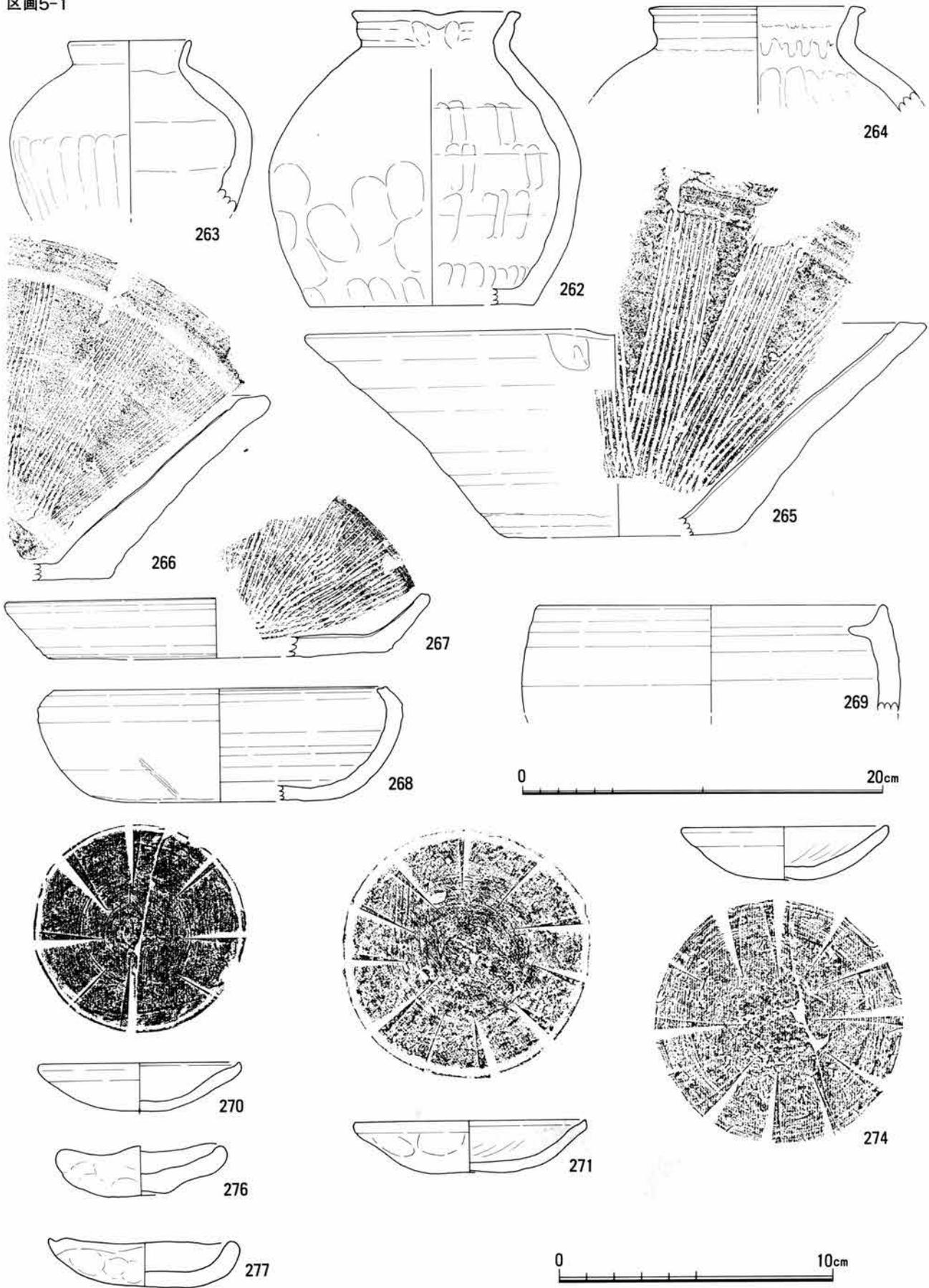
土師質土器皿230 土鈴232 鉄釉天目茶碗234~237 青磁碗243~247 皿248 白磁皿247・250 染付碗252 皿251・254  
 金属製器鋏257 石製品砥石258



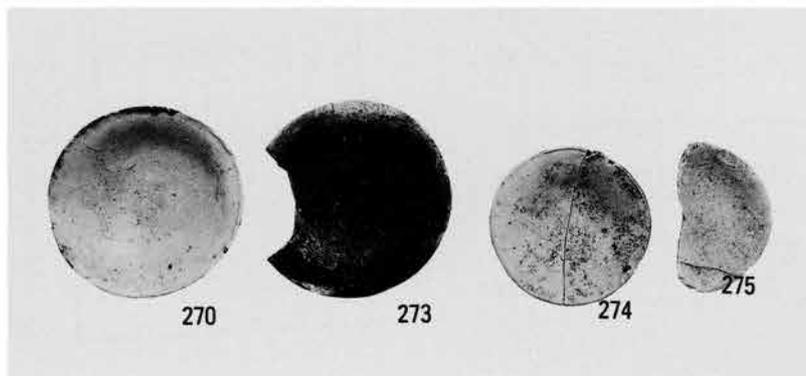
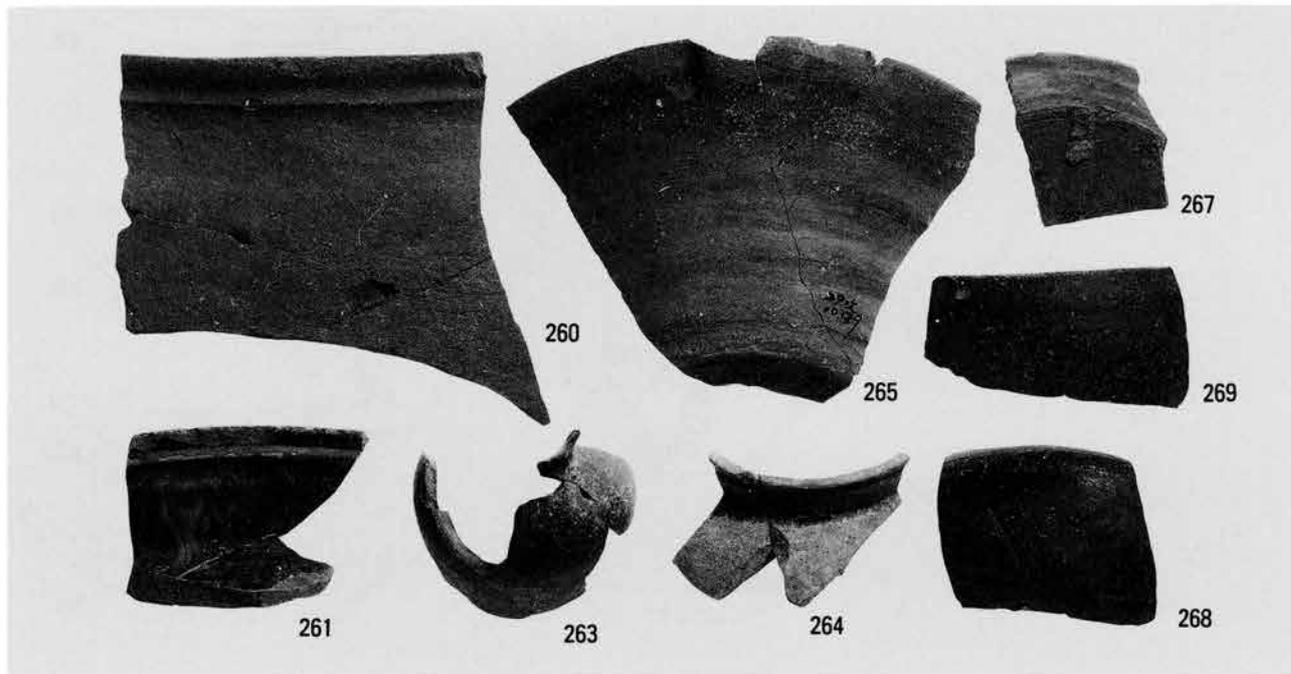
区画4 土師質土器耳皿231 土鈴232 円板状土製品233 鉄釉天目茶碗234～238 茶入239 灰釉皿240～242 青磁碗243～247 皿248 白磁249 杯251 染付碗252 皿253～255 瓦質土器風炉256 石製品バンドコ蓋259

第18図 第29次調査遺物(10)

区画5-1

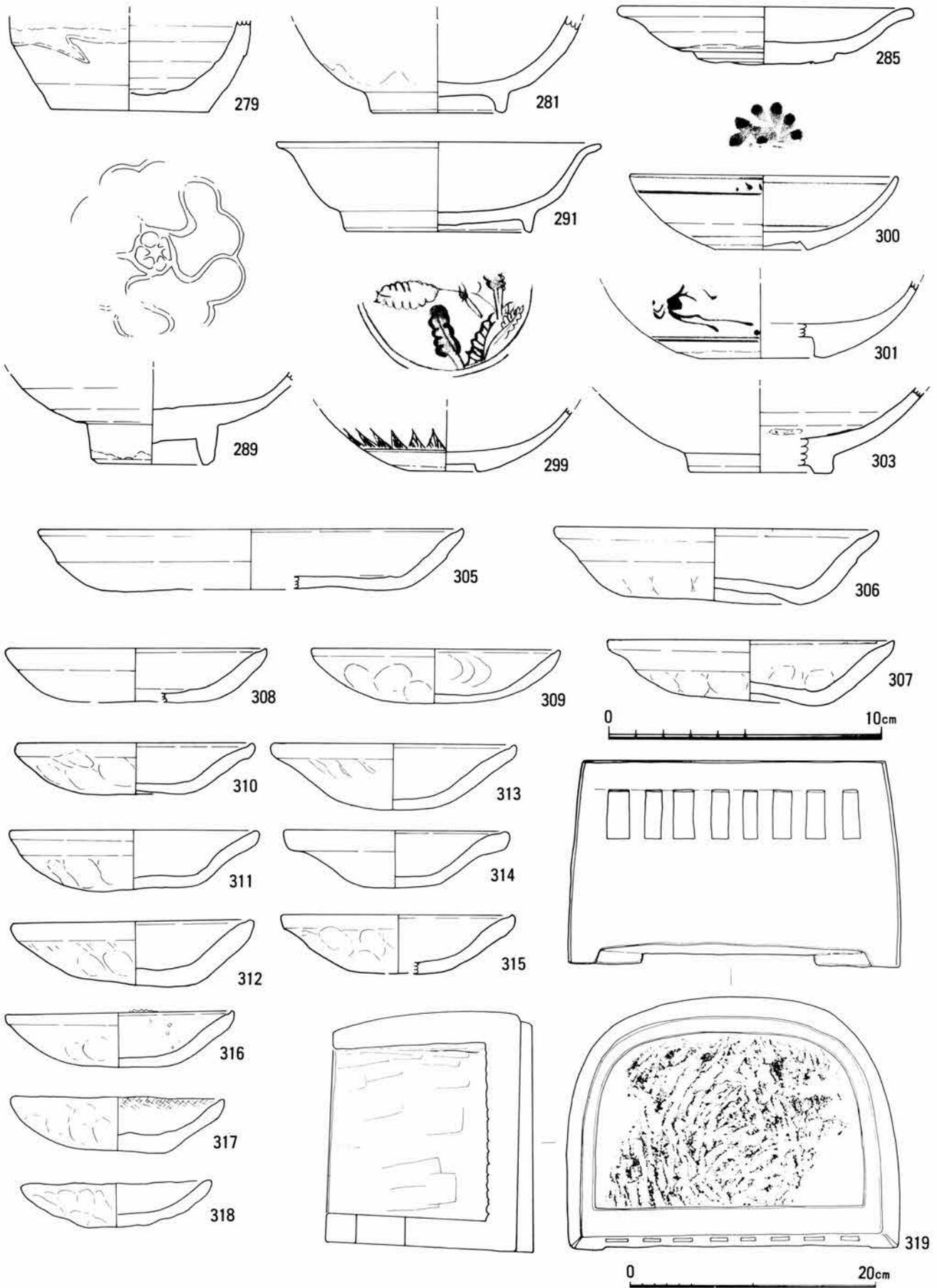


越前焼壺262~264 掃鉢265・266 卸皿267 鉢268 水指269 土師質土器皿270・271 276・277

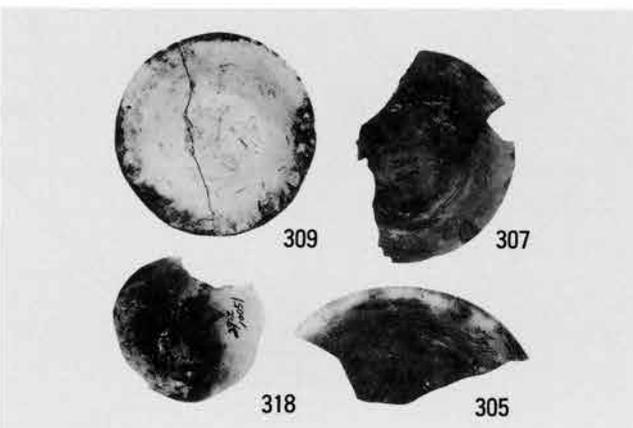
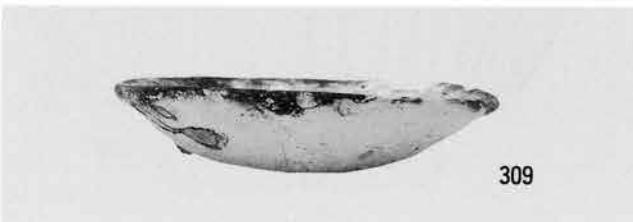
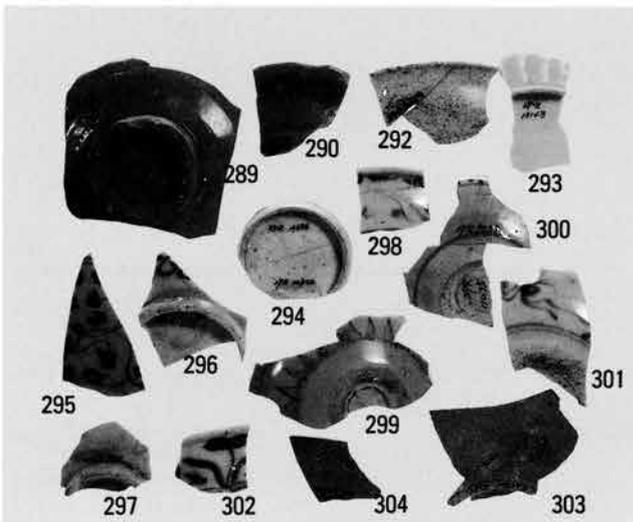
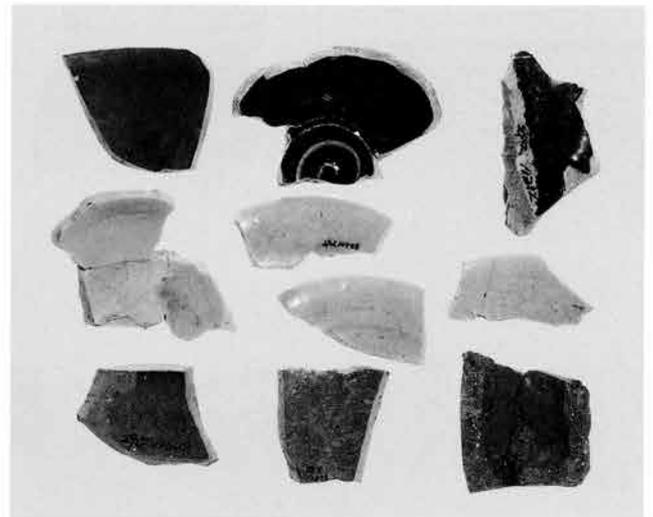
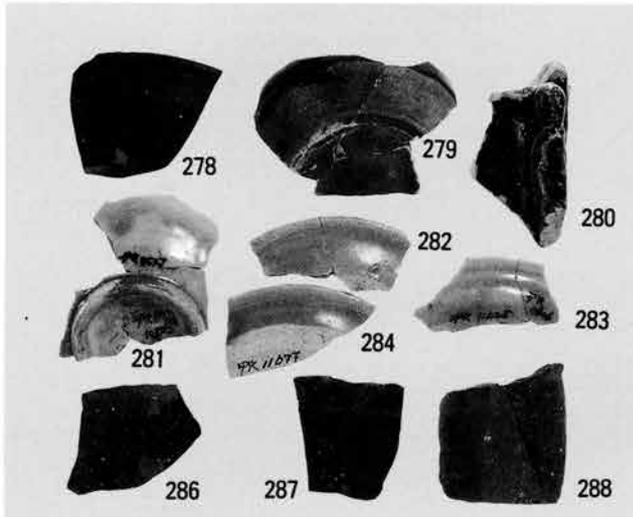


区画5-1 越前焼甕260・261 壺262～264 播鉢265 卸皿267 鉢268 水指269 土師質土器皿270・273～275

第19図 第29次調査遺物(11)



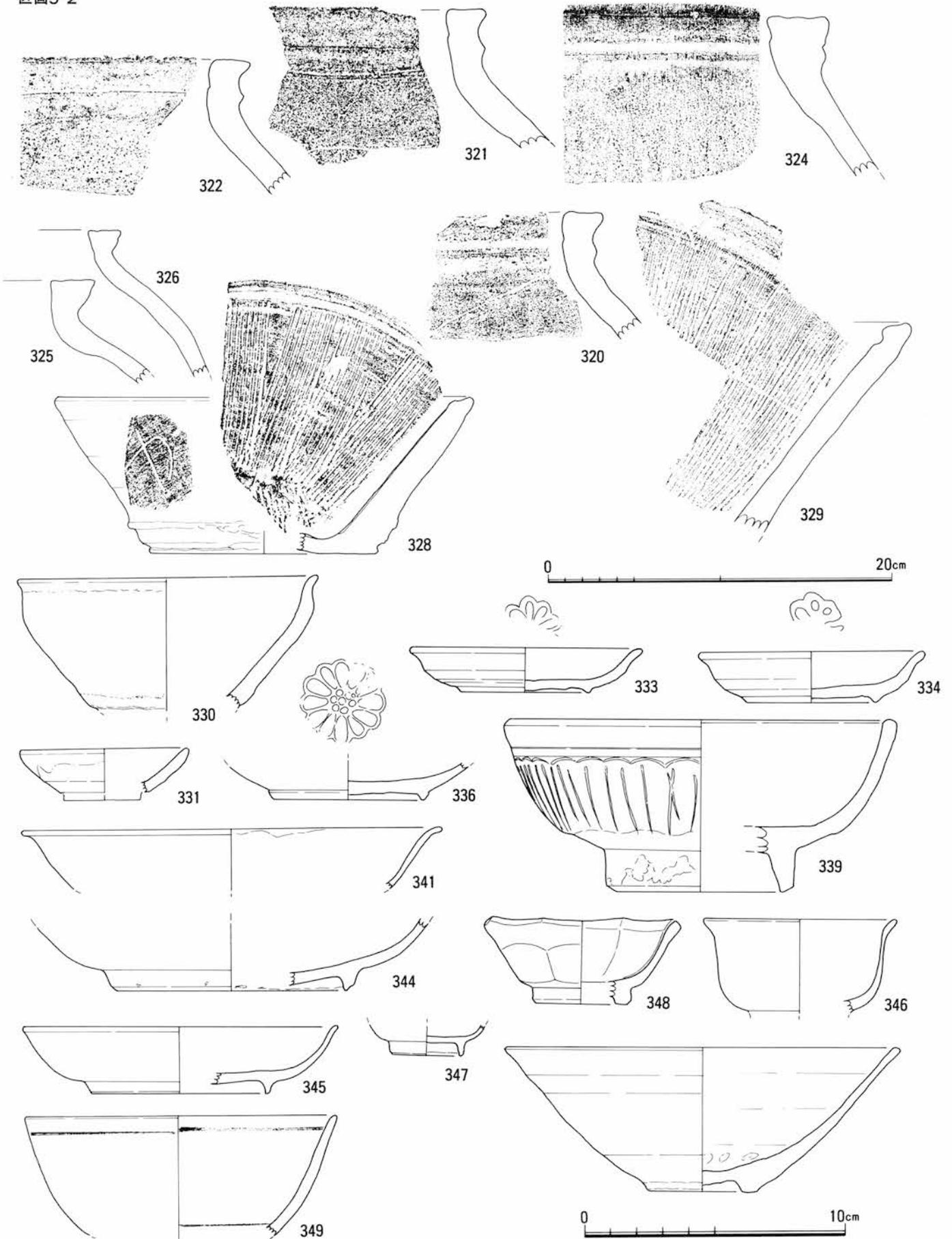
鉄釉壺279 灰釉碗281 青磁碗289 白磁皿291 染付皿299~301 朝鮮製陶磁器碗300 土師質皿305~318 石製品バンドコ319



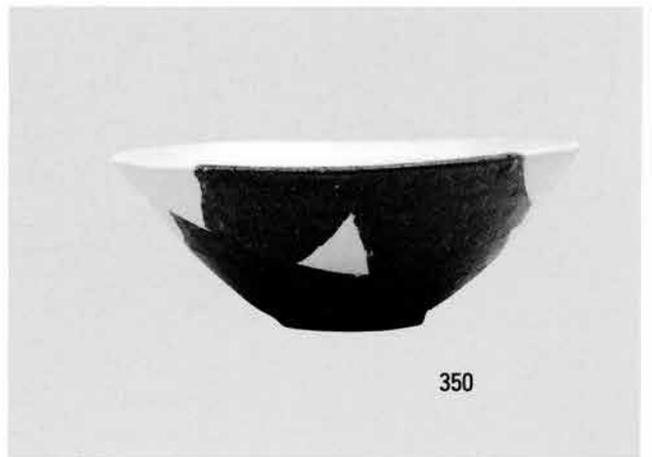
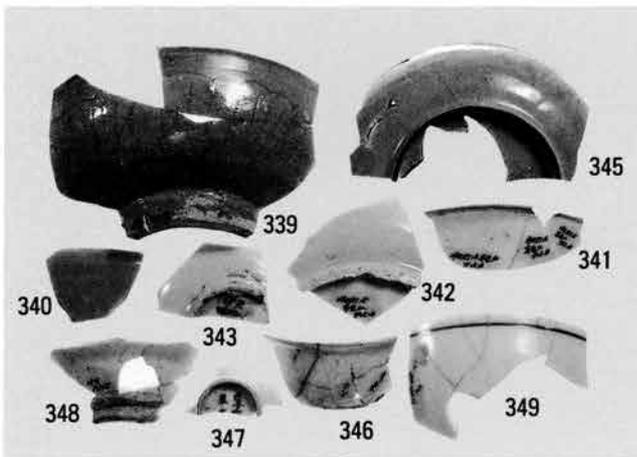
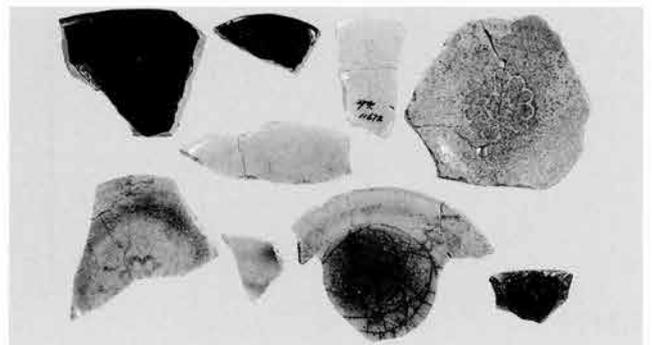
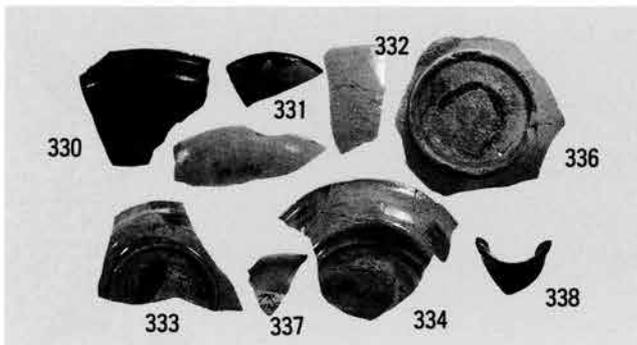
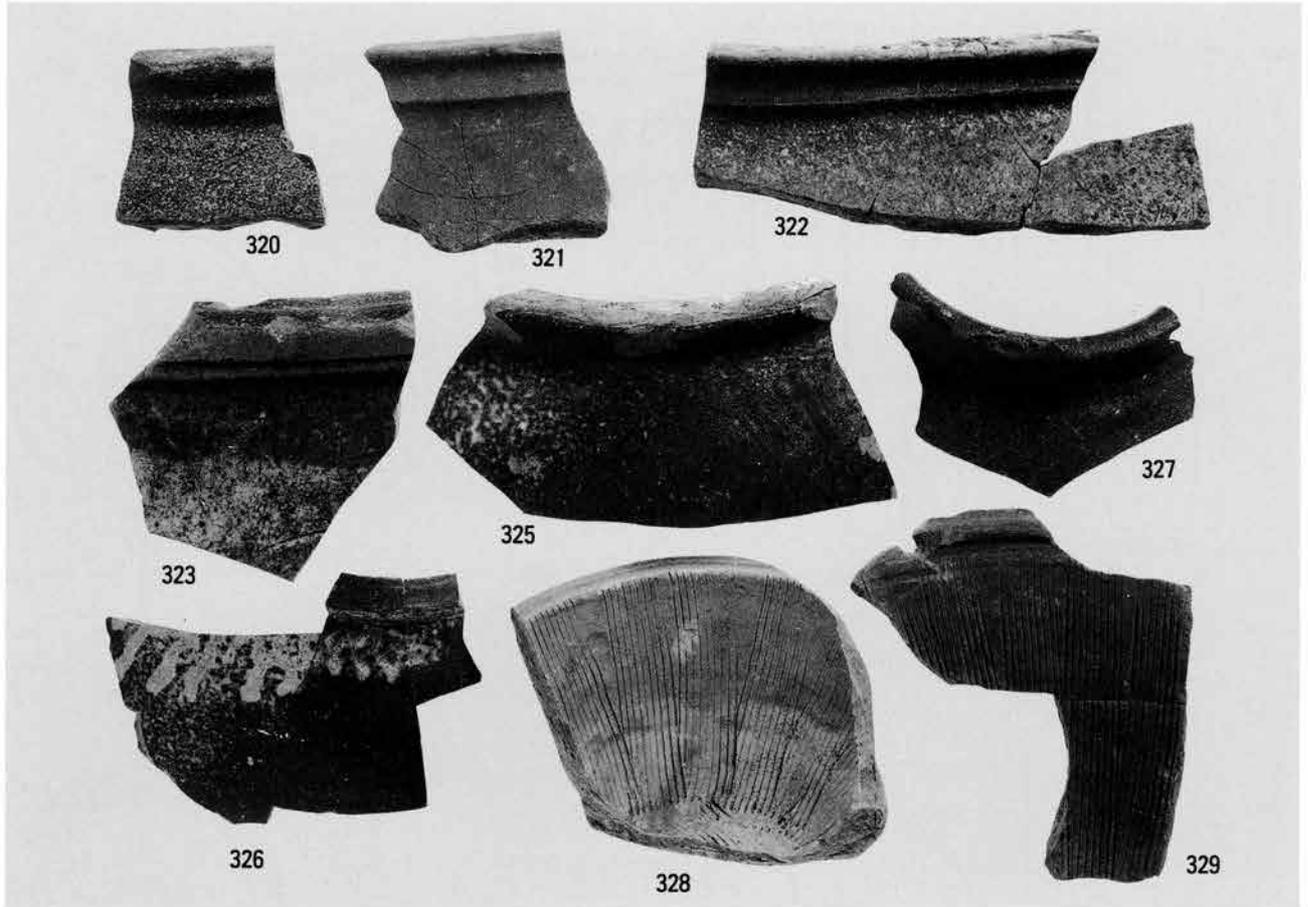
区画5-1 鉄釉天目茶碗278 鉄釉壺279 仏花瓶280 灰釉皿281~284 国産陶器花生286~288 青磁碗289 皿290  
白磁皿291~294 染付碗295・296 皿297・301 杯302 朝鮮製陶磁碗303 皿304 土師質土器皿302~315 石製品319

第20図 第29次調査遺物(12)

区画5-2



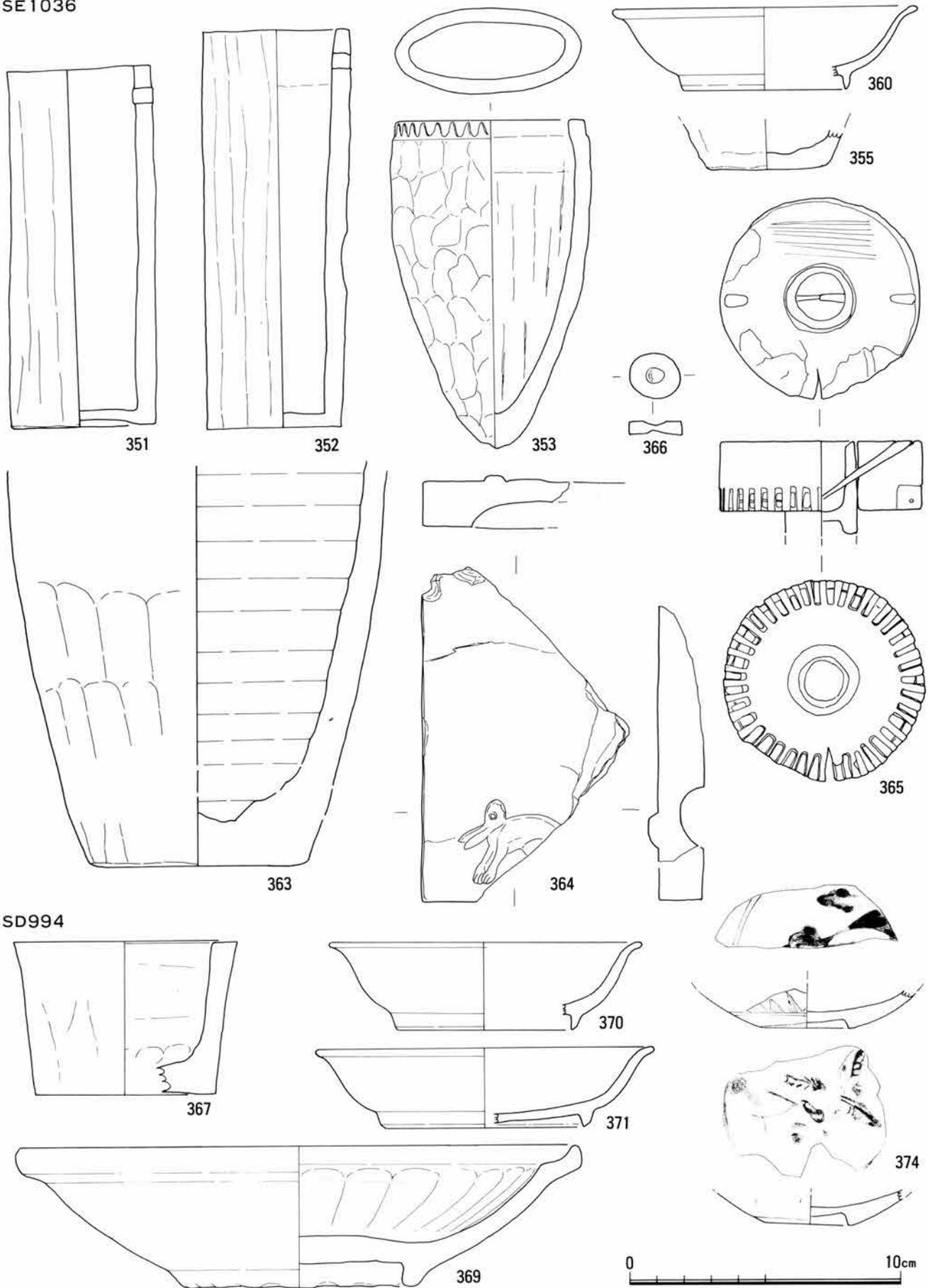
越前焼甕320~326 挿鉢328・329 鉄釉天目茶碗330 杯331 灰釉皿333・334・336 青磁碗339 白磁皿341・344・345  
杯346~348 染付碗349 朝鮮製陶磁器碗350



区画5-2 越前焼320~326 壺327 播鉢328・329 鉄釉天目茶碗330 小杯331 灰釉碗332 皿333~337 国産陶磁器徳利338 青磁339 皿340 白磁皿341~343 杯346~348 染付碗349 朝鮮製陶磁器碗350

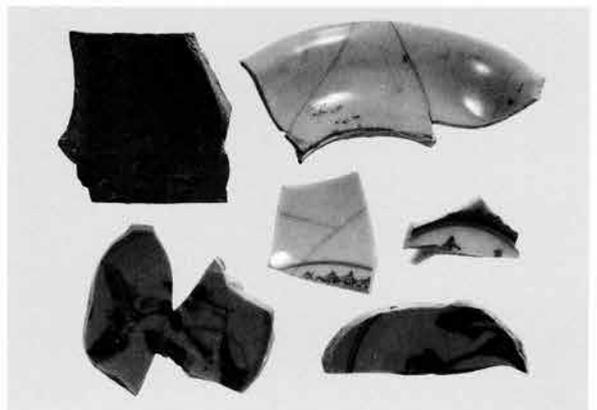
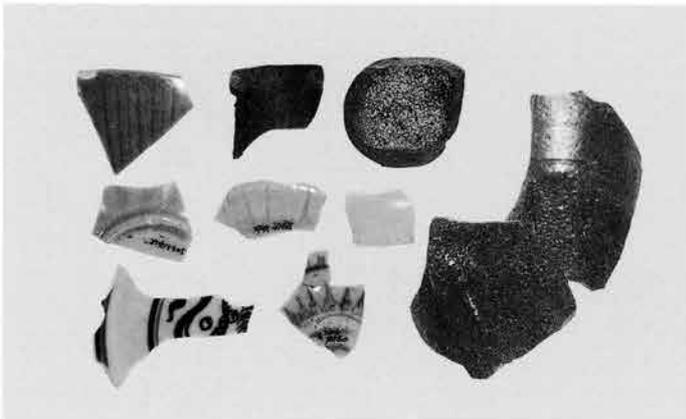
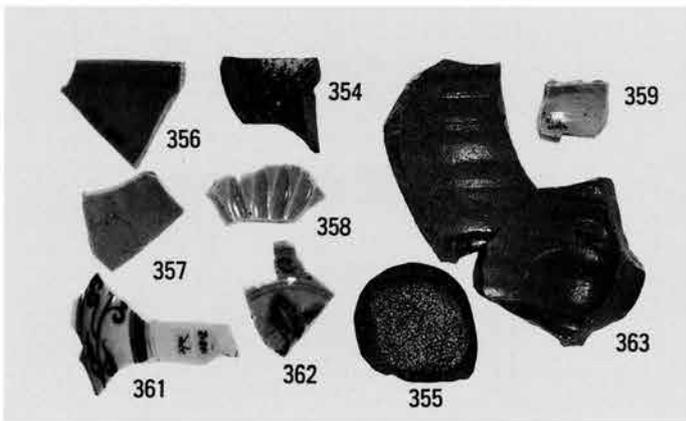
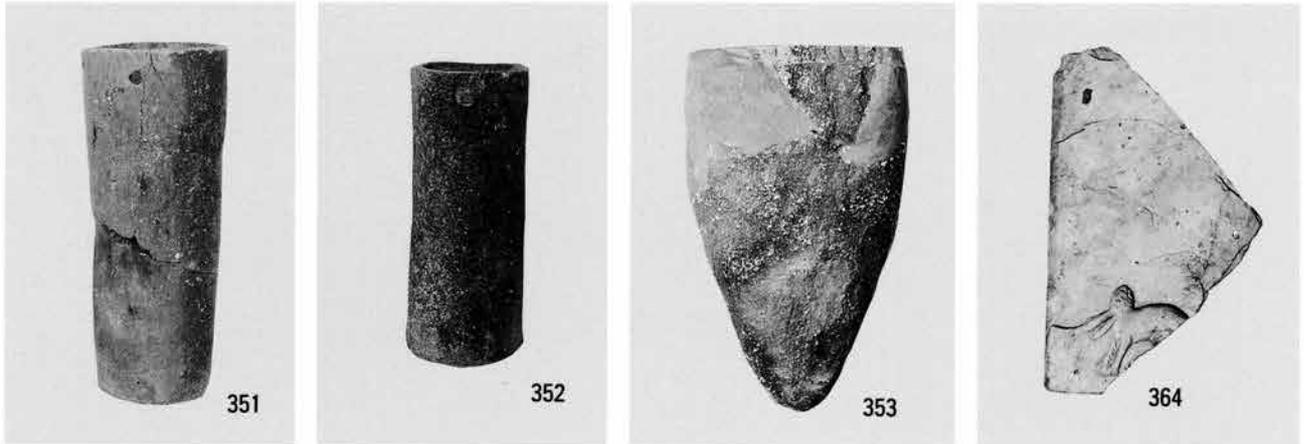
第21図 第29次調査遺物(13)

SE1036



SD994

国産陶器一輪挿351~353 茶入356 白磁皿360 朝鮮製陶磁器壺363 石製品硯364 木製品傘ロクロ365 骨角製品駒366  
越前焼筒物367 青磁鉢369 白磁皿370・371 染付皿374・375

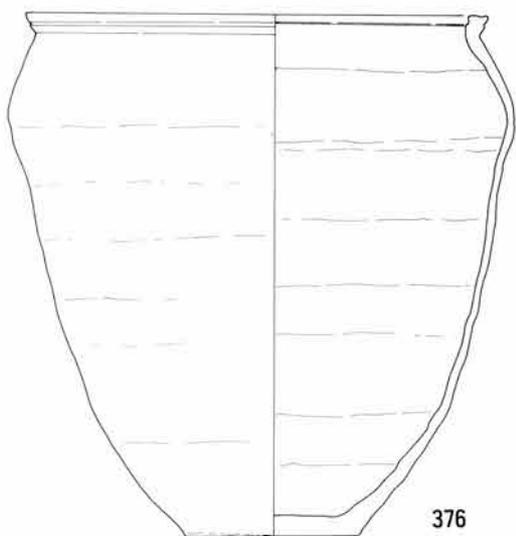


SE1036 国産陶器一輪挿351~354 茶入355 青磁碗356 皿357・358 小壺359 染付皿361・362 朝鮮製陶磁器壺363 石製品硯364 木製品傘口クワ365

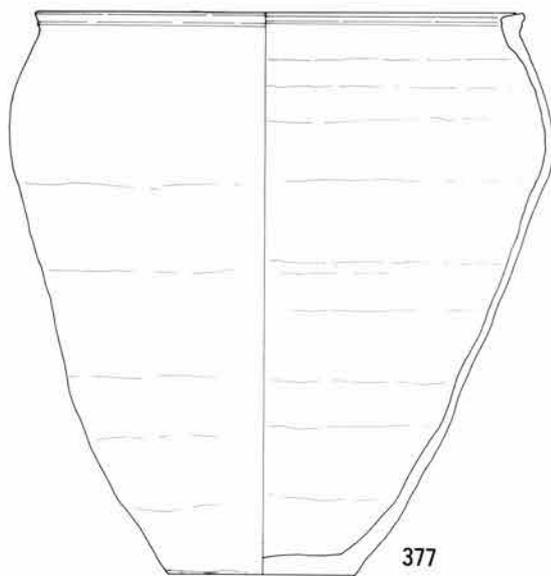
SD994 越前焼筒物367 瀬戸・美濃焼鉄釉猿368 青磁鉢369 白磁皿370 染付碗372・373 皿374・375

第22図 第29次調査遺物(14)

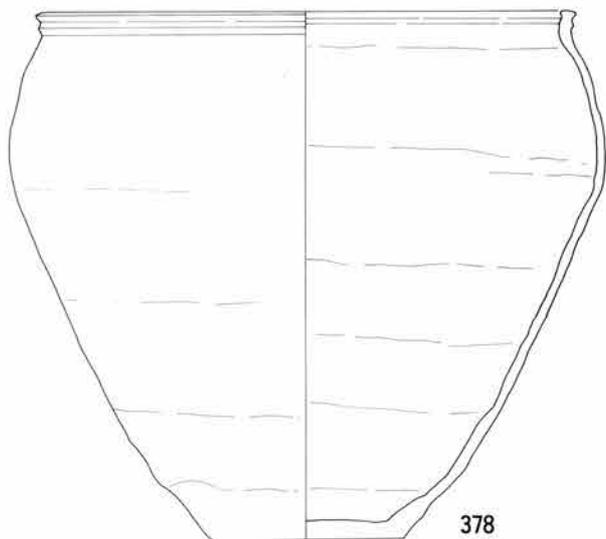
区画6 SX1097・SX1098



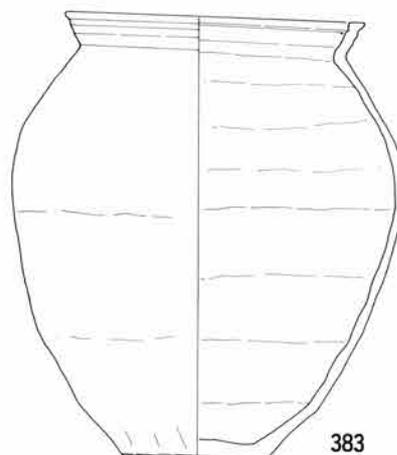
376



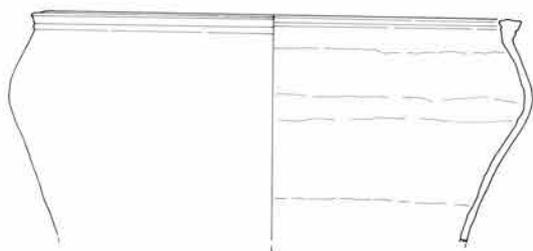
377



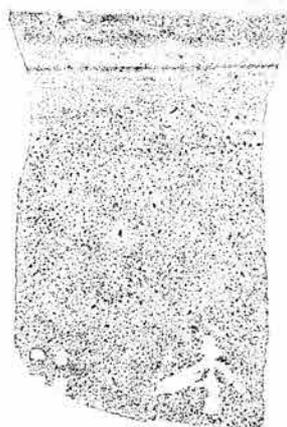
378



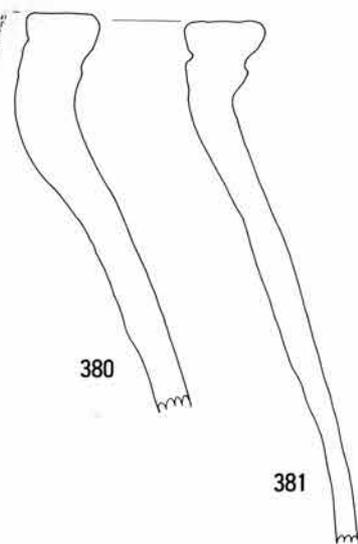
383



379

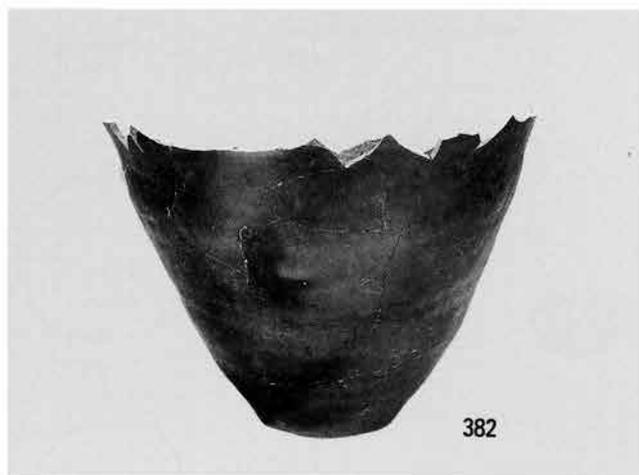
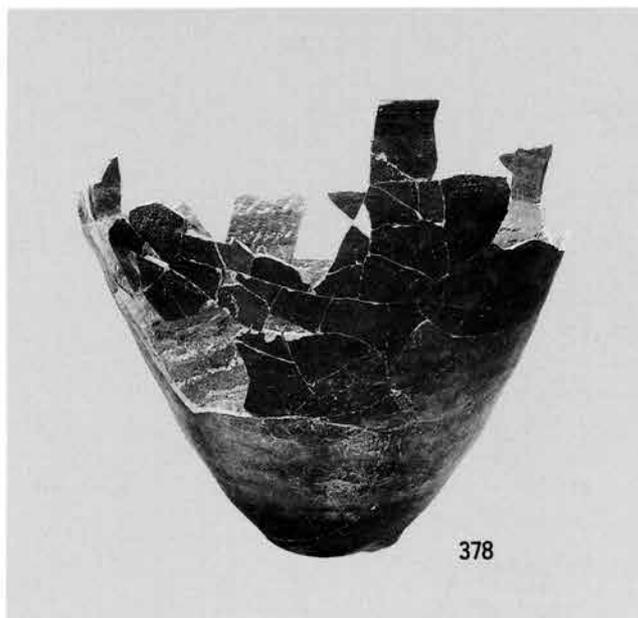
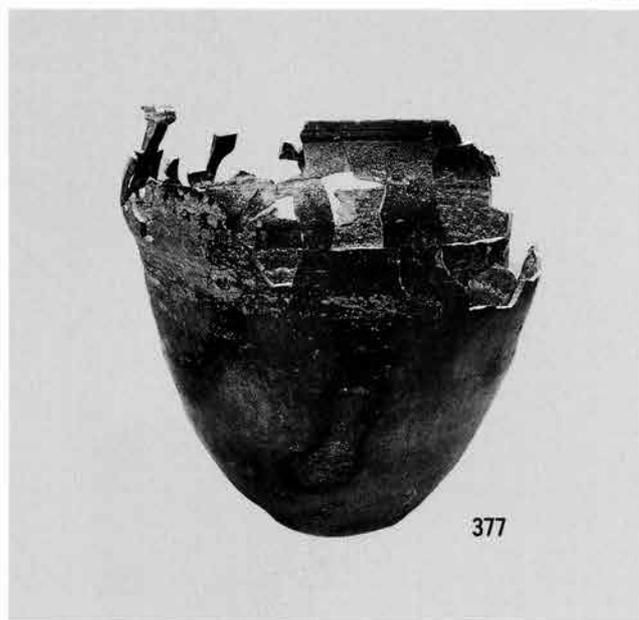


380



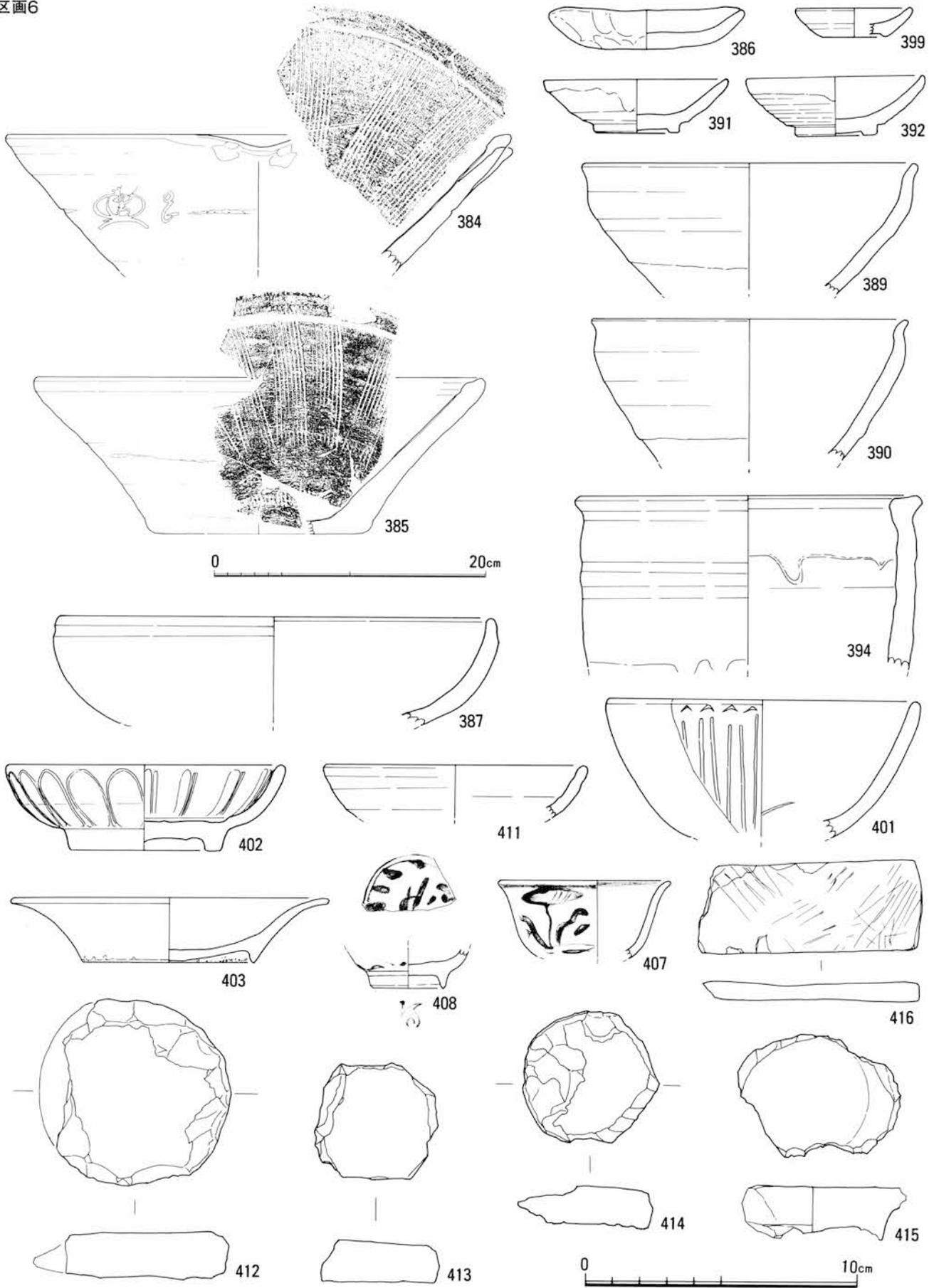
381



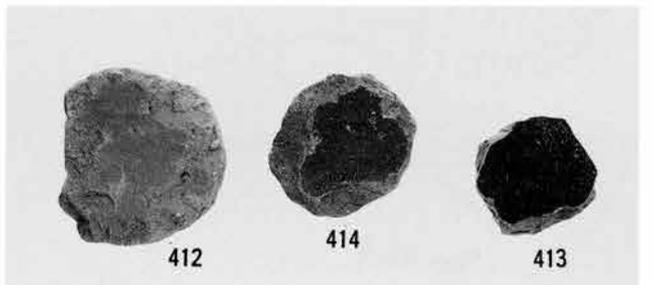
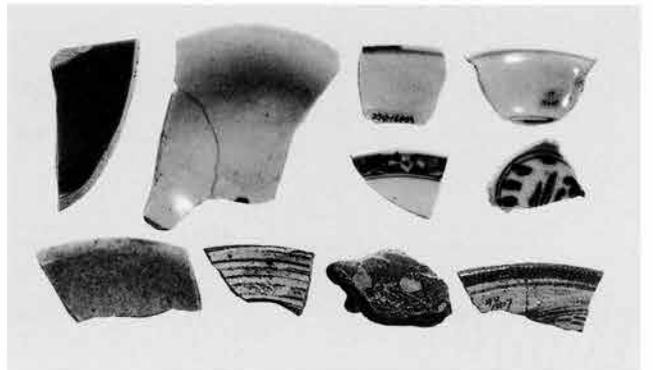
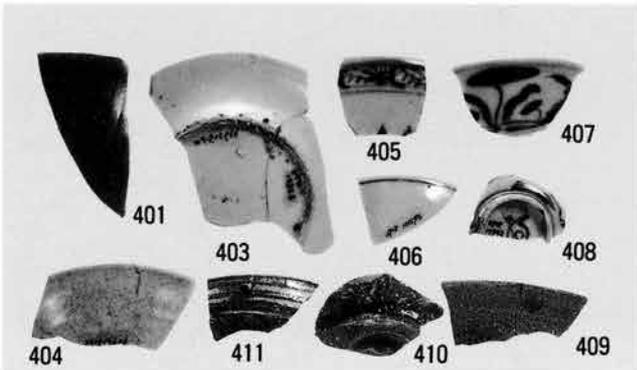
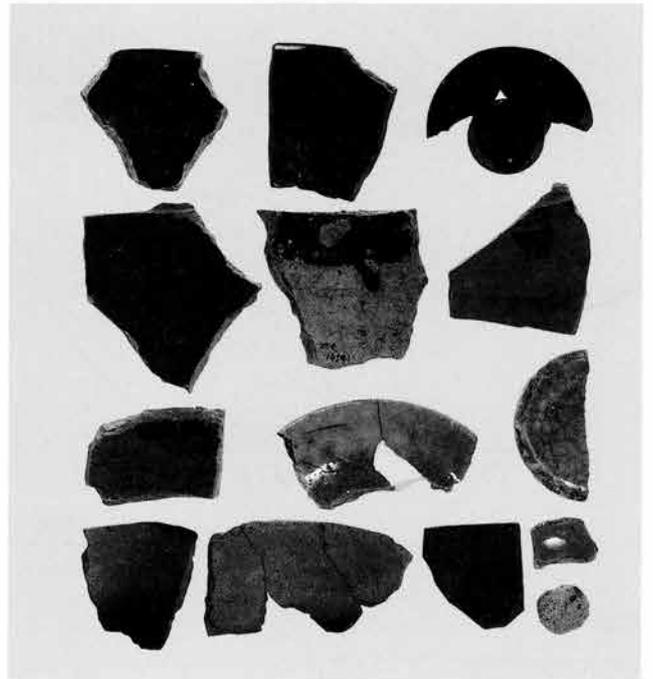
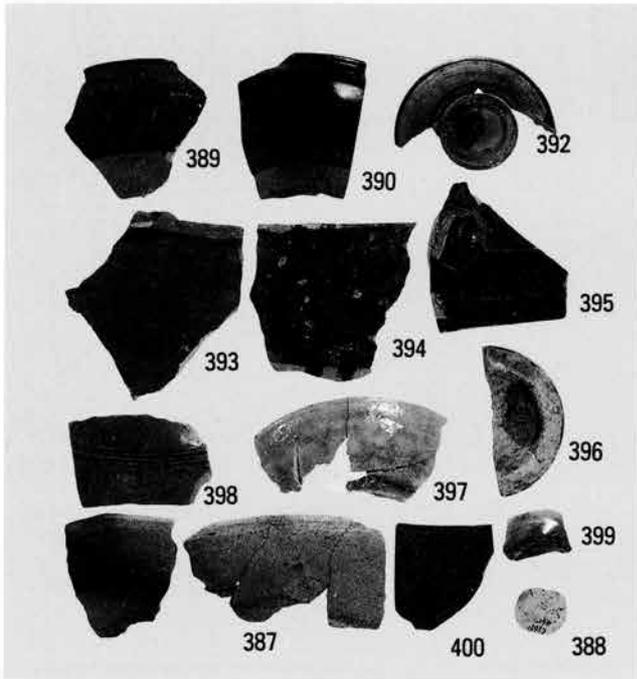
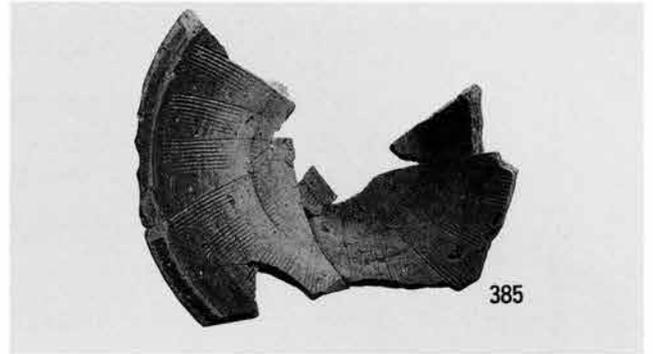


第23図 第29次調査遺物(15)

区画6



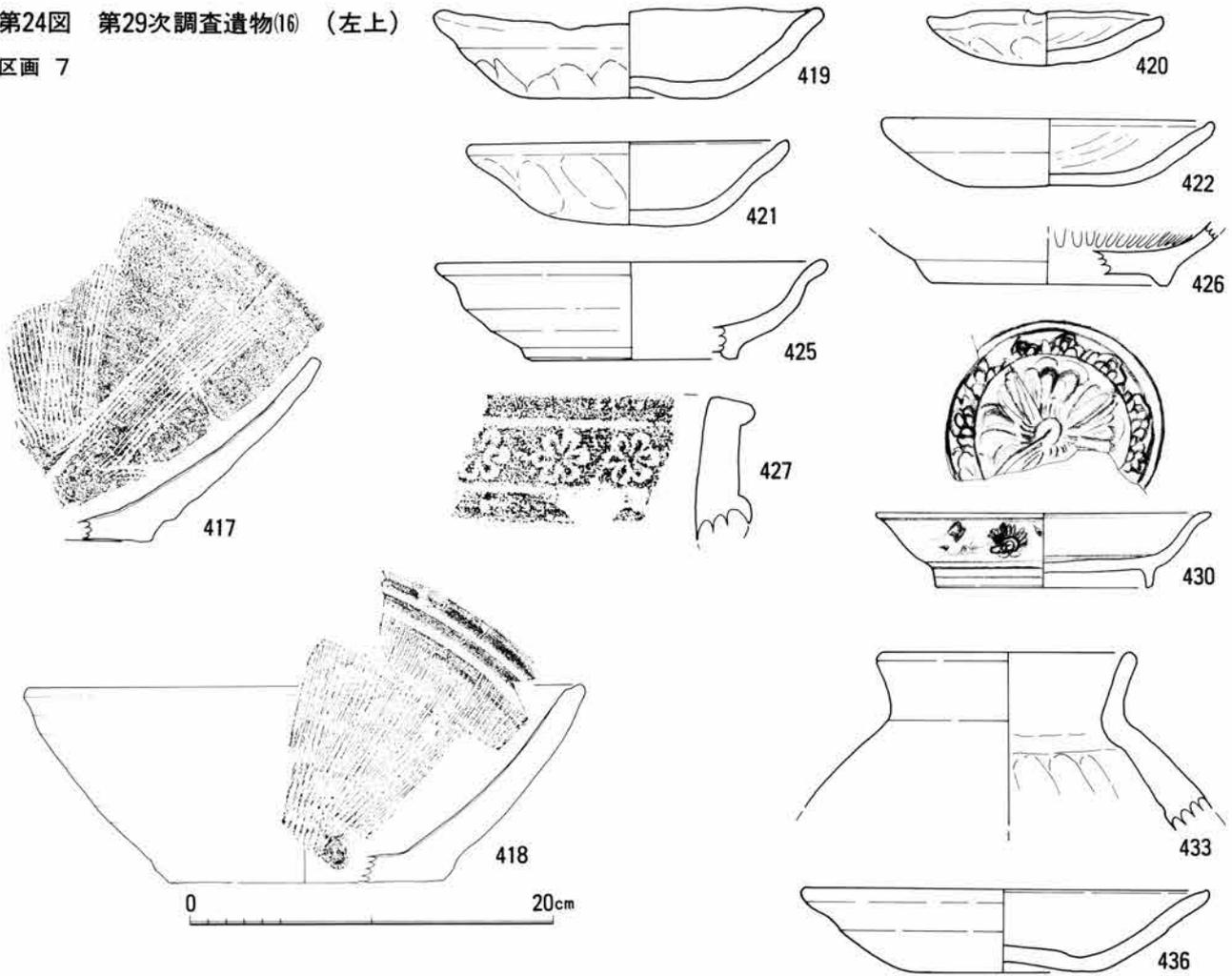
越前焼播鉢384・385 土師質皿386 鍋387 瀬戸・美濃焼天目茶碗389・390 小杯391・392 水指394 灰釉小杯399 青磁碗401 皿402  
白磁皿403 染付杯407・408 朝鮮製陶磁器皿411 土製円板412~414 石製品砥石416



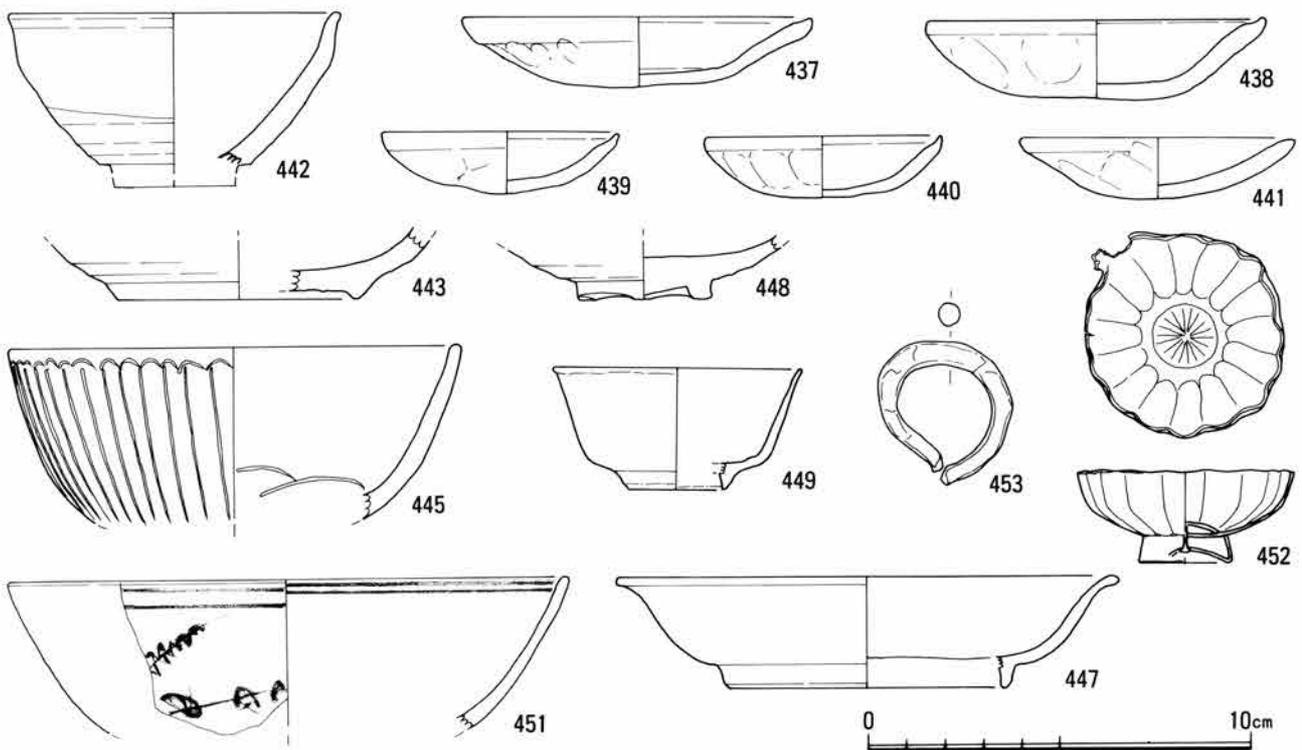
区画6 越前焼播鉢384・385 土師質土器鍋389 小円板388 鉄釉天目茶碗389・390 小杯392 水指393・394 四耳壺395 灰釉碗396 皿397 壺398 小杯399 国産陶器花瓶400 青磁碗401 皿402 白磁皿403・404 染付碗405・406 杯407・408 朝鮮製陶磁器碗409・410 皿411 土製円板412~414

第24図 第29次調査遺物(16) (左上)

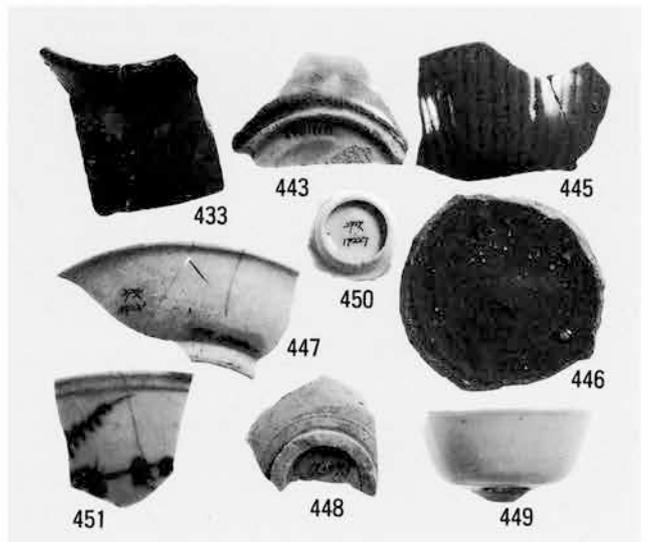
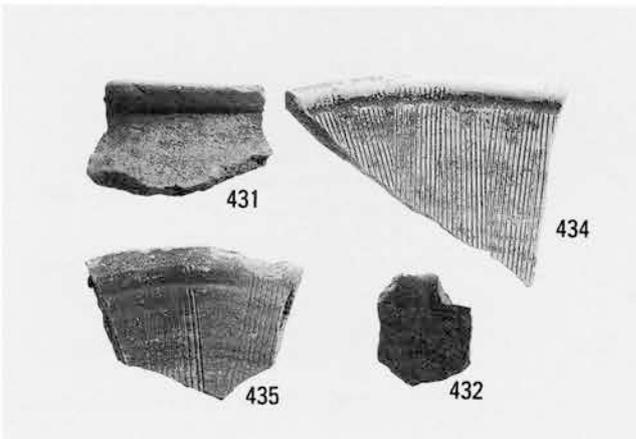
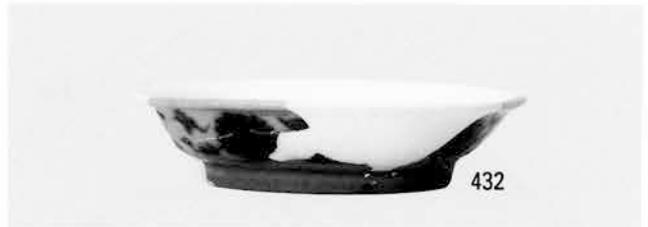
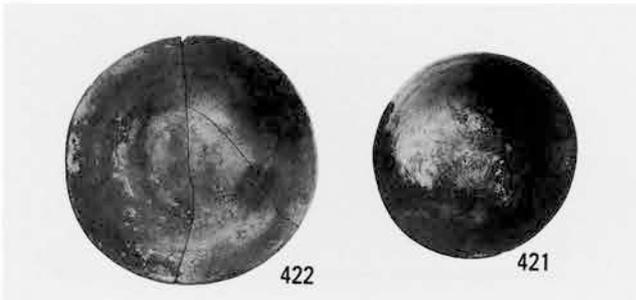
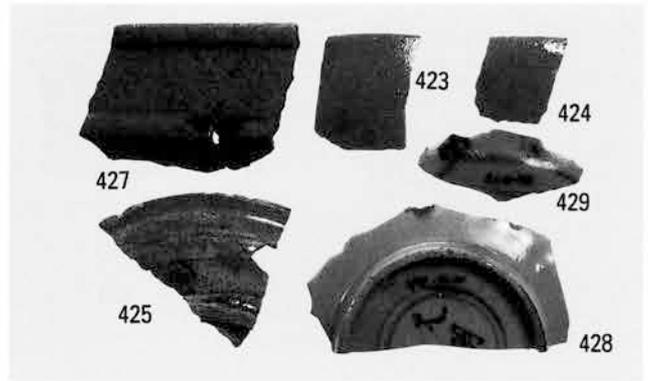
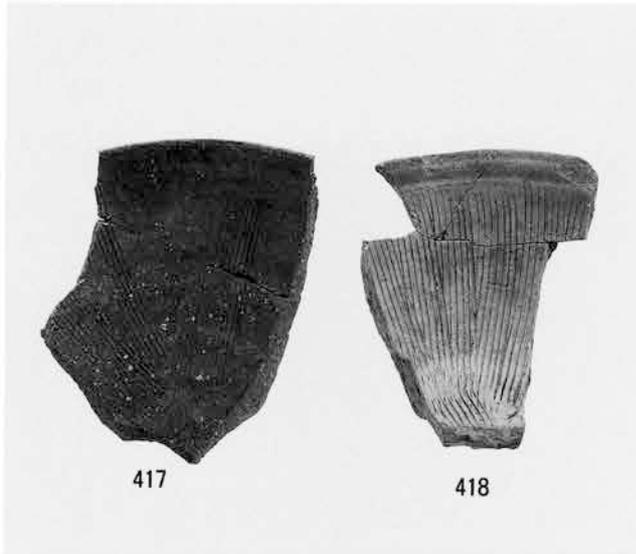
区画 7



区画 8



越前焼播鉢417・418 土師質土器皿419～422 灰釉皿425・426 瓦質風炉427 染付皿436 越前焼壺433 土師質土器皿436～441  
鉄釉天目茶碗442 灰釉皿443 青磁碗445 白磁皿447・448 杯449 染付碗451 金属製品紅皿452 銅製輪453

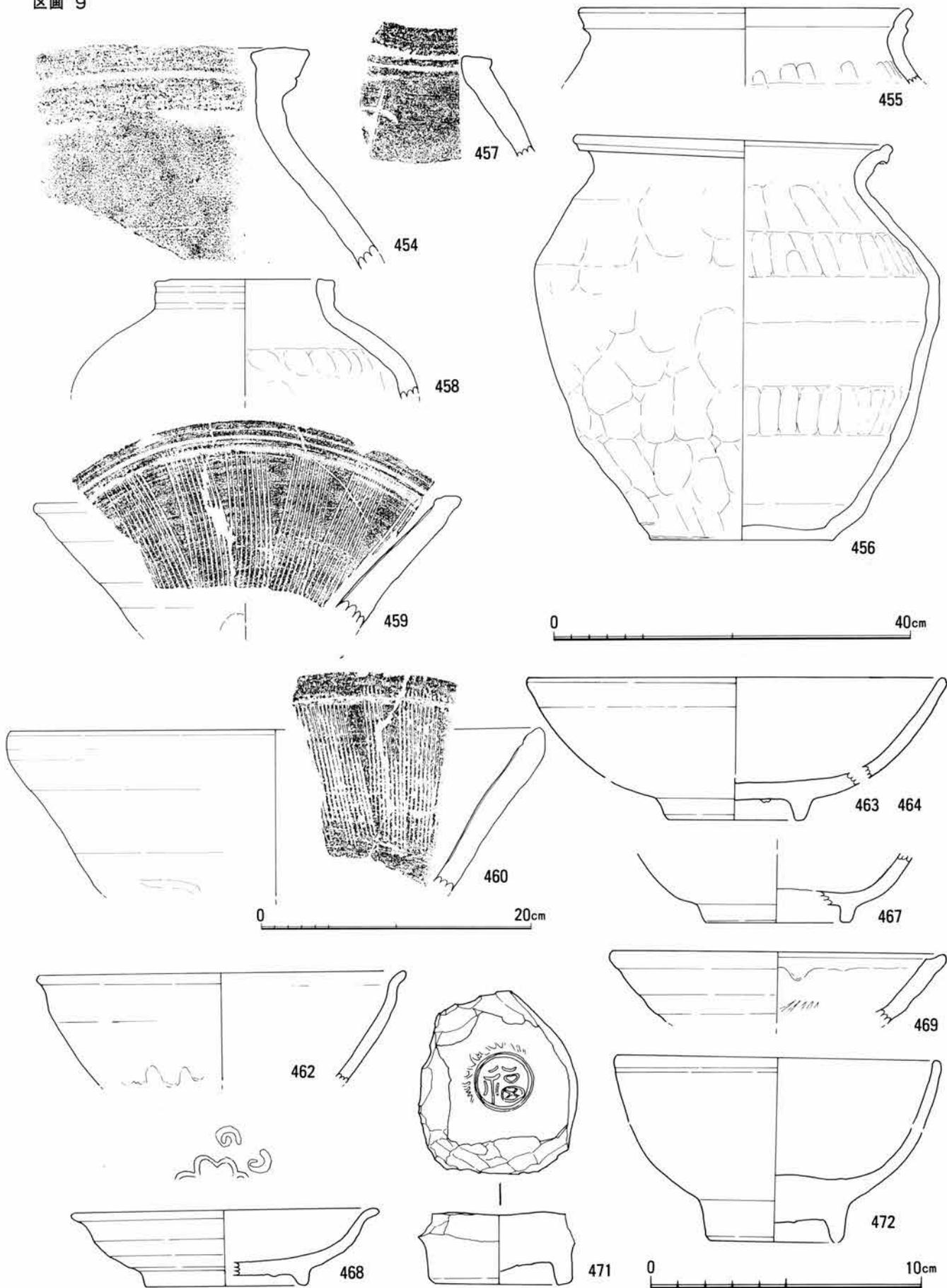


区画7 越前焼擂鉢417・418 土師質土器皿421・422 灰釉碗423・424 皿425 白磁皿428 染付碗429 皿432

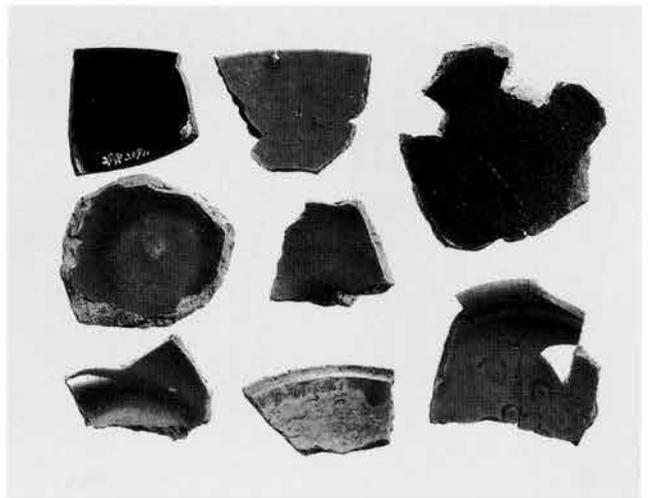
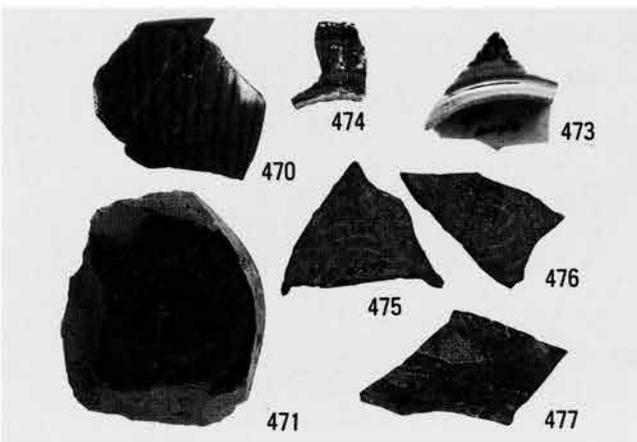
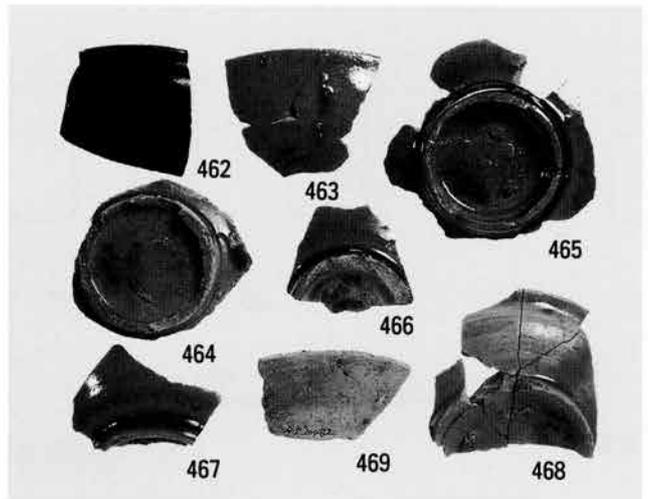
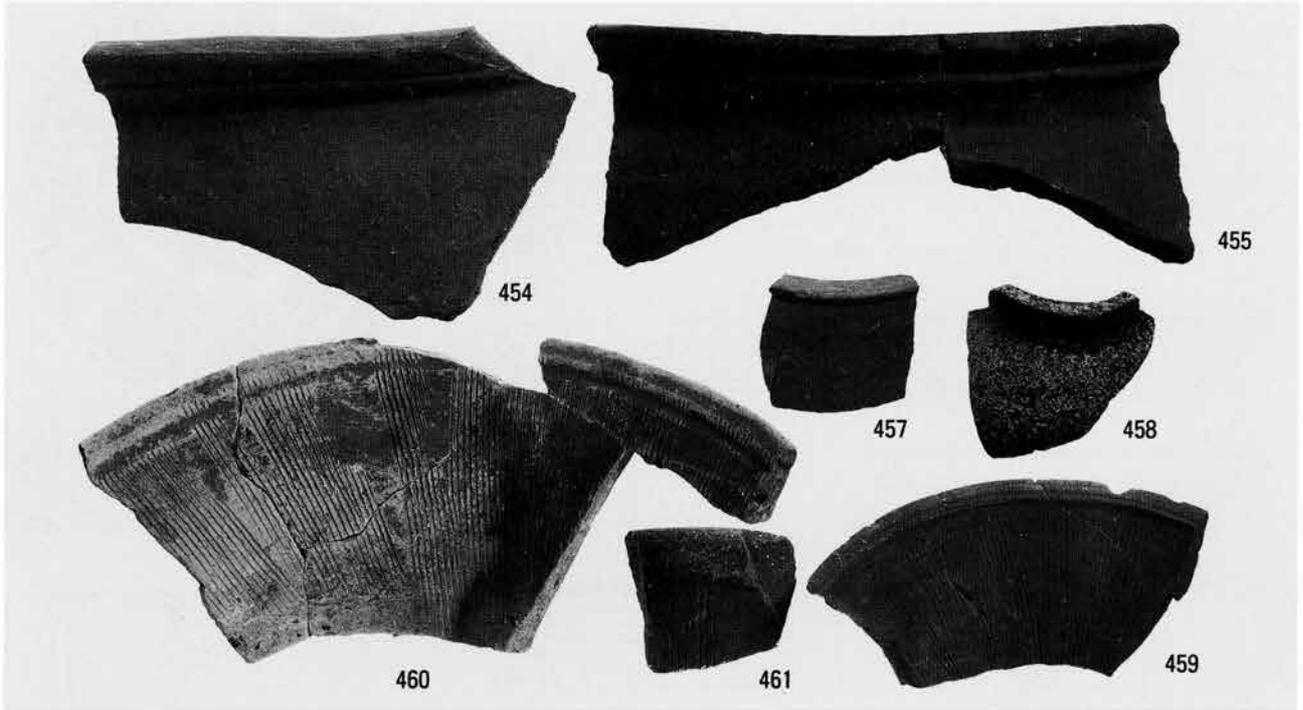
区画8 越前焼甕431 壺432・433 擂鉢434・435 灰釉皿443 青磁碗445 皿446 白磁447・448 杯449・450 染付碗451 石製品砥石452

第25図 第29次調査遺物(17) (上)

区画 9



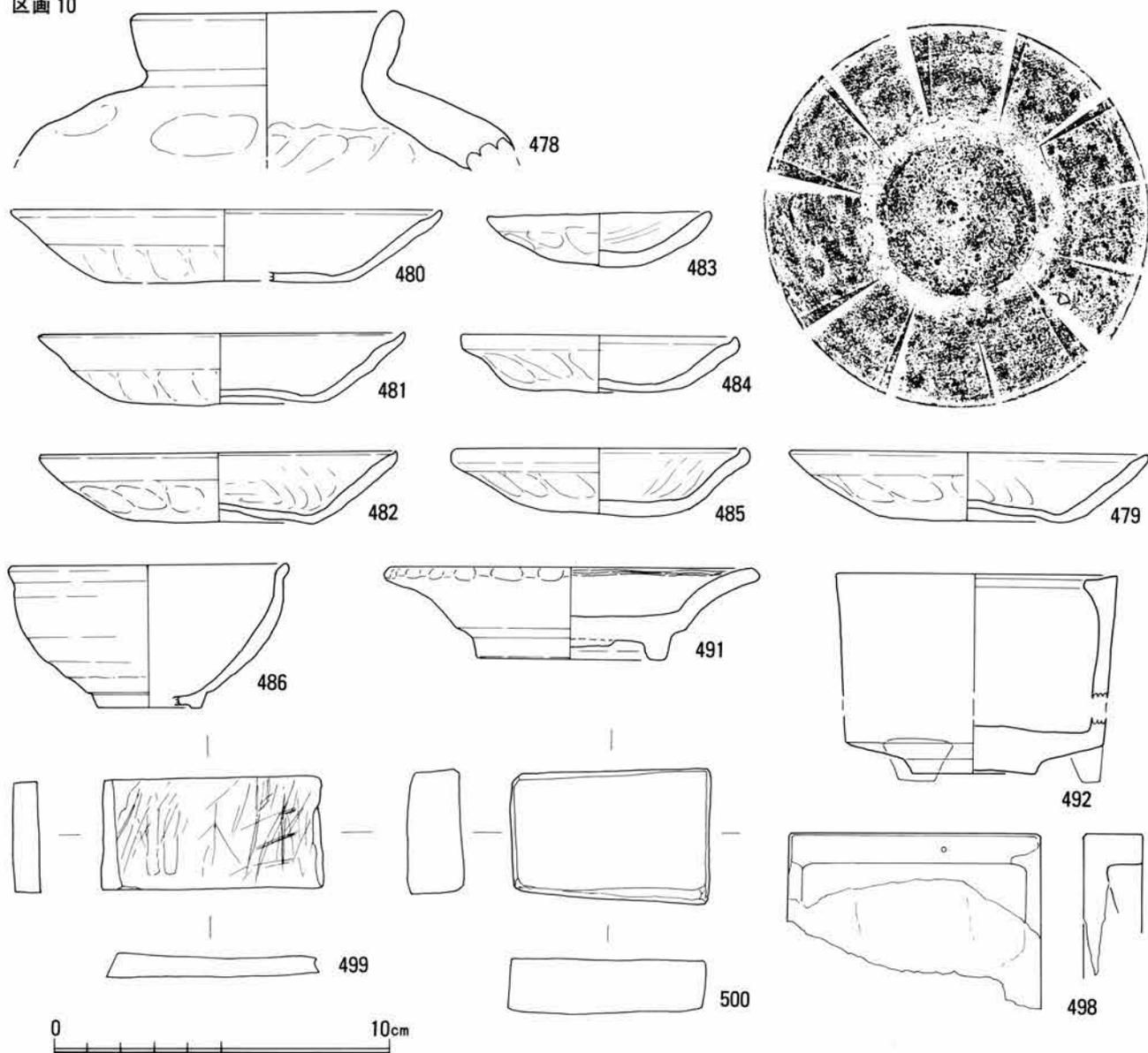
越前焼壺454・455 壺458 播鉢458・459 鉄釉天目茶碗462 灰釉碗463・464・467 皿468 卸皿469 青磁碗471・472



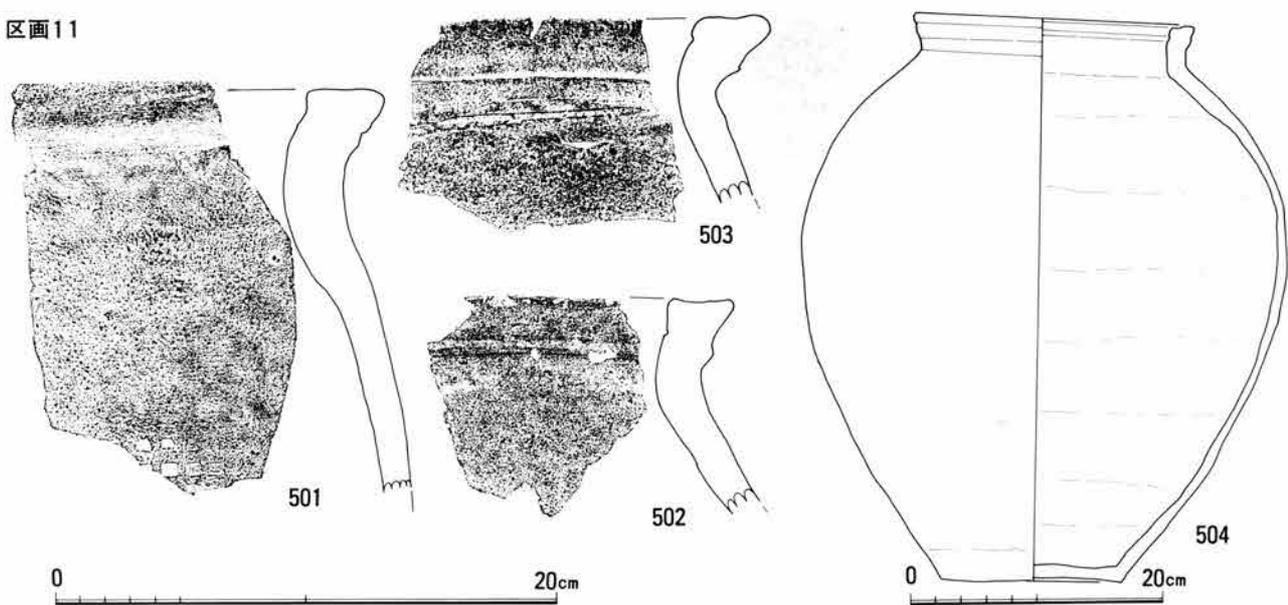
区画9 越前焼甕453~456 壺457 播鉢458~460 鉄釉天目茶碗461 灰釉碗462~466 皿467 卸皿467・468 青磁碗469・470 染付皿472 交趾皿473 朝鮮製陶器壺474~476

第26図 第29次調査遺物(18)

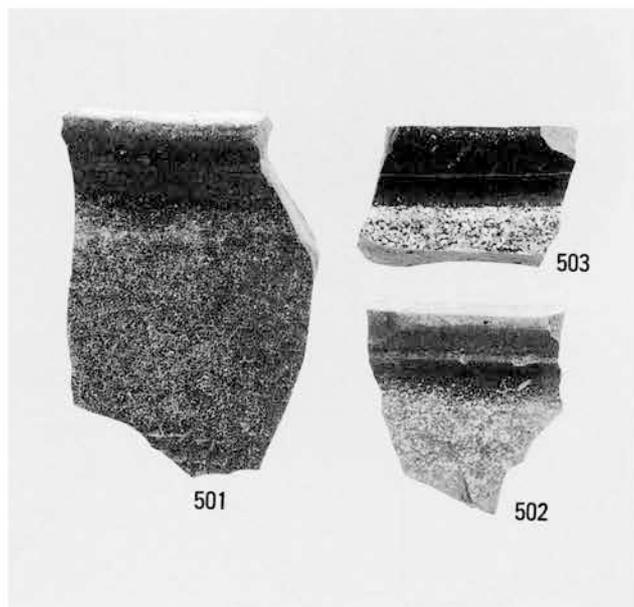
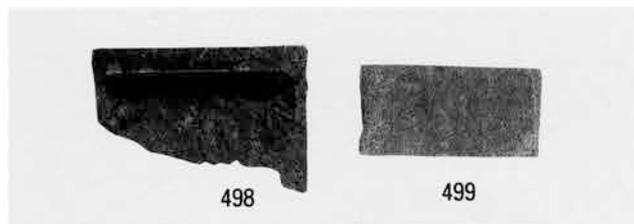
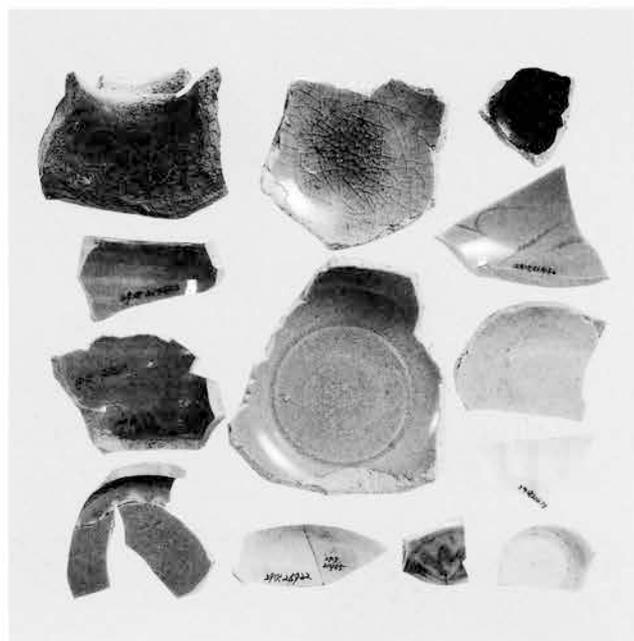
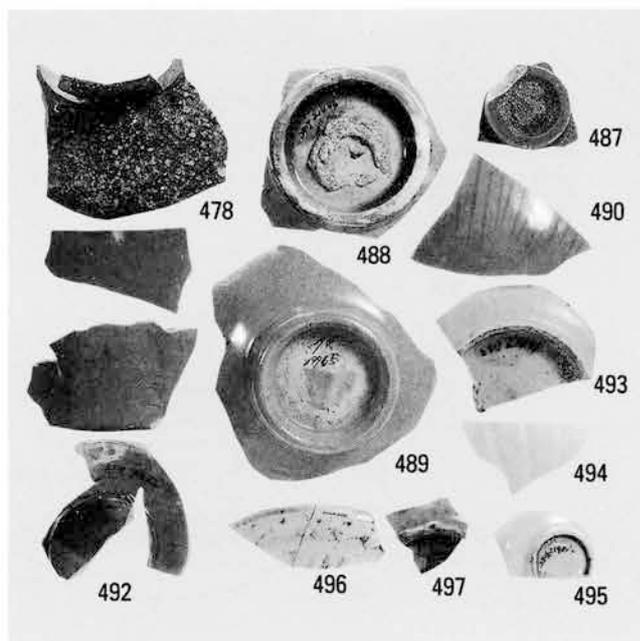
区画 10



区画 11

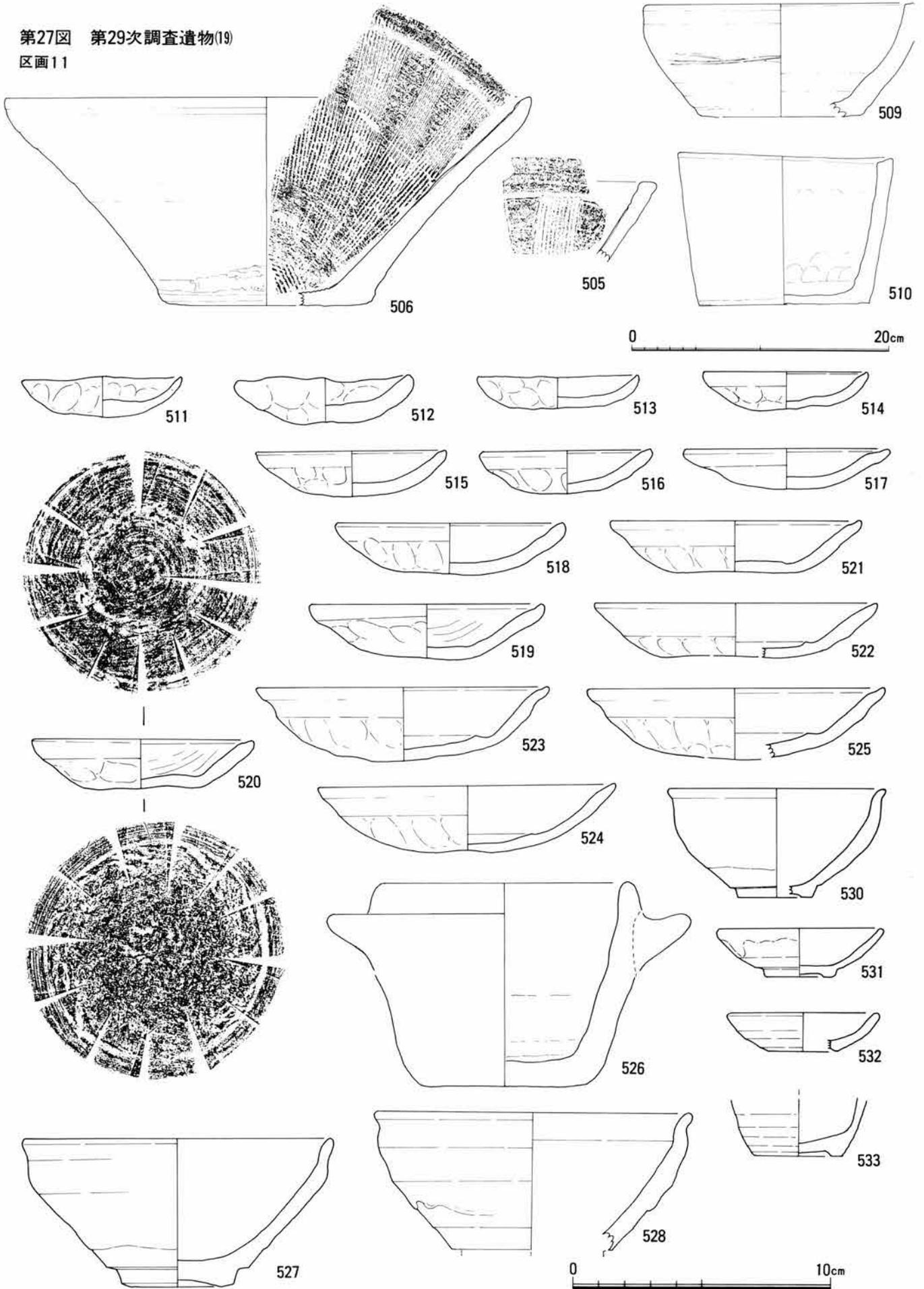


越前焼壺478 土師質土器479~485 鉄釉天目茶碗486 青磁皿491 香炉492 石製品硯498 砥石499・500 越前焼甕501~504

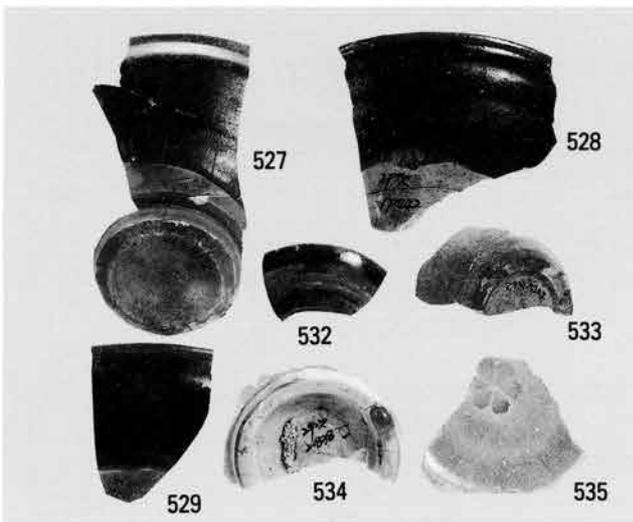
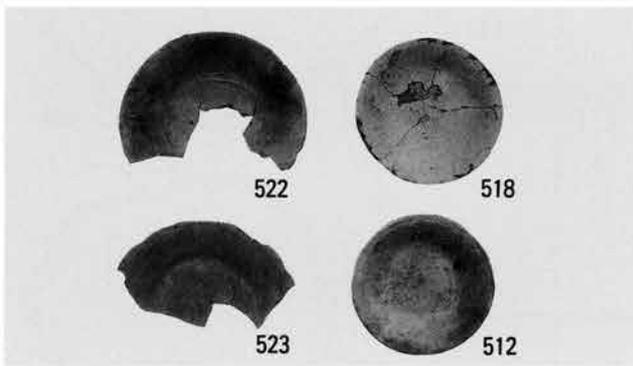
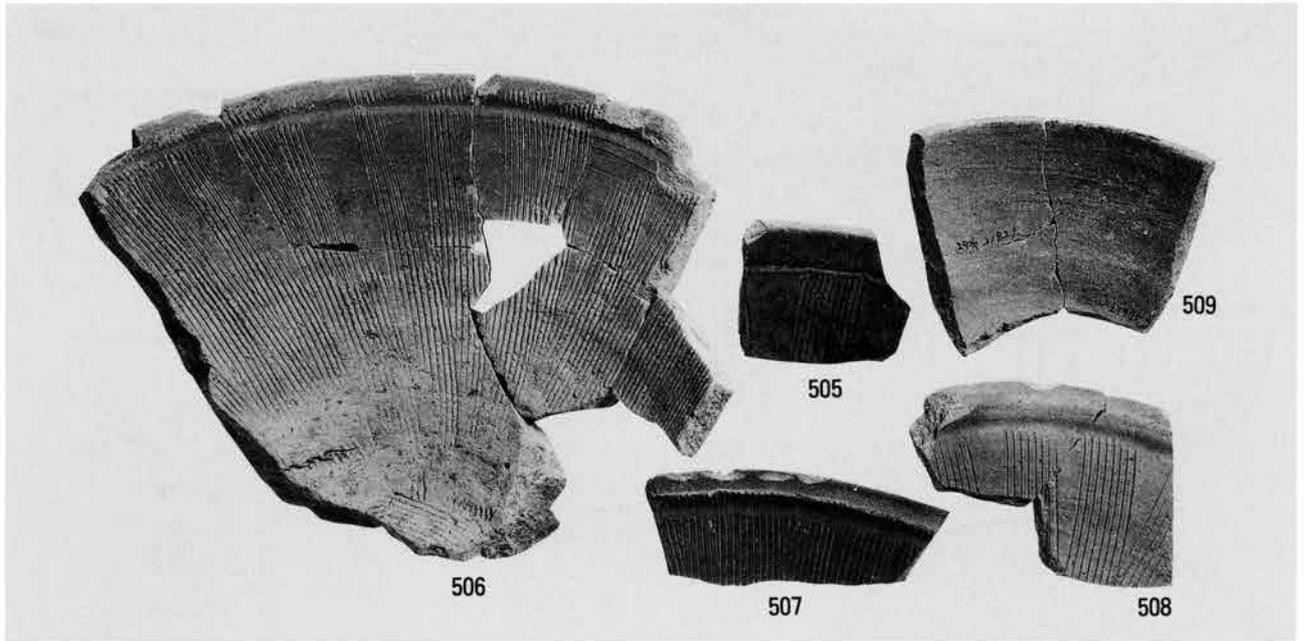


区画10 越前焼壺478 土師質土器皿479・484 鉄釉天目茶碗487 灰釉碗488 青磁碗489・490 皿491 香炉492  
 白磁皿493・494 杯495 染付皿496・497 石製品硯498 砥石499 区画11 越前甕501～504

第27図 第29次調査遺物(19)  
区画11

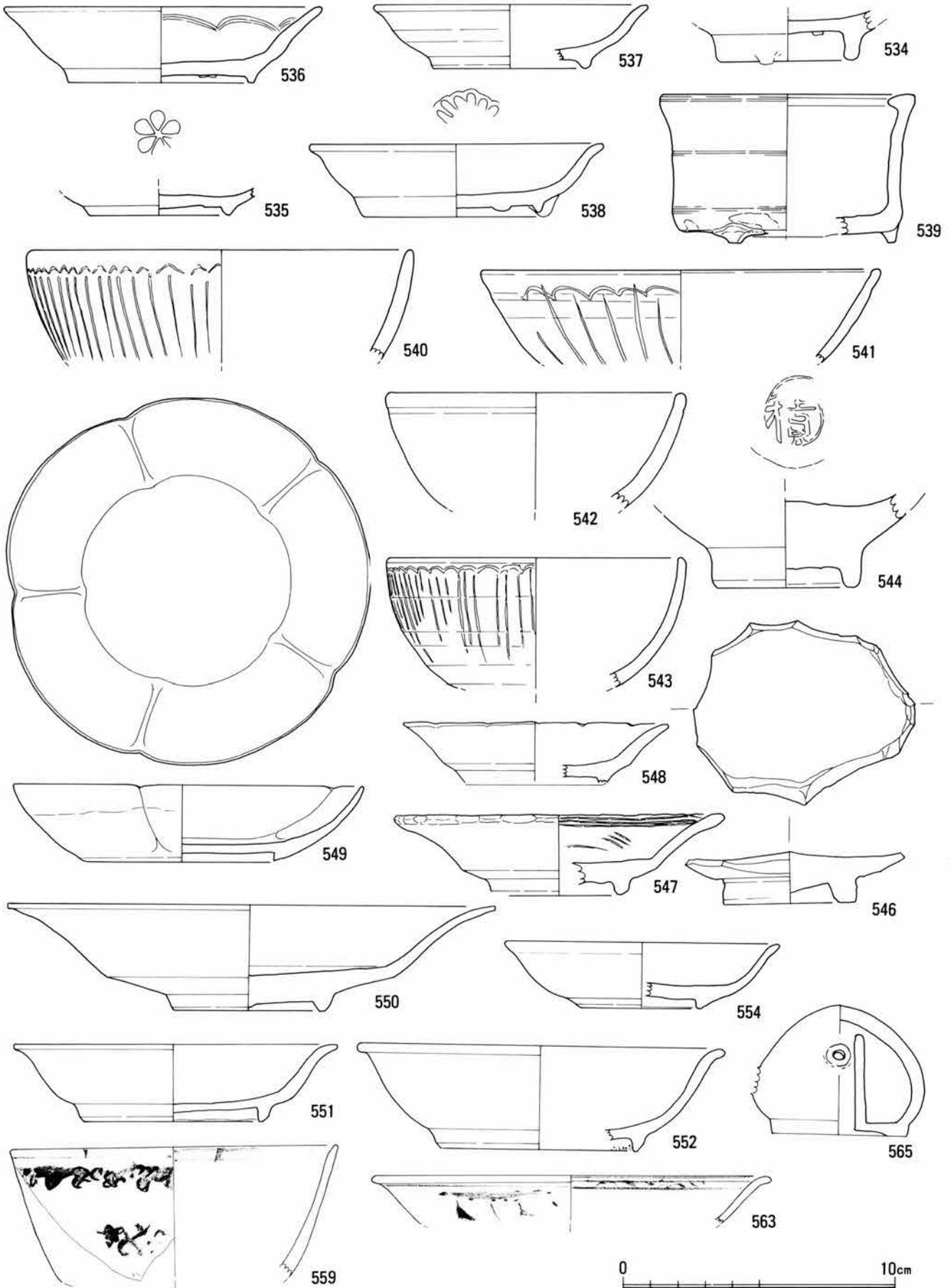


越前焼播鉢505・506 鉢509 水指510 土師質土器511～525 羽釜526 鉄釉天目茶碗527・528・529 小杯531・532 茶入533

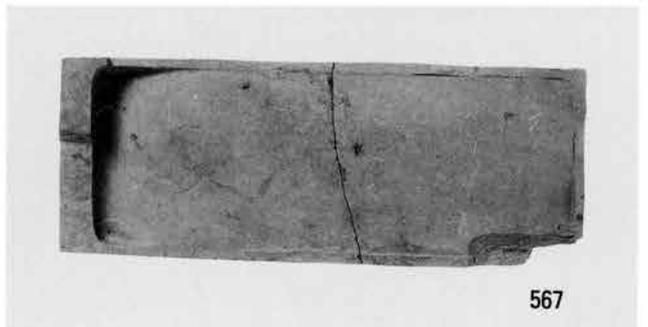
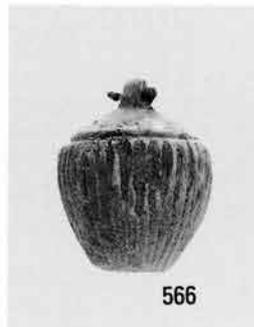
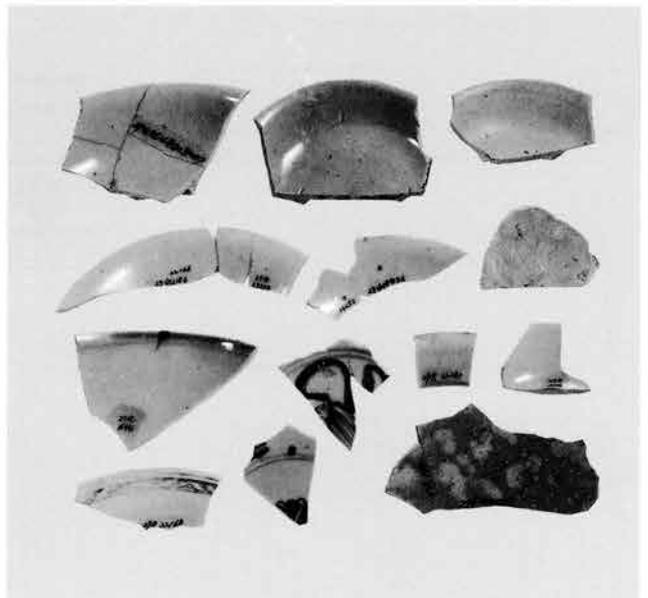
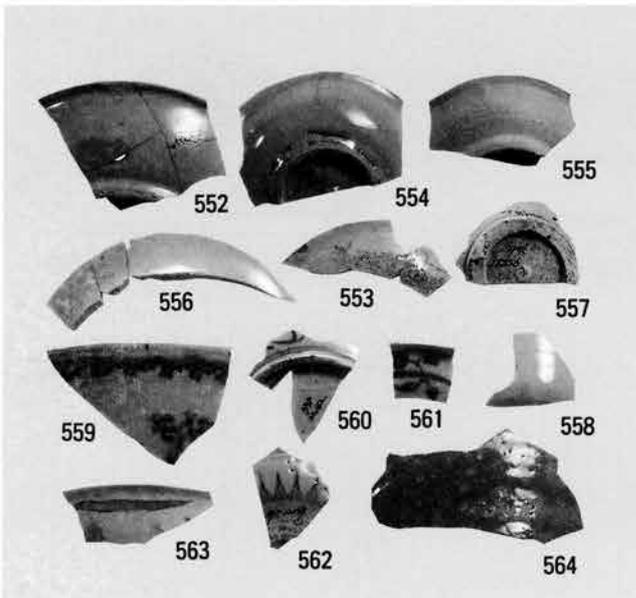
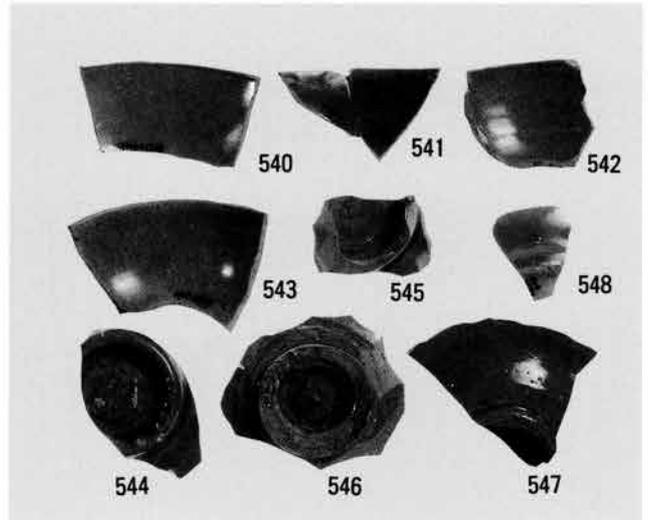


区画11 越前焼播鉢505~508 鉢509 水指510 土師質皿512・518・522・523 鉄釉天目茶碗527~529 小杯531・532 茶入533 灰釉碗534 皿535・536

第28図 第29次調査遺物(20)



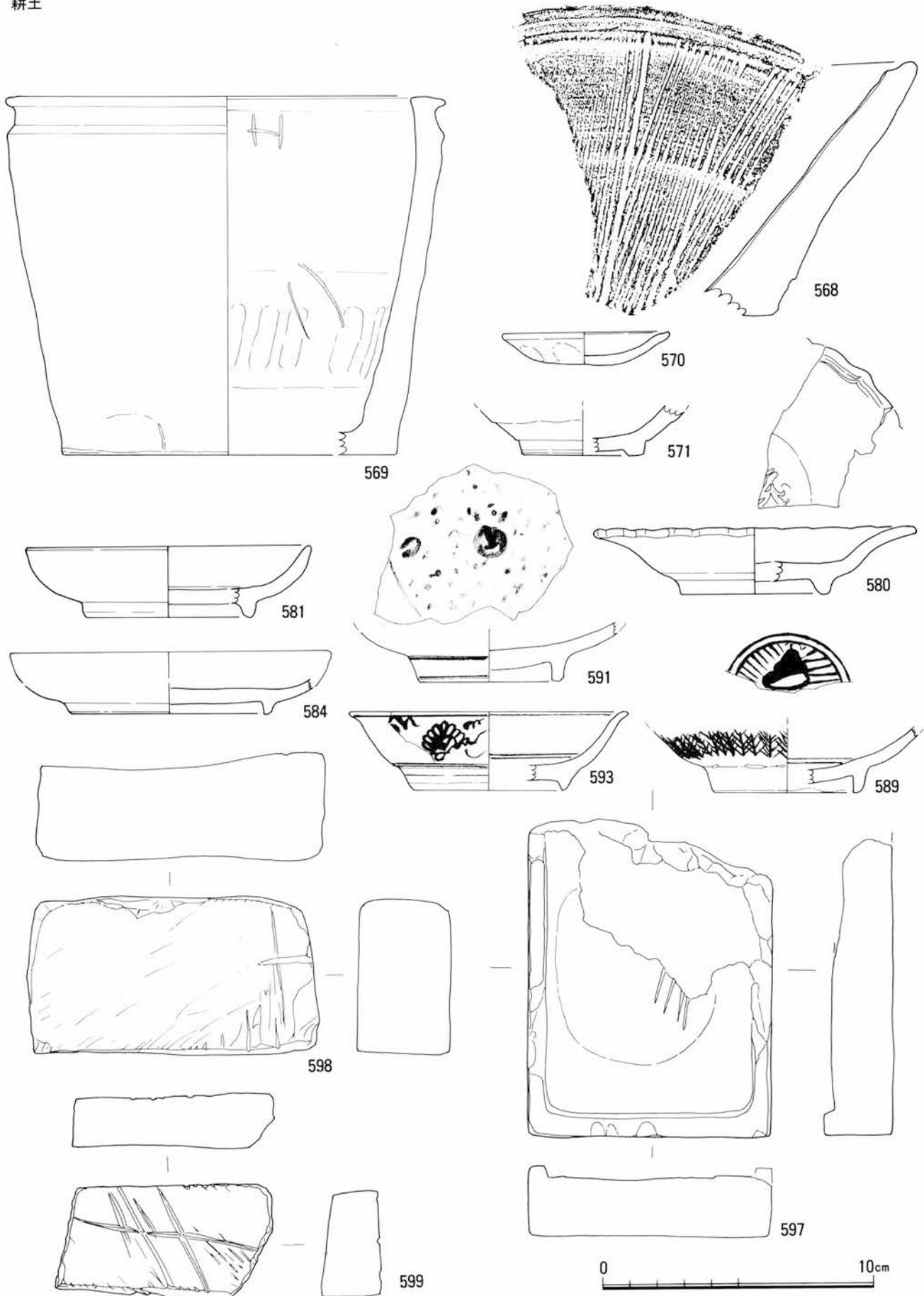
灰釉碗534 皿535~538 香炉539 青磁碗540~544 皿546~550 白磁皿551・552・554 染付碗559 赤絵皿563  
産地不明水滴565



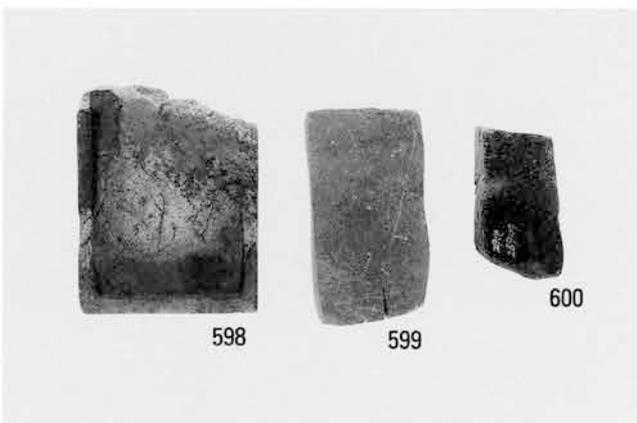
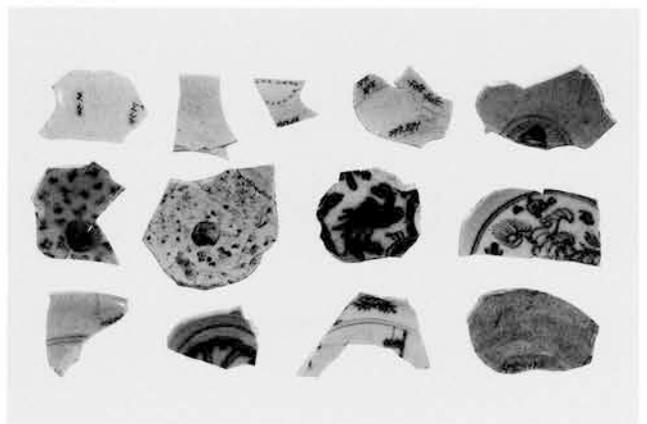
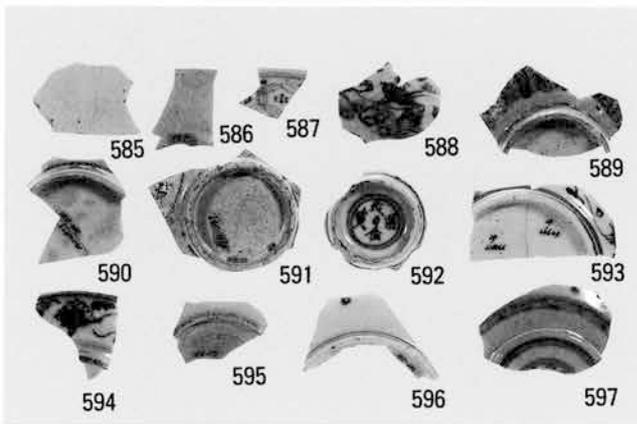
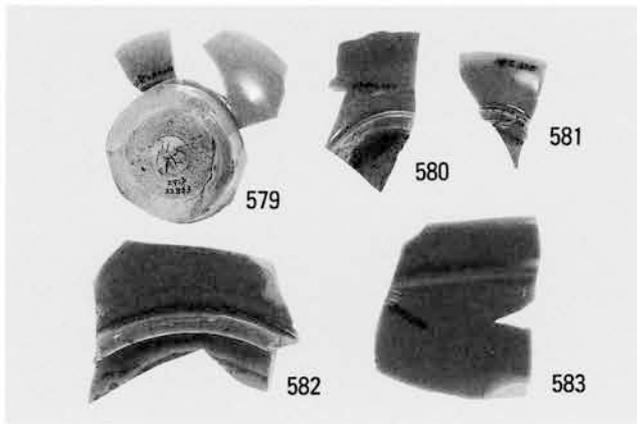
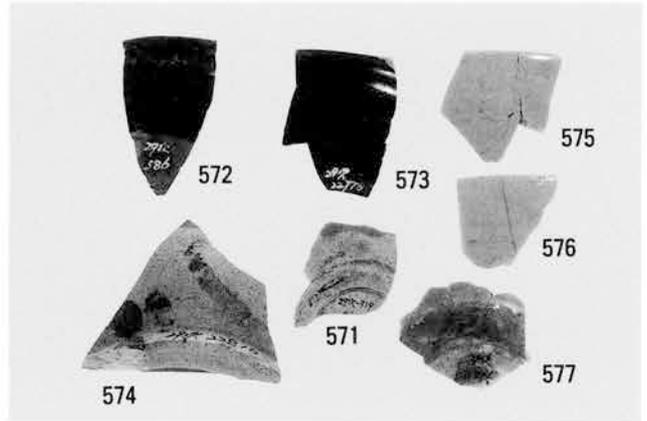
区画11 青磁碗540~545 皿546~550 白磁皿552~557 杯558 染付碗559 皿560~562 赤絵皿563 朝鮮製陶磁器碗564  
産地不明水滴565 金属製品銅製権566 石製品硯567

第29図 第29次調査遺物(2)

耕土



越前焼掃鉢568 水指569 土師質土器570 鉄釉天目茶碗571 青磁皿580・581 白磁皿584 染付碗589・591 皿593  
石製品硯597 砥石598・599



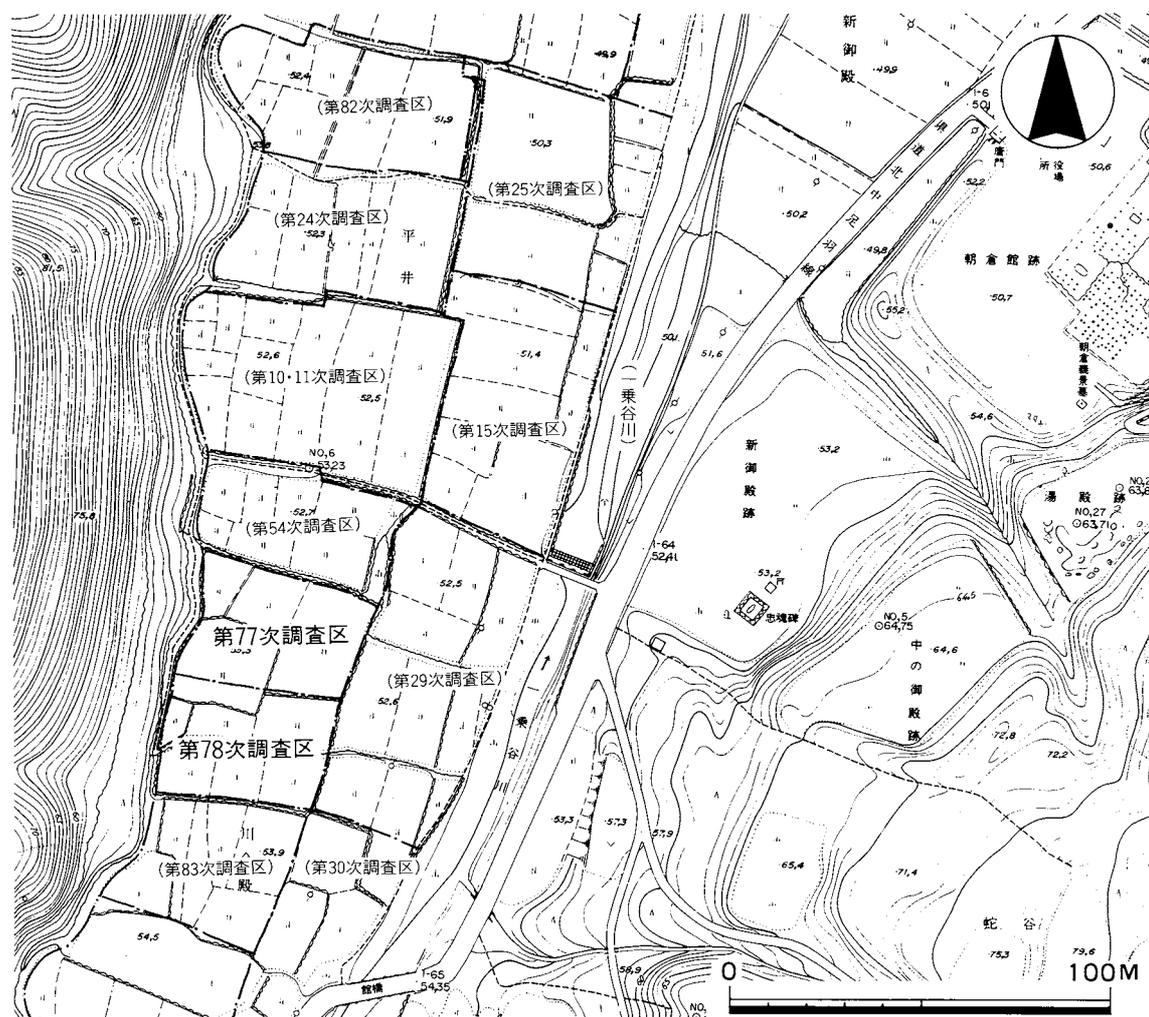
表土 越前焼播鉢568 水指569 鉄釉天目茶碗571~573 壺574 灰釉碗575~577 青磁碗579 皿580・581 盤582・583  
 白磁皿585・586 染付碗587~592 皿593~596 蓋597 石製品硯598 砥石599・600

### III 第77・78次調査

### III 第77・78次調査

#### 1. 調査の経過と概要

本調査の対象としたところは、都市遺跡「一乗谷」の中心であり、約1.7kmの距離を持って存在する上下の城戸によって区画された「城戸ノ内」の中程やや南にあって、一乗谷朝倉氏五代当主義景が居住したことが判明している朝倉館（『報告書I』）と、一乗谷川を隔てた対岸の南西約100mに位置している。この付近一帯の水田の区割り等からは、比較的整然とした大きな屋敷割が連続することが読み取られ、また、これを裏付けるように、江戸時代後期に描かれたとされる「一乗谷古絵図」にも「斎藤兵部大輔」・「新馬場」・「平井」・「鰐淵将監」・「河合安芸守」等の有力家臣の名を含む屋敷が記されていることもあって、注目されていたところである。そこで、この地区の様子を解明するため、第10・11次調査（昭和48・49年度、『報告書II』）が、この地区のほぼ中央にあって「新馬場」に比定されている、約3,665㎡で実施された。その結果、予想された通り、周囲に土塁を廻らす大規模な屋敷と南北方向の、幅4.5mの道路を検出した。引き続き、第15次調査（昭和50年度、『報告書IV』）、第24・25次調査（昭和



挿図20 第77・78次調査区周辺地形図 (1/2000)

52年度、『報告書IV』)、第29・30次調査(昭和53年度)、第54次調査(昭和61年度、『報告書II』)の各調査が実施され、計画的な町割の存在があきらかとなった。また、この間、昭和57・58年度には、この地区において、極めて遺構の残存状況の良い、約30m(100尺)四方の屋敷の立体復原整備(『環境整備報告書II』)が実施され、注目された。この事業は、わかりやすく、親しまれる史跡整備を目指す、史跡公園化計画の一つの柱である立体復原地区の創出を先取りするものであった。この計画は、平成3年度より、町並立体復原事業として、地区を貫く道路に面する建物群を復原整備するという形で、大きく展開することとなった。そこで、この町並立体復原事業の対象地に一部含まれ、未調査である西の山裾の屋敷について、調査を進める必要が生じた。その調査が、ここで報告する第77・78次調査である。

第77・78次調査は、福井市城戸ノ内町字川合殿地係、東西約45m、南北約58mに設定したもので、面積約2,600㎡の広さを有する。第29・30次調査によって既にその正面の門と土塁の一部が検出されている、南北方向の道路の西に位置する敷地間口約30m(100尺)の二つの屋敷で、北を第77次調査、南を第78次調査とする。調査は、平成4年4月1日に開始し、8月7日に前半の第77次調査を終え、次いで、後半の第78次調査に移り、11月9日に基本的な調査を終了し、11月17日に遺構平面実測図作成のためのヘリコプターを用いた航空写真測量を実施した。その後、若干の補足調査を行い、同年12月にすべての現場作業を終了した。なお、町並立体復原事業の工事進捗との関係から、これらの調査に先立って、道路に面する門とこれに続く塀の基底部である土塁の調査約360㎡を、平成3年4月1日から4月31日までの期間で実施している。

調査地周辺の地形は、南から北へ一乗谷川が流れ、この川を含め、平地部の幅は約160m程と狭く、また、東西の山からは小さな沢が流れ出て、これが小規模の扇状地を造りだしている。これを利用して農地が広がり、基本的には、山の存在する西、そして上流である南が高く、東、北が低くなっている。また、調査区の東端に位置する水田石垣を境にして東西に約0.5m程の高低差が見られ、同様に調査区の南端の水田石垣を境にして、やはり、南北に約0.5m程の高低差が見られる。海拔高は53~54mである。山裾の一段高い所には水田への給水路と農道が存在し、調査区内は、200~500㎡程度の面積を持ち、0.1m程のレベル差を持つ水田、10区画に分割されているが、これらの中では、山裾中央の約600㎡と最も大きな水田が最もレベルが高くなっており、少し不自然に感じられる点もあった。

調査は、まず、前半の調査区となる北半分について、以前の調査により生じた若干の廃棄土と水田耕作土を除去することから始めた。この過程で、不自然に高い区画となっていた山裾の広い水田は、江戸期においては狭い4区画の水田であったものを、明治中期以降の比較的新しい時期に盛土し、一つの区画としたものであることが判明した。このように、後世に盛られた土も多く、これらの除去に多くの労力を要することとなり、本格的な遺構検出作業に着手したのは6月に入ってからのことであった。まず、6月2日に隣接する第54次調査に準じてグリット設定のための地区杭打を行い、遺構検出を開始した。その後は、順調に調査を進めることができ、8月7日に第77次調査区とした北半部の調査を終了した。引き続き、第78次調査区とした南半部の耕作土の除去を進めた。北半部同様、耕作土と共に、二次的な盛土も含め、かなり厚く遺構を覆う土砂がみられた。この作業は、9月7日で終了し、翌8日、グリット設定のための地区杭打を行い、遺構の検出に着手した。約2か月をかけ、ほぼ遺構の検出を終えた。その後、検出遺構の写真撮影を行い、また、二つの調査区を併せて、写真測量を実施し、平面図を作成し、若干の補足調査を行い、現地における作業を終了した。

この調査を通じて、この地区一帯には、山裾を中心に大規模な屋敷が整然と並ぶことがより一層明らか

かとなり、一乗谷の町割に関する貴重な成果が得られた。しかし、屋敷を区画する門や土塁等の外回りの遺構は残されていたものの、内部の遺構は、削平されたところも多く、残存状況は、決して良好とはいえ、屋敷内の建物等の詳細を解明するには至らず、今後の調査に課題を残すこととなった。

なお、各調査成果の詳細については屋敷毎に第77次調査、第78次調査の二つに分けて述べるとともに、ここでは、屋敷としての完結性を考慮し、屋敷の正面を区切る第29・30次調査で一部を検出し、改めて、これを前年に発掘調査した門、土塁を含めて報告することとした。また、これらの屋敷の境界となる東西方向の土塁は、それぞれ上段の屋敷に含めて報告している。

## 第77次調査日誌抄

(1992年 4月 1日～ 8月 7日)

### 4.1 調査開始。休憩テント、道具小屋等設置。

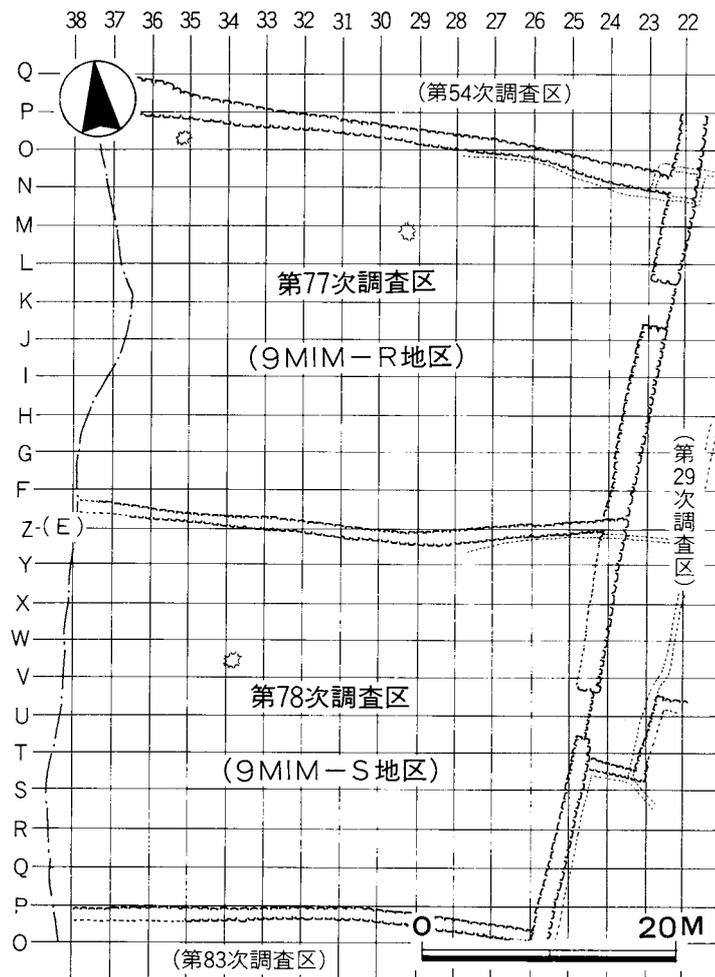
第29・54次調査廃土と共に耕作土除去作業を始める。土量も多く、作業には、かなりの日数を要した。途中で、水田が大きく盛土されていることが判明し、

これの除去も実施する。

なお、この作業の間に、前年度調査(第74・75次調査)の補足調査をも実施する。

### 6.2 表土除去作業終了。

グリッド設定、地区杭打。屋敷を区切る土塁方位



挿図21 第77・78次調査グリッド設定図

とは異なるが、従来の調査と合わせることにする。

- 3 西南部より、遺構の検出作業を始める。以前の調査により検出している北境界の土塁S A3310の屋敷側の基礎部石垣の確認を優先する。井戸S E4130等検出。
- 4 石積施設S F3329を検出。
- 5 石積施設S F3328を検出。
- 9 溝S D4177、井戸S E4131等を検出。R K28付近で銅鏡が出土。
- 10 礎石列S A4124、石積施設S F4137を検出。
- 15 溝S D4178、石積施設S F4132を検出。
- 7.1 石敷の建物S B4129、石積施設S F4133・4134等を検出。

3 第1回の全体の遺構検出作業をほぼ終了。削平部が多いことが判明。特に屋敷前寄りの東は、ほとんど遺構が残らないため、更に下層の調査を実施することとした。

- 6 下層でピット列S A4123等を検出。
- 10 33ラインの土層観測用畔に沿って西に深堀トレンチを設定する。
- 17 井戸S E4138の掘り下げを実施。
- 22 28ラインの土層観測用畔に沿って西に深堀トレンチを設定する。
- 8.3 遺構検出作業終了。写真撮影のため、清掃作業を行う。
- 7 遺構写真撮影実施。現場作業終了。

## 第78次調査日誌抄

(1992年 8月10日～12月25日)

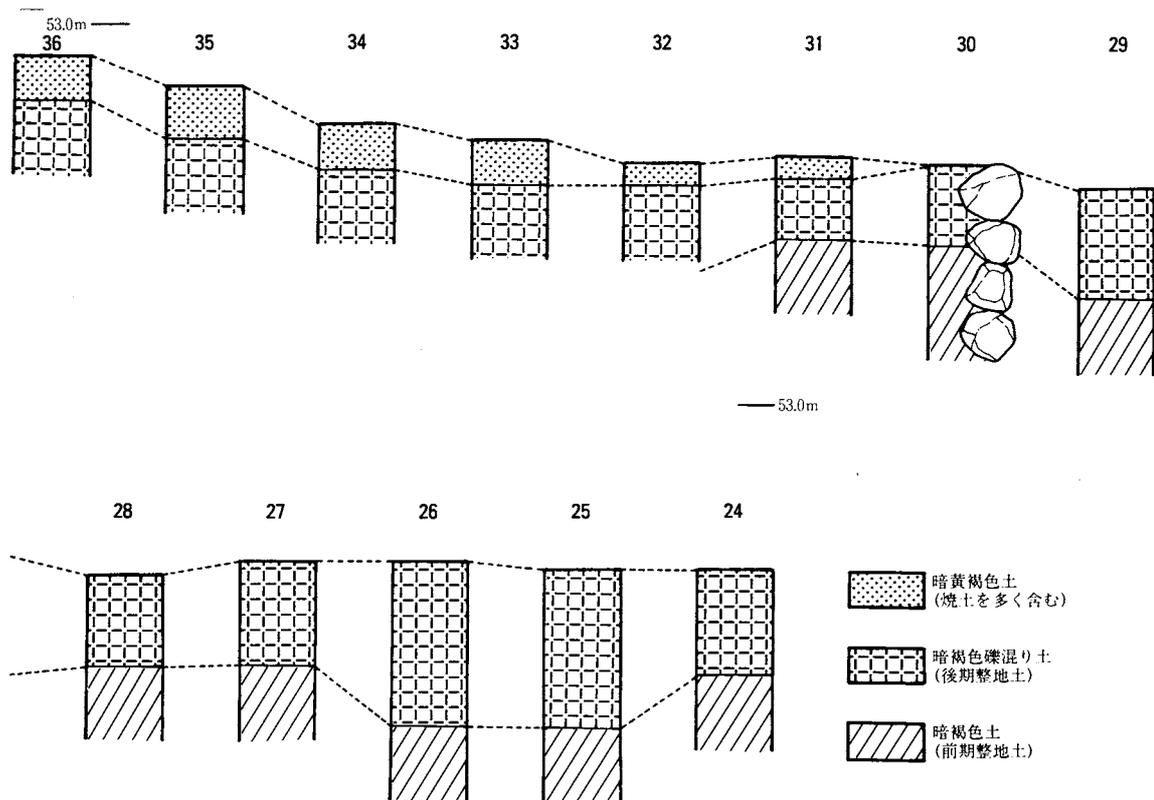
- 8.10 調査開始。耕作土等の表土取を始める。
- 18 水田面の積上げが判明し、この除去を開始する。径0.6m前後の比較的大きな石が埋め込まれている。
- 21 表土除去終了。この中に含まれていた石を撤去する。
- 27 S32付近の床土直下より、鍬形台、鉄鍋片等出土。
- 9.7 西北部の水田は0.8m程盛り土していることが判明し、この除去を実施。
- 8 グリッド設定、地区杭打。遺構検出開始。
- 9 復原工事工程に関連し暗渠S Z1091の検出を実施、図面作成。溝S D4201の西石列を検出。
- 16 石積施設S F4212、石列S V4216等を検出。
- 17 西北部の遺構群S B4208・4209等を検出。
- 18 溝S D4205等を検出。
- 21 屋敷の北境界土塁S A4127の南に沿う東西溝S D4200を検出。
- 22 屋敷の東部のほとんどが削平を受けていることが判明する。屋敷の東境界土塁S A981をくぐる暗渠S Z1092を検出。

- 24 土層観測用畔28ライン南半の東に深堀トレンチを設定。下層は自然の礫層であり、遺構は存在しないことが判明する。
- 28 西半中央部の遺構検出作業。約0.1m下層ではつきりとした整地面を確認。
- 10.2 井戸S E4211、石積施設S F4212・4213等を検出。
- 7 西山裾で、溝S D4205等検出。
- 13 中央の土層観測用畔Uラインに沿って、北に深掘りトレンチを設ける。
- 16 下層遺構確認のために北へ拡大したトレンチの井戸S E4211の北で石敷等を検出。
- 23 鍵の手に曲がる溝S D4201・4202を検出。
- 28 土層観測用畔の清掃を行い、引き続き遺構の清掃に移る。
- 29 土層図作成。
- 11.5 基本的な調査はほぼ終了する。
- 17 前半の第77次調査区と併せて、遺構図作成のため、ヘリコプターによる航空写真測量を実施。
- 18 遺構写真撮影実施。現場作業終了。以後、遺構保護のため一部埋め戻し等を行う。

## 2. 第77次調査遺構（第30図～第36図，PL.33～PL.40）

ここで取り扱うのは、概要で述べた通り、主として第77次調査により検出された、南北方向の道路に面し、西の山裾との間に位置する、敷地間口約27m、奥行き約50m（山裾の未調査部を除く）の屋敷である。この屋敷を構成する建物群については、水田化に伴う削平等を受け、明確ではないものの、検出された主な遺構として、屋敷を区画する土塁3、門1、建物4、溝5、井戸3、石積施設8等があげられる。削平や砂利を多く含む整地土が基本であることもあり、明確さを欠く点もあるが、これらの遺構は、基本的には前後2時期に分けて考えることができ、後期は、この一乗谷の町が朝倉氏と共に滅亡した天正元年（1573）に存在した最終時の遺構、これに先行するのが前期の遺構で、この二つの遺構面には0.2～0.4mの差がみられ、この間は砂利を多く含む土で整地されている。なお、前期の遺構については、断ち割調査等による断片的な検出に止まる。この二つの時期においては屋敷割に変化はないが、深掘りトレンチにおいて、これら屋敷割（＝町割）に伴う遺構に先行する生活面の一部が確認されている。なお、これまでの調査例では、この地区の町割策定後の遺構は3期に分離される例が多いこと、上面が削平を受け明確でないこと等をあわせ考えると、ここで後期の遺構としたものが、さらに二つに分離される可能性も残されている。

また、ここにおける記述で用いる方位は、谷の奥を南、入り口を北とするもので、屋敷が面している正面の道路側が東、奥となる山裾側が西としているが、正確には、正面の土塁石垣方向と第VI系方位との間ではN17°Eのずれがある。また、遺構平面図等に記した数値は、第VI系座標に基づく位置を示すものである。



挿図22 第77次調査区東西方向土層模式図

**S A 979・980** 調査区東端に位置し、屋敷の正面となる南北方向道路 S S 976 に面する南北方向の土塁。前後期を通じて存在する。やや北寄りに存在する門 S I 1083 により、南北二つに分かれ、北を S A 979、南を S A 980 とする。S A 979 は、幅 2.4 m で、門の北袖石から北に隣接する屋敷との境の土塁 S A 3310 との交点までの距離は約 7 m である。この土塁の裾を固める石垣をみると、検出された道路に面する正面（東面）の石垣は、径 0.6~1.2 m の比較的大きな石を 1 石並べ、高さは 0.6 m 程である。しかし、門の袖石の高さや、この石垣と連続する北隣の屋敷で残る石垣の高さが 1.5 m 程であることから、本来は、やはり同程度の高さを有していたと推定される。これに対し、屋敷内面（西面）の石垣は、残されている石の径も 0.3~0.6 m と小さく、また、残存状況も劣る。屋敷の外と内には意識の差があったことは明白である。なお、この土塁の屋敷北端、東西方向の土塁との交点には、この土塁裾を流れてきた溝を屋敷の外へ排出する暗渠 S Z 1090 が存在する。S A 980 は、幅は基本的に 2.4 m であるが、屋敷内の石垣についてはその基礎部が一部残るのみで、明確でない点もあり、また、南端部では 2 m 程と若干狭くなっていたことも考えられる。門の南袖石から南に隣接する屋敷との境となる東西方向土塁 S A 4127 との交点までの距離は約 15 m である。正面（東面）の石垣は、S A 979 とほぼ同様であって、0.6 m 程度の高さを持って、1~2 石が並ぶが、少し小振りの石もみられる。この二つの土塁は、正面の石垣を基準に考えると、ほぼ直線となるが、北隣の屋敷の土塁石垣とは約 5° ずれがあり、屋敷からみて、内に曲がっている。（第 36 図，P L.37・38）

**S A 3310** 屋敷の北境界となる東西方向の土塁。前後期を通じて存在する。裾を固める石垣の崩れたところも多く、また、幅、方向とも一定ではない。最も残存状況の良い中ほどでは、幅 1.2 m、高さ 1.2 m であり、東の正面土塁 S A 979 との取り付き部では、幅 1.8 m である。検出長は約 45 m であるが、西の山裾へ向かってさらに延びている。石垣は、隣の屋敷に面する北面が高く立派であり、この土塁を境にして、南北の屋敷には 0.4 m のレベル差がみられる。この土塁 S A 3310 と正面の土塁 S A 979 とはほぼ直交するが、この屋敷からみて、内角は 92° ほどで、若干開いているようである。なお、この土塁の東端部にはこれを横断して北の屋敷へ排水する暗渠 S Z 3374 が設けられている。（P L.37）

**S I 1083・S B 4128** 屋敷正面の門とその建物。前後期を通じて存在する。門 S I 1083 は、屋敷のやや北寄りに存在し、間口は正面で 3.3 m であるが、屋敷内に向かって少し狭くなっている。南の袖石は、原位置を保っており、正面幅 0.9 m、高さ 0.8 m、奥行き 0.7 m の大きさの角のある石が用いられている。北の袖石は抜き去られていた。道路との見切りの石列は、径 0.4~0.6 m の扁平な石を並べるものであって、道路面から 0.15 m の段差を持つ。また、この石列は土塁正面石垣からは、0.2 m 内側に位置している。門建物 S B 4128 は、本来礎石 4 個から構成されるものとみられるが、原位置を保っているのは正面南と奥北の 2 個である。また、正面礎石間には狭間石がみられる。正面 2.1 m（7 尺）、奥行き 1.5 m（5 尺）の規模と判断される。なお、この門建物の柱礎石及び狭間石と門の見切り石列の間隔は 1.5 m であり、高低差は 0.2 m である。（P L.38）

**S D 3332** 屋敷の北境界となる東西方向の土塁 S A 3310 に沿う石組の溝。前後期を通じて存在すると考えられる。検出長は 22 m 程であって、西半は側石を欠くとともに、屋敷の西端までは延びていない。幅は 0.3~0.4 m、深さは 0.3~0.4 m である。この溝の屋敷外への排水経路は二つ検出されている。第 1 は、そのまま直進し、暗渠 S Z 1090 を通すもの、第 2 は、東端で屋敷境界の南北土塁を潜る暗渠 S Z 3374 で北の屋敷へ出た後に道路に面する土塁 S Z 1089 を通して排水されていたものである。当初は、後述した第 2 の経路であったものを後に第 1 の経路としたようにみられるが、不明な点も残る。

**S D4177** 屋敷の中央付近で検出された南北方向の石組の溝。後期の遺構である。検出長は2.4m、幅0.3m、深さ0.15m。

**S D4178** 屋敷の北半中ほどで検出された素掘りの溝。後期の遺構である。中央付近の長さ4.5mの南北方向の部分と、この北に約7m離れ、南北方向から東西方向へとL字型に曲がる約10mの部分に分かれるが、本来は一つであったと考えられる。幅は0.4m、深さは0.15mである。

**S D4179** 屋敷の南境界となる東西方向の土塁S A4127の裾で検出された東西の溝。明確ではないが、後期の遺構と考えられる。奥である西半部のみで断片的に残されている。幅は0.3m程とみられる。この溝の東への延長上に存在する東西の石の集まり、S X4165・4166・4167はこの溝の名残の可能性が高い。(P L.37)

**S Z 1090** 屋敷の東北隅に位置する南北方向土塁S A979に設けられた溝S D3332を受けて屋敷の外へ排水する暗渠。基本的には、前後期を通じて存在した遺構と考えられるが、後述する暗渠S Z3374との関係も有り、若干不明な点も残る。土塁S A979の東面石垣における開口部で、縦0.2m、横0.15mほどである。天井石は残らない。また、底に敷石はみられない。

**S Z3374** 屋敷の北境界となる東西方向土塁S A3310の東端近くに設けられた暗渠。前期の遺構と考えられる。溝S D3332を受けて、北隣の屋敷の東南隅部へ排水し、前述した暗渠S Z1090の北約2.5mに存在する暗渠S Z1089を通して排水する。暗渠S Z1090に先行すると考えられる。

**S A4121** 門の近くで検出された南北方向のピット列。不明な点も残るが、前期の遺構ではなかろうか。3個のピットからなり、その間隔は南から、1.2m、2.5mである。径は0.3m、深さは0.1mと浅く、すり鉢状であることから、礎石の抜き跡の可能性も考えられる。門建物と約3m離れるのみで、ほぼ相対していることから、塀の一部ではなかろうか。

**S A4122** 門の南で検出された東西方向のピット列。前期の遺構と考えられる。4個のピットからなり、その間隔は東から、2.7m、1.4m、1.2mと、一定しない。径、深さとも不揃いであるが、約0.6mと深いものもあることから、掘建柱の跡と考えられ、塀と推定される。

**S A4123** 屋敷の前面土塁脇で検出された南北方向のピット列。前期の遺構と考えられる。4個のピットからなり、その間隔は南から、1.5m、2.1m、0.7mと一定ではないが、径、深さは、それぞれ、0.5m、0.3mとほぼ統一されている。若干不明な点も残るが、掘建柱の跡で、塀と考えられる。

**S A4124** 屋敷の前寄り中央付近で検出された南北方向の礎石列。後期の遺構。間隔にばらつきが有り、断片的に残るのみで、性格等は明確でない。塀もしくは建物の礎石と考えられる。

**S A4125** 屋敷の前寄り南半で検出された南北方向のピット列。後期の遺構。ピットの形状は、径0.3m、深さ0.3m程であるが、間隔は、一定でない。掘建柱の跡で、塀と考えられる。S A4124の南延長上に位置している。

**S A4126** 屋敷の中央部で検出された南北方向のピット列。後期の遺構と考えられる。ピットの形状は、径0.5m、深さ0.2m程。間隔は、南から2.7、1.2、1.8、1.5mと一定でない。掘建柱の跡で、塀と考えられる。

**S B4129** 屋敷の西南部で検出された石を敷き詰めた建物。後期の遺構。東西、南北とも約4mであるが、東についてはもう少し広がっていた可能性も残されている。まず周囲に長径0.4m前後の扁平な石を内部に面を作るように並べ、この内に同程度の石を敷き詰めている。周囲の石には柱の痕跡がいくつか残されており、その間隔の基本は約0.9mほどとみられる。こうした石を敷き詰める建物は、この遺

跡の調査例としては4例が知られている。倉庫、蔵と考えられている。(P L.39)

**S B 4181** 屋敷中央部北寄りで検出された建物礎石。東西に約0.8m程の間隔で並ぶ3個が残るのみで、規模等は明らかでない。前期の遺構ではなかろうか。

**S E 4130** 屋敷中央部北寄りで検出された石積井戸。後期の遺構。径1.1m程と少し大振りである。深さは3.2mで直接湧水層である礫層の上に自然石を積み上げる構造である。また、この井戸の周囲約3mはよくしまった砂利面となっている。(P L.40)

**S E 4131** 屋敷の西北隅近くで検出された石積井戸。後期の遺構。径0.7m程、深さは未確認である。(P L.40)

**S F 3328・3329・4132** 屋敷の北境界土塁S A 3310に接して検出された石積施設群。中ほどやや西よりに位置するのがS F 3328。第54次調査によりその一部が確認されていた。東西、南北とも約2m、深さは約1mと大きい。この西約6mに位置するのがS F 3329。同様に第54次調査によりその一部が確認されていた。東西1.2m、南北1.4m、深さ0.6m。共に後期の遺構。前寄りにあって今回新たに検出されたのがS F 4132。東西3m、南北1.2m、深さ0.7m程。北面は崩れている。土塁に沿う溝S D 3332の下層に位置するようであり、前期の遺構の可能性が高い。また、この底でこの遺構に先行する井戸の一部と考えられる遺構S X 4147が検出されている。(P L.40)

**S F 4133** 屋敷の中央部で検出された石積施設。後期の遺構。東西、南北とも約1.2m、深さ0.5m。(P L.40)

**S F 4134** 屋敷の中ほど南西寄りで検出された石積施設。後期の遺構。少し異質で円形に近い隅丸方形で、西北隅のみ若干角がみられる。径約1m、深さ0.5m程。(P L.40)

**S F 4135・4136** 屋敷の南境界土塁S A 4127の脇、西奥で検出された石積施設。後期の遺構。二つが東西に接して並び、東にあって、東西1.3m、南北1.4m、深さ0.4mの規模を持つのがS F 4135。この西壁を兼用するように西に接する東西1m、南北0.9m、深さ0.5mと少し小規模のものがS F 4136。(P L.40)

**S F 4137** 屋敷の中ほど西北寄りで検出された石積施設。後期の遺構。周囲の石積はかなり崩れており、規模等若干はっきりしない点も有るが、東西0.9m、南北0.8m、深さ0.5m程とみられる。

**S K 4138** 屋敷の東南部で検出された土壇。前期の遺構。径0.7m、深さ0.3m程。

**S K 4139** 屋敷中ほど南寄りで検出されたピット群。前期の遺構。3個がほぼ南北に並び、径は0.6m程、深さは0.1m程と浅い。

**S K 4140・4141・4142** 屋敷中ほどで検出された土壇。ともに後期の遺構。S K 4140は径0.8m、深さ0.3m程。S K 4141はその西約3mにあって、径0.9m、深さ0.4m程。S K 4142はこれらの北、石積施設S F 4133の脇にあって、径0.6m、深さ0.3m程。

**S K 4143・4182** 屋敷中ほど下層で検出された土壇とピット群。S K 4143は、東西1.2m南北0.6mの長方形に近い形で、深さは0.1m程と浅い。この東付近で検出されたピット群がS K 4182。径0.3m、深さ0.3m程。

**S X 4144** 屋敷の東北隅部で検出された石を敷き詰めた遺構。前期の遺構と考えられる。東西1.7m、南北1.2mの長方形を示す。性格等は不明。(P L.39)

**S X 4145** 屋敷の北東部、北境界土塁S A 3310の脇で検出された遺構。石積施設S F 4132と並ぶように存在し、東西1.8m、南北1m、深さ0.4m程の規模を持つ同様の石積施設の一部ではなかろうか。前期

の遺構と考えられる。

**S X 4148** 屋敷の東北部で検出された不整形の窪みを呈する遺構。深さ0.2m程度。周りに石が若干配されている。前期の遺構と考えられる。

**S X 4149** 屋敷の東北部で検出された石の集まり。前期の遺構と考えられる。

**S X 4150** 屋敷の東北部で検出された南北の石列。径0.2m程度の石5個を並べる。後期の遺構。

**S X 4151** 屋敷の東北部で検出された南北方向の溝状の遺構。東西長4m、幅0.9m程。後期の遺構と考えられる。(P L.39)

**S X 4152** 屋敷の東北部の下層で検出された礫石の集まり。前期の遺構と考えられる。

**S X 4153・4154・4155** 屋敷の東北部で検出された遺構。S X 4153は礫石の集まり。S X 4154は石の集まり。S X 4155は南北に並ぶ径0.2m程のピット。間隔は1.2m。いずれも後期の遺構と考えられる。

**S X 4156** 屋敷の東北部で検出された東西に並ぶ2個のピット。径は0.2m、間隔は3m。後期の遺構と考えられる。

**S X 4157** 屋敷の東北部、石積施設S F 4132の西で検出された南北の石列、東に面を持つ。前期の遺構と考えられる。

**S X 4158・4159** 屋敷の東南部で検出された遺構。S X 4158は屋敷の南境界土塁S A 4127の裾に位置する東西の石列。S X 4159はL字形に並ぶピット群。大きさは一定でないが、0.2m弱と浅く礎石の抜き跡でなかろうか。共に、後期の遺構。

**S X 4160・4161** 屋敷の北辺部中ほどで検出された石の集まり。S X 4160は前期の遺構。S X 4161は後期の遺構と考えられる。

**S X 4162・4163** 屋敷の中央部で検出された遺構。S X 4162は東西に並ぶ径0.5m程のしっかりとした礎石。間隔は0.9m。S X 4163は溝S D 4177脇の石の集まり。共に後期の遺構。

**S X 4164** 屋敷の中央部南寄りで検出された遺構。建物礎石の根石状に若干石が点在する。後期の遺構と考えられる。

**S X 4165・4166・4167** 屋敷の南端中ほど、南境界土塁S A 4127の裾で検出された疎らではあるが東西の石列状の遺構。西で検出されているこの土塁裾の溝の一部の可能性が考えられる。後期の遺構と考えられる。

**S X 4168・4169・4170** 屋敷の中央部で検出された遺構。S X 4168は下層に位置する東西2個の根石状を呈する前期の遺構。間隔は1.8m程。S X 4169は上層に位置する南北に点在する礎石とその根石状の遺構。後期の遺構。S X 4170は礫石の集まり。後期の遺構。

**S X 4183** 屋敷の中央部で検出された石の集まり。後期の遺構と考えられる。

**S X 4171・4172・4173・4174** 屋敷の西北部で検出された遺構。S X 4171・4172はそれぞれ南北、東西の礎石状の石列で、一つの建物となる可能性も考えられる。S X 4173は南北に並ぶ2個の根石状の遺構。間隔は1.8m程。S X 4174は石の集まり。いずれも後期の遺構と考えられる。

**S X 4175** 屋敷の西北隅、土塁S A 3310裾で検出された東西の石列。後期の遺構と考えられる。

**S X 4176** 屋敷の西南部で検出された南北2個の礎石。間隔は1mほど。後期の遺構と考えられる。

### 3. 第78次調査遺物 (第37~43図, P L.41~46)

ここで扱う遺物は77次の調査区で出土した遺物群で、本来は各遺構ごと、もしくは遺構面ごとに分け  
て説明するべきであるが、調査区全体が大きく削平されているためか、遺物の出土量は少なかった。ま  
た他の調査区で確認されている多くの遺物を出土する整地層が、本調査区では良好な状況では検出され  
なかった。数少ないながらも検出された遺構からも、ごく少量の遺物しか出土していないため、今回は  
これらをすべてまとめて報告することとした。ただし調査区の一部を掘り下げた「深掘りトレンチ」か  
ら出土した土師質土器のカワラケの14点については、まとめて呈示した。

出土した遺物の総点数は6,315点で、土師質土器が60.2%、越前焼が25.9%、輸入陶磁器が6.1%、そ  
の他の石製品・金属製品などは3.8%の割合となる。この割合は前述のような理由から、この調査区本  
来のものをしめすものではない可能性が高いと思われる。

**越前焼** 甕は概ねIII群とIV群の両者がある。(632)は口縁帯が退化し、わずかに口縁部が外反するてい  
どに名残を留める。(632)はIII群に属するものと考えられる。(649)は口縁部が肥厚し始めるN群aに属  
する。(631)は口縁部がほぼ直立する形態のもので、IV群でも古相(aタイプ)であろう。(647)は肩部  
に格子文のスタンプを捺す。

器種		%		器種		%		器種		%				
越前焼	甕	1,192		青磁	碗	82		金属	銅 銭	28				
	壺	52			皿	35			釘	57				
	鉢	51			鉢	6			銅製品	1				
	播 鉢	328			盤	2			装金具	1				
	火 桶	8			香 炉	6			火 鉢	1				
	卸 皿	3			器 台	1			銅 鏡	1				
	その他	1			杯	1			銅 輪	1				
	計	1,635	25.9		花卉皿	1			刃 子	1				
					その他	1			鍋	3				
					計	135	2.1		その他	1				
瀬戸美濃	碗	34		白磁	碗	13		石製品	バンドコ	75				
	皿	1			皿	105			大 鉢	5				
	茶 入	4			杯	17			円 盤	1				
	鉢 利	2			壺	1			火打石	1				
	徳 杯	1			その他	2			温 石	1				
	杯 壺	2			計	138	2.2		硯 石	5				
	壺 計	6			染付	碗	29			砥 石	8			
	計	50	0.8			皿	52			盤	17			
	日本製陶磁器	碗	19				杯		2		こね鉢	3		
		皿	20				壺		2		玉 石	12		
茶 入		4		片		1		白	2					
茶 利		1		その他		1		笏 谷	7					
徳 香		21		計		88	1.4	その他	9					
香 壺		1		赤絵・その他		3	0.05	計	146	2.3				
壺 計		3		計		364	5.8	木製品	炭	20				
計		69	1.1	朝鮮陶磁		碗	19			漆 碗	1			
土師質		皿	3,758			皿	1			漆 片	5			
		土 釜	30			鉢	1			漆 板	8			
	土 鈴	1			徳 利	1			曲 物	1				
	土 押	3			計	22	1.3		自然木	1				
	土 壺	5			陶磁器の計	5,972	94.5		棧	1				
	土 甕	3			瓦質	火 鉢	19			計	37	0.6		
	土 鍋	3				火 皿	1			陶磁器類	47			
	計	3,803	60.2			風 炉	1			その他	4			
	瓦質	火 鉢	18				火 炉	1		計	51	0.8		
		瓦 鉢	3			火 舎	1		その他	壁 土	8			
風 炉		1		計		24	0.4	骨		3				
火 炉		1		須恵器		壺	1			種 子	1			
火 舎		1				皿	1			伊万里	1			
計		24	0.4			その他	1			使い残し漆	1			
須恵器		壺	1				計	3		0.05	計	14		
		皿	1			国産陶器・その他	計	2		0.03				0.2
		その他	1				計	5,585		88.5	合 計	6,315	100.0	
		計	3		0.05									
	国産陶器・その他	計	2		0.03									
		計	5,585		88.5									

表4 第77次調査出土遺物一覧表

(647)は口縁部上端面が幅広くなり、断面が逆三角形を呈するもので、口縁の内外面ともに沈線を残す。(649)は肩部に「本」字印のスタンプを捺す。これら2つはIV群でも新相の形態(cタイプ)であろう。(630)も同様であるが、前二者に比して、口縁部がやや低く、厚い。胴部が低くずんぐりとした感じのものにこのような口縁をもつものが多い。

**壺** (650)は口縁を玉縁に作り、胴部が球状によく張った形態のもので、口縁から肩部にかけて厚く自然釉がかかり景色を作る。

**鉢** (651)は内面口縁下に沈線をもちその下部分には扇形に楕目を上下に2カ所にもつ。(636)は鉢の下半部分であろう。(641)は器高の低いもので口縁下に沈線を施す。(651・641)とも口縁の形態から播鉢分類のIV群に相当するものと考えられる。

**播鉢** (634)は口縁端部が丸くなり、その下で一段くびれる。(654)も口縁端部が丸くなり、内面に一条の沈線が巡る。(635)は口縁上端面がやや平になるもので口縁内面の沈線はない。これら3点はIII群に属するものと考えられる。(633・637)は口縁上端面が水平のもので、いずれも口縁内面に沈線を有する。(639・642)は口縁部の上端面を強くナデて内湾させ、端部を鋭くつまみ出す。(638)は口縁上端面を水平にするが、端部は丸い。(643)は口縁直下が強くとびれる。(654)も口縁上面は平らであるが、端部は丸い。以上、これらは(641)を除いて播目間隔も狭く、IV群に属するものと考えられる。(653)は小型の播鉢である。播目の間は広い。口縁の形態や見込みの播目からIV群に属するものと考えられる。(655)は播鉢の下半部である。見込みに播目をもつ。

**おろし皿** (640)は見込みに直線的な播目をもったものである。

**桶** (644)は下部分に行くにしたがってややすぼまる形態で、垂直に張りでた把手を張り付ける。

**土師質土器** (670)は底部を押し出した、いわゆるへそ皿形態のA類のものである。(665・666・671～673)は手捏の非常に不整形なもので、B類に属するものと考えられる。なお、(671)はススが残り灯明皿として使用されていたものようである。(656・667・668・674～696)は粘土板から手捏で起こし、口縁部を回しナデして形成したもので端部がつまみ出されているものが多い。C類に属するものである。なお、(677・681)などススの付着した灯明皿などとして使用されたと考えられるものは、C類のものに多い。(657～663・697～707)は底部が広く平坦なD類に属するもので、(659～663・703～707)のような口径14cm前後のものも多い。(664)は、口縁からS字状に外反した薄作りのもので、口径15.2cmの大ぶりなものもある。第24次の調査によるM類に属するものと考えられる。なお、(656～669)はこれ以外のカワラケよりも古様を示す。この点については「特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書IV 第15・25、第24次調査 1993 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館」のIII、第24次調査の3、遺物で今後の見通しとともに、これらのカワラケについての位置付けがなされている。その後も福井県教育庁埋蔵文化財調査センターや各市町村教育委員会が福井平野の沖積地において、発掘調査が頻繁に行われるようになり、これらの資料の公表をまって、さらに詳細な概要があきらかにされることであろう。

**土釜** (724・725)は小ぶりな口径9.0cm前後のもので、(724)は羽部を丁寧にナデつける。ススが内面全体に付着する。(725)は底部を平らに作ったもので羽部分は欠落しており、取付部分は窪ませた状態で羽をつけやすいようになっている。(726)は推定口径13.4cmの大ぶりのものである。これらの土師質の土釜は火を受けた痕跡など、使用されたものであることは間違いがないが、どのような状況で、どのような目的で使用されたかは明確にされていない。しかし各調査区で数点ずつ出土しているようで、特定の調査区で大量に出土した例はないことから、一般に普及していたものと考えられる。

調査区で大量に出土した例はないことから、一般に普及していたものと考えられる。

**瀬戸・美濃焼** (709・710)は鉄釉天目碗である。(709)は上半部のみ残存するもので、全体に柿釉色を呈し釉のたまった部分は黒色に斑となる。露胎となる下半部にはサビ釉を塗る。(710)は高台を削り出す部分まで残り、釉色はカセた黒褐色を呈する。口縁下は、強い屈曲を見せる。(711)は大海茶入である。よく溶けた鉄釉を内面及び外面腰あたりまでかける。一部に、釉なだれを見せ景色を作る。腰以下は、サビ釉を塗り、唐物の鉄分の多い土に似せる。肩部の張った厳しいプロポーションであるが、器壁はやや厚く手どりの重さを感じさせる。和物茶入らしい形質のものである。(723)は鉄釉瓶である。底部付近のみ残存したもので、底部のみ無釉で、それ以外の内外面とも施釉する。大ぶりな徳利であろう。(708)は鉄釉大鉢の口縁部である。端部は小さく立ち上がりその内側にも一重の蓋受け状の段をもったものである。

(721・722)は灰釉碗である。(721)は碗の下半部である。高台内部のみ釉ハギとし、畳付まで施釉する。高台は付高台である。(722)は上半部がやや内傾の平碗で外面は腰上当りまでの施釉をする。(720)は灰釉皿底部である。高台は低い。体部外面には鑄文をもつ。高台付近には透明度の高い淡緑色に釉が厚くたまる。高台内は無釉とし、削り込んだ跡をそのまま残す。胎土は純白に近い白色で、非常にこまやかである。

**瓦質土器** (652)は瓦質土器の火鉢口縁部である。直立した幹部に粘土帯を張り付ける。上面には3条の突帯を巡らし、側面に連珠文を巡らす。

**中国製陶磁器** (727)は中国製陶磁器青磁の盤の上半部分である。口縁端部小さく立ち上がりその内側には窪み部が回り一段折れの形態となる。内面には縦に櫛目描を密に施す。(728・729)は上半部分のみ、(731・732・733・738)は碗の下半分である。(728)は丸碗である。縦線のみ粗く刻んだ蓮弁文の非常に退化したもので釉がカセている。(729)は素文の端反碗で、釉色はややくすんだオリーブ色を呈する。(736)は花文印を、(731)は「嘉」字?の印をそれぞれ中央に捺す。(734)は外面に鑄蓮弁文を刻出したもので鮮やかな青色の釉が厚く掛かる。胎土は明灰色の緻密なもので他のものより上手である。なお(732)は高台の周囲の意図的に打ち欠き、2次的使用を考えさせるものである。このようなものは、各地の中世遺跡から出土しており、この一乗谷からも出土している。どのように使用されたのかは諸説あるが、いまだ明確にされておらず不明である。(735)は筒形香炉である。青緑色の釉が外面から内面口縁付近まで厚く掛かり内部および高台底部は無釉とする。高台部は内部を刻み込まないままである。小さな足が三方に付くが、高台より高い位置で浮いた形となり、直接接地しないいわゆる千鳥足の香炉である。(736・737)は皿である。双方幅の厚い高台を持ち、内外面および、畳付部を含めて高台部まで施釉し、高台内底面のみ無釉とする。見込みを平坦につくり、中央部には印花を捺す。器壁は非常に厚い。(736)は口縁部まで残る。端部は強く外反しており、釉色はくすんだオリーブ色を呈し、細かな貫入が全面に入る。(737)は高台部のみであるが、(736)に比べ高台器壁は倍近く分厚いが高さや径はほとんど変わらない。釉は青灰色を呈する。高台の形態が(736)とはやや違い、あるいは碗形態のものとも考えられるが、高台の形状や平坦な見込から(736)に近く、皿の範疇に含めておく。(730)は稜花皿である。口縁部を花卉形に切り込み、これに沿って内面には三条の刻線が巡る。釉色はオリーブ色を呈する。器壁の厚い比較的よく見られる下手のものである。

(718・719)は白磁の端反皿である。(719)は(718)に対して高台径が大きく、断面V字形のものである。釉は高台畳付部を除き高台内まで施釉される。(718)は高台すそまで施釉し、高台内外面は露胎とする。

(719)は純白に近い釉色で畳付を除き内外まで施釉される。(713)はやや軟室の胎土で高台は蛇の目高台とする。高台付近は露胎とする。(714)は半球形の小杯である。軟質の胎土は器壁はやや厚めである。高台部を露胎とする。(717)は白磁壺の高台部である。削りだされた厚い高台をもち高台畳付部から内側を無釉とする。

(740~745)は染付の皿である。(743・744)は端反皿である。(743)は高台畳付部のみ無釉とし、見込みにのみ文様を描く。(744)は内面には圈線を巡らせ、外面は簡略な唐草文が巡る。(742)も、高台畳付部のみ釉ハギとし、内外面に文様が描かれる。見込みは十字花文が描かれる。(741・742・745)はやや高目の高台とし、畳付部のみ釉ハギとした下端部である。(741)は外面に唐草文を描き、見込みにはアラベスクが描かれている。(742)は火を受けたためか釉肌が荒れている。外面は「の」字状の唐草文を描き、見込みにはアラベスクが描かれる。(734・741・742・745)は口縁部が残っていないものの、総じて端反碗である。

(739)は鉄絵壺の上端部である。口縁部は、短くほぼ垂直に立ち上がる。器厚は厚めである。肩部には、鉄釉で花文帯が描かれる。外面は釉がカせており、一部剝離しているところもある。又、内面にも施釉される。磁州窯系の元時代頃のものであり、おそらく伝世品が破損・廃棄されたものと考えられる。胎土は乳白色を呈するきめ細かい土であるが軟らかい感じのものである。

**朝鮮陶磁器** (716)は雑釉碗の下半部分である。高台は竹の節状になる。灰褐色の釉は畳付部分を除き総釉掛けとするが、釉のたまった所や薄い所などかなりむらがあるが、これが逆に景色となる。見込みは一段下げた鏡とし、中央部は播鉢状に窪む。胎土には、1mm以下の白又は黒色に砂粒を多く含む。形態から、蕎麦茶碗と考えられる。

**金属製品** (750・751)は鉄製の蓋である。双方同様の作りで、板状に鑄造された比較的薄いつくりのもので、裏面には身を受ける部分を浅い一条の凸帯で作られる。鉄製の茶釜の蓋であろうか。(751)はほぼ完形で鈕も残す。(752)は小型の銅鏡である。鏡背の陽刻された模様は磨滅して残りが悪く不明である。

**石製品** (746)は火鉢である。内面にはノミ跡を残す。(747・748)はいわいる「バントコ」である。(747)は小形形の平面形の蓋で、盛り上がった甲をもつ。いわいる平面が楕円形に分類されるものである。(748)は身部である。底部には粗くノミ跡を残す。半分ほどしか残っていないが、おそらく(747)と同じ平面が楕円形に分類されるものであろう。(749)は硯である。下半面が剝離している。

## 4. 第77次調査 小結

### 遺 構

検出された各遺構について、前項で個別の解説を行なった。ここでは、これらに若干の考察を行ない、まとめとする。

遺構は、前後2時期に分けられ、この後期については、一乗谷の町が織田氏の攻撃を受けて滅亡した時期に存在したものであること、また、この二つの時期においては、屋敷の構成等に変化は見られないこと、そして、これらの下層において、屋敷割に先行する生活面が一部確認されたこと等は前述した通りである。ここでは、こうした、検出された遺構の構成等の検討を通じて、調査の対象となった屋敷について考察することとしたい。

#### 地区計画と屋敷

この地区の骨格となるのは、前面（東）の南北方向道路S S976であり、この道路と西の山裾の間は60m程であり、ここに敷地間口30mを基本として、大規模な屋敷が整然と配置されていることが判明している。この屋敷の間口をみてみると、南北二つの東西方向土塁S A4127、3310の東端の真々距離で約27mである。しかし、この二つの土塁は平行ではなくて、かなり開いており、奥の山裾付近では、約33mとなる。また、前面の道路S S976及びこれに面する土塁S A979・980はこの屋敷及び北隣の屋敷あたりで若干折れ曲がっていることが判明しており、計画上の軸線の変換点と考えられている。こうした点から、間口が約3m（10尺）縮小され、また、平行する東西2条の土塁が開く結果となったものと考えておきたい。

#### 屋敷内の構成

屋敷内の遺構の多くは、後世の削平を受けており、建物の配置等については明確でない。検出された遺構で、まず、注目されるのは、門とその建物（S I1083、S B4128）である。門の位置についてみると、屋敷の北端から約9mのところであって、これは屋敷間口を3分割した位置と考えられる。このように、門がやや屋敷の北に寄る例は多くみられる。門幅は約10尺（3m）であって、他の例と同様であるが、門建物の正面間口は7尺（2.1m）であり、従来から知られているこうした屋敷の門建物の例では8尺としているのと異なる。この理由として考えられるのは、門建物と門は、真をあわせておらず少し北に寄せており、門の南脇面と門建物の南の柱の間に0.9mほどの空が生じていることと関係があるのではなかろうか。すなわち、この空を利用して、門の脇に潜り戸を設けていた可能性を指摘しておきたい。

屋敷内の建物としては、石敷の建物S B4129が注目できる。遺跡内の類似例から、蔵と推定される。屋敷の奥、南に位置していることを確認しておきたい。

他には平面や規模等が確認できる建物は見当らない。しかし、断片的ではあるが建物礎石の大半は屋敷の中央部に存在し、前面や奥ではほとんど検出されていない。これに対し、塀等と考えられるピット列（S A4121～4126）は、ほとんどが前面で検出されている。こうした点から考えると、門を入れてすぐの前面には、目隠しの塀が設けられ、その奥、屋敷の中央部に建物群が配されていたものと推定される。また、井戸は2基検出されているが、いずれも屋敷の北寄りで、中央と奥に位置している。井戸と

密接に関係する台所等は、これらの周辺に存在したものと考えられる。また、前述した南奥に位置する蔵S B4129はこうした井戸とは離れており、この屋敷の住人にとって重要な家財道具等を納める機能が考えられよう。また、町屋では便所となることが確認されている石積施設群（S F 3328・3329・4132～4137）は、屋敷の境界となる土塁に接するもの（S F 3328・3329・4132・4135・4136）と屋敷の中で独立して存在するもの（S F 4133・4134・4137）に分けられるが、これらすべてが便所であるとは考えられないものの、独立して存在するもののいくつかは、建物に付随して設けられた主人や客のための便所として、また、土塁に接するもののうち、主として、北に位置するものが屋敷で働く人々のための便所として用いられたと考えられよう。

#### まとめ

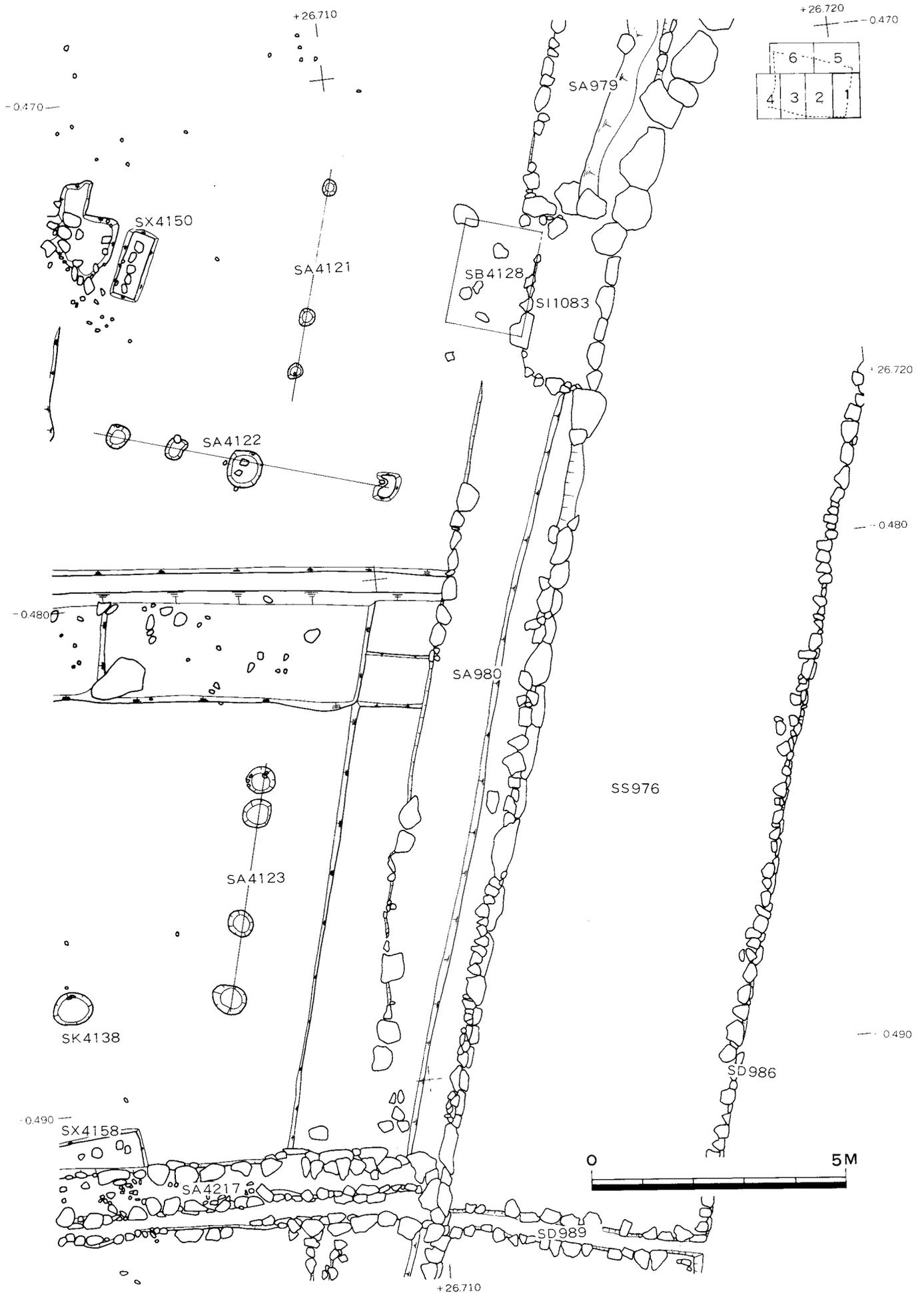
最後に、以上の諸点をふまえて、判明したことをまとめると、次のようになろう。

遺構群は、前後2時期に分けられるが、ここでの大きな変化は認められない。なお、屋敷割に先行する生活面の存在も確認されている。屋敷の規模等は、地形的制約を受け、若干狭くなっているものの、正面間口を100尺とするこの地区でみられる基準的なものと考えられる。屋敷内の構成は、遺構の残存状況から不明な点も残るが、正面前寄りには目隠しの塀等を設けるものの建物は配さず、中央部に多くの建物を設ける。なお、これらの建物群の南奥に、蔵を配するとともに、北、奥寄りに、井戸に代表される台所等の施設が推定される。こうした遺構の配置から、屋敷の構成として、前面、南を主人の生活や接客の施設としての表向き、すなわち「晴（ハレ）」の空間、北寄り、奥を日常生活を支える場としての奥向き、すなわち「裏（ケ）」の空間として読み取ることが出来る。

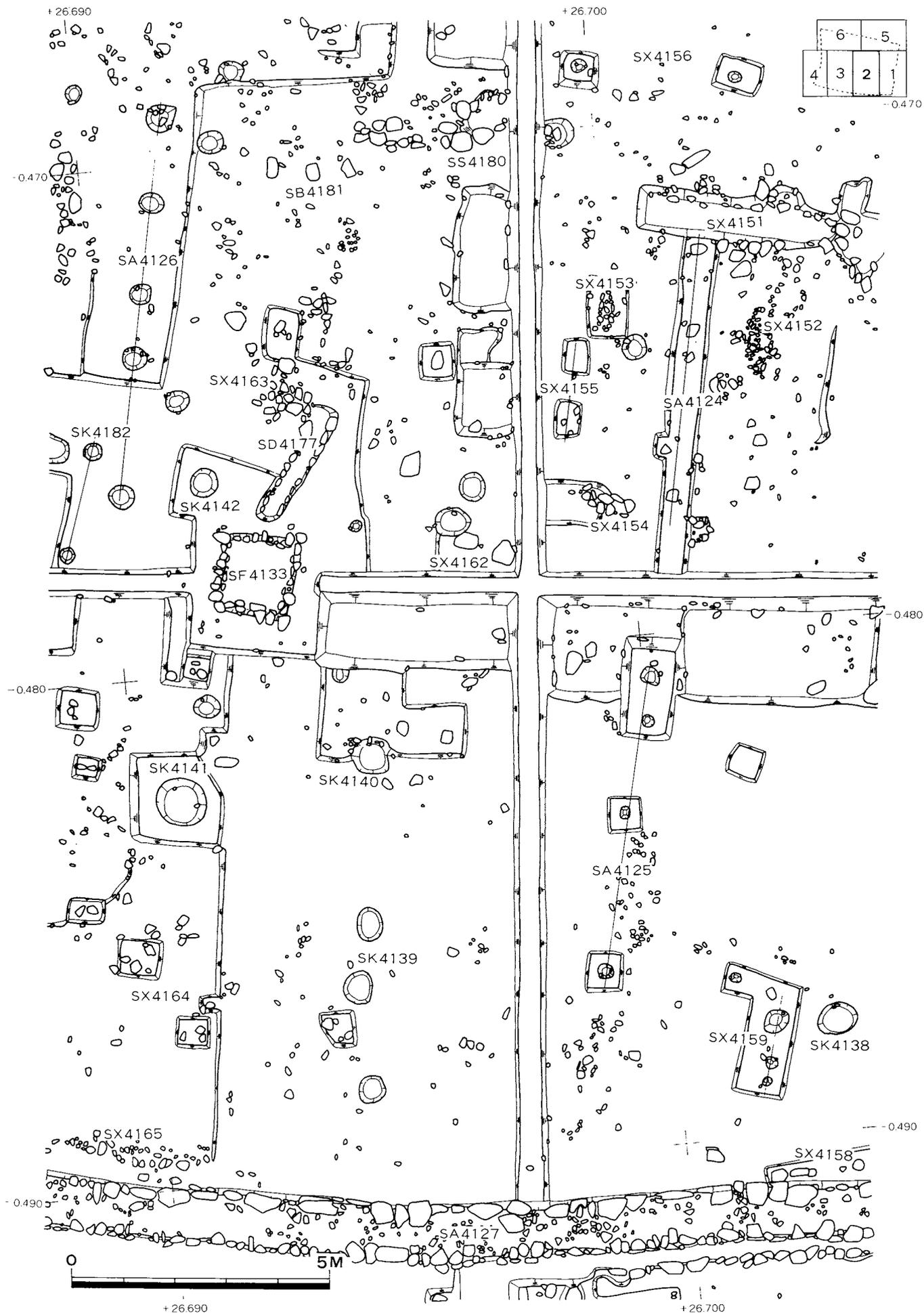
## 遺 物

すでに述べたように、今回の調査区は遺構面全体が大きく削平を受けているらしく遺物量も少ないため、遺物から調査区の性格を推測することはむずかしい。本調査区が位置する川合・平井地区は有力武将名が小字名として残っており、本調査区も有力武将の屋敷地であったと想定される。しかし、残された数少ない遺物からは屋敷地の主人の名前はもちろん、階層も予測することは困難である。唯一、小片ではあるが鉄絵壺の口縁部片が出土し、元代のものと思われる伝世品を所有していたであろう当地の主人が有力者であったことをうかがわせるものであろうか。本調査区だけの問題ではないが、土師質の土釜が何個体分か出土している。これらには煤などが付着するなどして、実際に使用されたものであることは明らかである。その容量などから実用品として使用されたものではないことが考えられる。つまり土師質の土釜は、各調査区でも数個体分は出土していることから、一乗谷の各家で実用品ではないが、非日常的な用途で使用されたものであろうと考えることができる。中世の食生活に詳くない筆者であるため、それが何にあたるかを指摘することはできないのが残念である。また金属製品として、鉄製のふたが2個体分出土しているがこれに対応する身（容器）については出土していない。損失の激しい身が鑄直しされて、再利用されることが多かったのか、その行方に興味を持たれるところである。またカワラケの問題についてはすでに指摘したが、まずは編年の確立が急務であろう。現在は資料の絶対量が不足しているが、前述のごとく、近い将来にこの問題は解決されていくことであろう。

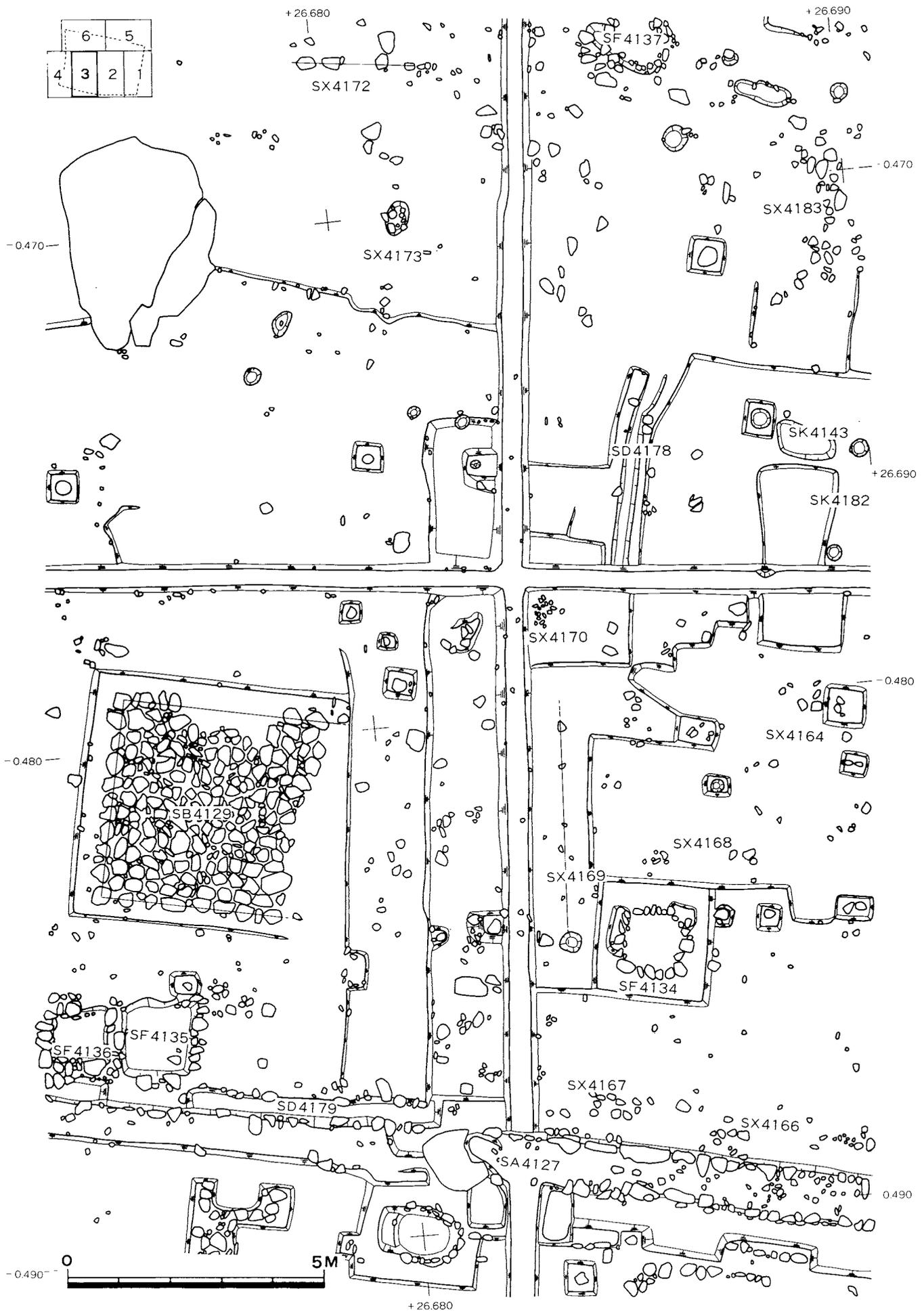
第30図 第77次調査遺構詳細図(1)



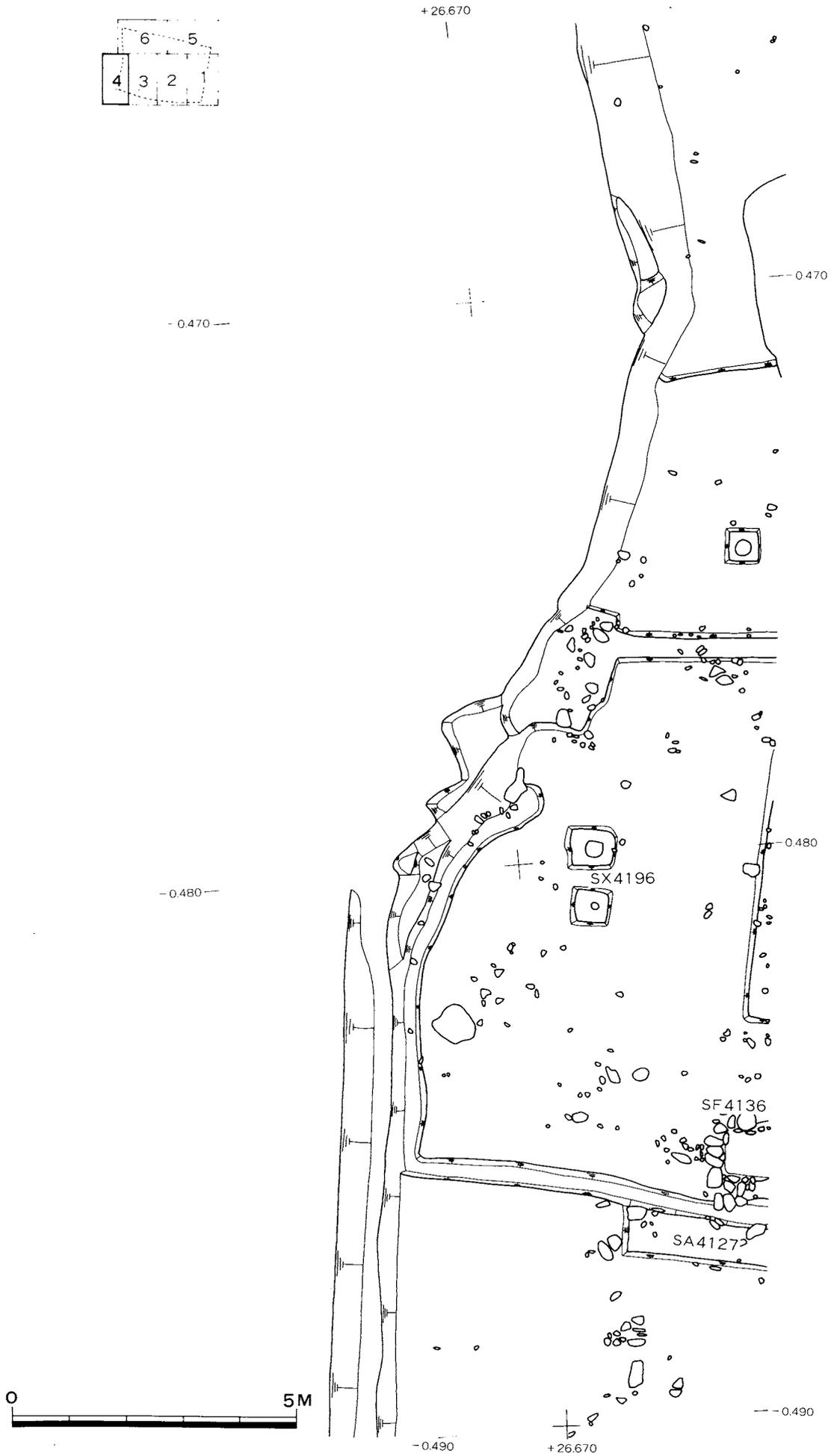
第31図 第77次調査遺構詳細図(2)



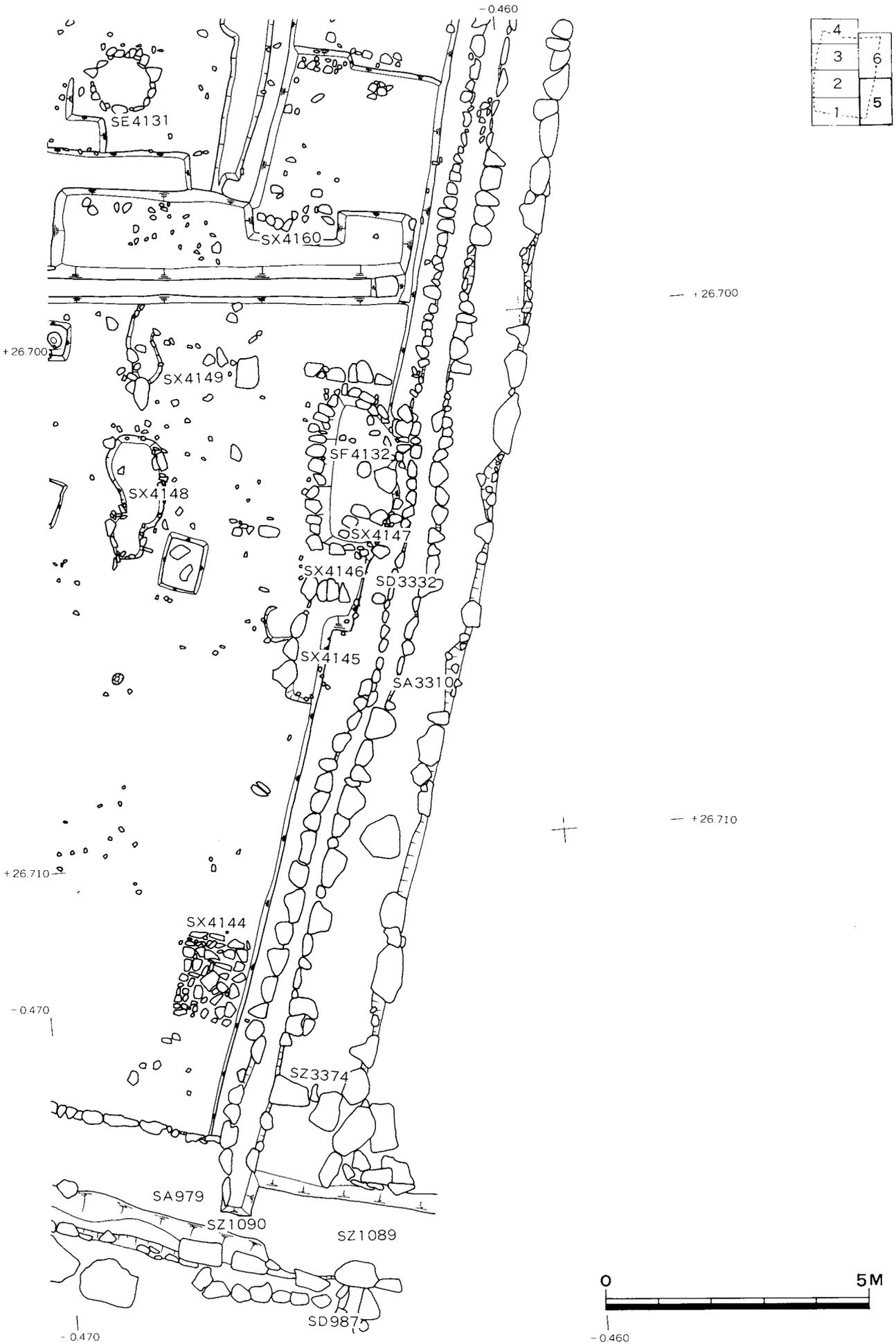
第32図 第77次調査遺構詳細図(3)



第33図 第77次調査遺構詳細図(4)



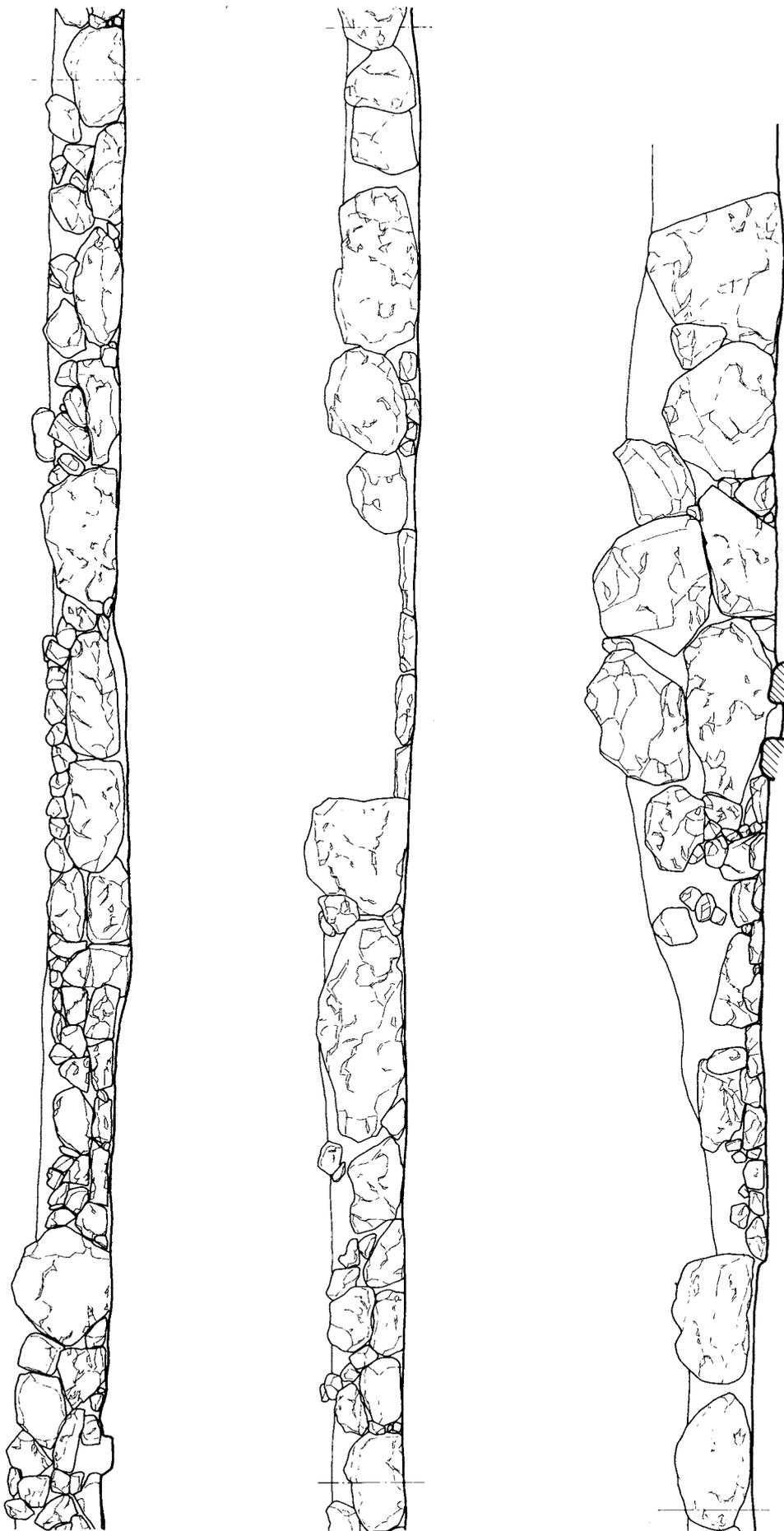
第34図 第77次調査遺構詳細図(5)

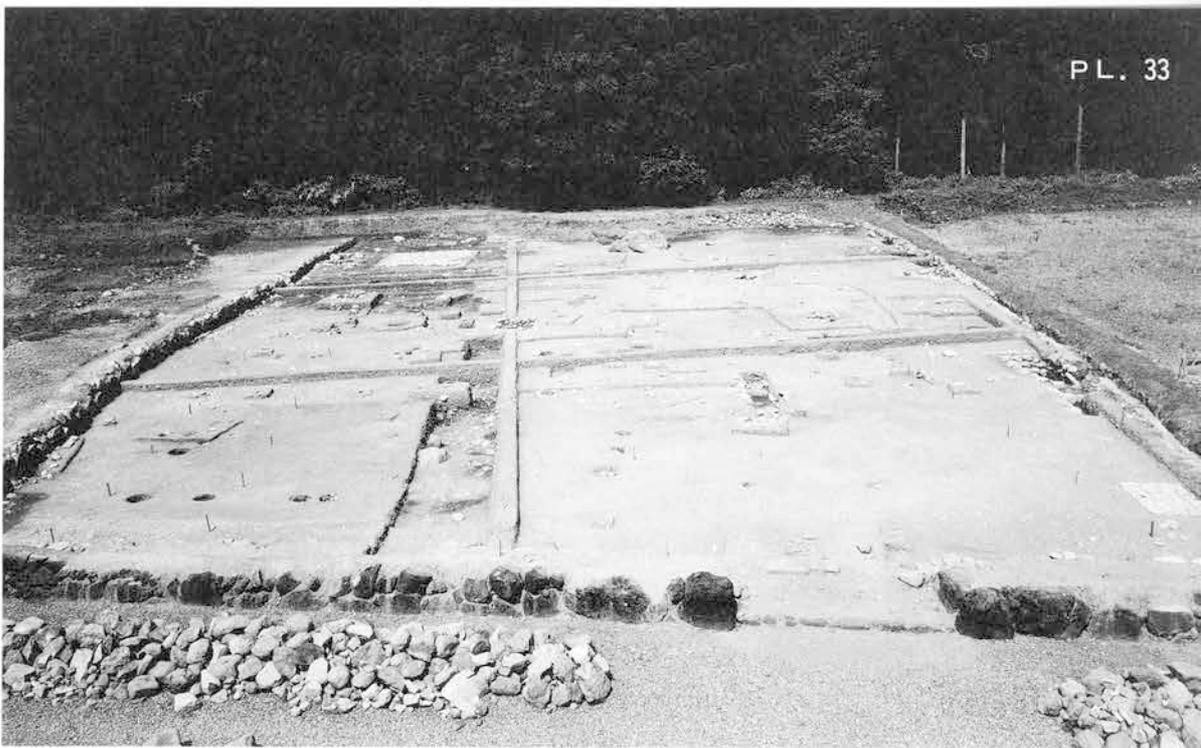


第35図 第77次調査遺構詳細図(6)



第36図 第77次調査土塁 SA979・980東面石垣立面図





全景  
(東から)



同上  
(東南から)



同上  
(西から)



第77次調査・中景(1)

東部  
(南から)



東部南半  
(北から)



東部北半  
(南から)

第77次調査・中景(2)



中央部  
(南から)



中央部北半  
(南から)



中央部南半  
(西から)



第77次調査・中景(3)

北部東半  
(西から)



北部中央  
(西から)

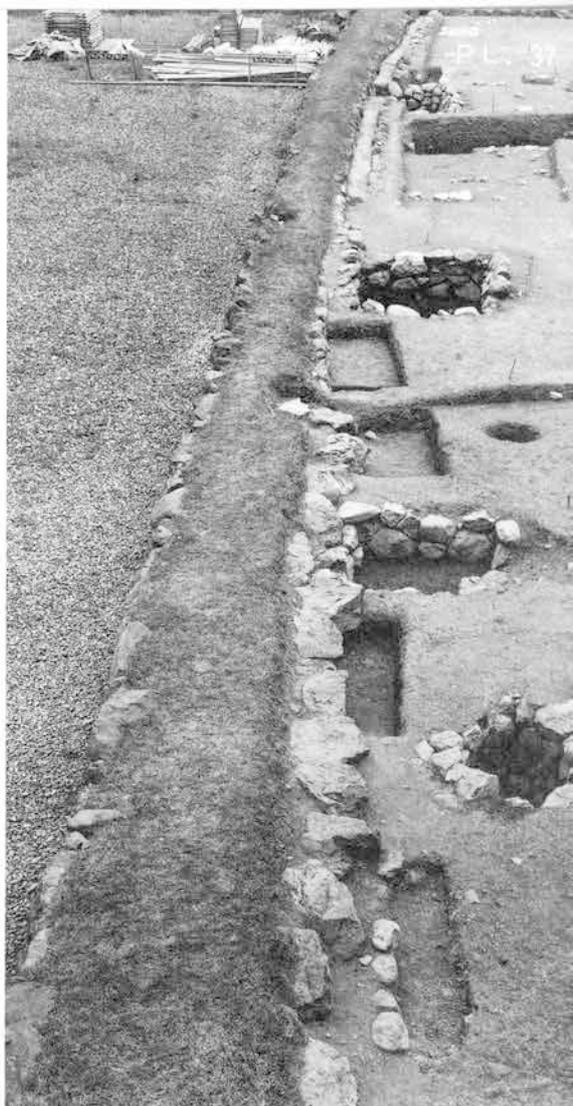


北部西半  
(南から)



◀ 土塁 SA980  
(南から)

▶ 土塁 SA3310  
(西から)



土塁 SA4127  
溝 SD4179他  
(西から)

第77次調査・  
土壘SA979・980  
及び門SI1083



土壘SA980  
555(東から)



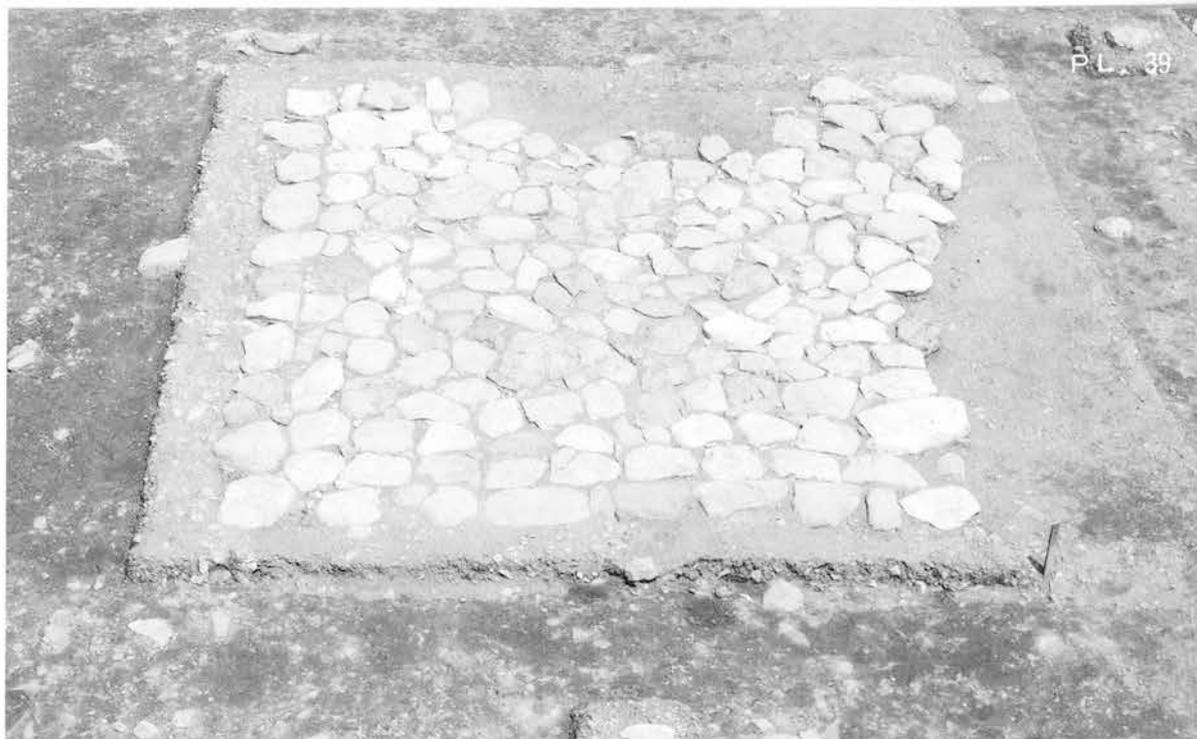
土壘SA979  
東面石垣  
(東から)



門SI1093  
及門建物SB4128  
(東から)



門SI1093  
(東から)



建物SB4129  
(南から)



SX4144  
(南から)



SX4151  
(北から)



第77次調査・  
井戸及石積施設

◀ SE4130  
(南から)  
▶ SE4131  
(西から)



◀ SF3328  
(南から)  
▶ SF3329  
(南から)



◀ SF4132  
(南から)  
▶ SF4133  
(南から)

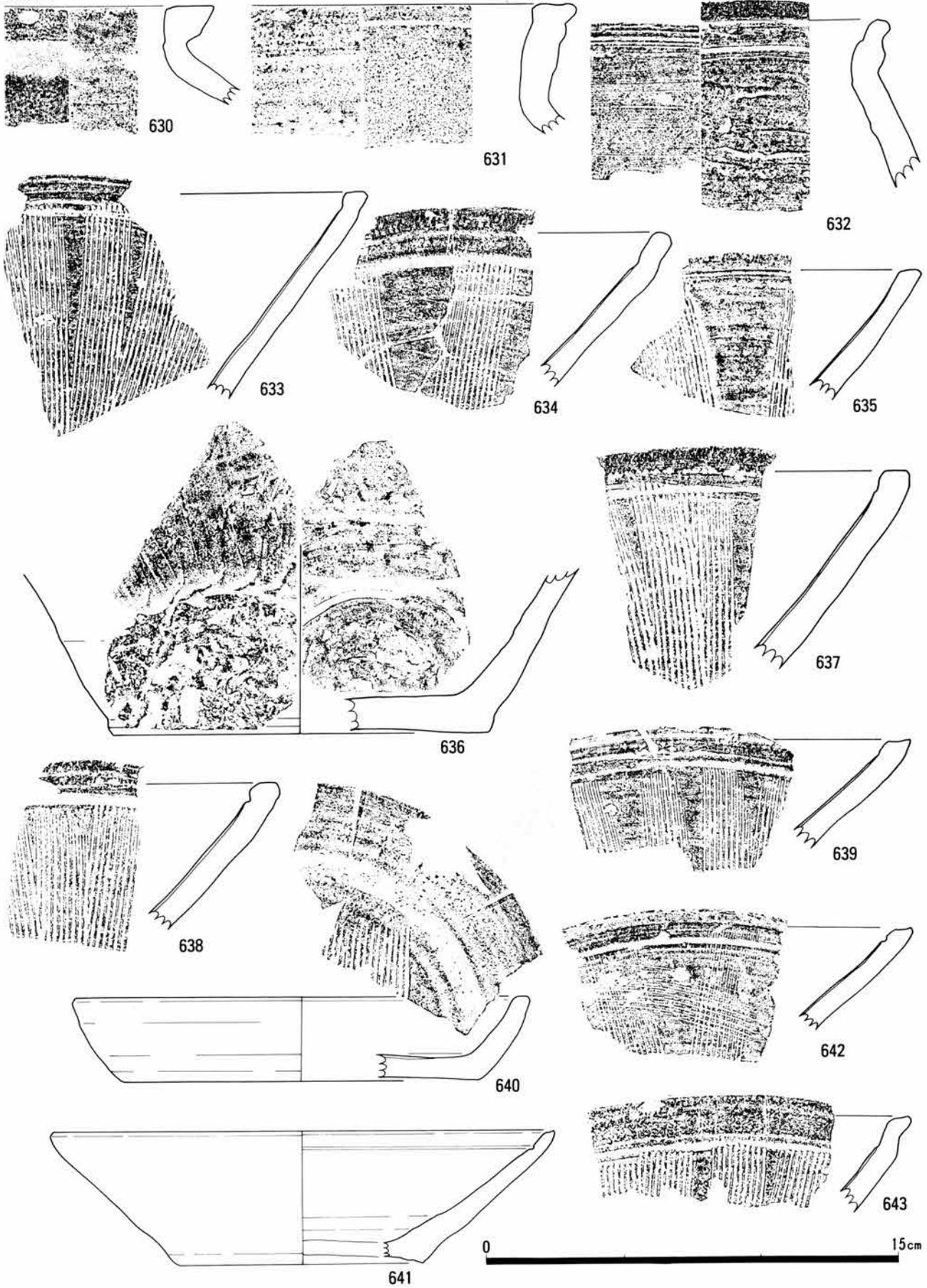


◀ SF4134  
(南から)  
▶ SF4137  
(東から)

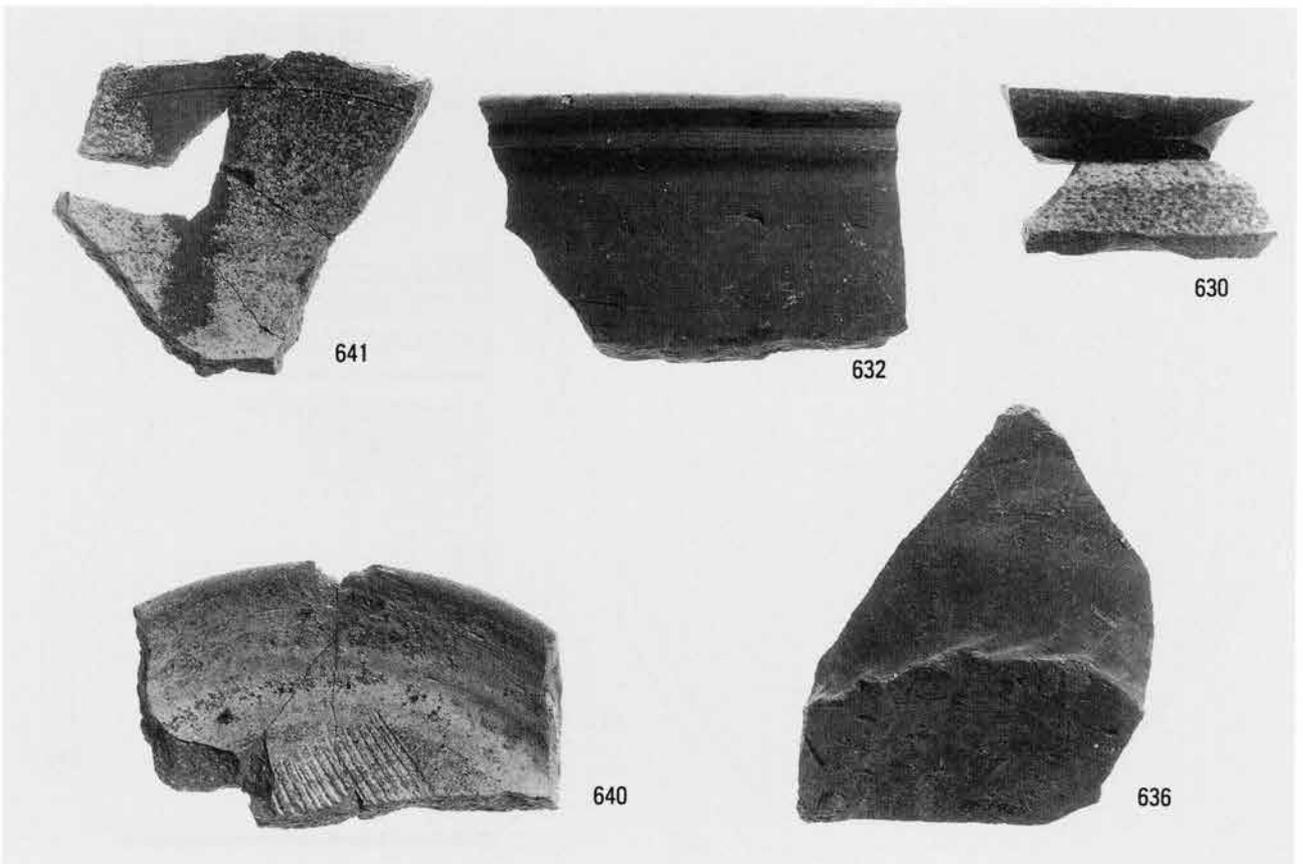
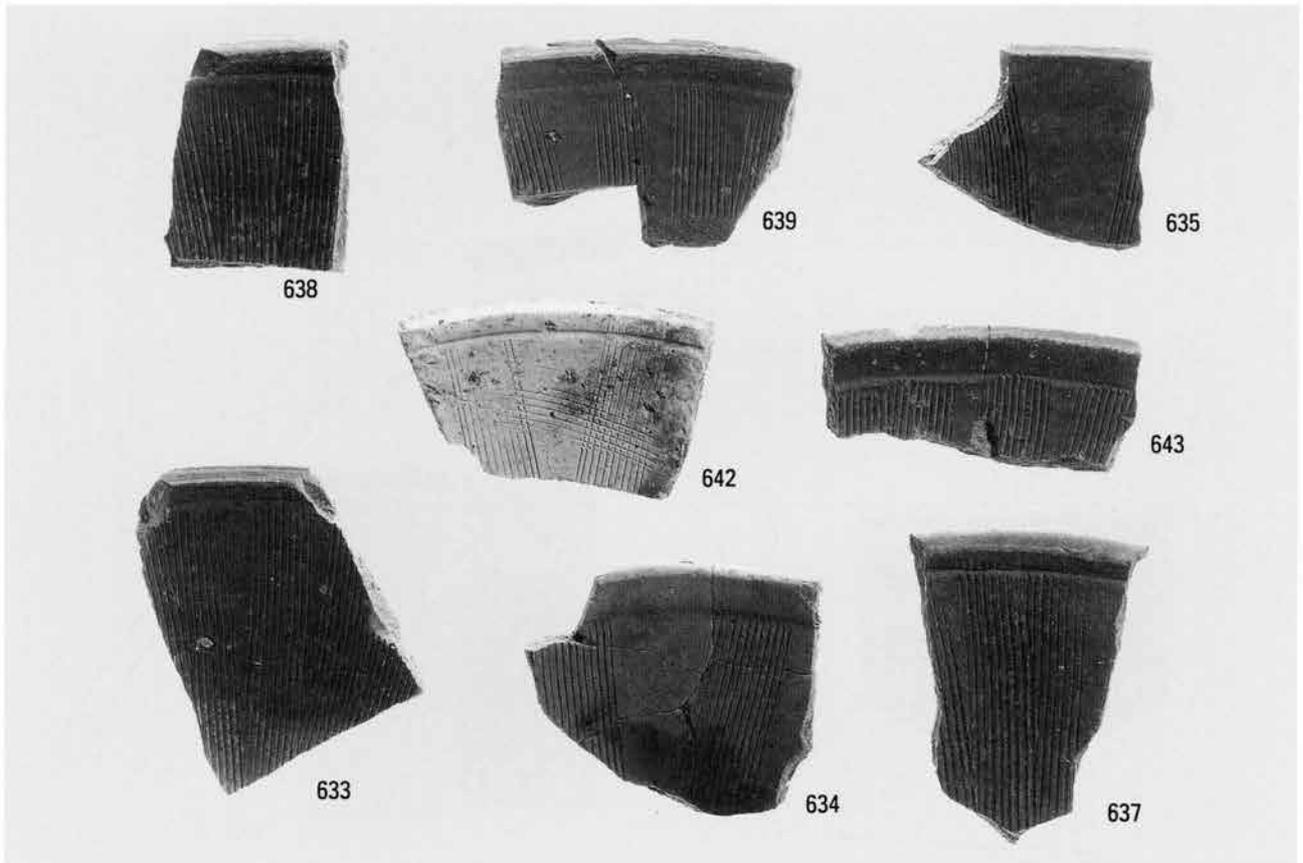


◀ SF4135  
▶ SF4136  
(北から)

第37図 第77次調査遺物 (1)  
遺構面

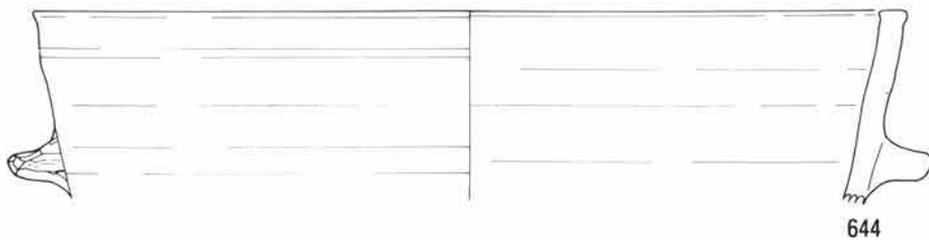


越前焼甕630~632・636 播鉢633~635・637~639・642・643 鉢641 卸皿640

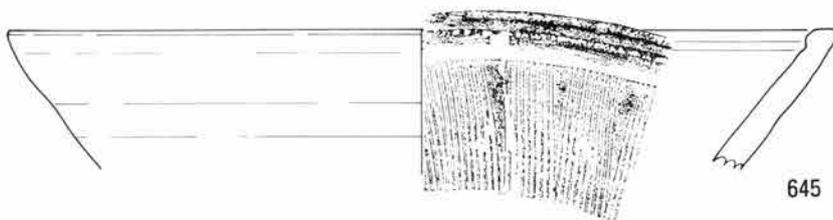


越前焼 甕630・632・636 挿鉢633～635・637～639・642・643 鉢641 卸皿640

第38図 第77次調査遺物 (2)



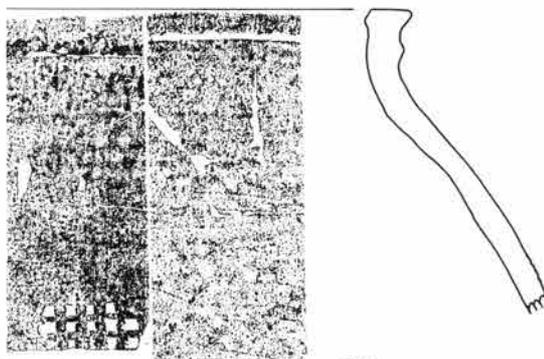
644



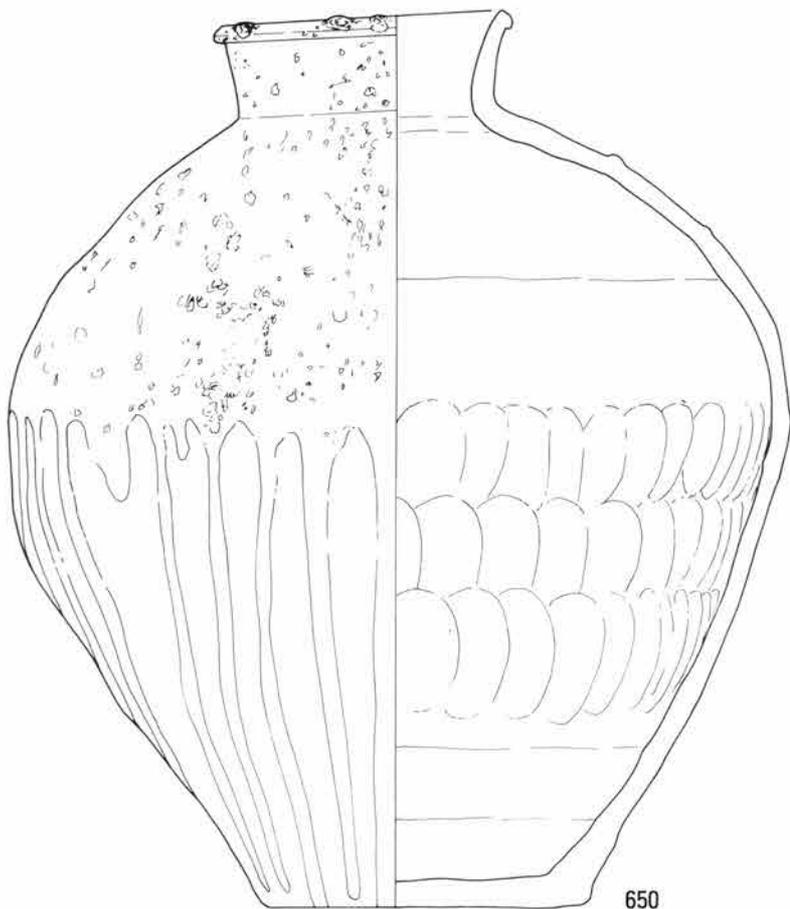
645



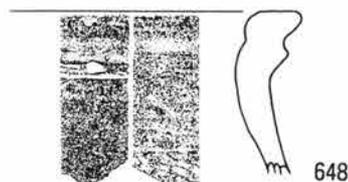
646



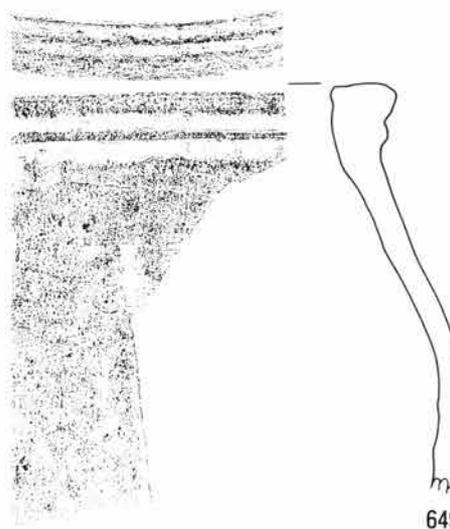
647



650



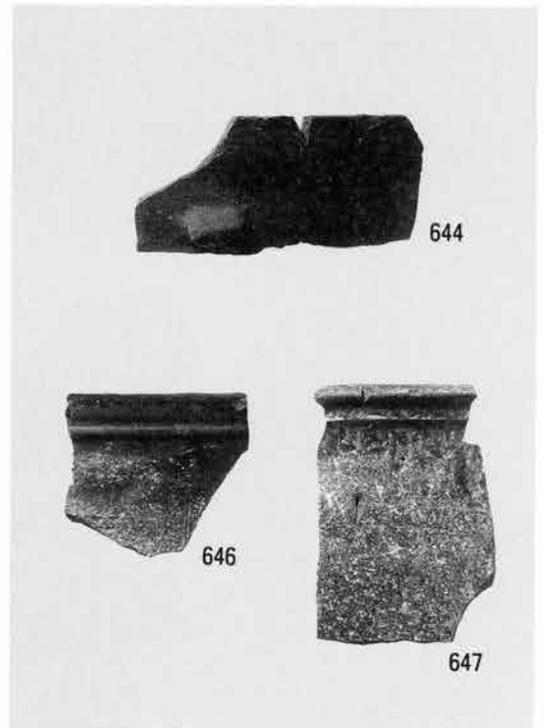
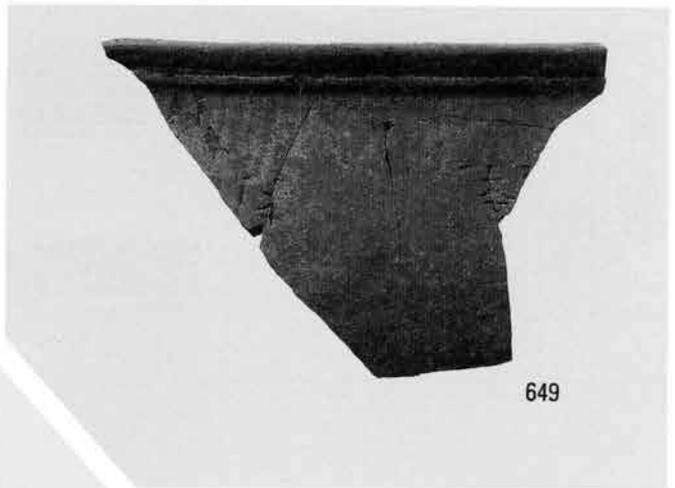
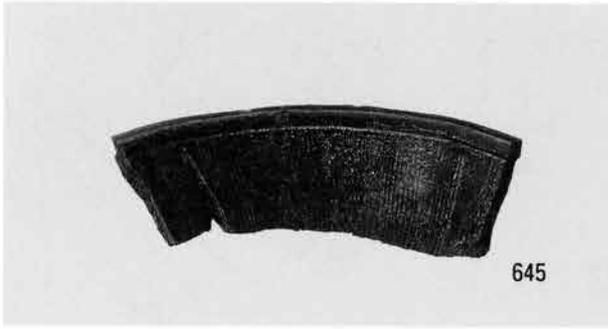
648



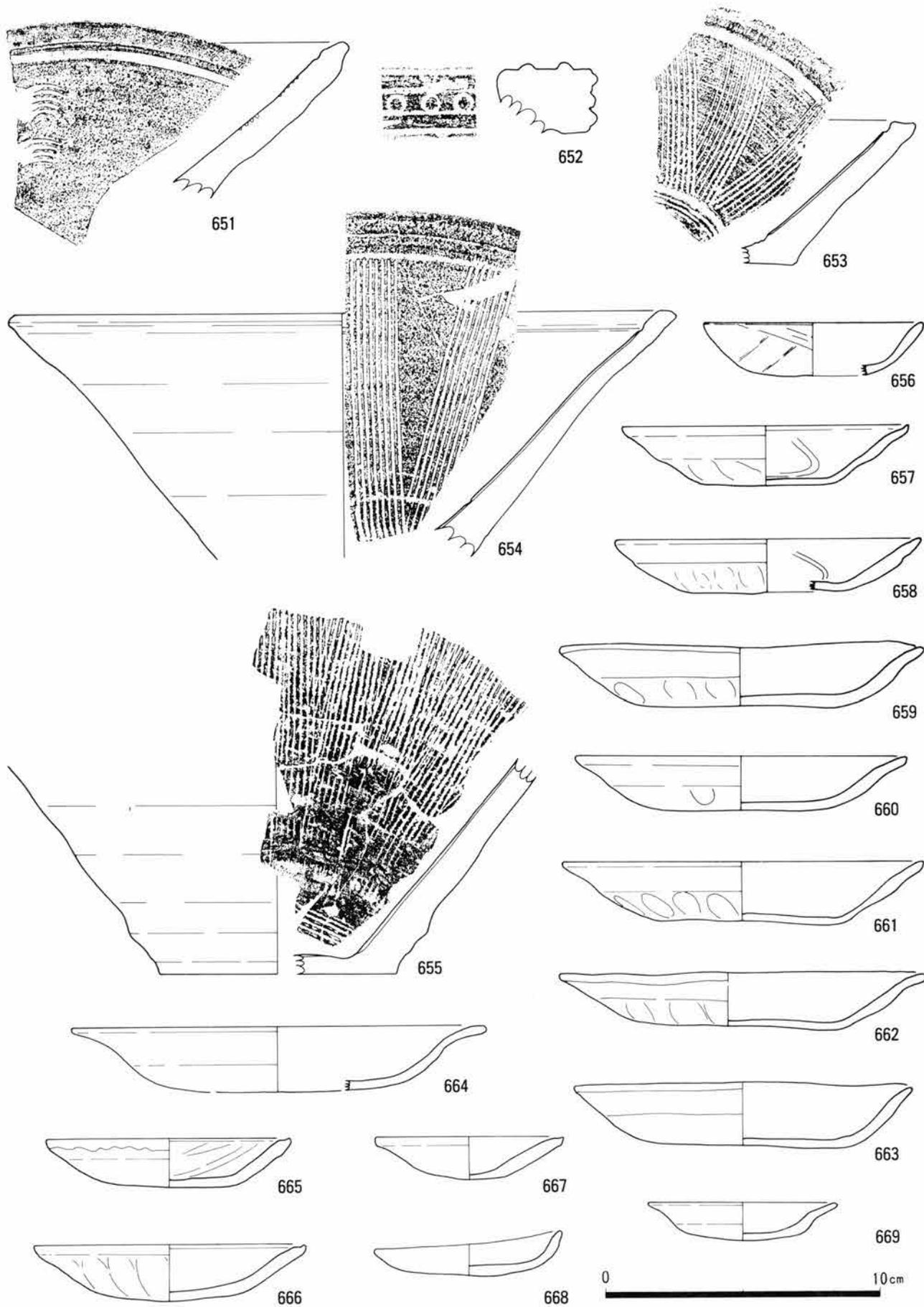
649



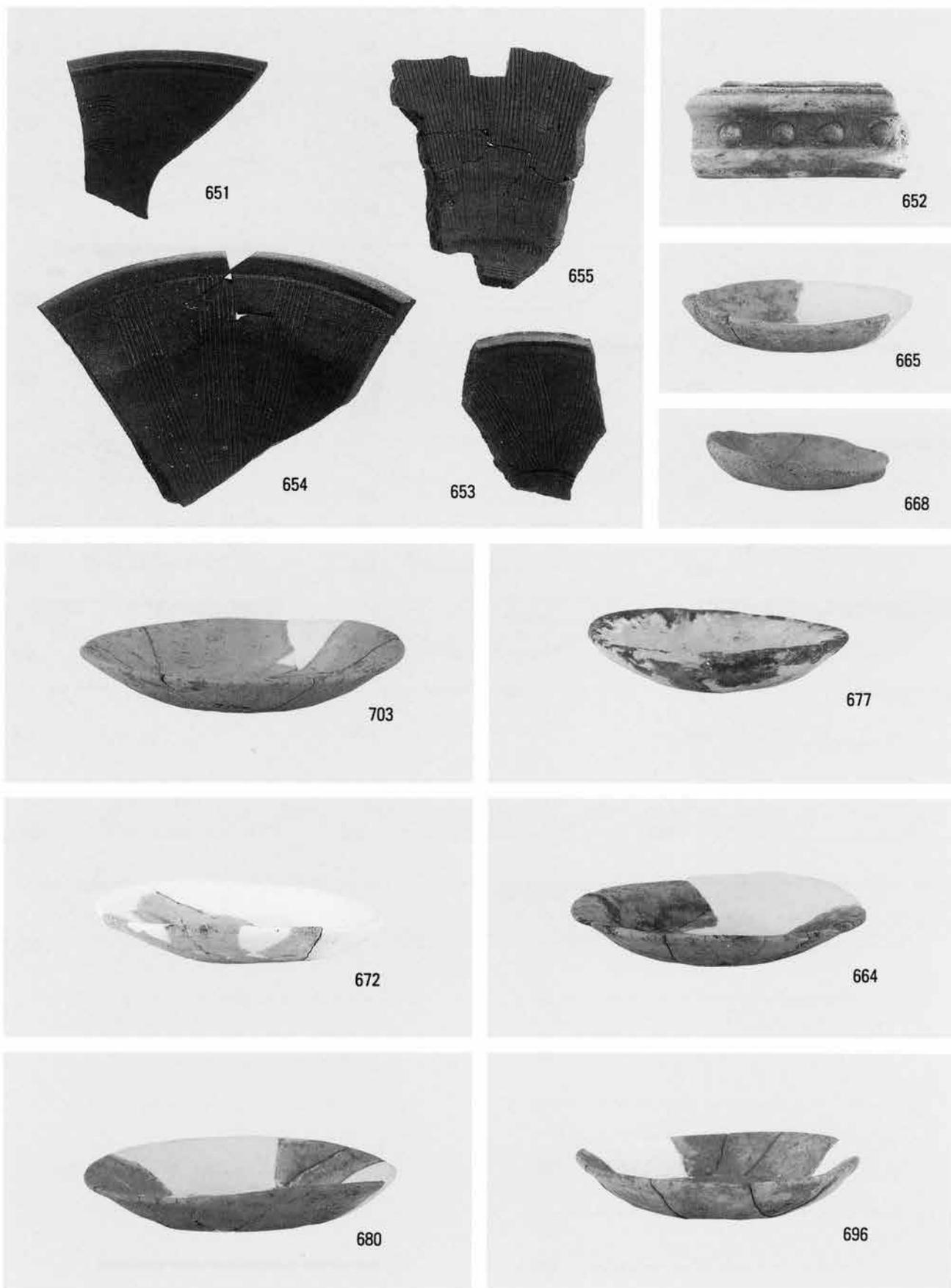
越前焼646・647・649 壺650 播鉢645 桶644



第39図 第77次調査遺物 (3)

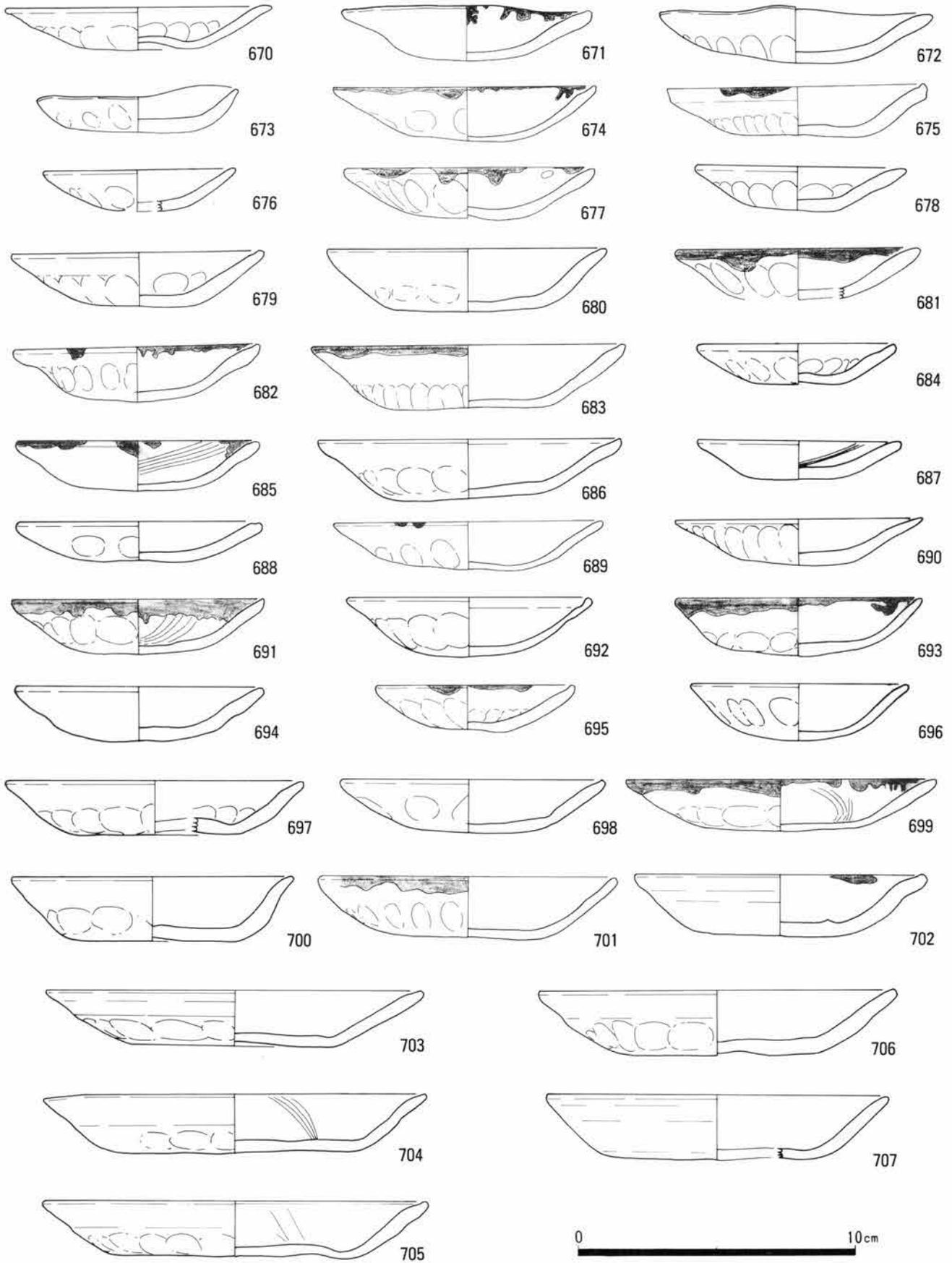


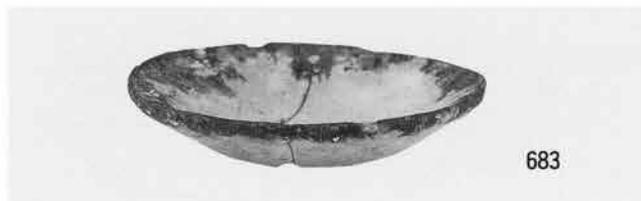
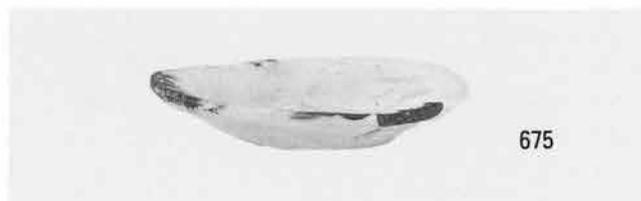
越前焼播鉢651・653～655 土師質皿656～659 瓦質火鉢652



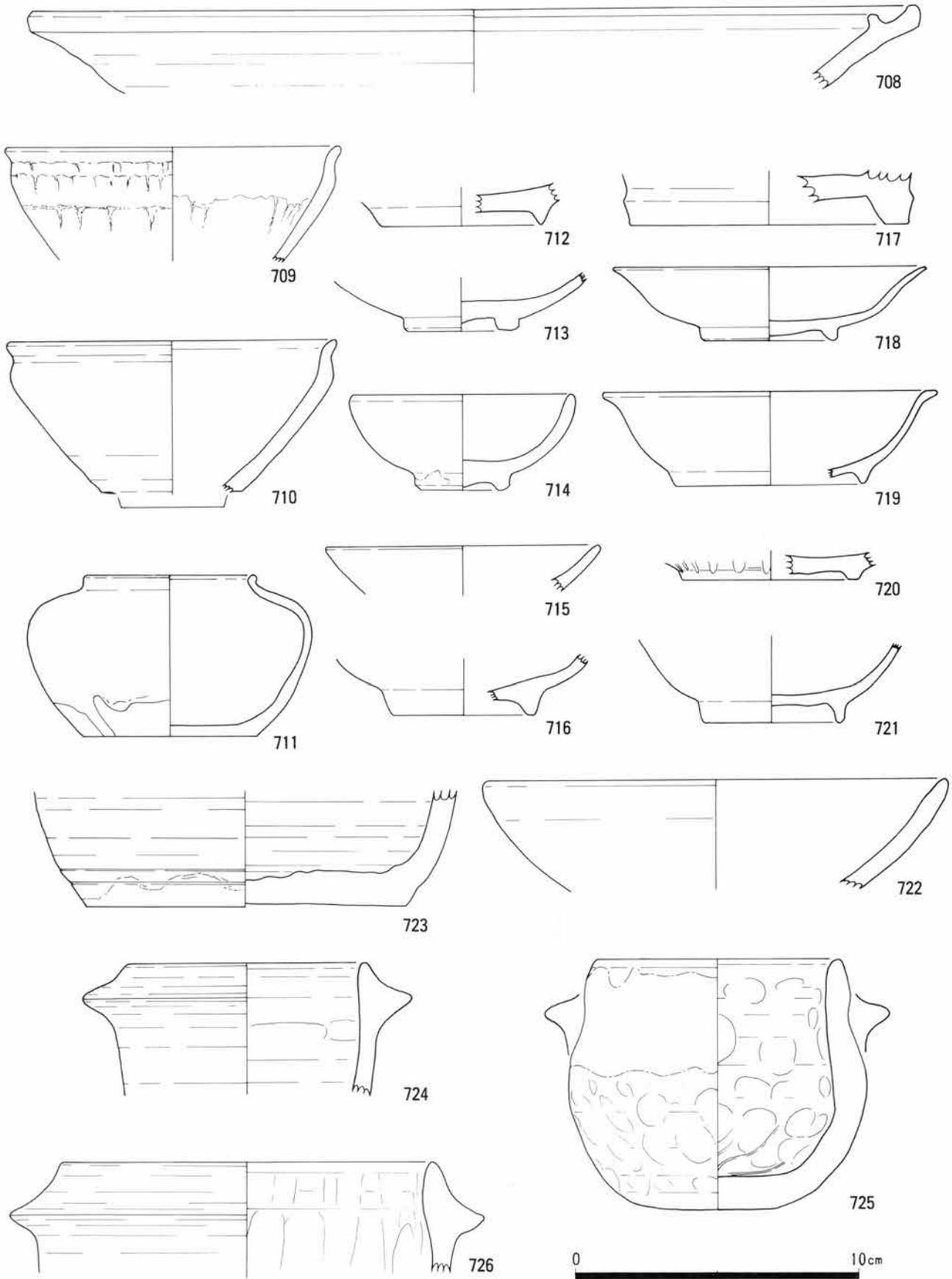
越前焼播鉢651・653～655 土師質皿656～659 瓦質火鉢652

第40図 第77次調査遺物(4)

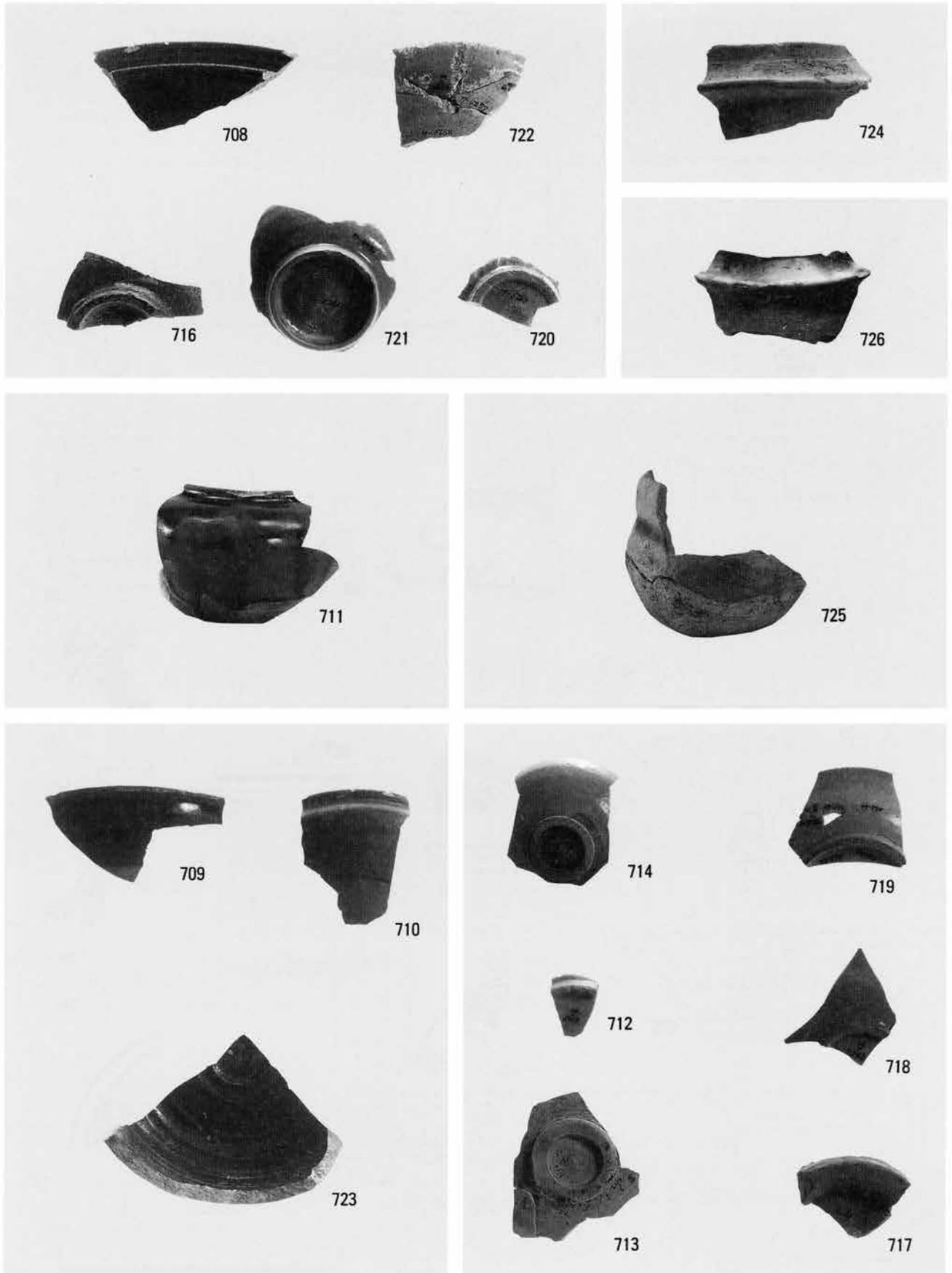




第41図 第77次調査遺物 (5)

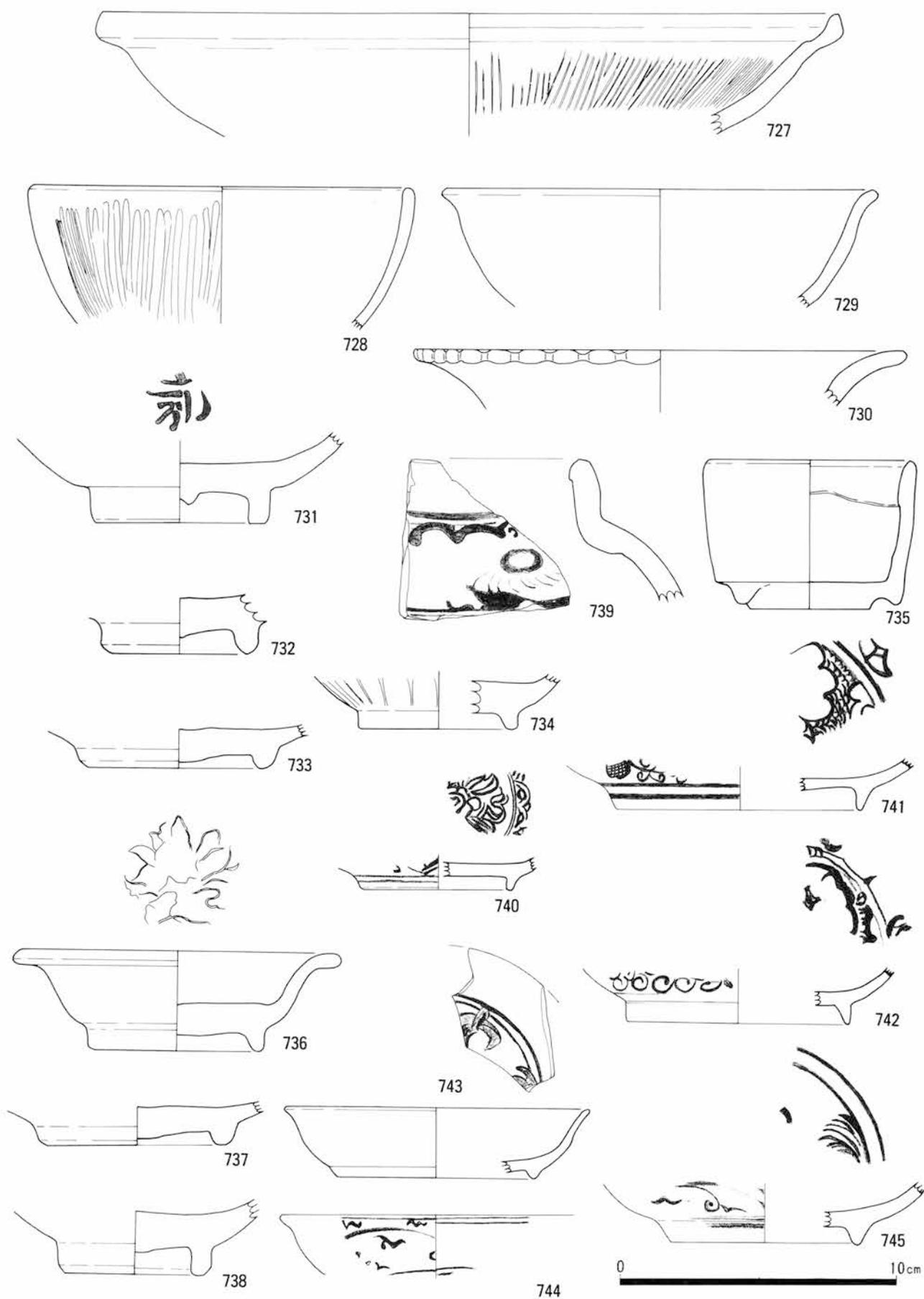


国産陶磁720～722 鉄釉碗709・710 瓶723 茶入711 鉢708 土師質土釜724～726 白磁壺712・717 皿713・718・719 碗713・714 朝鮮陶磁器716

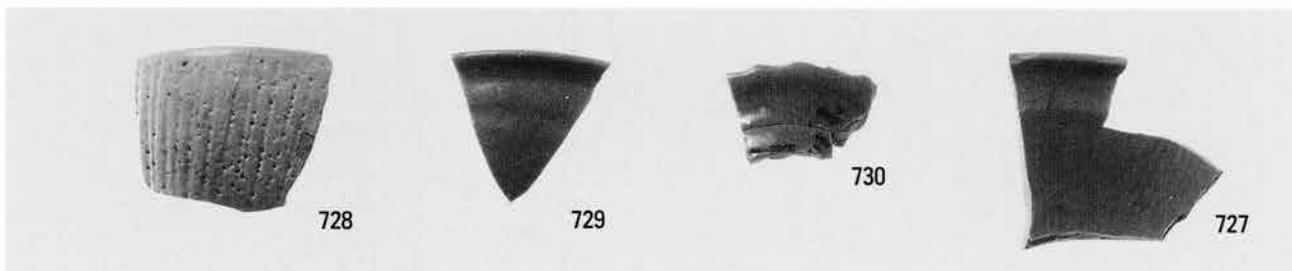
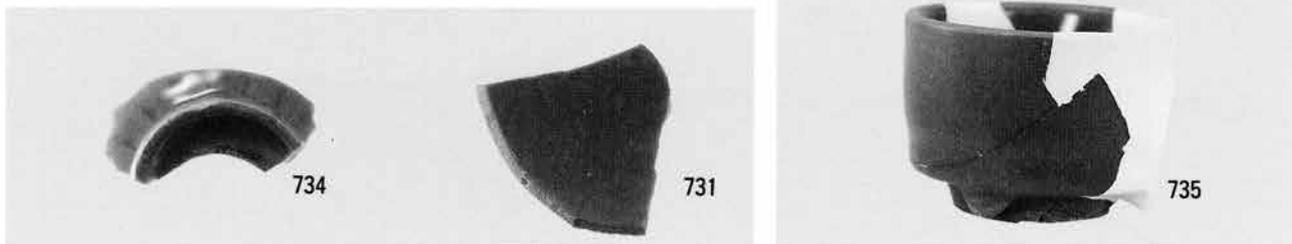
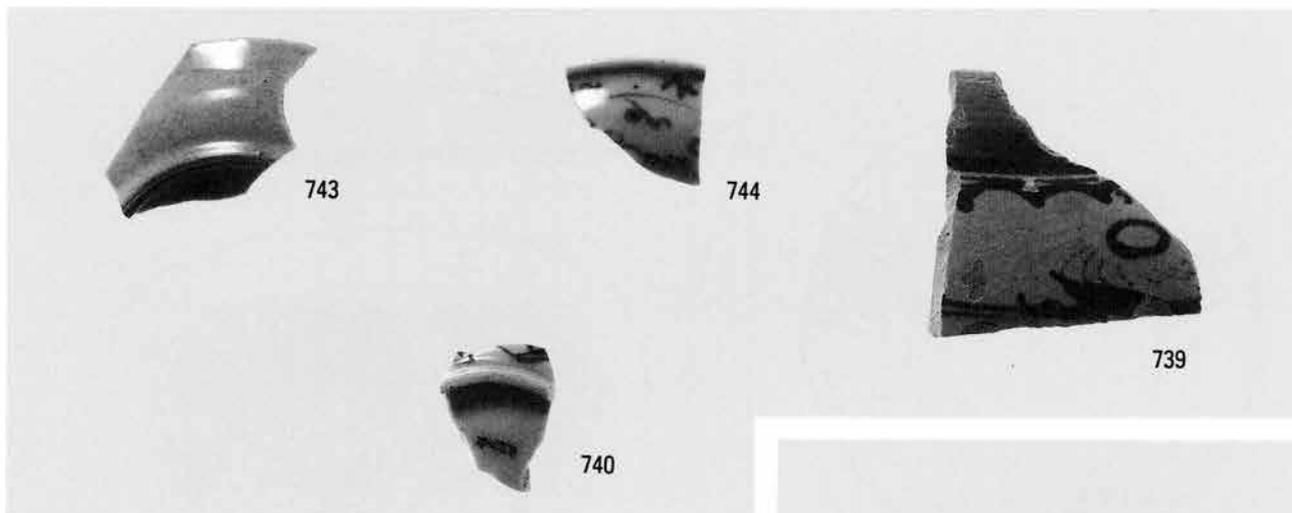
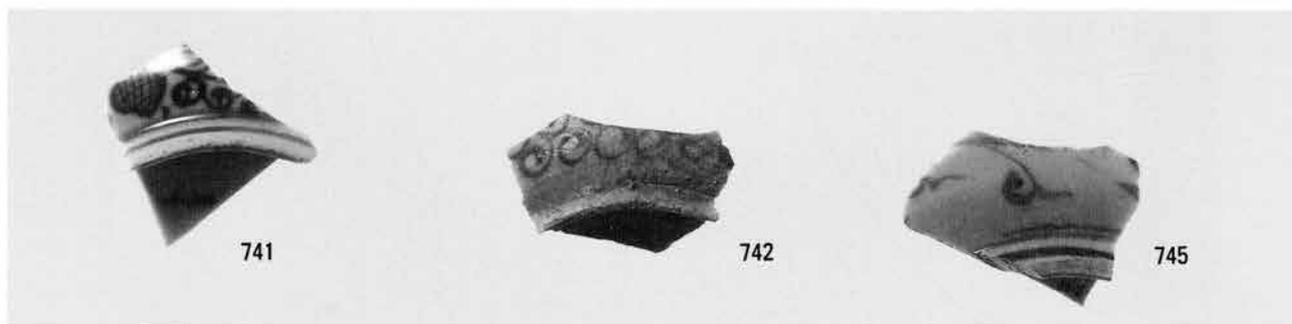


国産陶磁器 720~722 鉄稻碗 709・710 瓶 723 茶入 711 鉢 708 土師質土釜 724~726 白磁壺 717 皿 713・718・719 碗 713・714  
 朝鮮陶磁器 716

第42図 第77次調査遺物 (6)

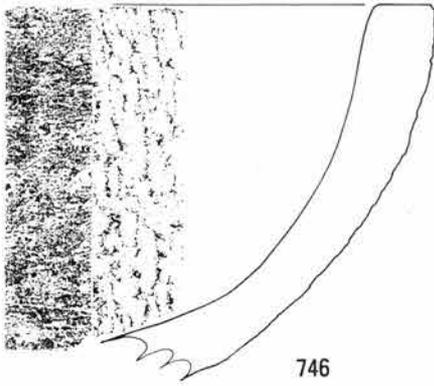


青磁盤727 碗728・729・731~734・738 皿730・736・737 香炉735 染付皿740~745 中国産陶磁器鉄絵壺739

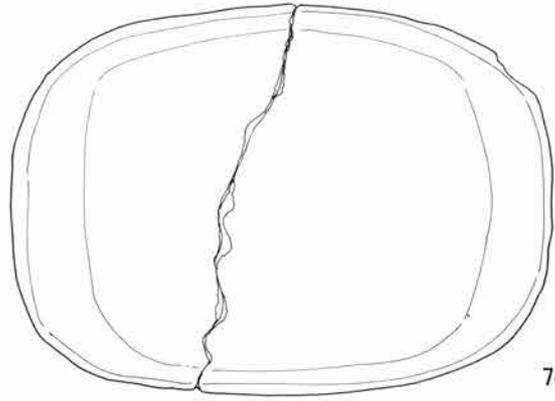


青磁盤727 碗728・729・734・738 皿730・736・737 香炉735 染付皿740~745 中国産陶磁器鉄絵壺739

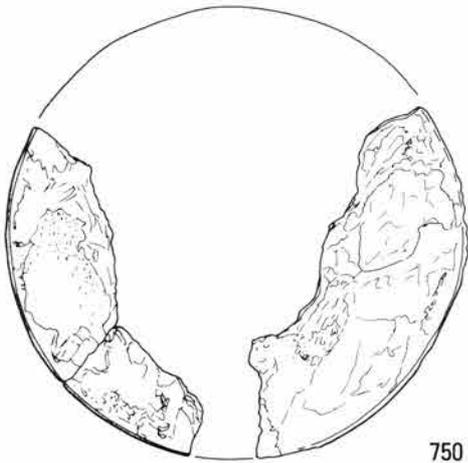
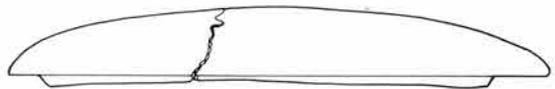
第43図 第77次調査遺物 (7)



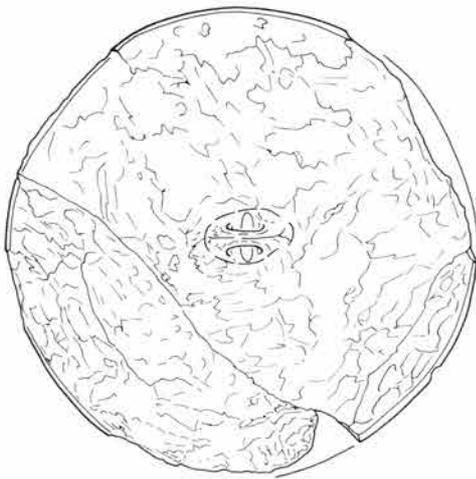
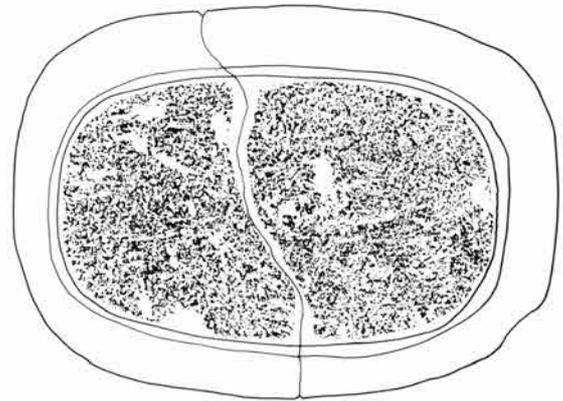
746



747



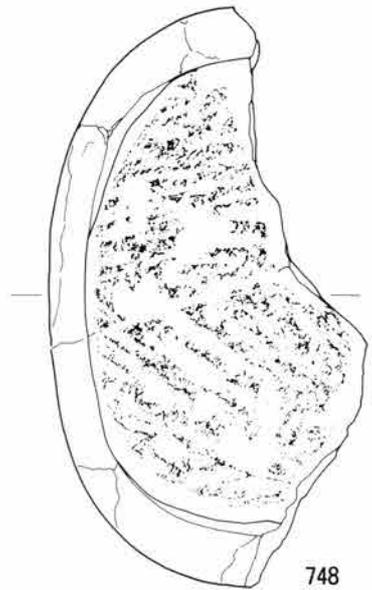
750



751



749



748

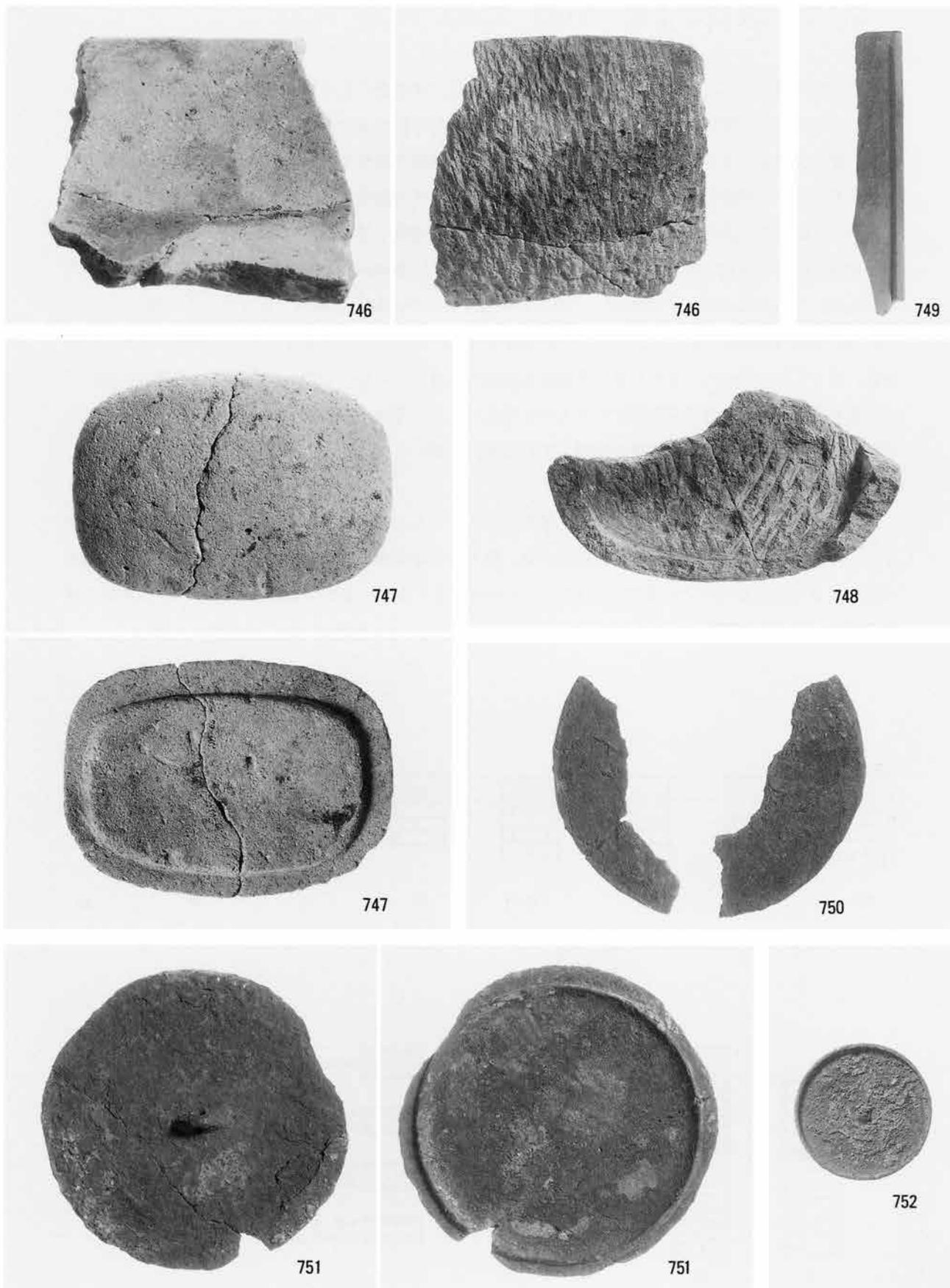


752



0 15cm

石製品火鉢746 バンドコ747・748 硯749 金属製品鉄製蓋750・751 銅鏡752

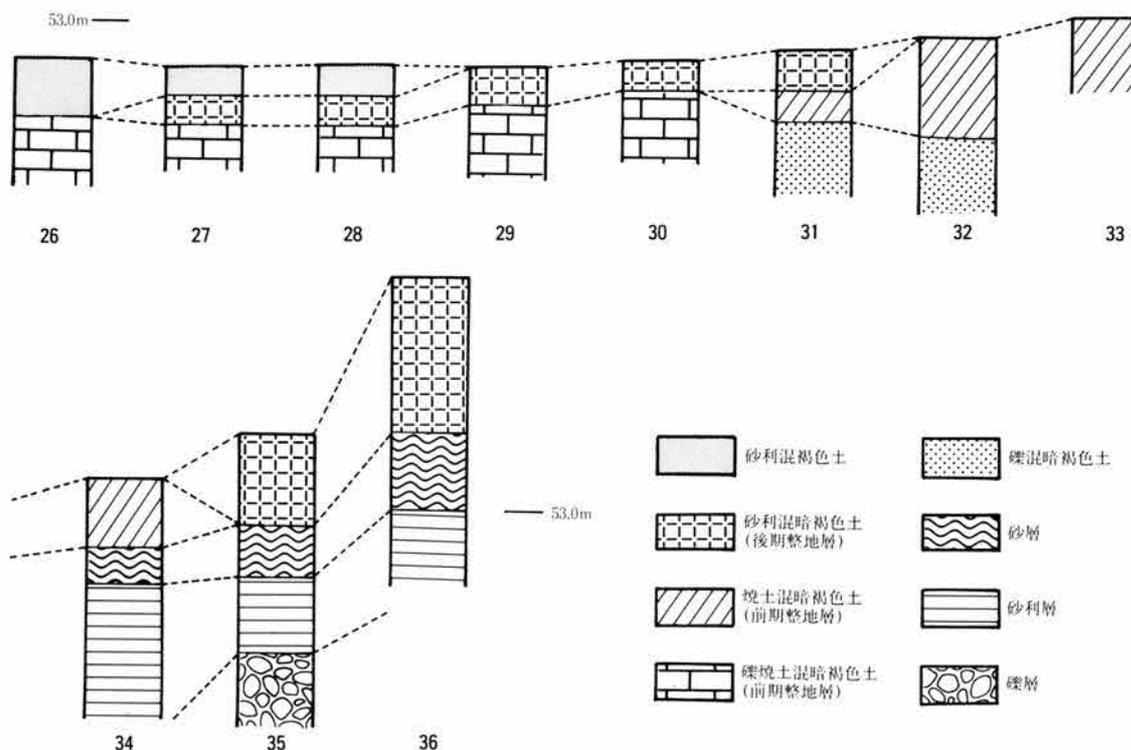


石製品火鉢746 バンドコ747・748 硯749 金属製品鉄製蓋750・751 銅鏡752

## 5. 第78次調査遺構（第44図～第49図，PL.48～PL.54）

ここで取り扱うのは、概要でのべた通り、主として第78次調査により検出された、南北方向の道路に面し、西の山裾との間に位置する、敷地間口約33m、奥行き約43m（山裾の未調査部を除く）の屋敷である。第77次調査により検出した北隣の屋敷同様、この屋敷を構成する建物群については、水田化に伴う削平等を受け、明確でないが、断片的ではあるものの、その概要をうかがうことが出来る土塁3、溝6、門1、建物5、井戸1、石積施設2、越前焼大甕埋設遺構1等を検出した。これらの遺構は、基本的に前後2時期に分けて考えることができ、後期は、この一乗谷の町が朝倉氏とともに滅亡した天正元年（1573）の時点に存在した遺構群、これらに先行するのが前期の遺構群であって、この間には、0.1～0.4mの礫や砂利等の混じる土を用いた整地層がみられるものの、一様ではなく、明確さを欠く点もある。そうしたことから、さらに区分される可能性も残されている。この二つの時期の遺構群については、基本的には、いずれも屋敷割にのるものと考えられる。なお、深掘トレンチにおいて、これらに先行する生活面と考えられる整地層を確認しているが、一部にとどまり、明確な遺構を欠くこと等から、詳細は不明である。

なお、ここで説明に用いている方位は、地形を大きくとらえた、谷の奥を南、入り口を北とするものであって、屋敷が面している正面の道路側が東、奥となる山裾側が西となる。正確には、正面の土塁石垣方向と第VI系座標方位との間ではN17°Eのずれがある。また、遺構平面図等に記した座標数値は第VI系座標に基づく位置を示している。



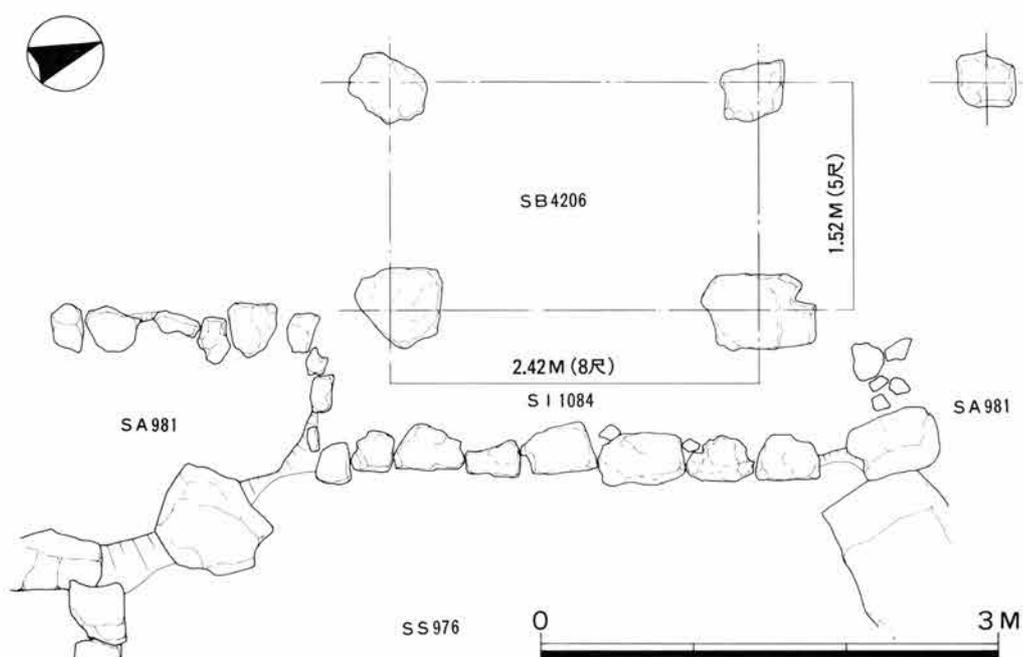
挿図23 第78次調査区Uライン土層模式図

**S A 980・981** 調査区の東端に位置し、屋敷の正面となる南北方向道路道路 S S 976に面する南北方向の土塁。前後期を通じて存在する。ほぼ中央に門 S I 1084を開き、これを境にして、北を S A 980、南を S A 981とする。S A 980は、長さ約14m、幅は2.1mである。道路に面する東面には径0.5m前後の自然石を積んだ石垣の基礎部、1～2石が比較的良好に残されているが、屋敷内となる西面は一部に石垣の根石と考えられる石列が残るのみである。なお、北端近くの屋敷の北境界となる土塁 S A 4127の南に沿う溝の屋敷外への排水のための暗渠 S Z 1091が設けられている。南の S A 981は、長さ約15m、幅は1.8mであって、石垣の状況は、北の S A 980とほぼ同じであって、やはり屋敷の外側となる東面の石垣の残りが良く、また、西面についても一部に基礎部が残されている。道路は、門の約1.5m南で行き止まりとなり、ここに仕切りの東西方向土塁 S A 983が取り付くとともにこの南約3mに暗渠 S Z 1092が設けられている。(第49図)

**S A 4127** 調査区の北端に位置し、屋敷の北境界となる東西方向の土塁。前後期を通じて存在する。検出長約40m、幅は1.2mである。屋敷の正面土塁 S A 980とは直交せず、内角で75°とかなり振れている。そして東端から約15m西の地点で約7°北へ折れ、山裾へ向かって延びる。なお、この折れ曲がり部から東にはこの土塁の南面石垣を兼用する排水溝 S D 4200が存在する。この土塁を境に北隣の屋敷との間には0.3～0.4mの高低差がみられ、この屋敷が高い。北面石垣の残存高さは0.5m前後で、自然石1～2石を積んでいる。南面石垣もほぼ同様であるが、北面に比べれば、少し低い。なお、削平を受けたためか、西の山裾近くでは、こうした石垣は残されていない。(P L. 50・52)

**S A 4331** 調査区の南端に位置し、屋敷の南境界となる東西方向の土塁。前後期を通じて存在する。検出長約36m、幅は1mである。屋敷の正面土塁 S A 981とは取り付き部では、ほぼ直交しているが、約12m西へ延びた後、南へ6°折れ、西の山裾へ向かって延びている。この土塁を境にして、南北の屋敷の間には0.2mほどの高低差がみられ、この北の屋敷が低い。北面石垣の残存高さは0.3mほどで、自然石1～2石で構成されている。西の山裾近くでは削平のためか、石垣は残されていない。

**S I 1084・S B 4206** 屋敷正面に位置する門とその建物。前後期を通じて存在する。門 S I 1084は、屋



挿図24 門 S I 1084・門建物 S B 4206平面詳細図 (1/50)

敷のほぼ中央に位置する。間口は正面の南北袖石が倒されていたため正確な寸法は明らかでないが、延段石列で計ると約3.6mとなり、少し広いようである。袖石は、南が正面幅0.6m、奥行幅0.8m、高さ0.7m、北が正面幅0.7m、奥行幅0.8m、高さ1.2mである。延段は、正面土塁石垣面から約0.3m内に、径0.4~0.5mの扁平な自然石9個を基壇状に並べるもので、道路面との高低差は0.2mである。門建物S B4206は、長径0.6m程の礎石4個を前後に2個ずつ配置するもので、正面の2個が少し大振りである。この礎石配置から、正面幅2.4m（8尺）、奥行き1.5m（5尺）の規模の建物であることが知られ、薬医門形式と推定される。なお、正面の礎石列は延段石列から約1mの距離を持っている。また、後の控柱筋の約1.5m北に礎石と考えられる1石が存在する。この門建物とのなんらかの関係を有すると考えられるが、その詳細等は明らかでない。（P L.52）

**S D4200** 屋敷の北境界土塁裾に位置する東西方向の溝。前後期を通じて存在した遺構と考えられる。東端で暗渠S Z1091に繋がり、屋敷の正面土塁S A980を潜り、屋敷の外へ排水する。北面側石は土塁S A4127の南面石垣と兼用となる。長さ約11m、幅0.3m、深さ0.3~0.4mである。西で南に折れて、S D4201となる。（P L.52）

**S D4201・4202** 屋敷の北、中程で検出された鍵型に曲がる溝。前述した屋敷の北境界土塁に沿って存在する溝S D4200から南に延びる南北方向の溝がS D4201。そして、この溝から西へ延びる東西方向の溝がS D4202。基本的には後期の遺構と考えられる。S D4201は検出長約8m、幅0.25m、深さ0.25m程で、西の側石が比較的良く残されており、径0.3m程度の扁平な石1石を並べている。これに対し、東側石は北端に一部が検出されたのみである。当初から東側石は存在しなかった可能性も考えられる。S D4202は検出長約10m、幅0.2m、深さ0.15m程。西半部は比較的良く残り、南北の側石がみられるが、東半部は側石は残されていない。また、さらに西へ延びていた可能性も残されている。（挿図25、P L.50・51）

**S D4203** 屋敷の北寄り中ほどで検出された東西方向の溝。検出面から考え、朝倉氏の一乗谷の町の廃絶後の水田化に伴う遺構の可能性が高い。径0.5m程度と少し大きな自然石を並べており、幅0.4m、深さ0.2m程。北側石が比較的良く残り、約20m検出された。

**S D4204** 屋敷の南半西寄りで検出された東西方向の溝。後期の遺構。検出長1.5m、幅0.2m、深さ0.2m程。西端には止め石が存在し、確実にここから始まっていたことが知られる。周辺の建物群と方位を合わせていることから、これらと密接な関係を持つものと考えられる。（P L.53）

**S D4205** 調査区西端中ほどで検出された東西方向の溝。後期の遺構。検出長2.5m、幅0.4m、深さ0.2m程。西へ向かって、さらに延びている。

**S Z1091** 屋敷の東北隅にあって、土塁S A980をくぐって溝S D



挿図25 溝S D4201（北から）



挿図26 暗渠S Z1091（東から）

4200を受けて排水する暗渠。前後期を通じて存在する。この暗渠の北の側壁の一部が二重になっており、改修があったことが知られる。天井石も一部残っていた。なお、底に敷石はみられない。(挿図26・27)

**S Z 1092** 屋敷の正面南半の土塁S A 981に設けられた暗渠。屋敷内ではこの暗渠に繋がる溝は残されていない。不明な点も残るが、前後期を通じて存在したものと考えられる。

**S B 4207・4208** 屋敷の南西部で検出された礎石を持つ建物遺構。基本的には後期の遺構と考えられる。径0.3~0.5mの比較的しっかりした礎石を据えている。その間隔には若干のばらつきもあるが、1間は約1.9m(6.2尺)が基準と考えられる。ここでは、西の南北約5.6m、東西約6mの規模の建物をS B 4207とし、この東に延びる建物をS B 4208と分けたが、一つの建物の可能性もある。(P L.53)

**S B 4209** 屋敷の南西部で検出された礎石を持つ建物遺構。前述した建物S B 4207の南に接して存在する。基本的には後期の遺構と考えられるが、0.1m弱レベルが低く、この建物がまず先行して造られ、後にこれに接して、建物S B 4207が造られたと考えられる。検出規模は、南北約3.0m、東西約2.4mであるが、これは建物の一部の可能性が高い。(P L.53)

**S B 4210** 屋敷の中央付近で検出された礎石を持つ建物遺構。後期の遺構と考えられる。部分的な検出である。基準となる柱間寸法は約1.9m(6.2尺)とみられ、方位も南西部の建物群と同じである。

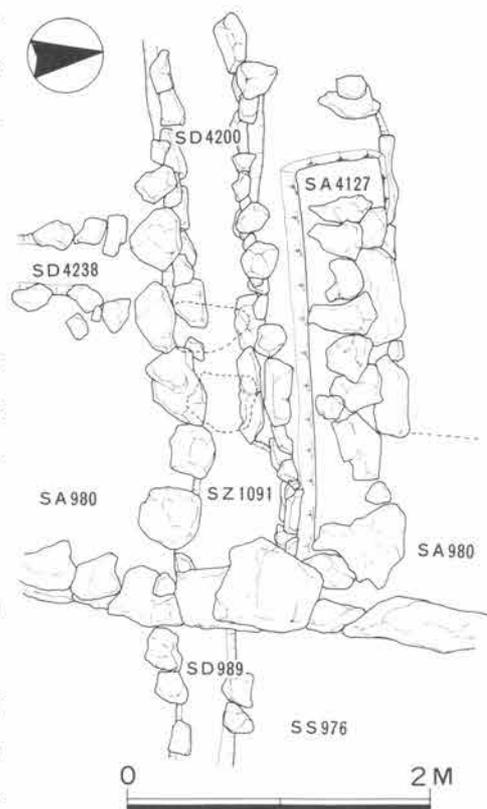
**S E 4211** 敷で唯一検出された井戸。天端石を欠くが、基本的には後期の遺構と考えられるが、前期から存在していた可能性も考えられる。基礎井桁等は置かず、砂礫層に直接自然石を積み上げている。内径は0.9m、深さ2.5m程で、底部は若干不整形である。(挿図28, P L.54)

**S F 4212** 屋敷の中ほどやや北よりで検出された自然石を方形に積み上げた石積施設。後期の遺構と考えられる。東西1.0m、南北1.2m、深さ0.8mの規模と考えられる。周囲の石積は、南面が最も良く残り、北面はほとんど残らない。(P L.51・54)

**S F 4213** 屋敷の北境界土塁S A 4127の脇、中ほどで検出された自然石を隅丸方形に積み上げた石積施設。後期の遺構と考えられる。東西1.2m、南北0.9m、深さ1.0mの規模と考えられる。西面の石積は残らない。(P L.54)

**S V 4214** 屋敷の北境界土塁S A 4127の脇、中ほどで検出された南北方向の石列。後期の遺構である。長径0.4m程度の自然石を並べるもので、東に面を持ち、検出長は約2.5m。方位は他のいずれの遺構とも異なる。

**S V 4215** 屋敷の北境界土塁S A 4127の脇、中ほどで検出された南北方向の石列。S V 4214の西脇に方



挿図27 暗渠S Z 1091詳細図 (1/50)



挿図28 井戸S E 4211

位を変えて位置し、東に面を持ち、検出長は約4.5m。朝倉氏滅亡後の水田化に伴う遺構の可能性の高い溝S D 4203とほぼ直角に繋がることから、これらと一連の遺構と考えられる。なお、S V 4214とのレベル差は約0.1mである。

**S V 4216** 調査区西端中ほどで検出された東西方向の石列。後期の遺構である。北に面を持ち、検出長は約1.8m。方位は北の溝S D 4205とほぼ同じである。さらに西へ延びている。

**S V 4217** 屋敷の西南部の建物群に接して検出された鍵型に曲がる小規模な石垣。建物群に先行するようで、前期の遺構の可能性が高い。自然石を2段積み、高さは約0.2m。東に面を持つ検出長1.3mの南北方向部と、この北端から東へ延びる長さ0.8mの東西方向部からなる。

**S X 4218** 屋敷の中央部前よりで検出されたピット。時期については明確でない点も残るが、ほんらいは整地土の下に存在した可能性が高く、前期の遺構ではなかろうか。詳細は不明である。

**S X 4219** 屋敷の北半、やや前寄りに位置する溝S D 4202の東端近くの底で検出されたピット。溝等で攪乱されており、詳細は不明。

**S X 4220** 屋敷の北半中ほどの北境界土塁S A 4127近くで検出された石の集まり。後期の遺構と考えられる。ほぼ土塁に平行するように2列、南北に石が並んでいるようであるが、詳細は不明。

**S X 4221** 屋敷の北半やや奥寄りで検出された石の集まり。後期の遺構と考えられる。「コ」の字形に並んでおり、中でも、東西に並ぶ石列は北に面を持っている。石は積み上げていない。性格等は不明。

**S X 4222・4224～4227** 屋敷の中ほどの下層で検出された前期の遺構群。断片的に残るのみで詳細は不明である。

**S X 4223** 屋敷の中ほど、井戸S E 4211の脇で検出された石の集まり。基本的には後期の遺構と考えられるが、若干レベルは低く、先行する可能性も考えられる。詳細は不明。

**S X 4228～4233** 屋敷の南半、中ほどで検出された遺群。建物S B 4210と0.1m程度のレベル差がみられることから、前期の遺構と考えられるが、断片的に残るのみであることから、不明な点も多い。S X 4228は、南北に石が並ぶ。S X 4229は石敷の様に見受けられる。

**S X 4234** 屋敷の南半、やや奥よりで研出された東西方向の石列状遺構。前期の遺構。径0.2m程度の石を並べるもので、検出長2.0m程で、面は持たない。

**S X 4235** 屋敷の南西部の建物S B 4207の南西で検出された越前焼大甕を埋設した遺構。後期の遺構と考えられる。大甕は2個で約1.5mの中心距離を持って、東西に並ぶ。底部も原位置を保っておらず、また、かなり入念に埋められており、最終時には廃棄されていた可能性が高い。性格等は不明である。  
(挿図29, P L. 54)

**S X 4236・4237** 調査区の西端、中ほどで検出された遺構。後期の遺構。詳細は不明だが、S X 4236は、径0.4mほどの礎石状の石が東西に並ぶことから、建物の一部の可能性が考えられる。



挿図29 越前焼大甕埋設遺構S X 4235

## 6. 第78次調査遺物 (第50図～第57図, P L.55～P L.62)

78次調査により出土した遺物の破片総点数は7842点を数え、その内訳は表に示すとおりである。これを調査面積1.270㎡による1㎡あたりの密度により示せば6.18点/㎡となり、これは本遺跡における出土傾向のうち少ない部類に属するものである。しかし、この結果がそのまま本地点の遺物相を反映しているものとは考えられず、遺物の一部は本報告書で合わせて報告する29次調査地点に流れ込んでいる可能性が高い。こうした遺物の原位置からの移動現象は、本遺跡において通有に認められる現象である。今回報告する地点における遺物出土状況は良好とは言えず、遺構内出土遺物は極少量であるが、これらについては小破片であっても極力図化することとした。また、それ以外の包含層出土遺物については各層位ごとに図示している。以下に各遺物についての概要を述べるが、分類については越前焼大甕・播鉢は「第36次調査」『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983年 福井県教育委員会、土師質皿は『朝倉氏遺跡発掘調査報告』1 1979年 福井県教育委員会、染付は小野正敏「15, 16世紀の染付碗, 皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No 2 1982年 日本貿易陶磁研究会、石硯は水野和雄「日本石硯考」『考古学雑誌』第70巻第4号 1985年 日本考古学会の分類を基準とした。

### 表土層出土遺物 (第50図, P L.55)

表土出土遺物は調査開始後、最初の作業である耕作土除去作業中に出土した遺物群である。これらの遺物群を構成する要素として越前焼, 土師質土器, 瀬戸・美濃焼, 瓦質土器, 中国製陶磁器, 朝鮮製陶磁器, 金属製品, 石製品が認められるものの、その多くは長い間の耕作により小破片に割れており、図化されるものは遺物の総量に比し少ない。

**越前焼** (801) は口縁部が著しく肥厚するIV群に属する甕である。口縁上面は凹状を呈し、内面の段

器形	破片数	%	器形	破片数	%	器形	破片数	%				
									器形	破片数	%	
越前焼	甕	1,798	中国製陶磁器	碗	113	金	兜肩鹿・前立	1				
	壺	250		皿	59		鉄 鍋	1				
	鉢	187		鉢	8		鉄 釘	27				
	播鉢	559		鉢 瓶	1		小 柄	1				
	桶	21		香 炉	6		銅 銭	9				
	火	1		その他	6		仏 餉器	1				
	その他	1		計	193		鉄砲の鉛玉	1				
	計	2,816		計	2.5		その他	32				
	瀬戸・美濃焼	碗		59	白磁		碗	11	石製器	計	73	0.9
		皿		1			皿	258		茶 白	1	
		鉢		5			皿 杯	12		硯	3	
		卸 皿		2			その他	3		バンドコ	61	
		壺		12			計	284		風 炉	2	
		瓶		12			染付	碗		59	砥 石	12
		その他		3				皿		82	白	1
計		94	杯	3		鉢		15				
灰釉		碗	27	計		144	盤	51				
		皿	9	小 計		621	その他	82				
		鉢	9	朝鮮製陶磁器		そば茶碗	1	計		228	2.9	
		卸 皿	3			白磁碗	7	木製品		漆 片	3	
		その他	1			壺	3			その他	1	
		計	50	計		11	計			4	0.1	
		土師質	皿	3,677		陶磁器類の計		7,518		95.9	その他	壁 土
	土 釜		12	瓦質	風 炉	79	紘 澤	1				
	土 鈴		4		火 鉢	13	炭	10				
	その他		2		香 炉	3	その他	2				
	計		3,695		仏花瓶	1	計	19	0.2			
	瓦質		風 炉		79	その他	4	合計	合計	7,842		100
			火 鉢		13	計	100		1.3			
			香 炉		3	信楽・その他	25		0.3			
			仏花瓶		1	近世・その他	106		1.4			
その他			4		小 計	6,886	87.8					
計			100		1.3							
信楽・その他			25		0.3							
近世・その他			106		1.4							
小 計			6,886		87.8							

表5 第78次調査出土遺物一覧表

は消滅し、外面の稜線は僅かに認められるまでに退化している。内外面共に回転ナデ調整する。(802)は壺の口縁部であるものの、小破片であることから口径は不明である。調整は内外面共に回転ナデ調整する。(803)は播鉢の底部片である。内面には12条を1単位とする播目を有するが、播目の間隔は粗い。底部に近い部分では使用による摩滅が激しい。体部外面は回転ナデ調整する。

**瀬戸・美濃焼** (804)は復元口径14.4cmを測る灰釉碗である。体部は外上方へ内湾しながら立ち上がり、口縁部を丸く収める。口縁部は手擦れのため釉が磨耗している。

**中国製陶磁器** 中国製陶磁器には青磁、白磁、染付が認められるが、いずれも小破片である。本稿では、その中から図示し得た染付について紹介することとした。(805)は皿C群である。体部外面に芭蕉葉文を描き、底部内面には捻花を描いている。底部は碁笥底である。(806)は皿B群であり体部外面には牡丹唐草文を、底部内面には玉取獅子を描いている。復元高台径は5.9cmを測る。(807)は碗C群であり、体部外面および底部内面には唐草文の退化文様を描いている。復元高台径は7cmを測る。(808)は碗C群である。底部内面は無文であるが、底部外面には「…年造」の一部が認められる。復元高台径は7cmを測る。

**金属製品** (809)は釘であり、断面は台形を呈する。全長6cmを測る。

**石製品** (810)は硯であり、全長6.5cm・幅3.3cmを測る。長方硯I B c類に分類される。

#### 後期遺構確認面出土遺物 (第50～53図, P L.55～58)

後期遺構確認面出土遺物は、表土除去後における遺構確認作業中の出土遺物である。越前焼, 土師質土器, 瀬戸・美濃焼, 信楽焼, 瓦質土器, 中国製陶磁器, 朝鮮製陶磁器, 金属製品, 石製品が認められる。

**越前焼** (811)は甕IV群に属するものであり、口縁部外側には鋭い稜を持ち、内側は凹状を呈する。口唇部で著しく肥厚する。調整は内外面ともに回転ナデ調整する。(812～821)は播鉢である。(812)は、IV群に分類され、復元口径40cm, 器高16.4cmを測る。体部内面には12条を1単位とする播目を有し、口縁部内側には1条の沈線が巡る。また、体部外面は回転ナデ調整する。(813)はIV群に属し、体部内面には10条1単位とする播目を有するが、その間隔はやや粗い。口縁部内側には1条の沈線を有し、体部外面には回転ナデ調整する。(814)もIV群であるが、口唇部上面が平面ではなく、凹面を呈している。体部内面には10条1単位とする播目を有し、口縁部内側には1条の沈線を有する。また、体部外面は回転ナデ調整する。(815)はIV群であり、口唇部上面は平面を呈する。体部内面には9条1単位とする播目を密に有し、外面は回転ナデ調整する。(816)は口唇部を丸く収めるタイプであり、III群に分類されるものである。体部は他の物が直線的に外上方へ伸びるのに対し、本品はやや内湾気味に伸びる点が異なっている。内面には9条を1単位とする播目を密に有しおり、外面は回転ナデ調整する。(817)はIV群に属するものである。口縁部内面には1条の深い沈線を有しており、口唇部上面は平面をなしている。体部内面には12条を1単位とする播目を有し、外面は回転ナデ調整している。(818)はIV群に分類されるものである。口縁部内面には1条の深い沈線を有しており、外面は上方へ折り曲げたような面を形成している。口唇部上面は平面を呈する。体部内面には16条を1単位とする播目を密に有し、外面は回転ナデ調整する。(819)もIV群に属するものであり、口唇部上面は平面を呈している。体部内面の播目は粗く、外面は回転ナデ調整する。(820)は腰部の破片である。内面には8条を1単位とする播目を有する。外面は回転ナデ調整する。(821)も腰部の破片である。内面には12条を1単位とする播目を有するが、これらは使用による磨耗が激しい。外面は回転ナデ調整する。(822)は壺の底部である。復元底径

は9.7cmを測り、腰部外面には斜方向の軽いヘラ削りを有する。底部内面から腰部内面には赤色の顔料が付着している。(823)は卸皿であり、復元口径19cm、器高4.3cmを測る。底部内面から体部内面にかけては全面に10条を1単位とする卸目を有する。体部外面は回転ナデ調整する。(824)は復元口径13cmを測る壺である。調整は肩部内面から外面にかけては回転ナデ調整する。(825)は鉢であり、復元口径15.4cm、器高7.6cmを測る。体部外面は強い回転ナデ調整するが、内面は降灰が強く不明である。(826～827)は桶である。体部はほぼ直立し、口唇部で厚く肥厚する。口縁部内面に1条の沈線を有し、体部内外面を回転ナデ調整する。(845)は壺であり、復元口径17.5cm、器高11.3cmを測る。底部端に小さな高台を有し、そこから立ち上がる体部は内湾しながら肩部に至り、「く」の字状に屈曲して口縁部に至る。頸部には2条を1単位とする縦方向の櫛描文を有し、その直下に横方向の同文様を有する。底部内面から体部内面にかけては横ナデ調整を行い、肩部内面から高台部外面にかけては回転ナデ調整する。体部内面には黒色粒子が少量付着している。(846)は播鉢であり、III群に属する。口径33.5cm、器高13.6cmを測る。体部は底部より外上方へ屈曲し、そのまま直線的に伸び口縁部へ至る。口唇部は平らな面をなし、片口を1ヶ所有する。体部内面には13条を1単位とする播目を有するが、その間隔は粗く、底部内面には施さない。また、体部内外面ともに回転ナデ調整する。

**瓦質土器** (847)は口径29.3cm、推定器高28.5cmを測る風炉である。3ヶ所に高台を有し、底部より外上方へ屈曲した体部は内湾しながら伸び肩部に至り、肩部で上方へ屈曲し口縁部に至る。口唇部では肥厚する。頸部には花文のスタンプを有し、また、頸部の付け根と腰部にはそれぞれ1条の凸帯を巡らす。肩部には3ヶ所に窓を持つ。底部内面から体部内面下半にかけては、丁寧な不定方向のナデ調整を行うが、他は器壁の剝離が著しく不明である。色調は、底部内面が黒色を呈するほかは、橙褐色を呈している。

**土師質皿** (828)は口径11.6cm、器高2.5cmを測る。C類であり口唇部は、上方につまみ上げる。体部下半に指頭圧痕を有し、底部内面から口縁部外面にかけて回転ナデ調整する。(829)は口径10.8cm、器高2.1cmを測る。C類であり口唇部は丸く収める。体部下半に指頭圧痕を有し、底部内面から口縁部外面にかけて回転ナデ調整する。口縁部外面にはタール痕を有する。(830)は口径10.5cm、器高2.4cmを測る。C類であり口唇部は丸く収める。体部下半を指で成形した後、底部内面から口縁部外面を回転ナデ調整する。口縁部内外面にはタール痕を有する。(831)は口径10.4cm、器高2.4cmを測る。C類であり口唇部を極僅かに上方へつまみ上げる。体部下半に指頭圧痕を有し、底部内面から口縁部外面を回転ナデ調整する。口縁部内面にはタール痕を有する。(832)は口径10.4cm、器高2.6cmを測るC類である。口唇部は僅かに上方へつまみ上げる。体部下半に指頭圧痕を有し、底部内面から口縁部外面を回転ナデ調整する。また、口縁部内外面にはタール痕を有する。(833)は口径9.9cm、器高2.1cmを測る。C類であり、口唇部は丸く収める。体部下半には指頭圧痕を有し、底部内面から口縁部外面は回転ナデ調整する。(834)は口径9cm、器高2.2cmを測る。C類であり、口唇部は上方へつまみ上げる。体部には指頭圧痕を有し、底部内面から口縁部外面にかけて回転ナデ調整する。口縁部内外面にタール痕を有する。

(835)は口径8.8cm、器高2cmを測る。C類であり、口唇部を上方へつまみ上げる。体部には指頭圧痕を有し、底部内面から口縁部外面は回転ナデ調整する。(836)は口径8.3cm、器高2.2cmを測る。C類であり、口唇部は丸く収める。体部下半には弱い指頭圧痕を有し、口縁部内外面にはタール痕を有する。

**瀬戸・美濃焼** (837)は鉄釉の羽釜であり、口径は5cmを測る。(838)は鉄釉の天目茶碗であり、口径11.2cmを測る。体部はやや内湾気味に外上方へ伸び、口縁部でくびれる。腰部は露体となっており、回

転へラ削りする。(839)は灰釉の鉢であるが、小破片のため口径は不明である。体部内外面共に施釉されているが、口唇部のみ露体となっている。

**中国製陶磁器** 中国製陶磁器は青磁、白磁、染付が出土している。(840)は白磁坏であり、口径5.6cmを測る。器厚は薄く、腰部より内湾気味に上方に立ち上がる体部は口縁部で外湾する。(841)は染付皿B群であり、復元口径16cmを測る。体部外面には牡丹唐草文を描き、口縁部外面には2条の界線を描く。また、口縁部内面には1条の界線を描いている。(842)は染付皿であり、復元高台径7cmを測る。底部内面には雲龍文を描き、その周りに界線を描いている。また、高台部外面にも1条の界線を描く。

**金属製品** (843~844)は釘である。(843)は全長6cm、最大巾0.9cmを測り、断面は台形を呈する。(844)は全長6cm、最大巾0.6cmを測り、断面は台形を呈する。

#### **焼土層出土遺物** (第53図, P L.58)

焼土層は後期の遺構面を一部覆う層であり、調査区T列以南において検出されたものである。越前焼、土師質土器、瀬戸・美濃焼、中国製陶磁器、朝鮮製陶磁器、金属製品などが認められるが、遺物量は極少量であり小破片が多い。

**朝鮮製陶磁器** (848)は復元口径18.8cm、器高9.8cmを測る白磁碗である。高台は高く1.2cmを測り、僅かに下方に開く「ハ」の字状を呈する。大きな底部より丸味を持って外上方へ強く屈曲した体部は直線的に伸び、口縁部で弱く外湾する。高台部下端には目痕が6ヶ所認められ、復元するとその数は11~12ヶ所になるものと想定される。使用時に破損したものと考えられ、漆による補修が認められる。

**金属製品** (849)は兜の肩庇と前立(鍬形台)であり、肩庇は鉄製で銅製の覆輪で縁を飾る。覆輪は左右両側と中央下部をピン留めする。兜本体には、上部3本の割ピンで固定する。前立は中央と左右の3本の割ピンで肩庇に固定する。中央のピンの座金に細線が施される以外には、装飾的細工は認められない。

#### **S D 4200出土遺物** (第53図, P L.58)

**越前焼** (850)は26.3cmを測るを測る播鉢である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は凹面をなし、体部内面には18条を1単位とする播目を有する。使用中に破損したものと考えられ、断面には漆による補修痕が認められる。(851)は播鉢の破片であり、IV群に属する。体部は直線的に外上方に伸び、口縁部を丸く収める。体部内面には8条を1単位とする播目を有し、体部と口縁部の境には1条の沈線を巡らす。色調は白色を呈し焼成は甘い。

**土師質皿** (852)は口径8.5cm、器高1.9cmを測るC類である。体部には指頭圧痕を有し、底部内面から口縁部外面にかけては回転ナデ調整し、口唇部は上方につまみ上げる。また、口縁部内面にはタール痕を有する。

#### **S D 4202出土遺物** (第53図, P L.58)

**土師質皿** (856)は口径10.2cm、器高2.4cmを測るC類である。体部には指頭圧痕を有し、底部内面から体部上半を強い回転ナデ調整する。口縁部は丸く収める。また、口縁部内外面共にタール痕を有する。(857)は口径9.6cm、器高2.4cmを測るC類である。体部には指頭圧痕を有し、体部内外面共に回転ナデ調整する。口縁部は丸く収め、内外面共にタール痕を有する。(858)は口径9cm、器高2.3cmを測るC類である。体部外面には指頭圧痕を有し、内外面共に回転ナデ調整する。口縁部は丸く収め、内面にはタール痕を有する。

**中国製陶磁器** (859)は口径6.8cm、器高3cmを測る白磁坏である。底部には断面三角形を呈する高台

を有する。体部は底部より僅かに丸味を持って屈曲し、外上方に直線的に伸びるが口縁部で外湾する。底部内面外周および高台部畳付の釉を削り取っている。

**S D 4204 出土遺物** (第53図, P L .58)

**土師質皿** (853) は口径9.9cm, 器高2.2cmを測るC類である。体部外面下半には指頭圧痕を有し、体部外面上半から底部内面にかけては回転ナデ調整する。また、口縁部は丸く収める。(854) は口径6.1cm, 器高2cmを測るB類である。ほぼ丸底の底部より内湾しながら伸びる体部は、口唇部をやや尖り気味に収める。底部より口縁部にかけて指頭圧痕を残す。(855) は口径6.3cm, 器高1.9cmを測るB類である。丸底の底部より立ち上がった体部は、内湾しながら伸び口縁部へ至る。口唇部はやや尖り気味に収める。底部より体部外面には指頭圧痕を残す。

**S E 4211 出土遺物** (第54図, P L .59)

**越前焼** (860~863) は播鉢であり、(860) はIII群である。外上方に直線的に伸びた体部は口縁部下で上方へ若干屈曲し、口唇部へ至る。口唇部は肥厚し、上面は平たく収める。10条を1単位とする播目を有するが、その間隔は粗い。体部内外面共に回転ナデ調整する。(861) は、IV群に属する。口唇部上面は平面を呈し、体部との境には1条の沈線を巡らす。体部内面には12条を1単位とする播目を密に有する。また、体部内外面共に回転ナデ調整する。(862) は口縁部形態はV群に類似するものの、口縁部と体部との境に1条の沈線を有する点は、IV群の様相を留めている。播目の間隔は密である。また、体部内外面共に回転ナデ調整する。(863) は、IV群に属する。口唇部上面は平面を呈し、体部は内湾する。9条を1単位とする播目を密に有し、体部内外面共に回転ナデ調整する。(864) は桶であり、復元口径17.2cmを測る。体部は上方に直線的に伸び、口縁部は丸く収める。体部内外面共に回転ナデ調整する。

**土師質皿** (865) は口径10.6cm, 器高2.2cmを測るD類である。広く平らな底部より強く屈曲した体部は直線的に伸び、口縁部を丸く収める。また、口縁部内面下端では小さな段を作る。体部外面には上下2段の指頭圧痕を有し、その他は回転ナデ調整する。(866) は復元口径10.4cm, 器高2cmを測るC類である。内湾しながら立ち上がる体部、口縁部下端で外方へ屈曲し、口唇部で更に上方へつまみ上げる。器面の磨耗が激しく調整は不明である。(867) は口径6.7cm, 器高1.7cmを測るB類である。体部は底部より内湾しながら立ち上がり、口縁部で丸く収める。体部外面には指頭圧痕を有する。(868) は口径6.8cm, 器高1.6cmを測り、B類に分類される。体部は内湾しながら伸び、口縁部を丸く収める。体部には指頭圧痕を残す。(869) は口径7.2cm, 器高1.7cmを測り、B類に分類される。体部は底部より内湾しながら伸び、口縁部は波状を呈し、口唇部をやや尖り気味に収める。体部下半には指頭圧痕を有する。

**中国製陶磁器** (870) は復元底径5.9cmを測る青磁碗である。底部外面のみ、釉を削り取り露胎としている。釉色は暗い青緑色を呈している。(871) は復元口径13cmを測る白磁皿である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で強く外湾する。釉色はクリーム色に近い白色を呈しており、胎土は締まりに欠ける。(872) は染付碗であり、C群に属する。体部外面には梵字文を有し、口縁部内外面には2条の界線を有する。(873) も染付皿B群であり、復元高台径9.6cmを測る。体部外面には牡丹唐草文を有し、底部内面には玉取獅子の一部が認められる。また、高台部外面には2条の界線を有する。

**S F 4213 出土遺物** (第54~55図, P L .60)

**越前焼** (874) は播鉢であり、復元口径38.8cmを測るIII群である。体部は外上方に直線的に伸び、口縁部に至る。口唇部は平面をなす。体部内面には11条を1単位とする播目を有し、体部内外面を回転ナデ調整する。(875) は復元口径30.2cmを測る鉢であり、体部は内湾しながら伸び、口縁部に至る。口縁

部は角形を呈し、口唇部は面をなす。また、体部内外面ともに回転ナデ調整する。土師質皿 (876) は口径11.1cm, 器高1.9cmを測るD類である。広い底部より外上方へ直線的に伸びる体部は、口縁部を丸く収める。体部外面と口縁部外面の境には、強い回転ナデにより生じた凹状を呈する。体部外面には指頭圧痕を有する。また、口縁部外面にはタール痕が認められる。(877) は口径11cm, 器高2.4cmを測るD類である。広い底部より強く屈曲した体部は直線的に外上方へ伸び、口縁部で上方へつまみあげている。口唇部はやや尖り気味に収める。体部下半は指頭圧痕が認められるが、その他は回転ナデ調整および底部内面は横ナデ調整する。(878) は口径10.6cm, 器高2cmを測るD類である。広く平らな底部より強く屈曲した体部は直線的に伸び、口縁部で強く外方へ屈曲し口唇部を上方へつまみ上げる。体部外面下半には指頭圧痕を有する他は、回転ナデ調整する。口縁部内外面共にタール痕を有する。(879) はD類に分類され、口径10.4cm, 器高1.9cmを測る。広く平らな底部より外上方に直線的に立ち上がった体部は、口唇部を僅かに上方につまみ上げる。体部外面下半に指頭圧痕を有する他は回転ナデ調整する。また、口縁部内外面共にタール痕を有する。色調は灰白色を呈する。(880) はD類に分類され、口径10.3cm, 器高2.2cmを測る。広く平坦な底部より丸味を持って立ち上がり、外上方へ直線的に伸び口縁部で若干外湾する。また、口唇部は上方へつまみ上げる。調整は体部外面には指頭圧痕を有し、体部内面から口縁部にかけて回転ナデ調整する。口縁部内外面共にタール痕を有する。また、色調は灰白色を呈する。(881) は口径9.2cm, 器高2.3cmを測るC類である。体部は底部よりやや丸味を持って立ち上がり、直線的に伸び、口唇部は上方につまみ上げる。体部外面には所々に指頭圧痕を残しており、底部内面から口縁部外面にかけて回転ナデ調整する。また、口縁部内外面共にタール痕を有する。(882) は口径9.3cm, 器高2.3cmを測るC類である。体部は平坦な底部より強く屈曲し直線的に伸びる。また、口唇部は上方へつまみあげている。

**中国製陶磁器** (883) は復元口径11.8cm, 器高3cmを測る白磁皿である。底部には断面形態が三角形状を呈する高台を有し、そこから立ち上がる体部は下半で内湾気味に伸び、上半で外湾しながら口縁部へ至る。釉は全面に施釉するが高台部接地面のみ釉を削り取っている。また、高台部には砂目が一部残っている。

#### ピット出土遺物 (第55図, P L.60)

**土師質皿** (884) はD類であり、口径15cm, 器高2.3cmを測る。体部は、広く平坦な底部より強く屈曲し、直線的に外上方へ伸びる。口唇部は強いナデにより内側に段を作っている。体部下半には指頭圧痕を有し、体部内面から体部上半外面にかけて回転ナデ調整し、底部内面を横ナデ調整する。(885) は口径14.8cm, 器高2.2cmを測るD類である。底部は広く平坦であり、器厚は薄い。体部は外上方へ直線的に伸び、口唇部は強いナデにより内側に段を作っている。体部外面下半には指頭圧痕を有し、体部内面から体部上半にかけてナデ調整する。

#### S X 4235 東 (第55図, P L.60)

**越前焼** (886) は甕IV群に分類される。口唇部内側は上方へ膨らんでおり、口縁部外面の稜線は弱く退化している。調整は、口縁部内面から体部外面にかけて回転ナデ調整する。(887) は甕IV群であるが、口縁部内側の凹線は消滅し、口縁部外側の稜線は弱く退化している。口縁部内外面共に回転ナデ調整している。(888) は甕IV群に分類される。体部内面には粘土紐の接着痕を有する。口縁部内面に凹面を形作ることから、口唇部は肥厚している。また、口縁部外面には1条の鋭い稜線を有している。調整は頸部内面から体部外面にかけて回転ナデ調整している。(889) は播鉢IV群である。体部は直線的に外上方

へ伸び、口縁部へ至る。口唇部はやや凹状を呈した面をなす。体部内面には8条を1単位とする播目を有する。調整は内外面共に回転ナデ調整する。(890)は復元口径13.6cmを測る壺の口縁部である。直線的に外上方へ伸びた頸部は、口縁部で外湾し丸く収める。調整は内外面ともに回転ナデ調整する。

(891)は小型甕である。内湾気味に伸びた体部は、頸部で上方へ屈曲し直線的に伸び、口縁部で肥厚し丸く収める。体部内面には粘土紐を接合するためのナデ痕が認められる。その他は、回転ナデ調整する。

#### S X 4235西 (第55図, P L .60)

**越前焼** (892)は甕IV群に分類される。口縁部内面には巾の狭い凹面を有しており、口唇部は強く肥厚している。また、口縁部外面には1条の鋭い稜線を有している。体部内面の調整は不明であるが、口縁部内面から体部外面にかけては回転ナデ調整している。(893)はIV群に分類される。復元口径35cmを測り、全体の器形は胴部最大径が中位よりやや上方に位置する中型の甕である。口縁部内面は凹面を呈しておらず、外面の稜線も弱く退化している。体部内面の調整は不明であるが、口縁部内面から体部外面にかけては回転ナデ調整している。

**土師質皿** (894)は口径8.8cm, 器高2.2cmを測るC類である。体部は僅かに外湾気味に伸び、口縁部へ至る。口唇部は上方へつまみ上げる。底部内面から体部上半にかけて回転ナデ調整する。また、体部外面下半には指頭圧痕を残している。

#### 前期整地層出土遺物 (第56・57図, P L .61・62)

前期整地層は、先に述べた後期の遺構面を形成する際に整地した層であり、また、前期の遺構面を覆う整地層でもある。出土遺物には、越前焼, 土師質土器, 瀬戸・美濃焼, 信楽焼, 珠洲焼, 瓦質土器, 中国製陶磁器, 金属製品, 石製品が認められる。

**越前焼** (895)は甕IV群である。体部より屈曲し、ほぼ直立した頸部はそのまま口縁部へ至る。口唇部内外面は強く肥厚するが、上面は平坦面を持つ。また、口縁部外面には1条の強い稜線を有する。調整は内外面ともに回転ナデ調整している。(896)は甕IV群に分類される。内上方に直線的に伸びた体部は、頸部で上方へ屈曲し口縁部へ至る。口縁部内面には強い凹面を持ち、外面には強い1条の稜線を持つ。口唇部は若干肥厚するが、上面は平面をなす。調整は内外面共に回転ナデ調整する。(897)も甕IV群に分類される。内上方へ伸びた体部より「く」の字状に強く屈曲した頸部は、直線的に伸び口縁部へ至る。口縁部内面には1条の段を有し、外面には1条の鋭い稜線を有する。口唇部は大きく肥厚するが、上面は平面をなすが若干凹状を呈する。調整は回転ナデ調整する。(898)～(903)は播鉢である。

(898)はIII群に分類される。体部は外上方へ直線的に伸び、口縁部は若干外湾させ丸く収める。内外面共に回転ナデ調整し、体部内面には7条を1単位とする播目を有するが、その間隔は粗い。焼成は軟質であり、色調は橙褐色を呈する。(899)は、IV群に分類される。体部は内湾しながら伸び、口縁部に至る。口唇部上面は平坦な面をなす。体部内面には9条を1単位とする播目を有し、内外面共に回転ナデ調整する。(900)はIV群に分類される。体部は直線的に伸び口唇部上面は平坦な面をなす。体部内面には8条を1単位とする播目を有するが、その間隔は粗い。内外面ともに回転ナデ調整する。(901)は復元底径15.2cmを測る底部片である。体部は薄く平坦な底部より強く屈曲し、外上方へ直線的に伸びる。内面の底部と体部の接合部付近に僅かに播目痕が残る他は、使用時における磨耗のため播目は認められない。体部外面は回転ナデ調整する。焼成はやや軟質であり、色調は淡黄茶褐色を呈する。(902)はIII類に分類される。体部は直線的に外上方に伸び、口縁部を丸く収める。体部と口縁部の境には1条の沈

線を巡らし、体部内面には7条を1単位とする播目を有するが、その間隔はやや粗い。調整は内外面ともに回転ナデ調整する。(903)は復元口径25.2cm, 器高8.2cmを測るIV群である。底部より外上方に強く屈曲した体部は直線的に伸び口縁へ至る。口唇部は凹状を呈する面をなす。口縁部と体部との境には1条の沈線を巡らしている。体部内面には9条を1単位とする播目を有し、調整は内外面共に回転ナデ調整する。(904)は鉢である。体部は内湾しながら伸び、口縁部に至る。口唇部上面は僅かな凹状を呈する面をなす。内外面共に強い回転ナデ調整する。(905)は桶である。体部は僅かに外上方へ傾くがほぼ直立し、口縁部へ至る。口縁部は角形を呈する。体部と口縁部の境には1条の沈線を有し、調整は体部内外面共に回転ナデ調整する。焼成はやや甘く、色調は橙褐色を呈する。

**土師質皿** (906)は口径10cm, 器高2.1cmを測り、D類に分類される。平坦で広い底部より、外上方に屈曲した体部は直線的に伸び、口縁部へ至る。口縁部は丸く収める。体部外面には指頭圧痕を有し、体部内面から口縁部外面には回転ナデ調整する。(907)は口径9cm, 器高2.2cmを測り、C類に分類される。僅かに丸味を帯びた底部より外上方に屈曲した体部は、底部と体部の境で段を作り、やや内湾気味に口縁部へ伸びる。口縁部は丸く収める。体部中位には指頭圧痕を有し、底部内面から体部外面にかけて回転ナデ調整する。口縁部内外面共にタール痕を有する。(908)は口径6.2cm, 器高1.2cmを測る。B類に分類される。底部が大きく歪んでいることから、器高は一定していない。体部はやや内湾しながら短く立ち上がり、口縁部は丸く収める。体部には指頭圧痕が明瞭に残る。ナデ調整は行っていない。(909)はC類であり、口径9.8cm, 器高2.1cmを測る。底部は平坦であり、外上方へ屈曲した体部は直線的に伸び、口縁部へ至る。口唇部は上方へつまみ上げている。体部外面には指頭圧痕を残し、内外面共に回転ナデ調整する。(910)はC類に属し、口径8.2cm, 器高1.8cmを測る。底部よりやや丸味を持って立ち上がる体部は、直線的に伸び口縁部へ至り丸く収める。体部下半には指頭圧痕を有し、底部内面から口縁部外面にかけて強い回転ナデ調整する。焼成は良好であるものの、色調は灰白色を呈する。また、口縁部内外面にタール痕を有する。(911)はC類に分類され、口径7cm, 器高1.5cmを測る。底部は小さく、体部は底部より外上方へ弱く屈曲し直線的に伸び、口縁部へ至る。体部外面には指頭圧痕を残し、底部内面より口縁部外面にかけてナデ調整する。(912)はC類に分類され、口径9.4cm, 器高2cmを測る。平坦な底部より外上方へ屈曲した体部は、僅かに内湾気味に伸び口縁部へ至る。口唇部は弱く上方へつまみ上げる。体部外面には指頭圧痕を残し、底部内面から口縁部外面にかけて回転ナデ調整する。(913)はC類である。口径7.1cm, 器高1.6cmを測る。やや丸底を呈しており、底部と体部の境は明瞭でない。底部から体部外面にかけては指頭圧痕を有する。また、口縁部外面から底部内面にかけては回転ナデ調整し、最後にナデ抜いている。(914)はB類に分類され、口径6cm, 器高1.5cmを測る。体部は大きく歪んだ底部より内湾気味に立ち上がり口縁部へ至る。また、口縁部は丸く収める。底部から体部外面にかけては指頭圧痕を残す。調整は内面に不定方向のナデ調整する。(915)はB類に分類され、口径6.1cm, 器高1.2cmを測る。体部は大きく歪んだ底部より内湾気味に短く伸び口縁部に至る。底部から体部外面には指頭圧痕を有するが、ナデ調整は行わない。

**瀬戸・美濃焼** (916)は復元口径31.2cmを測る鉢である。体部は外上方へ直線的に伸び、口縁部は内上方へ短く折り返され、その下に返りを有する。体部上半に施釉している。(917)も鉢である。体部は直線的に外上方へ伸び、口縁部を内上方へ折り返す。また口縁部内面下には返りを有する。(916)と同一固体の可能性も考えられるが、釉色は本品の方が緑味が強い。(918)は卸皿であり、復元口径13.4cmを測る。体部は内湾しながら口縁部に至り、口縁部内面は凹状を呈する。体部内面下端に卸目が認めら

れる。調整は内外面共に回転ナデ調整し、口縁部内外面のみに施釉している。(919)は碗の底部片であり、貼り付け高台を有し、復元高台径5.5cmを測る。体部は外上方へ直線的に伸びる。底部内面から体部上半にかけて施釉する。

**中国製陶磁器** (920)～(926)は青磁碗である。(920)は復元口径12cmを測る。体部は内湾しながら伸び口縁部へ至る。体部外面にはへら先による細線の線描蓮弁文を有する。(921)は復元口径12.7cmを測り、体部は内湾しながら伸び口縁部へ至る。体部外面には(920)と同様の蓮弁文を有するが、蓮弁間の間隔はより狭く描かれている。(922)は復元口径11.8cmを測る。体部は内湾しながら伸び口縁部へ至る。体部外面には(920)と同様の蓮弁文を有するが、底部内面にも線描文様が描かれていたと考えられ、その一部が内面下端に認められる。(923)は口縁部の破片であるが、細片のため口径は不明である。口縁部外面には線描による雷文帯を有する。(924)は復元高台径5.2cmを測る。腰部外面には線描による蓮弁文の一部が認められ、底部内面には卍文および剣頭文が認められる。釉は底部外面を除き施釉されている。(925)は復元高台径6cmを測る。底部内面には線描による1条の界線を巡らし、その中に花文を描く。底部外面から高台部内側を露胎とする他は施釉している。(926)は復元高台径5cmを測り、底部内面には線描による花文を有する。底部外面のみを露胎とする他は施釉している。(927)口径8.8cm・器高2.2cmを測る白磁皿である。(928)は染付碗B群であり、復元口径15.8cmを測る。口縁部外面には1条の界線を描き、体部外面には人物と風景を描いている。また、口縁部内面には四方禪を描いている。(929)は復元口径9.2cm、器高1.9cmを測る皿B群である。口縁部外面および高台部外面には、それぞれ2条の界線を巡らし、体部外面には牡丹唐草文を描いている。口縁部内面には1条の界線を有し、底部内面には十字花文の一部が認められる。

## 7. 第78次調査 小 結

### 遺 構

検出された遺構について個別の解説を加えた。これらの遺構は、前後2時期に分けられること、そして、後期は一乗谷の町が織田氏の攻撃を受けて滅亡した時に存在したものであること等は、前述した通りである。ここでは、検出された遺構の構成等の検討を通じて、調査対象とした屋敷の考察を行う。

#### 地区計画と屋敷

この地区の骨格となるのは、屋敷の前面（東）に存在する南北方向道路S S976であり、この道路と西の山裾の間は60mほどであり、各屋敷の敷地間口は、30m（100尺）が基本であることが知られている。この屋敷についてみると、屋敷境界である2条の東西方向土塁S A4127・4331の間隔は、道路に面する南北方向の土塁S A980・981との取り付き部で約33mとなっており、少し広い。屋敷境となる東西方向の土塁S A4127・4331は南北方向の道路や土塁とは直交せず、またこの2条の土塁は真直ぐではなく「く」の字に曲がっており、とりわけ北のS A4127はこの曲がりも大きい。これは、地形的制約を解消するためと考えられ、こうした理由で少し広ったものと思われる。なお、2条の土塁の中ほどでは約30mとなっている。

#### 屋敷内の構成

屋敷内の遺構の多くは、後世の削平を受けており、建物の規模や平面等、具体的な様子は明らかでないが、その概略をうかがうことは可能である。門については明確である。正面土塁のほぼ中央に位置している。他の屋敷では南北どちらかに寄る例が一般的であるのに対し、若干異なる。門の形状や門建物が間口8尺の4本柱で後世される薬医門形式と推定される点は、他の例と同様である。門を入った、屋敷の前よりにはほとんど遺構はみられず、中央部から奥にかけて、南半を中心に建物群S B4207～4210等が断片的ではあるが検出されている。これらは、主人の住まいや接客のための表向きの建物と考えることが出来よう。

これに対し、井戸S E4211は、屋敷の中ほどやや北奥で検出されている。また、この近く、北の土塁脇で石積施設S F4212・4213も検出されている。こうした遺構は、いわば日常生活の雑多な部分になうものである。

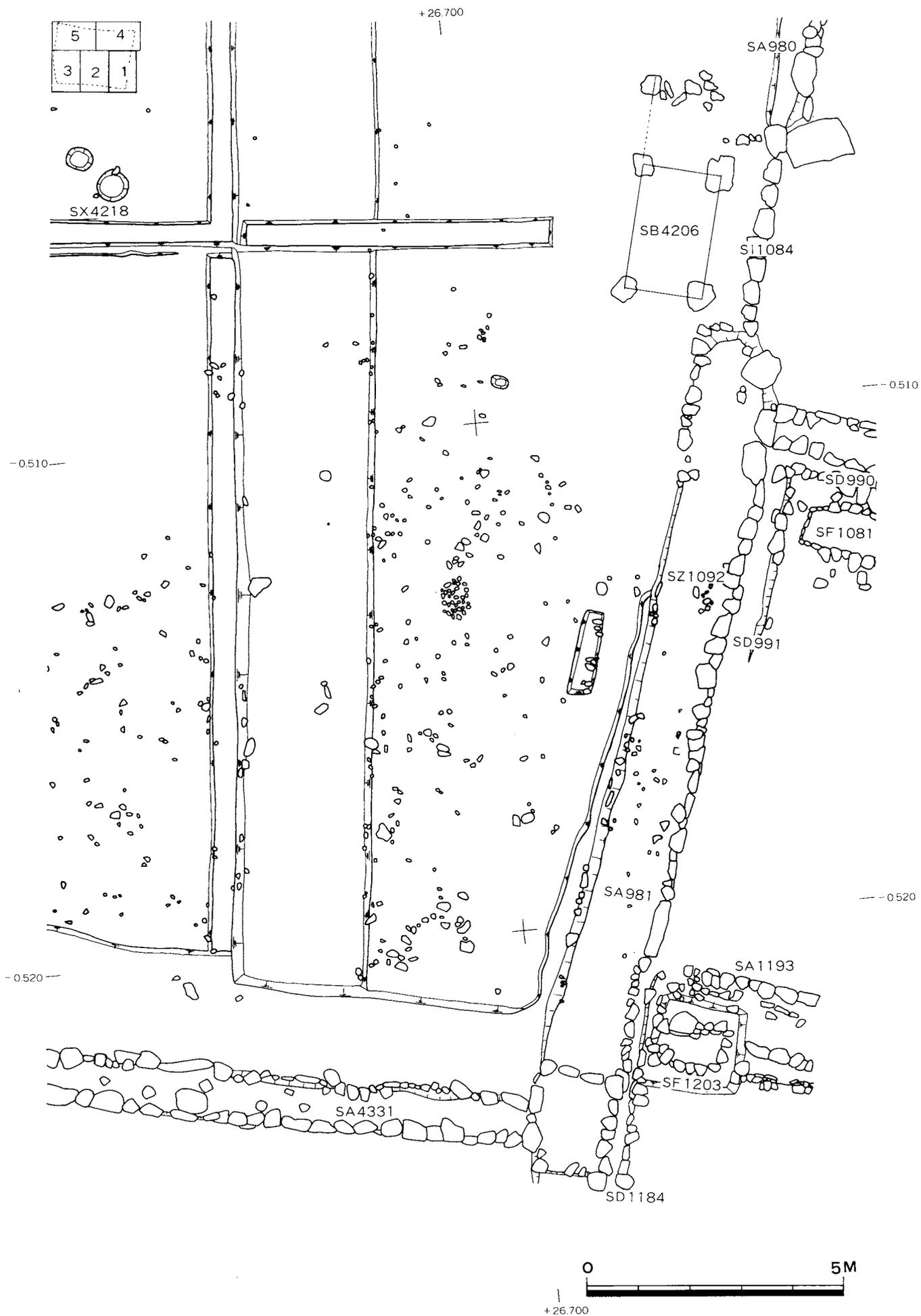
こうした遺構の配置から、知られるのは、当時の屋敷の一般的状況とされている、屋敷の南半、前寄りに表向きの建物群を、北半、奥寄りに内向きの諸施設を配したとされることと矛盾しない。

#### まとめ

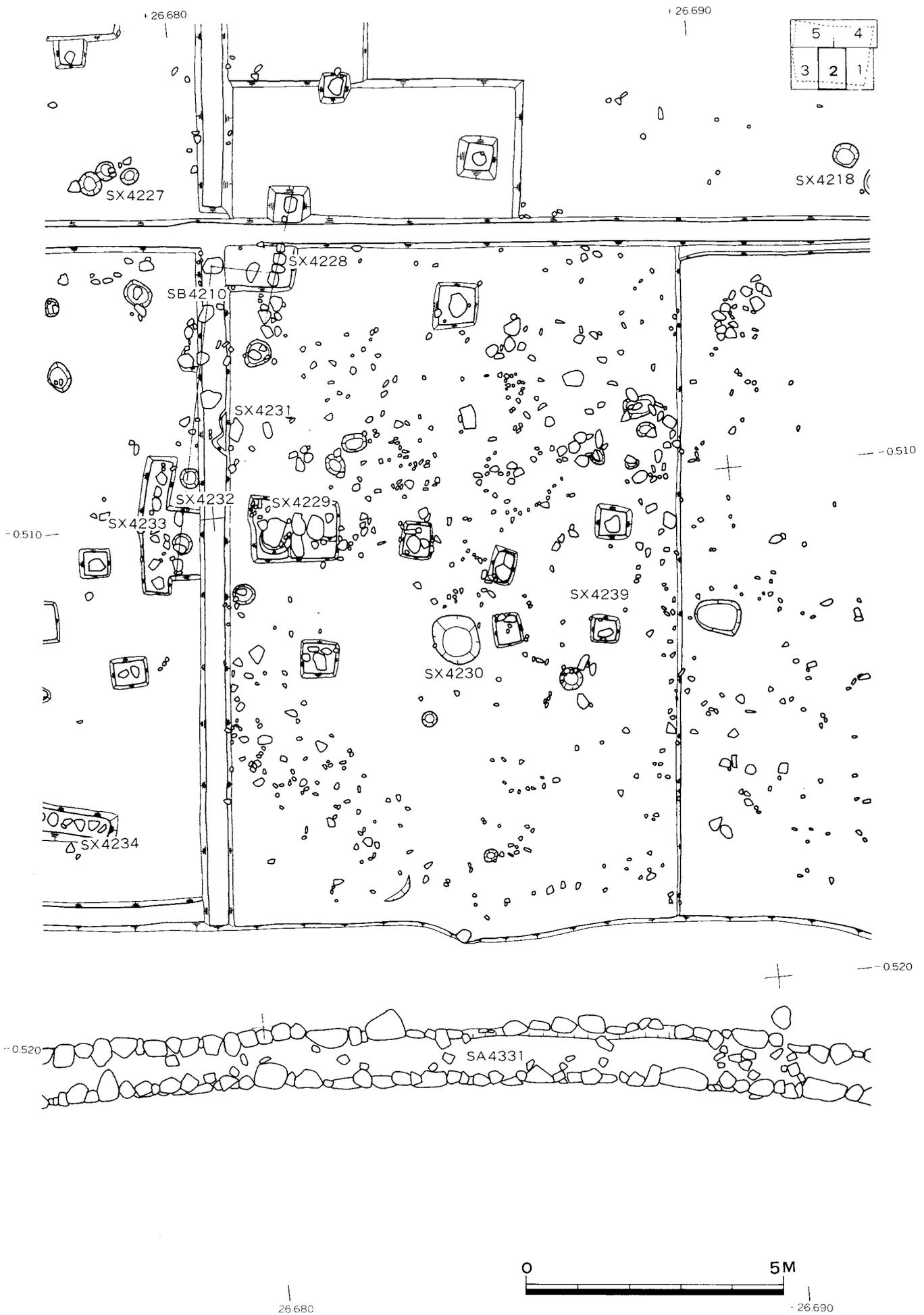
最後に、以上の諸点をふまえて、成果をまとめると、次のようになろう。

遺構群は、前後2時期に分けられる。これらは、基本的にこの一乗谷の町割に基づいて定められた屋敷構成に収まる。なお、部分的ではあるが、これらに先行する生活面の存在も知られた。屋敷の規模や構成をみると、若干の地形的制約はみられるものの、これまでの調査で知られている周辺の屋敷と同様で、基本間口100尺とし、門を入れて若干の空間を空け、南半、前よりから奥にかけ、主人の生活や接客の場となる表向き、すなわち「晴（ハレ）」の施設群を配し、北半、奥寄りに、日常生活を支える場としての奥向き、すなわち、「曇（ケ）」の施設群を配したと考えられる。

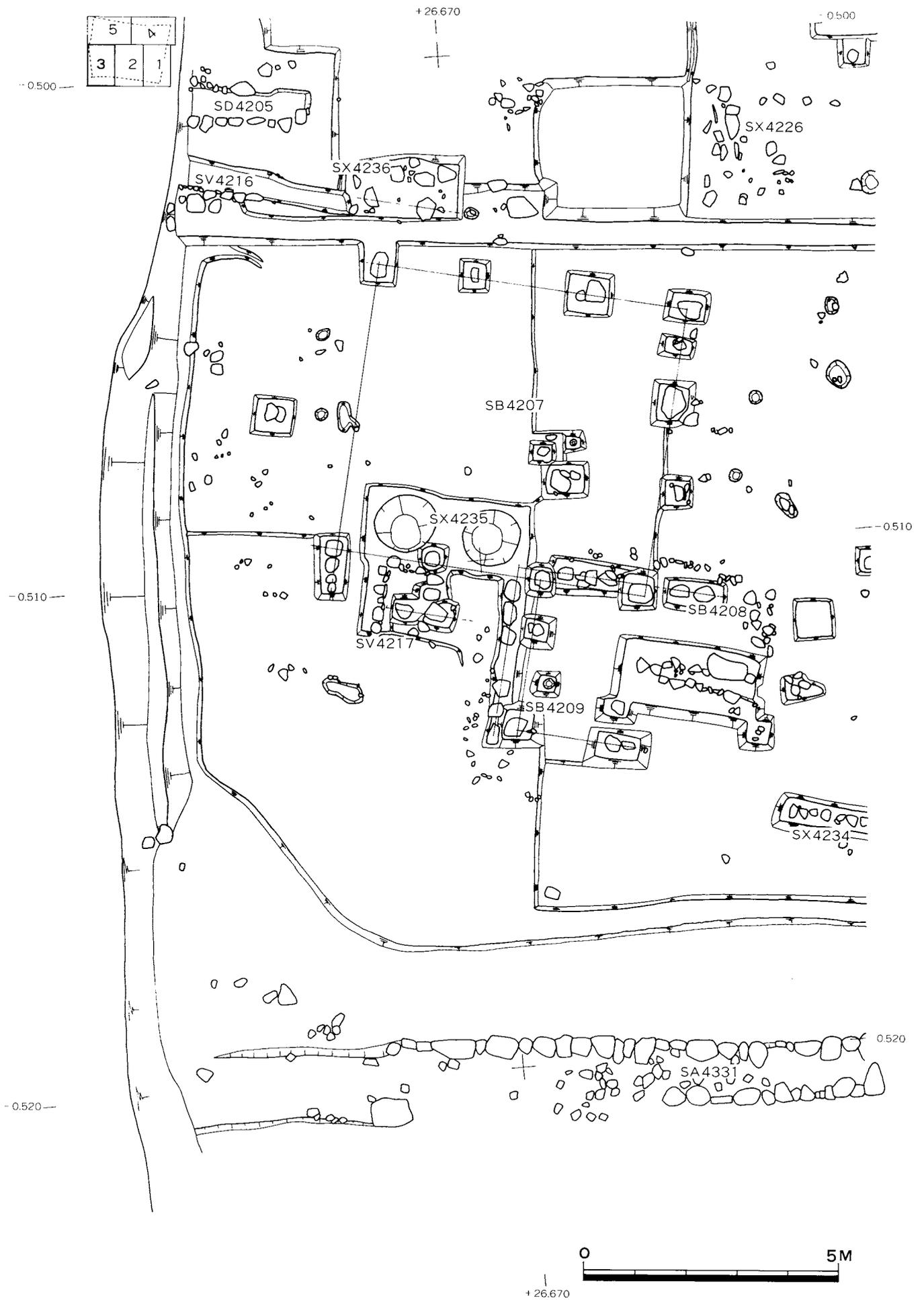
第44図 第78次調査遺構詳細図(1)



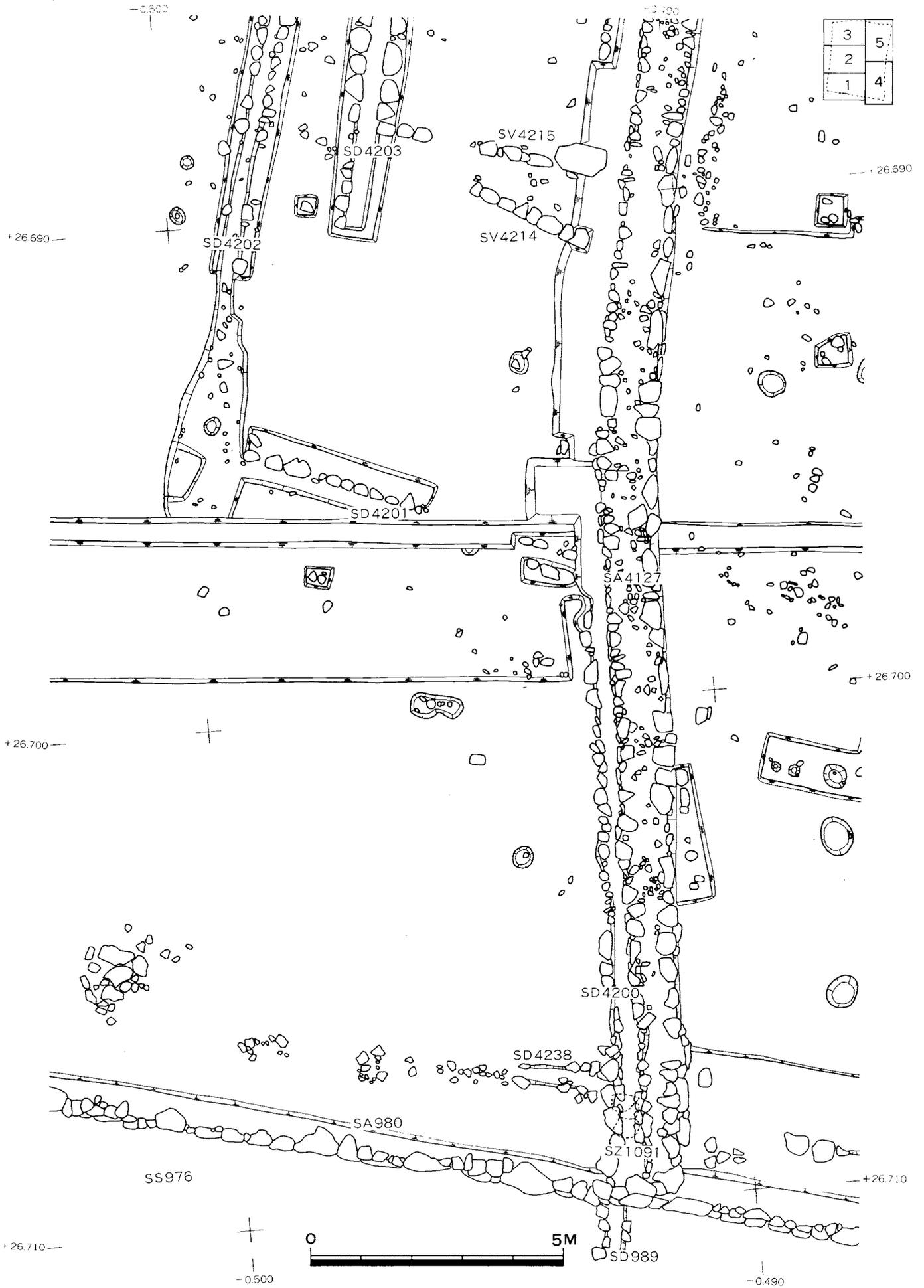
第45図 第78次調査遺構詳細図(2)



第46図 第78次調査遺構詳細図(3)

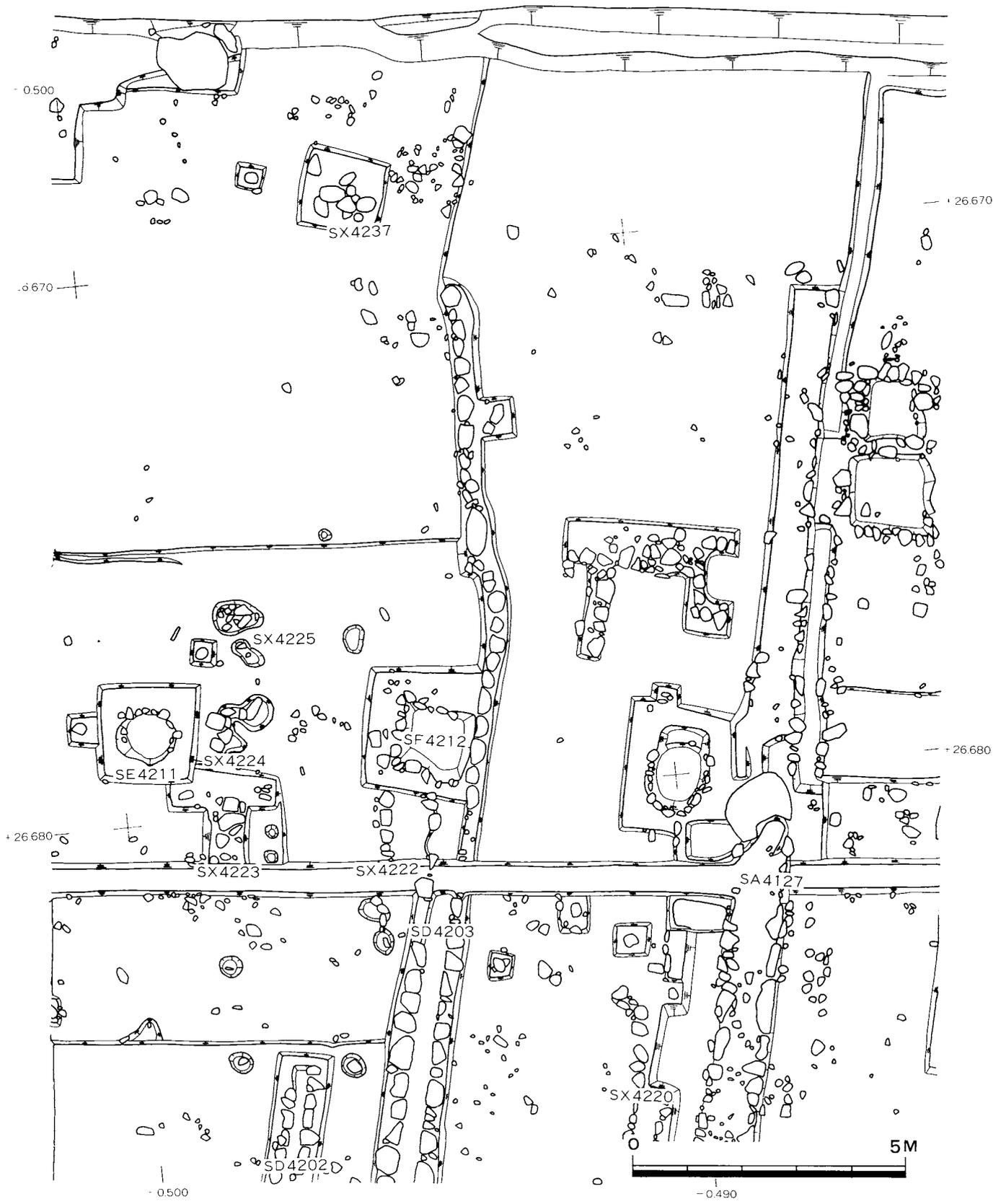


第47図 第78次調査遺構詳細図(4)

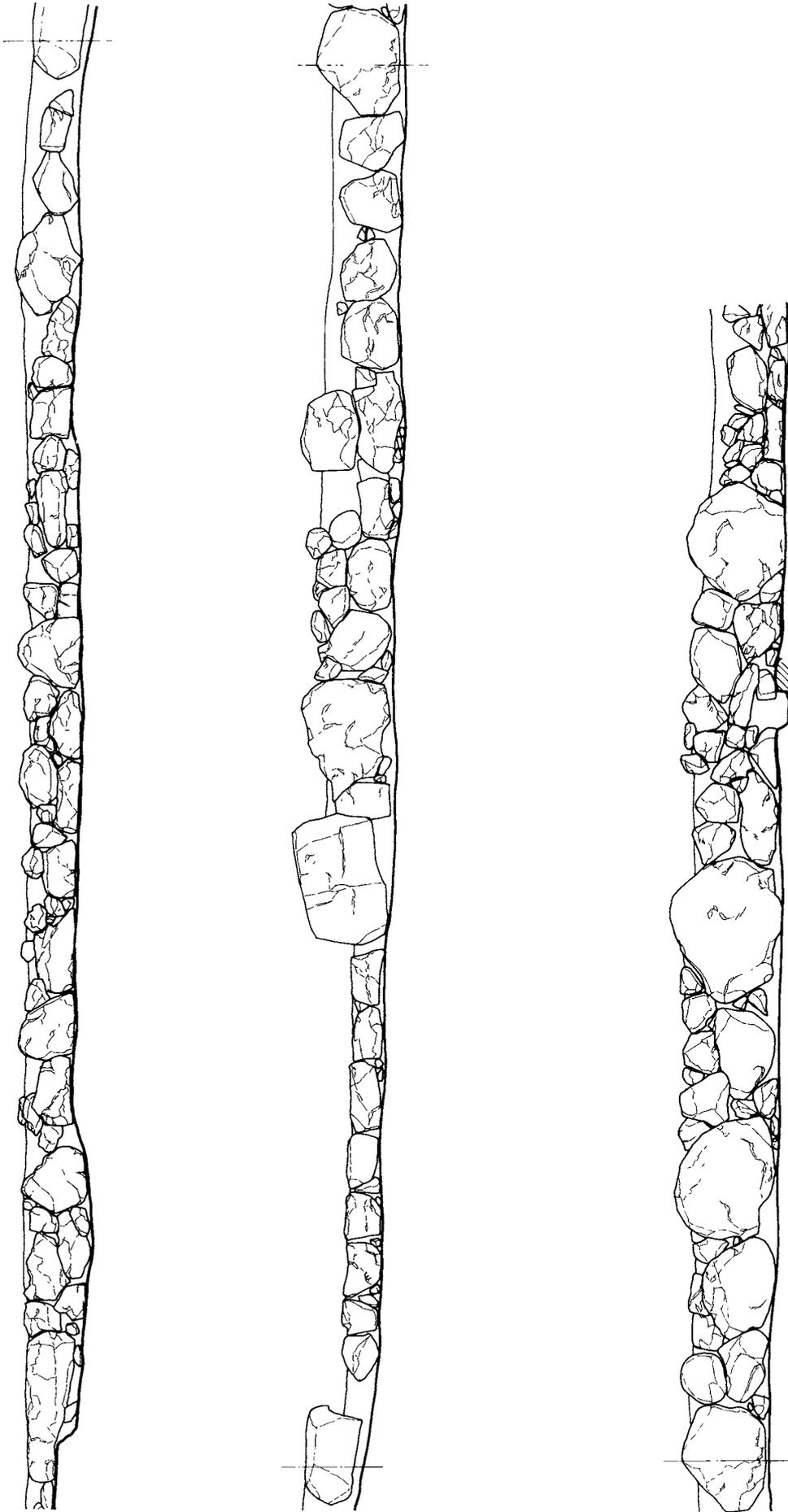


第48図 第78次調査遺構詳細図(5)

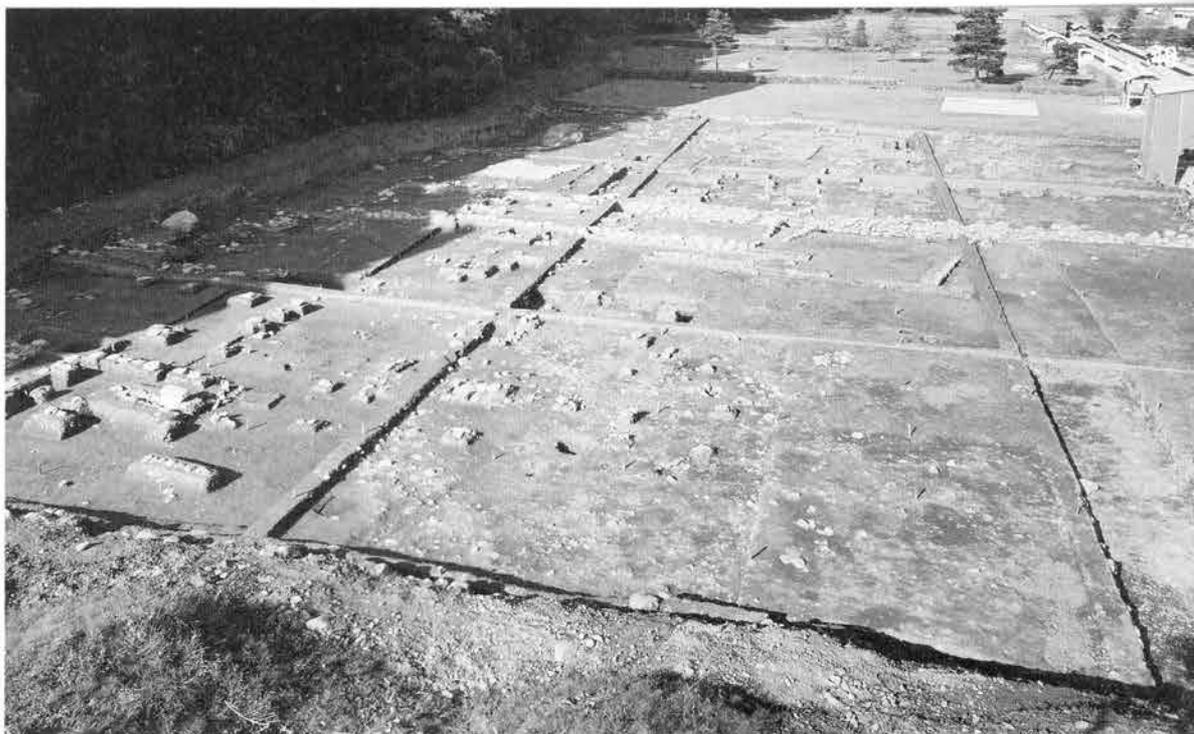
3	5
2	
1	4



第49図 第78次調査土塁 SA980・981東面石垣立面図



第78次調査・全景



全景  
(南東から)



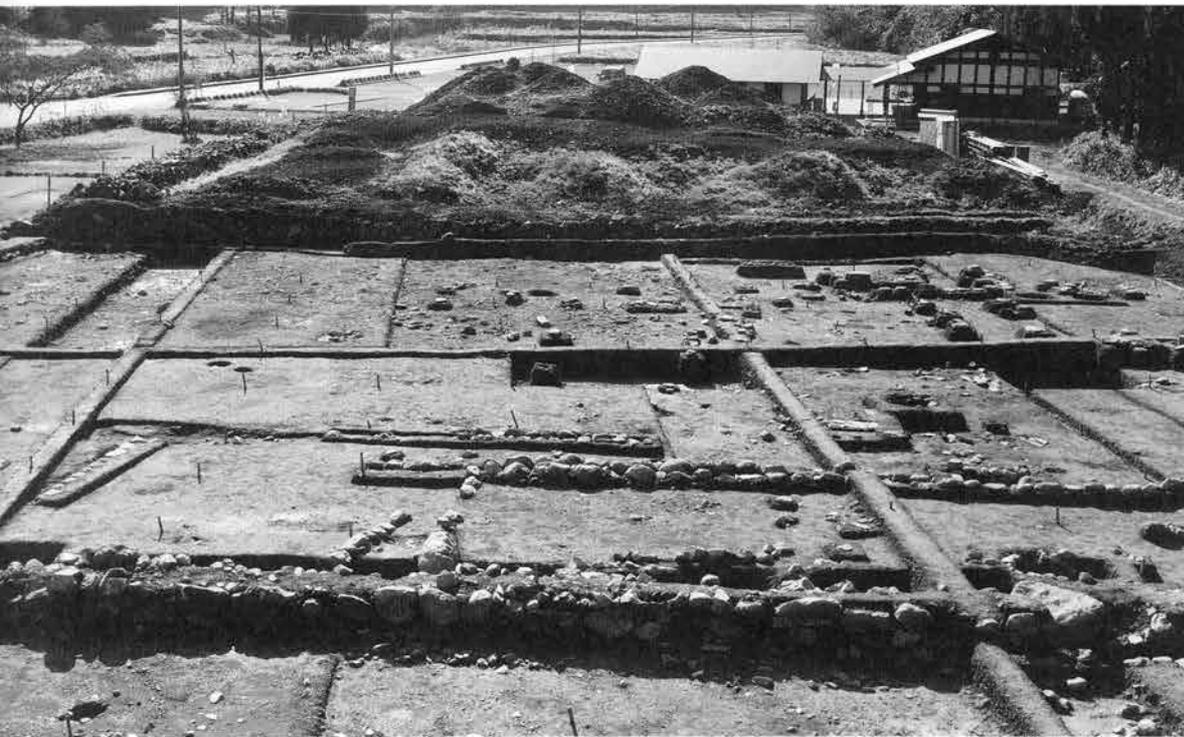
同上  
(南から)



同上  
(北東から)



中・西部  
(北から)



中・西部  
(北西から)



中央部  
(北から)

第78次調査・  
土壘SA4127他



土壘SA4127  
溝SD4201等  
(東から)



土壘SA4127  
溝SD4202・  
4203等  
(西から)



第78次調査・  
溝SD4201・  
4202・4203

溝SD4201  
SD4202  
SD4203  
(東から)



溝SD4203  
石積施設SF4212  
(西から)



土塁SA4127  
溝SD4200  
(東から)



門SI1084  
門建物SB4206  
(東から)



門SI1084  
(東から)



第78次調査・  
建物SB4207等

建物SB4207  
SB4209  
(西から)



建物SB4208  
(北から)



建物SB4209  
溝SD4204  
(東から)

井戸SE4211  
石積施設SF4212  
前期遺構群  
(東から)



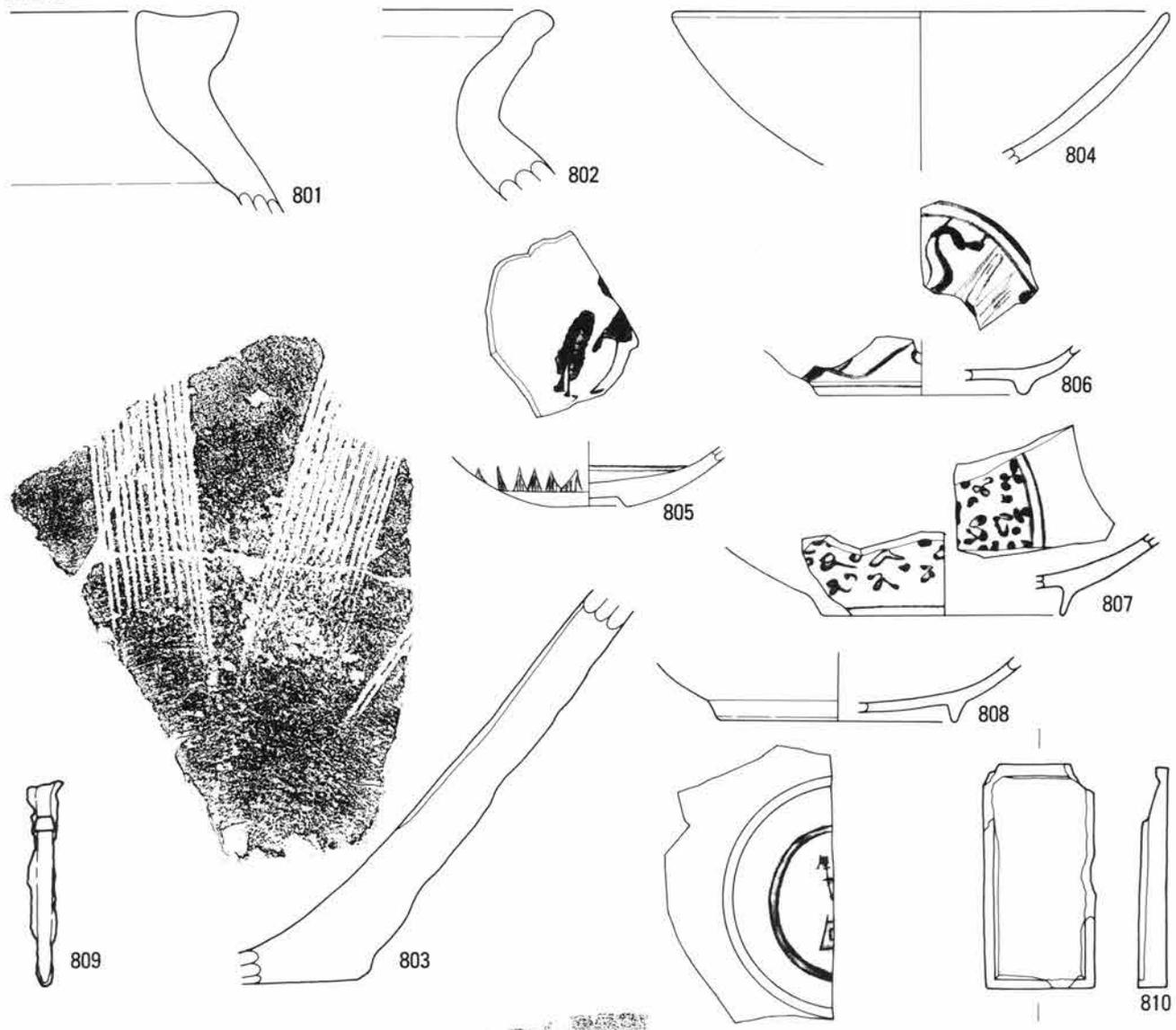
SV4217  
SX4235  
(南から)



◀ SF4212  
(北から)  
▶ SF4213  
(西から)



第50図 第78次調査遺物(1)  
表土層



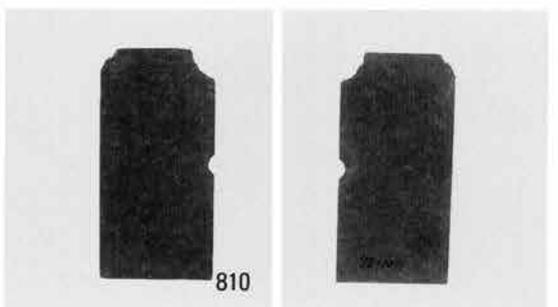
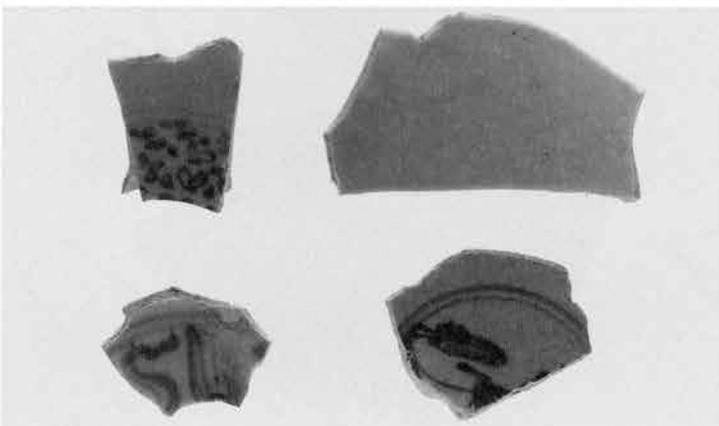
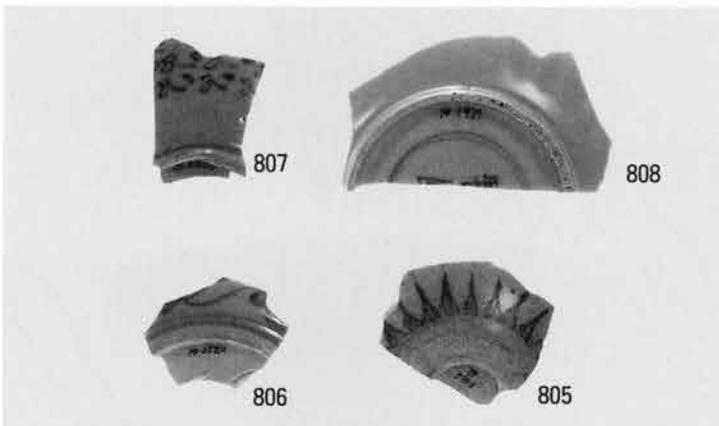
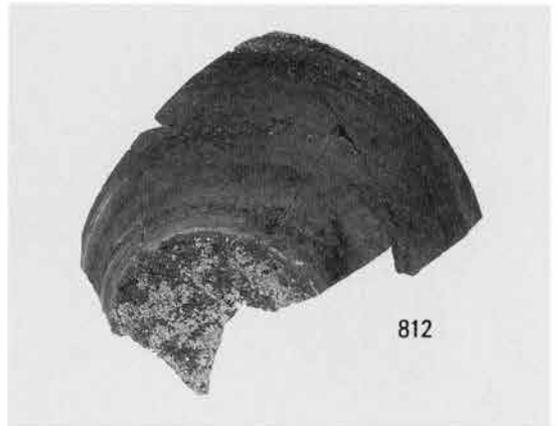
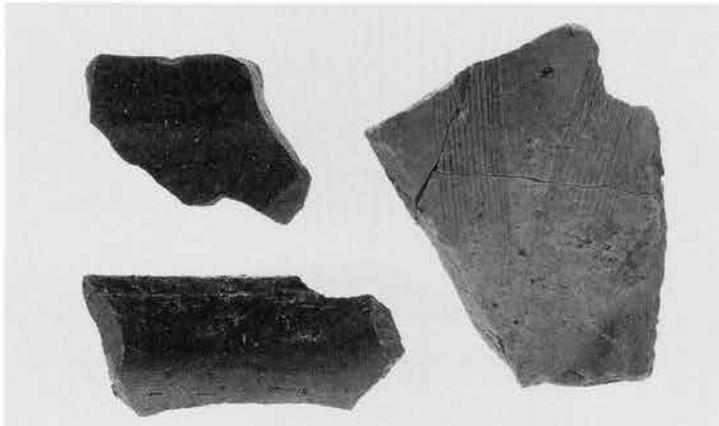
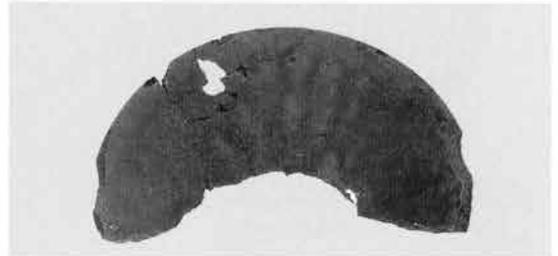
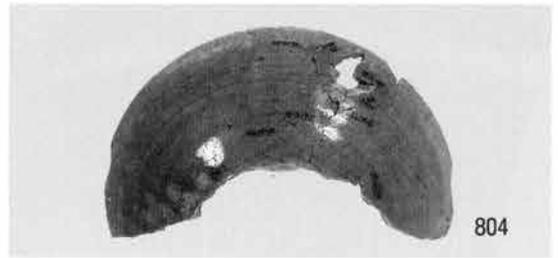
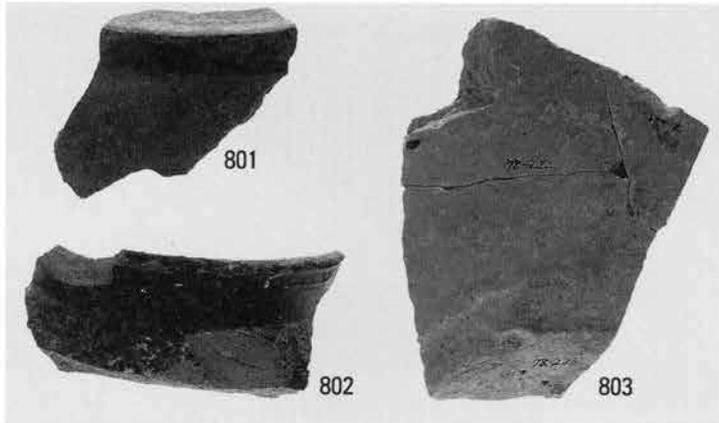
0 10cm

0 10cm

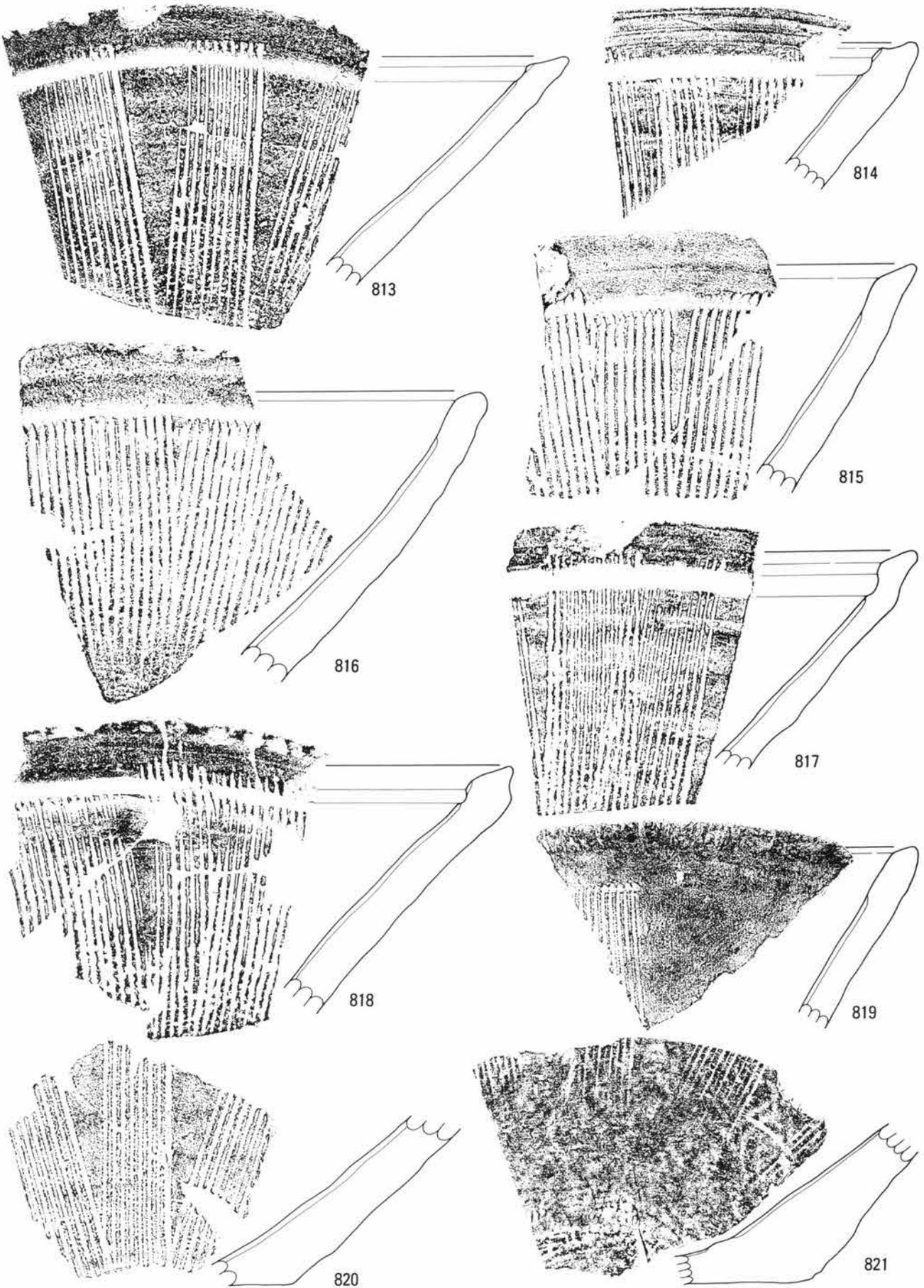
後期遺構確認面



表土層 越前焼甕801~802 播鉢803 灰釉碗804 染付皿805~806 碗807~808 金属釘809 石製品硯810  
後期遺構確認面 越前焼甕811 播鉢812

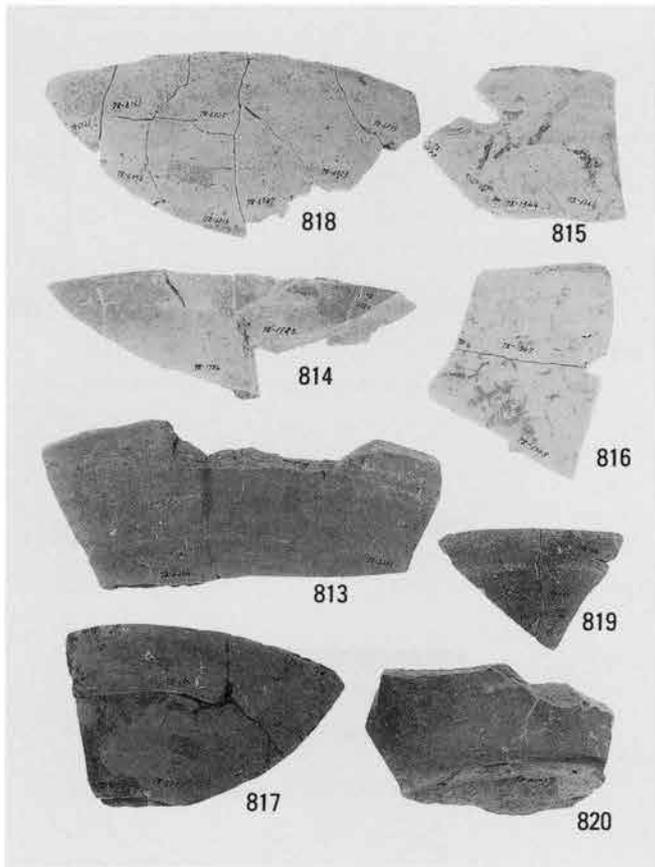


表土層 越前焼甕801 壺802 播鉢803 灰釉碗804 染付皿805~806 碗807~808 石製品硯810  
 後期遺構確認面 越前焼播鉢812

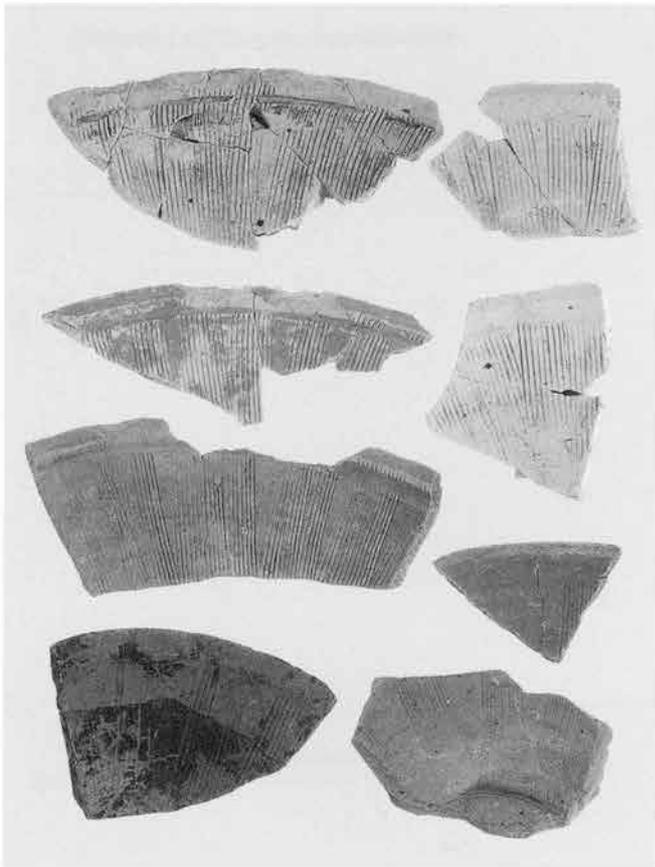


越前焼播鉢813~821

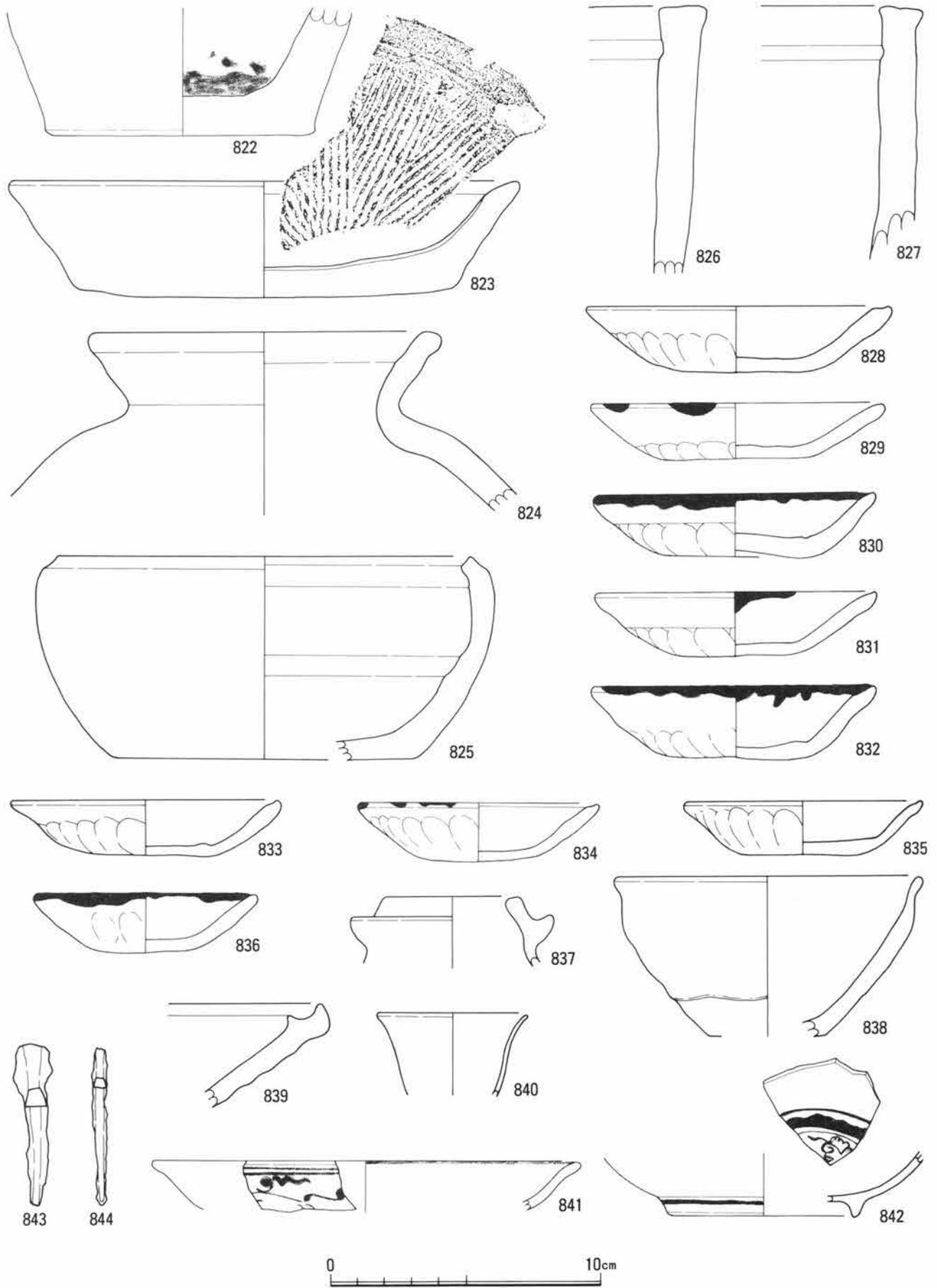
0 10cm



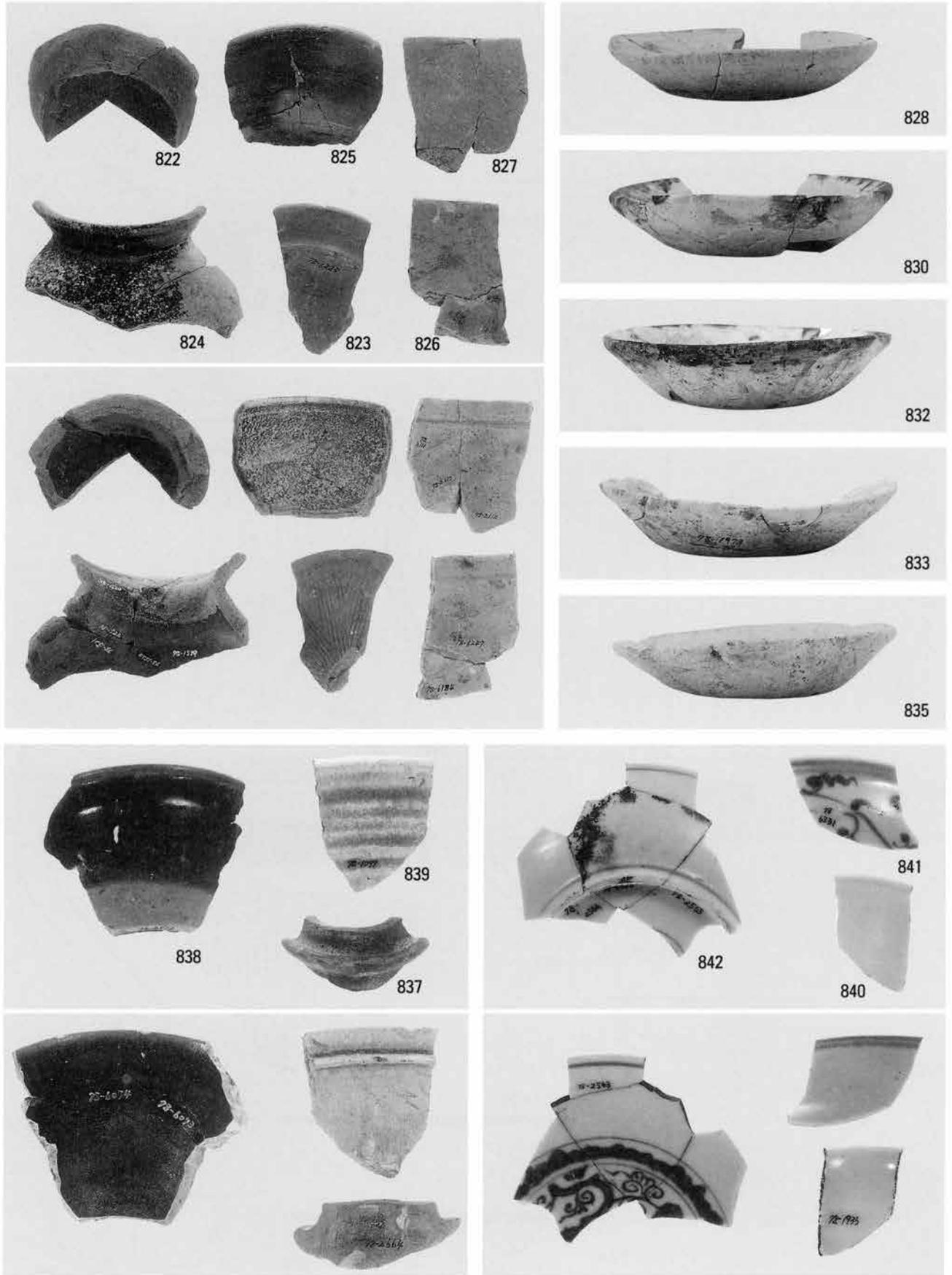
後期遺構確認面  
越前焼播鉢813～820



第52図 第78次調査遺物(3)

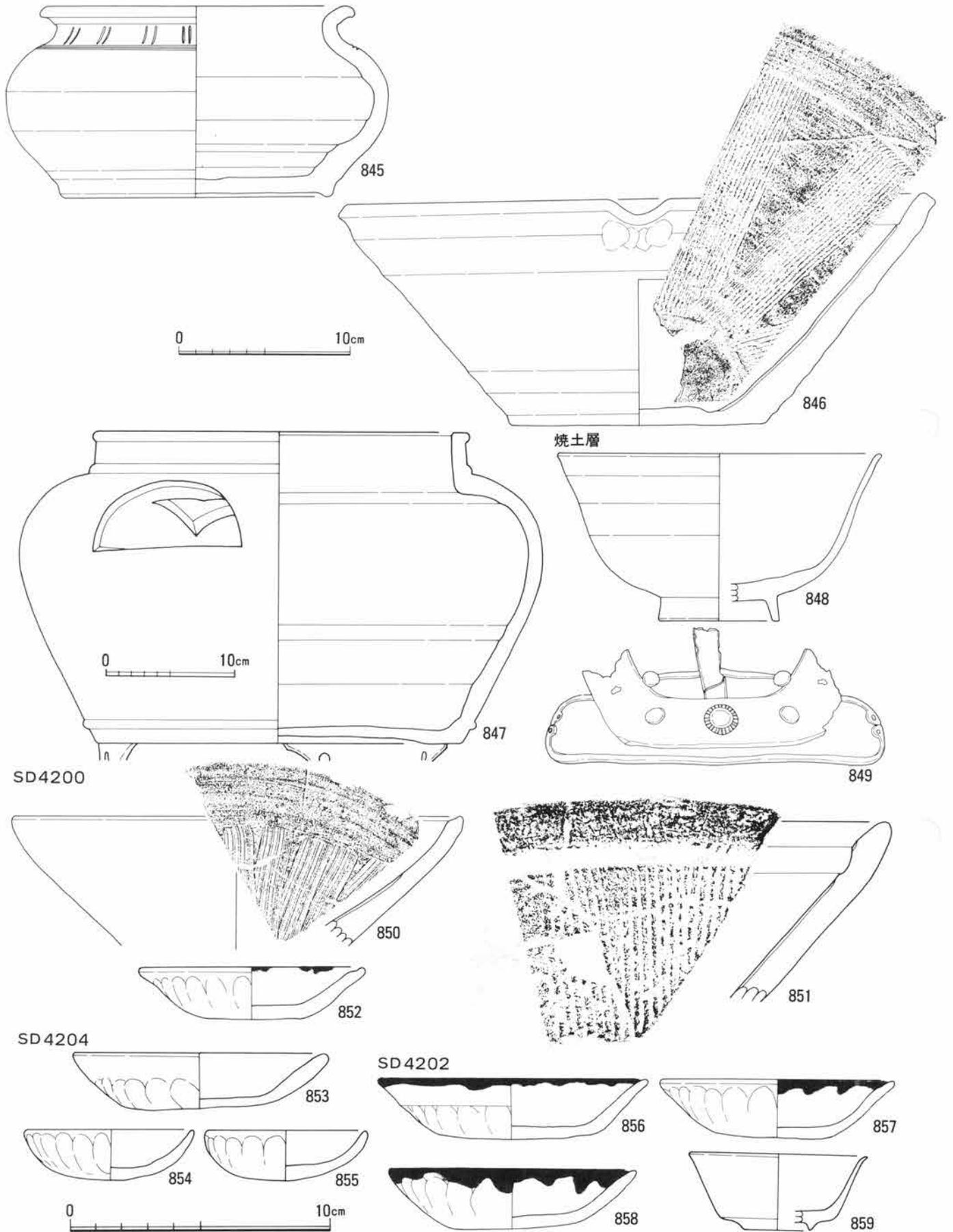


越前焼壺822・824 卸皿823 鉢825 桶826～827 土師質皿828～836 鉄釉羽釜837 碗838 灰釉鉢839 白磁杯840 染付皿841 碗842 金属釘843～844

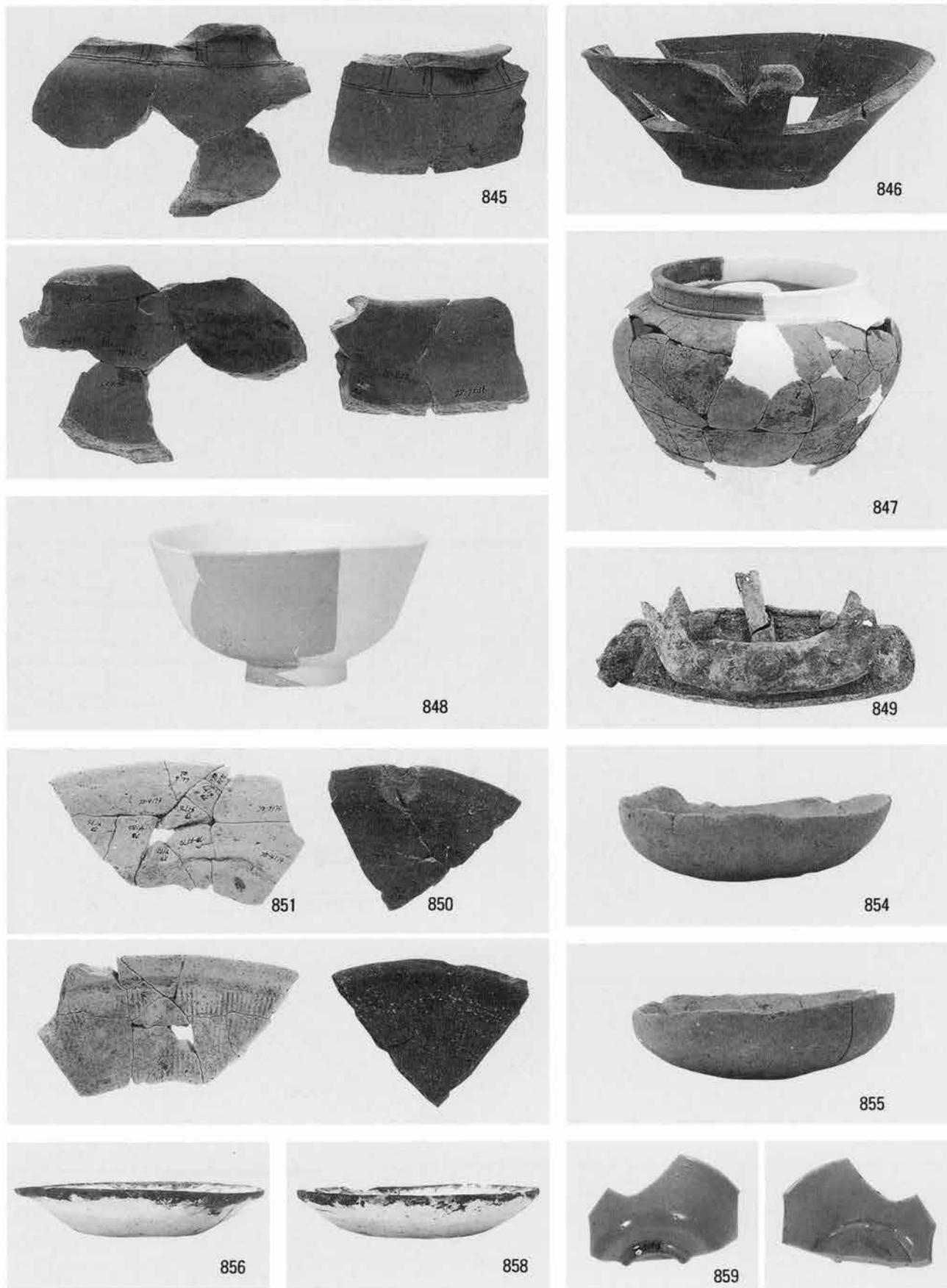


後期遺構確認面 越前焼壺822・824 卸皿823 鉢825 桶826～827 土師質皿828・830・832～833・835 鉄釉羽釜837 碗838  
 灰釉鉢839 白磁坏840 染付皿841 碗842

第53図 第78次調査遺物(4)

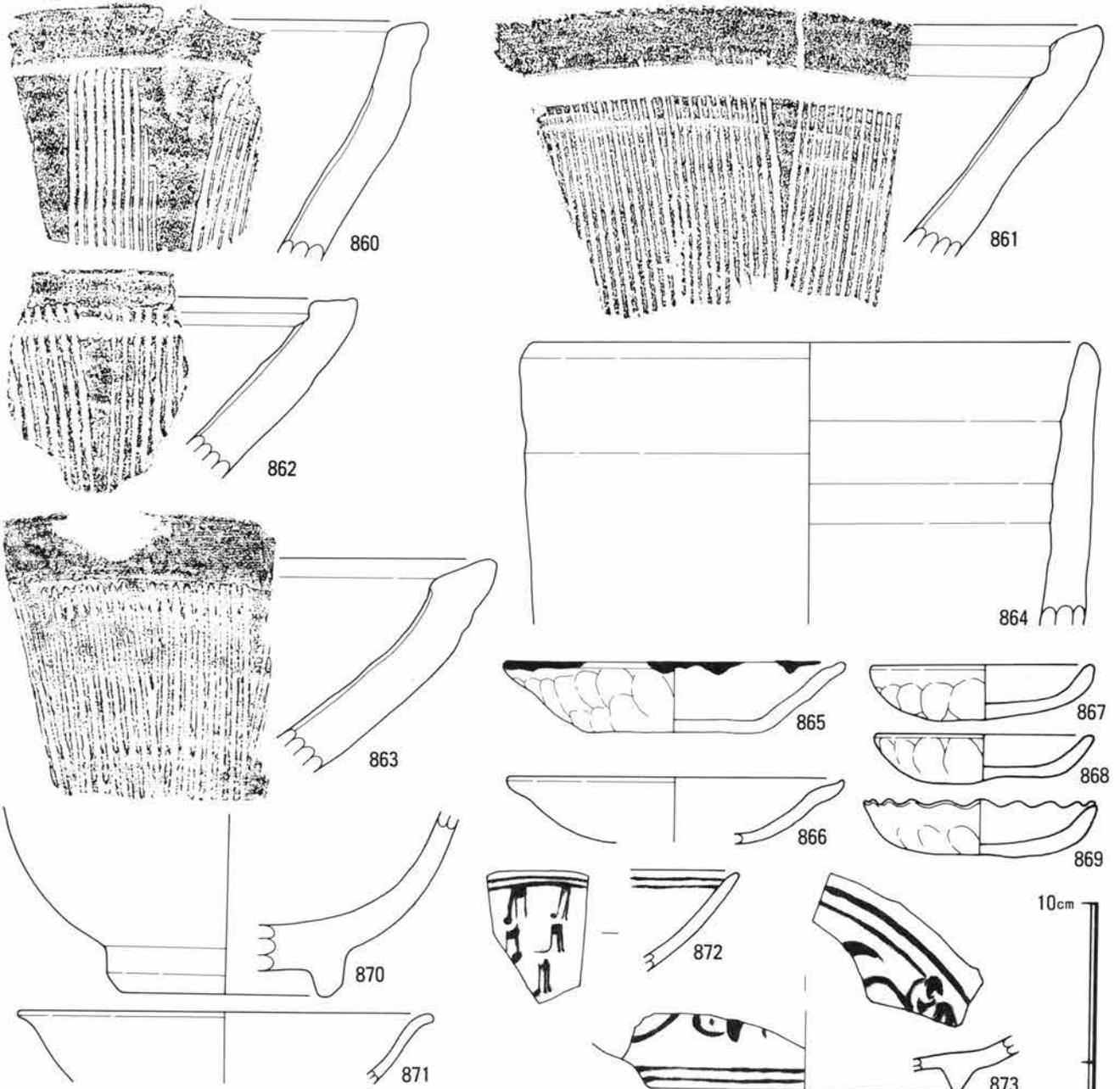


越前焼壺845 播鉢846 瓦質土器風炉847 焼土層 朝鮮製白磁碗848 金属肩庇・前立849 SD4200 越前焼播鉢850~851  
土師質皿852 SD4202 土師質皿856~858 白磁杯859 SD4204 土師質皿853~855

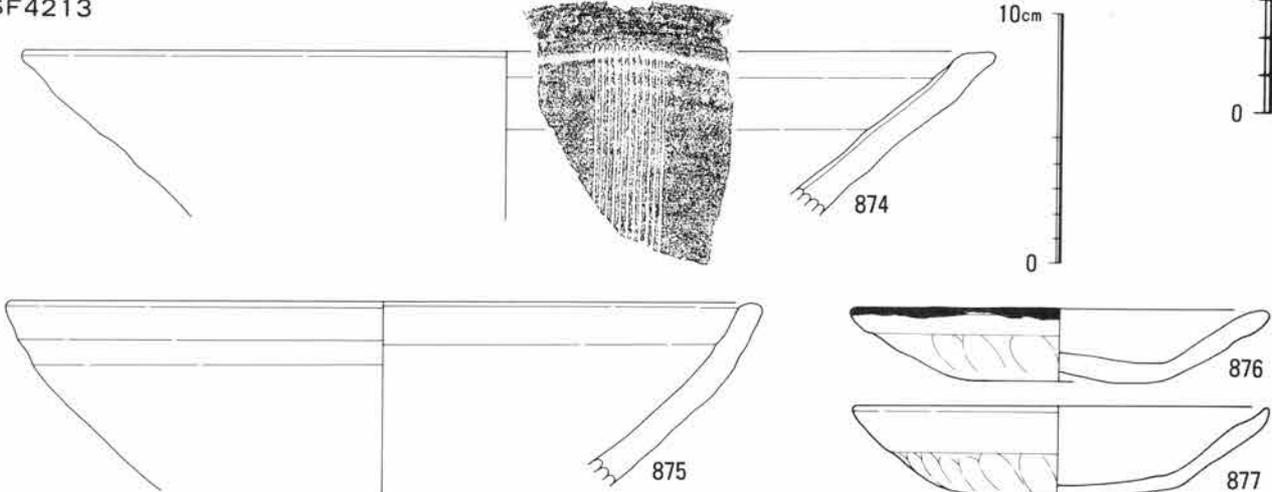


後期遺構確認面 越前焼壺845 播鉢846 瓦質土器風炉847 焼土層 朝鮮製白磁碗848 金属肩庇と前立849  
SD4200 越前焼播鉢850~851 SD4204 土師質皿854~855 SD4202 土師質皿856・858 白磁坏859

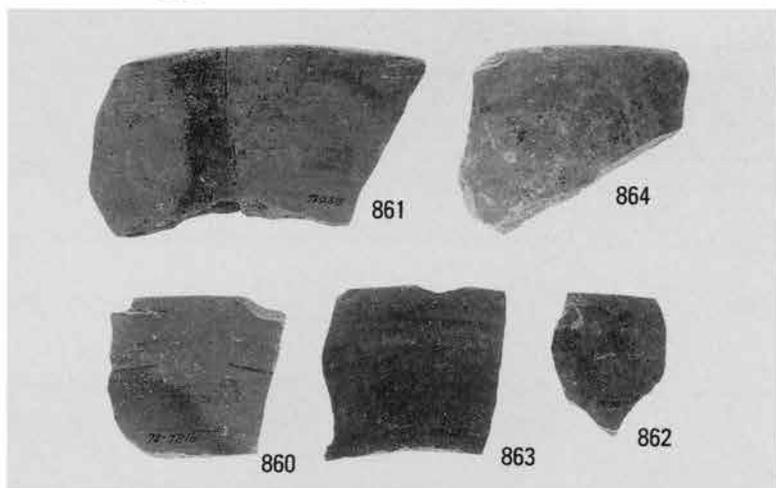
第54図 第78次調査遺物(5)  
SE4211



SF4213

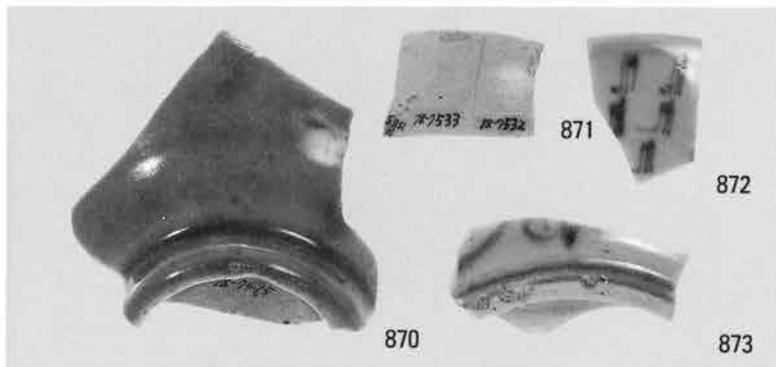


SE4211 越前焼掃鉢860~863 桶864 土師質皿865~869 青磁碗870 白磁皿871 染付碗872~873  
SF4213 越前焼掃鉢874 鉢875 土師質皿876~877

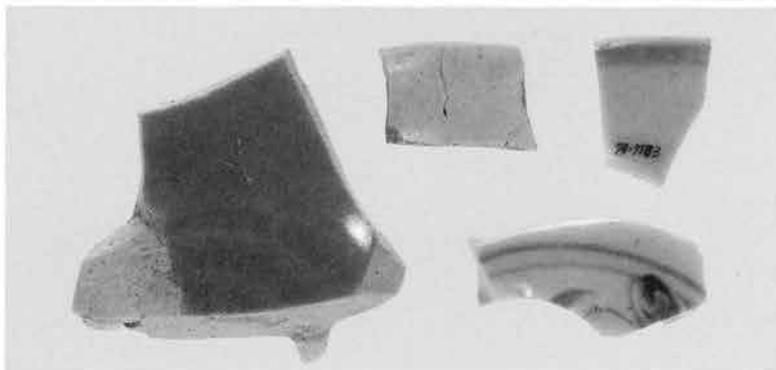


SE4211

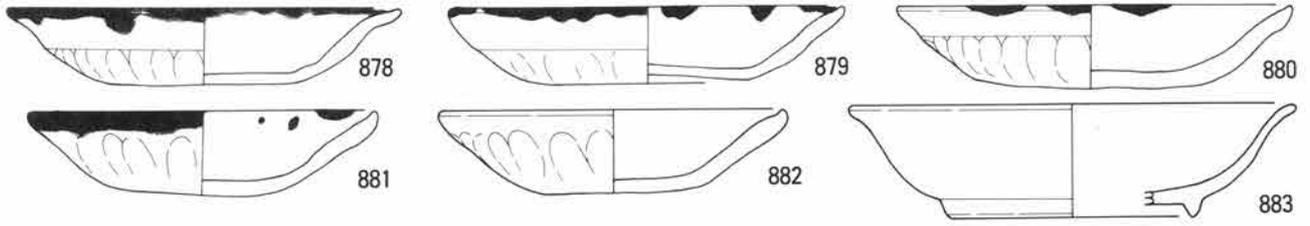
越前焼指鉢860~863 桶864



青磁碗870 白磁皿871 染付碗872~873



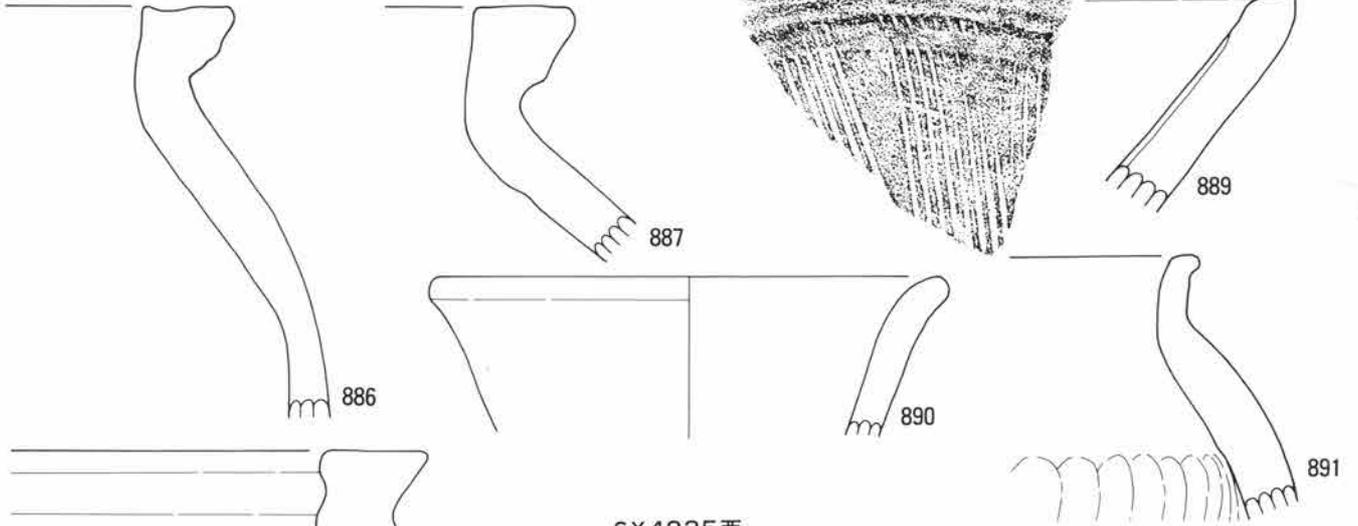
第55図 第78次調査遺物(6)



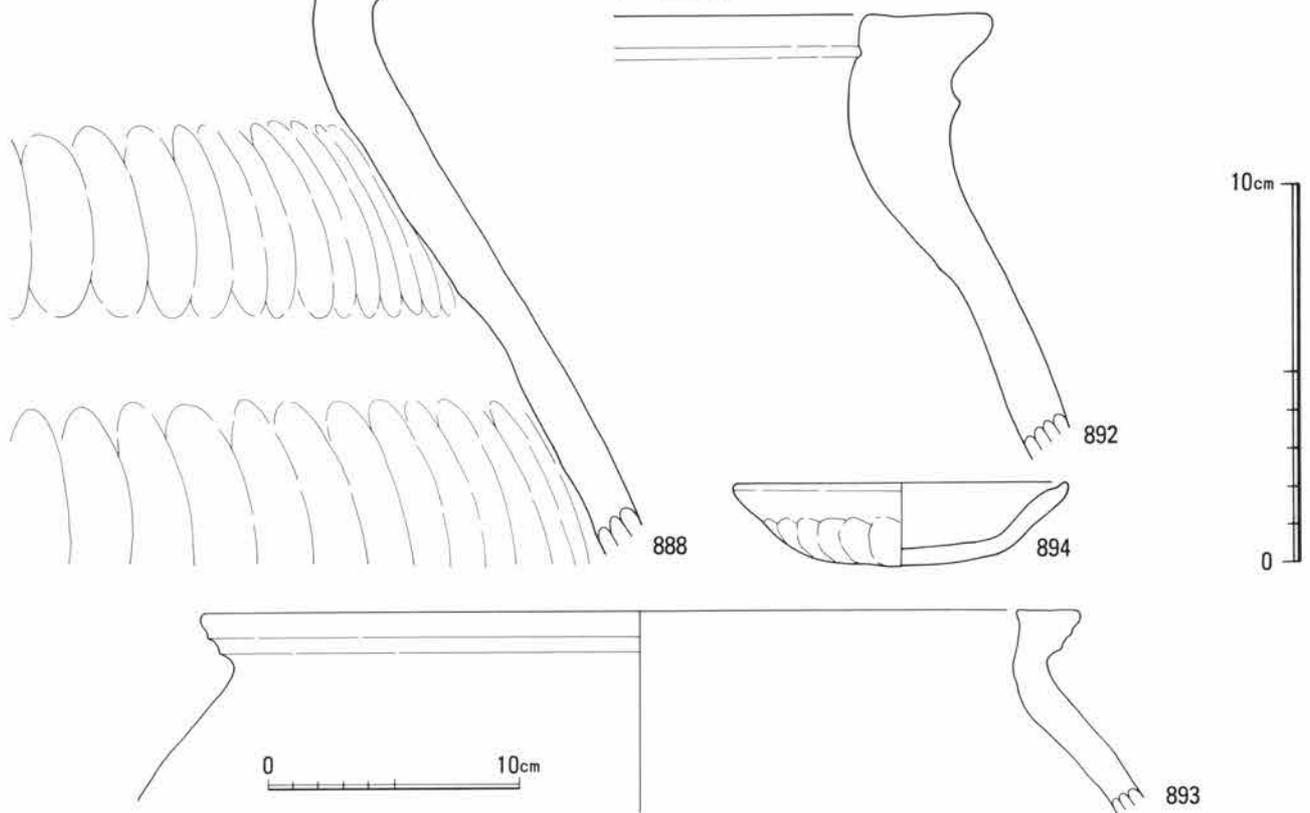
ピット



SX4235東



SX4235西



土師質皿878～882 白磁皿883 **ピット** 土師質皿884～885 **SX4235東** 越前焼甗886～888・891 播鉢889 壺890  
**SX4235西** 越前焼甗892～893 土師質皿894



881



882

SF4213  
土師質ⅢⅢ881～882

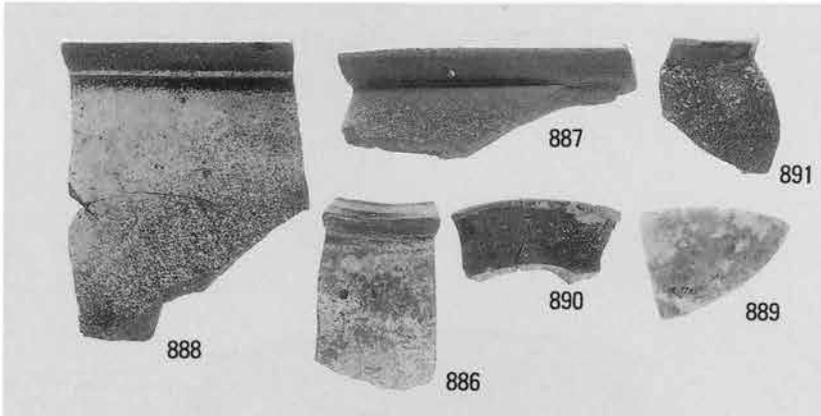


884



885

ピット  
土師質ⅢⅢ884～885



888

887

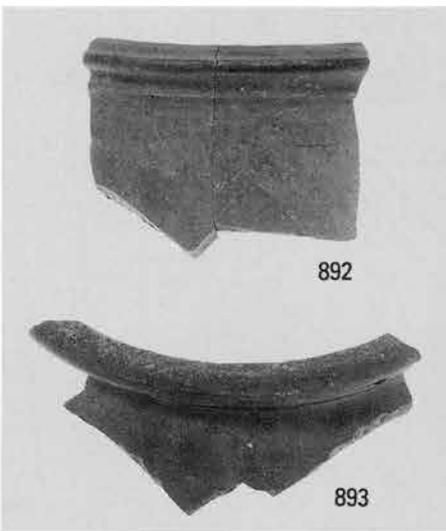
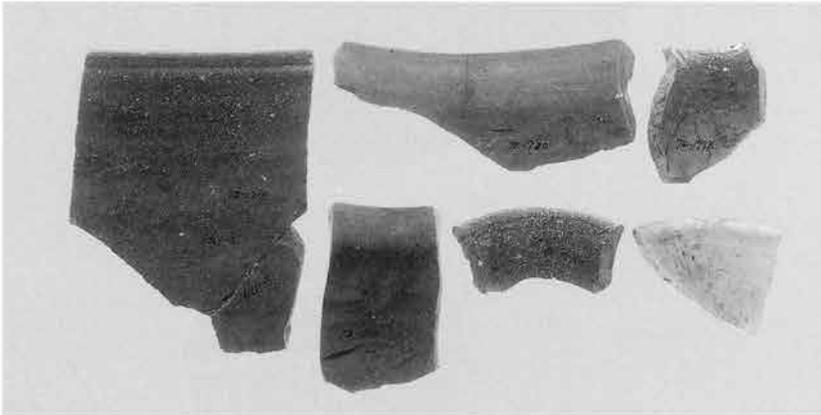
891

890

889

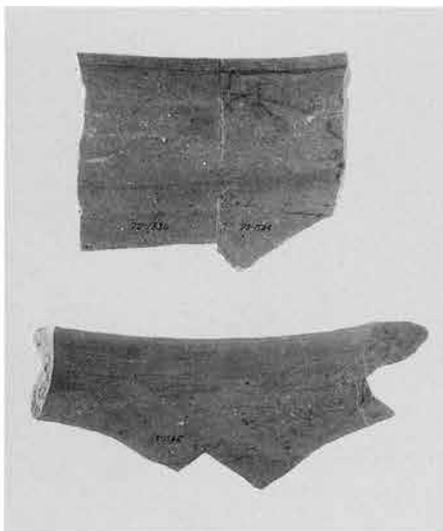
886

SX4235東  
越前焼甕886～888 播鉢889 壺890～891



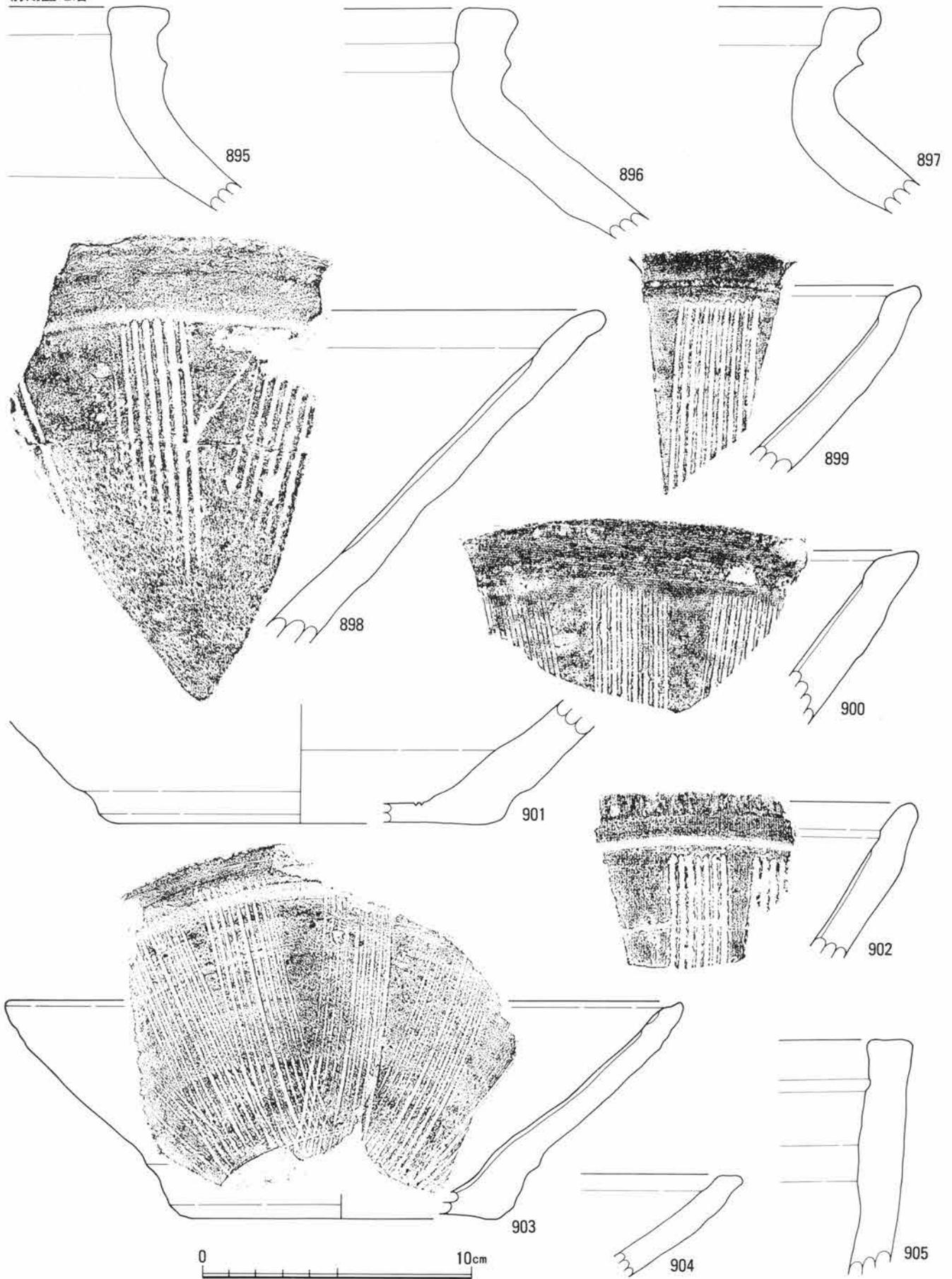
892

893

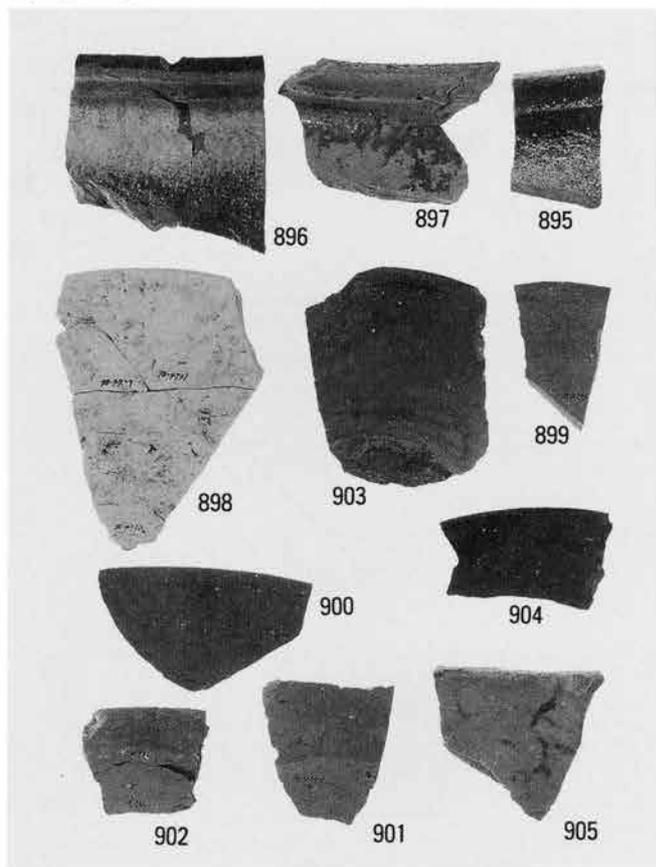


SX4235西  
越前焼甕892～893

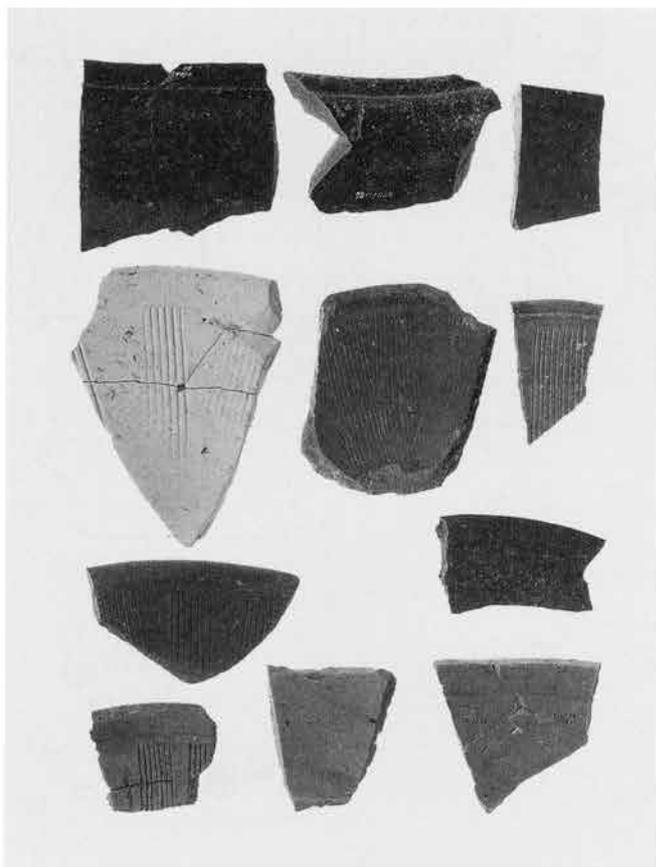
第56図 第78次調査遺物(7)  
前期整地層



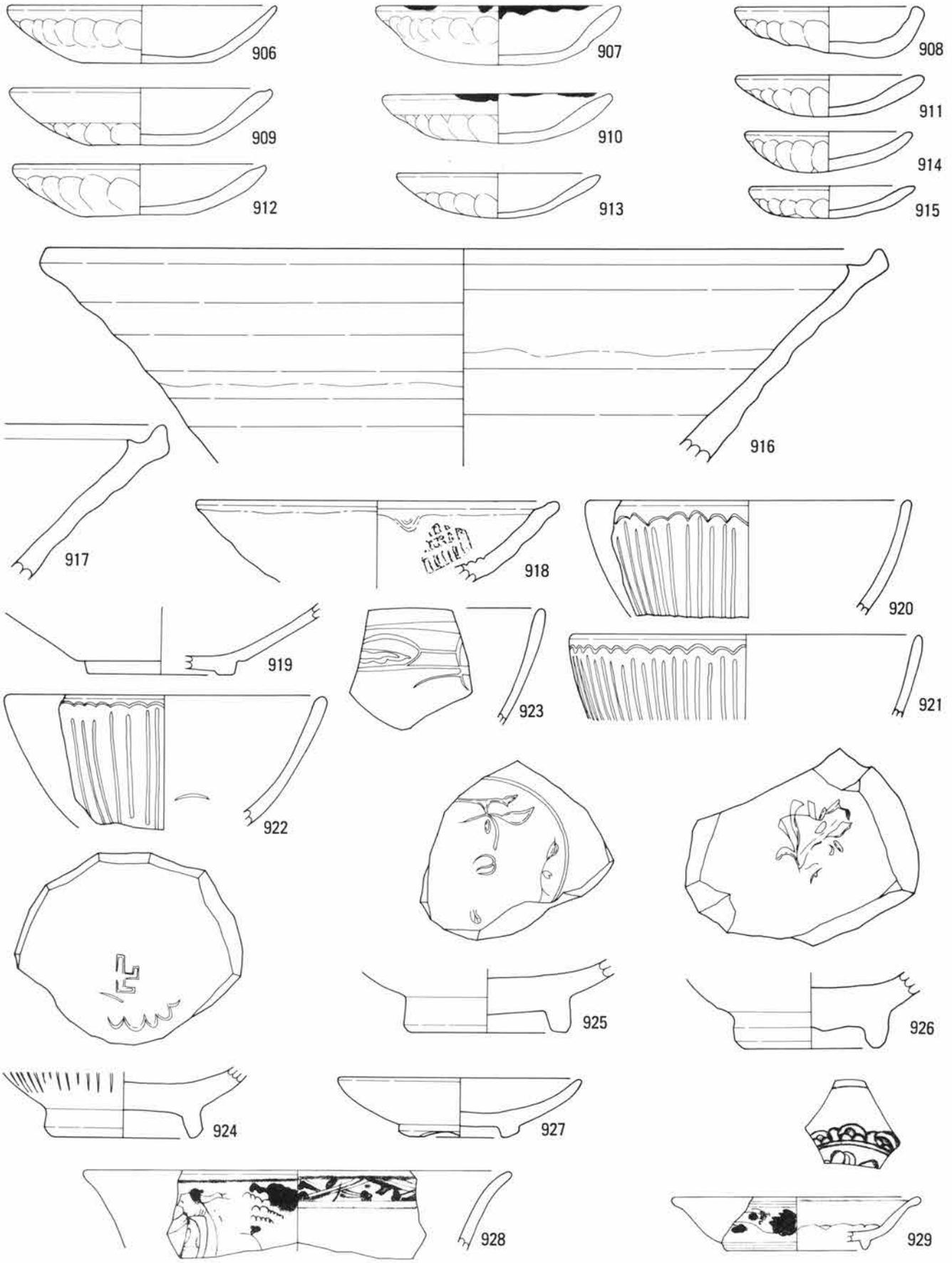
前期整地層 越前焼甕895～897 播鉢898～904 桶905



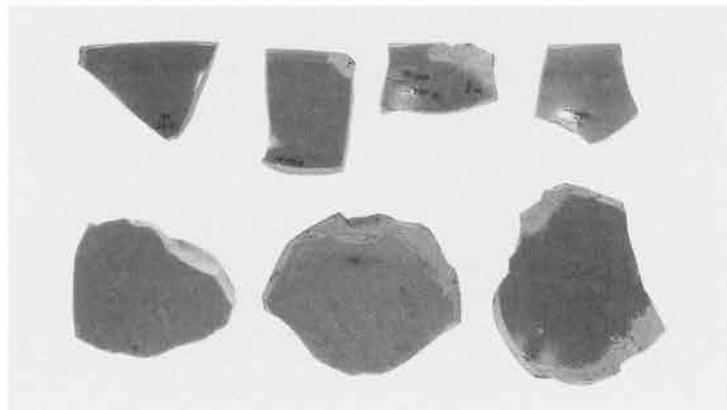
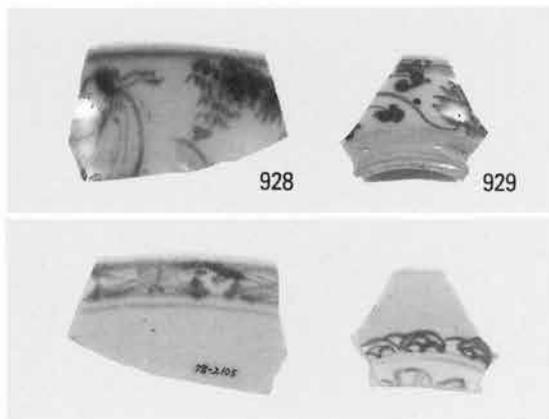
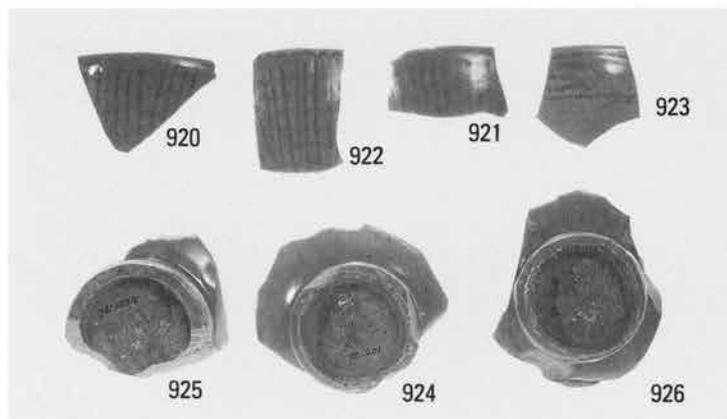
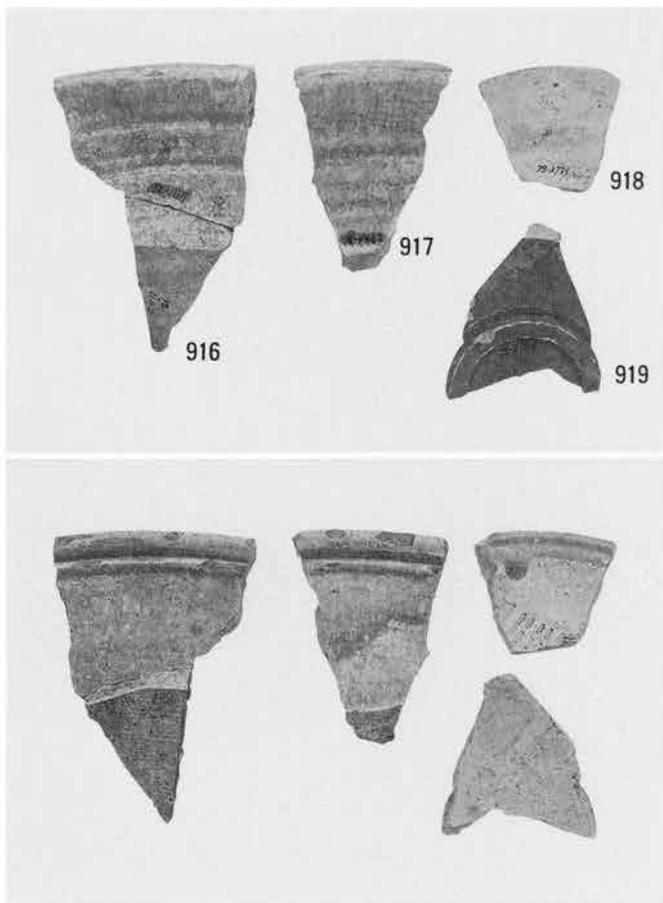
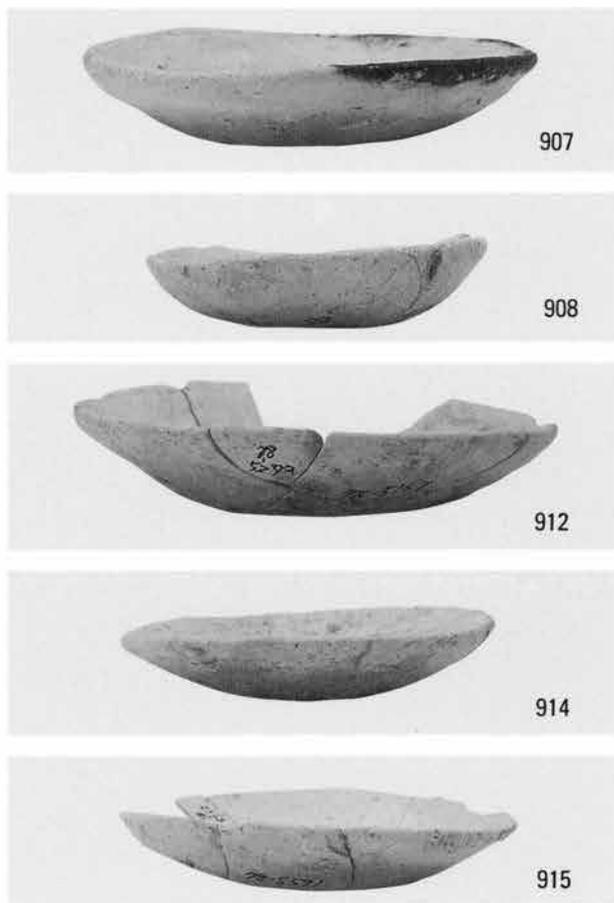
前期整地層  
越前焼甕895~897 播鉢898~904 桶905



第57図 第78次調査遺物(8)



土師質皿906~915 灰釉鉢916~917 卸皿918 碗919 青磁碗920~926 白磁皿927 染付碗928 皿929



前期整地層 土師質皿907~915 灰釉鉢916~917 卸皿918 碗919 青磁碗920~926 染付碗928 皿929

平成7年3月20日 印刷  
平成7年3月31日 発行

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅴ  
第29次 第77・78次調査

執筆・編集 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館  
発行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館  
福井市安波賀町4-10  
印刷 河和田屋印刷株式会社



既発掘調査地・整備地  
(昭和42年～平成6年度まで)

第29次・77・78次調査地



